瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告３

畑中遺跡

姫路－岡山高圧パイプライン敷設工事のうち
ＨＯライン非開削工事（岡山）に伴う
埋蔵文化財発掘調査

２０１３

瀬戸内市教育委員会

瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告３

畑　中　遺　跡

姫路－岡山高圧パイプライン敷設工事のうち
ＨＯライン非開削工事（岡山）に伴う
埋蔵文化財発掘調査

２０１３

瀬 戸 内 市 教 育 委 員 会

序

瀬戸内市は、岡山県南東部に位置し、平成16年（2004）11月１日に牛窓町・邑久町・長船町の３町が合併して誕生した市です。豊かな風土と瀬戸内海の海上交通に伴い古くから交通の要衝として多くの人々の交流や物資の流通により、多くの文化財、地域固有の伝統芸能や伝統文化等が残され伝承されています。

畑中遺跡は瀬戸内市の西部に広がる主要平野である千町平野の北西部に位置し、吉井川の沖積作用により形成された微高地上に形成された弥生時代以降の集落遺跡であります。この微高地上には弥生時代前期の貝塚として国指定である門田貝塚も存在しています。

平成22年度、大阪ガス株式会社により「姫路－岡山高圧パイプライン敷設工事」のうち、「ＨＯライン非開削工事（岡山）」が計画され、遺跡の北西地点において施設の設置に伴い地下掘削されることとなりました。協議の結果、地下掘削される部分については、やむを得ず記録保存の措置を講ずる発掘調査の実施に踏み切ることとなりました。

調査の結果、弥生時代前期から中世にわたる遺構を検出することができました。特に、底に籾痕の残る弥生時代前期の土器や石包丁など当地での稲作をうかがわせる資料や、播磨地域の高杯が出土し、当時のつながりを示す貴重な手がかりを得ることができました。

本報告書が、今後の埋蔵文化財の保護・保存のため有効に活用されるとともに、学術のため、また郷土の歴史学習の資料として役立てれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたりまして岡山県教育委員会から多大のご指導を賜りました。衷心より厚くお礼申し上げます。

平成25年３月

瀬戸内市教育委員会

教育長　藤　原　一　成

例　　言

1　本報告書は、大阪ガス株式会社が進める「姫路－岡山高圧パイプライン敷設工事」のうち、「ＨＯライン非開削工事（岡山）」に伴い、大阪ガス株式会社および鴻池組・奥村組共同企業体の委託を受け、瀬戸内市教育委員会が平成22年度に調査を実施した、畑中遺跡の発掘調査報告書である。

2　畑中遺跡は、岡山県瀬戸内市邑久町山田庄395番地に所在している。

3　発掘調査は瀬戸内市教育委員会が担当し、平成22年11月15日から平成23年１月20日まで実施した。調査面積は1,446㎡である。

4　本報告書の作成作業は、瀬戸内市教育委員会馬場昌一・大谷博志が担当し、古川久雄・山本宗昭（フジテクノ㈲）が協力した。

5　出土遺物の写真撮影は、柳生写真館に依頼した。

6　本書に関係する出土遺物および図面・写真の原板・フィルム・データ等は、瀬戸内市教育委員会に保管している。

7　本書の作成にあたり、下記の方々および機関の協力を得ました。記して感謝申し述べます。

石田爲成・宇垣匡雅・中野雅美・光永真一・米田克彦・岡山県教育委員会

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位北は平面直角座標第Ⅴ系の座標北を示す。

2　図面縮尺については、各図に明記してあるが、主なものについては以下のように統一している。

遺構

全体図：1/200　　竪穴住居：1/60　　掘立柱建物：1/60　井戸：1/30　　土壙：1/30

溝：1/100・1/30

遺物

土器：1/4　　石器：1/2・1/3・1/6

3　掲載遺物については、土器・石器・鉄製品（鉄滓）に分けて通し番号を与え、土器以外は下記略号を番号の前に付している。

石器S　　鉄製品（鉄滓）F

4　図版のうち遺物写真に付した番号と、挿図・観察表・本文の遺物番号は一致させている。

5　土器実測図で表現する、口縁線の中軸左右の白抜きは小破片のため口径復元に不確実性のあることを示す。

6　土層断面図に付した土層一覧の土色・土質の表現は、「新版 標準土色帖 2007年度版」による。

7　本報告書第２図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「西大寺」「備前・瀬戸」を複製・加筆したものである。また第３・４図は、瀬戸内市集成図（尾張・山手・山田庄・豆田・福元・百田・宗三・豊原・下笠加・箕輪・北池）1/2,500を使用し、加筆作成した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　遺跡の位置と環境……1
　第１節　位置と地理的環境……1
　第２節　周辺の遺跡と歴史的環境……3
第２章　調査の経過と調査体制……7
　第１節　調査に至る経緯……7
　第２節　調査の体制と地区区分・調査方法……8
　　１　調査の体制……8
　　２　調査の方法と地区区分……9
　第３節　調査の経過……10
　第４節　出土遺物整理と報告書作成……12
第３章　発掘調査の成果……13
　第１節　基本層序と遺構面……13
　第２節　弥生時代の遺構と遺物……13
　　１　弥生時代遺構の概要……13
　　２　竪穴住居……19
　　３　掘立柱建物……22
　　４　井戸……23
　　５　土壙……30
　　６　溝……40
　　７　落ち込み……48
　　８　弥生時代河道……52
　　９　遺構に伴わない弥生時代遺物……61
　第３節　古墳時代の遺構と遺物……63
　　１　古墳時代遺構の概要……63
　　２　溝……63
　　３　古墳時代河道……67
　第４節　古代・中世の遺構と遺物……71
　　１　古代・中世遺構の概要……71
　　２　掘立柱建物……71
　　３　柵囲い遺構……79
　　４　井戸……81

5　湧水・導水施設……82
6　ピット……87
7　遺構に伴わない中世遺物……87
第５節　時期不明の遺構……88
1　時期不明遺構の概要……88
2　土壙……88
第６節　Ⅲ区トレンチ調査の所見……92
第４章　まとめにかえて……95
遺構一覧表……96
遺物観察表……100
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図（黒丸印）……1
第２図　畑中遺跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）……2
第３図　調査地位置図（1/5,000）……7
第４図　調査地区割り図（1/1,000）……9
第５図　調査風景（2010年12月15日）……10
第６図　調査風景（2011年1月12日）……10
第７図　Ⅰ区北壁土層断面図（1/40）……14
第８図　Ⅰ～Ⅲ区検出遺構全体図（1/250）…（折込み）……15-16
第９図　弥生時代遺構全体図（1/200）……17
第10図　竪穴住居１平・断面図（1/60）……18
第11図　竪穴住居１出土遺物（1/4･1/3･1/2）……19
第12図　竪穴住居２平・断面図（1/60）･出土遺物（1/4･1/3）……21
第13図　掘立柱建物１平・断面図（1/60）……23
第14図　掘立柱建物２平・断面図（1/60）……24
第15図　井戸１平・断面図（1/30）……25
第16図　井戸１出土遺物（1/4･1/2）……26
第17図　井戸２平・断面図（1/30）……27
第18図　井戸２出土遺物（1/4）……28
第19図　井戸３平・断面図（1/30）……30
第20図　土壙１平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）…31
第21図　土壙２平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）…32
第22図　土壙３平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）…34
第23図　土壙４平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）…35
第24図　土壙５・６・７平・断面図（1/30）……35
第25図　土壙８平・断面図（1/30）……36
第26図　土壙９･10･11　平・断面図（1/30）……37
第27図　土壙12･13･14　平・断面図(1/30)･出土遺物(1/4･1/2)……38
第28図　溝１・２平・断面図（1/100･1/30）……39
第29図　溝１出土遺物（1/4）……40
第30図　溝２出土遺物（1/4）……41
第31図　溝３北東部および溝４・５平・断面図(1/100･1/30)……42
第32図　溝３南西部および落ち込み平・断面図(1/100･1/30)……43
第33図　溝３出土遺物（1/4･1/2）……45
第34図　溝６平・断面図（1/100･1/30）……46
第35図　溝６　出土遺物（1/4･1/3）……47
第36図　落ち込み　平・断面図（1/60）……49
第37図　落ち込み出土遺物１（1/4）……50
第38図　落ち込み出土遺物２（1/4･1/3･1/2）……51
第39図　自然河道上面検出状況（埋土の切り合い）(1/100)……53
第40図　自然河道土層断面図（1/40）……54
第41図　弥生時代河道　平・断面図（1/100）……56
第42図　弥生時代河道出土遺物１（1/4）……58
第43図　弥生時代河道出土遺物２（1/4）……59
第44図　弥生時代河道出土遺物３（1/4）……60
第45図　Ⅰ区検出面出土石器（1/2）……61
第46図　古墳時代遺構全体図（1/200）……62
第47図　溝７出土遺物１（1/4）……63
第48図　溝７平・断面図（西半）（1/100･1/30）……64
第49図　溝７平・断面図（東半）（1/100･1/30）……65
第50図　溝７出土遺物２（1/3）……66
第51図　古墳時代河道平面図（1/100）……68
第52図　古墳時代河道出土遺物（1/4）……69
第53図　古代・中世遺構全体図(推定中世土壙・時期不明ピット含む)(1/200)…72
第54図　掘立柱建物３平・断面図（1/60）……73
第55図　掘立柱建物４平・断面図（1/60）･出土遺物（1/4）……74
第56図　掘立柱建物５平・断面図（1/60）……75
第57図　掘立柱建物５出土遺物（1/4）……76
第58図　掘立柱建物６平・断面図（1/60）･出土遺物（1/4）……77

第59図　掘立柱建物７ 平・断面図（1/60）……78
第60図　柵囲い遺構 平・断面図（1/60）……80
第61図　井戸４ 平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）…81
第62図　井戸５ 平・断面図（1/30）……82
第63図　井戸６ 出土遺物（1/4）……82
第64図　井戸７・溝８　平・断面図（1/100・1/50）……84
第65図　井戸７・溝８　土層断面図（1/30）……85
第66図　井戸７・溝８　出土遺物（1/4・1/2）……86
第67図　遺構に伴わない遺物（中世）（1/4）……87
第68図　土壙 15・16・17・18　平・断面図（1/30）……89
第69図　土壙 19・20・21・22　平・断面図（1/30）……90
第70図　土壙 23・24・25　平・断面図（1/30）……91
第71図　Ⅲ区トレンチ調査遺構検出状況平面図（1/250）……93
第72図　Ⅲ区北トレンチ北壁土層断面図（1/50）……94

表目次

第１表　竪穴住居一覧表……96
第２表　竪穴住居１ピット一覧表……96
第３表　竪穴住居２ピット一覧表……96
第４表　掘立柱建物一覧表……96
第５表　柵囲い遺構一覧表……96
第６表　井戸一覧表……96
第７表　土壙一覧表……96
第８表　溝一覧表……97
第９表　ピット一覧表……97
第10表　ピットと掘立柱建物対照表……99
第11表　遺構名（番号）新旧対照表および遺物掲載番号一覧……99
第12表　土器観察表……100
第13表　石器・石製品観察表……104
第14表　鉄製品（鉄滓）観察表……104

図版目次

図版１　１　Ⅰ①区全景（東から）
　　２　Ⅰ①区全景（西から）
図版２　１　Ⅰ②区全景（東から）
　　２　Ⅰ②区西半（北から）
図版３　１　Ⅱ区全景（西から）
　　２　Ⅱ区全景（北から）
図版４　１　竪穴住居１（南から）
　　２　竪穴住居１遺物出土状況（南西から）
　　３　竪穴住居１遺物出土状況（西から）
図版５　１　竪穴住居２（北西から）
　　２　竪穴住居２（南東から）
　　３　竪穴住居２柱穴断面（南東から）
図版６　１　掘立柱建物１（西から）
　　２　掘立柱建物２（北から）
　　３　井戸３（南から）
図版７　１　井戸１（北から）
　　２　井戸１遺物出土状況（南東から）
　　３　井戸１遺物出土状況（東から）
図版８　１　井戸２（南東から）
　　２　井戸２ベルト断面（南から）
　　３　井戸２西壁断面（南東から）
図版９　１　土壙１遺物出土状況（北から）
　　２　土壙２遺物出土状況（南西から）
　　３　土壙３（北東から）
図版10　１　土壙４遺物出土状況（北東から）
　　２　土壙５（西から）
　　３　土壙７（南西から）
図版11　１　土壙 11（北西から）
　　２　土壙 13 遺物出土状況（南東から）
　　３　土壙 14 遺物出土状況（南から）
図版12　１　溝１（北東から）
　　２　溝１遺物出土状況（南西から）
　　３　溝２（南西から）
図版13　１　溝３（北東から）
　　２　溝３北東部（南西から）
　　３　溝３遺物出土状況（南西から）
図版14　１　溝６南部（南から）
　　２　溝６南壁土層断面（北から）
　　３　溝６北部（北から）
図版15　１　落ち込み遺構上面検出状況（北西から）
　　２　落ち込み遺構と溝３（北東から）
　　３　落ち込み遺構（南東から）
図版16　１　自然河道北壁土層断面（南東から）
　　２　自然河道中央ベルト土層断面（南から）
　　３　自然河道南壁土層断面（北から）
図版17　１　弥生時代河道（北から）
　　２　弥生時代河道（南から）
　　３　弥生時代河道遺物出土状況（南から）
図版18　１　溝７西部（西から）
　　２　溝７ベルト土層断面（北西から）
　　３　溝７東部（南東から）
図版19　１　古墳時代河道（北西から）
　　２　古墳時代河道下層流路（北から）
　　３　古墳時代河道（南から）
図版20　１　掘立柱建物３（北から）
　　２　掘立柱建物４（西から）

3 掘立柱建物５・６（東から）
図版21 1 掘立柱建物４周辺（P-54）（西から）
2 掘立柱建物５（P-186）遺物出土状況（北東から）
3 掘立柱建物５（P-209）遺物出土状況（南から）
図版22 1 柵囲い遺構（北から）
2 井戸４（西から）
3 井戸６（東から）
図版23 1 井戸７（南から）
2 溝８（北から）
3 溝８南壁土層断面（北から）
図版24 1 土壙17（南西から）
2 土壙19（東から）
3 土壙25（西から）
図版25 1 Ⅲ区北トレンチ全景（東から）
2 Ⅲ区北トレンチ土層断面（南から）
3 Ⅲ区北トレンチ遺構検出状況（西から）
図版26 1 井戸１　出土遺物
2 土壙３　出土遺物
3 土壙１　出土遺物
4 落ち込み　出土遺物
5 竪穴住居１　出土遺物
図版27 1 土壙４　出土遺物
2 井戸２　出土遺物
3 土壙13　出土遺物
4 溝６　出土遺物
5 弥生時代河道　出土遺物
図版28 1 出土石器
2 溝７　出土遺物
図版29 古墳時代河道　出土遺物
図版30 1 掘立柱建物４　出土遺物
2 掘立柱建物５　出土遺物
3 掘立柱建物６　出土遺物
4 井戸６　出土遺物
5 井戸４　出土遺物
6 井戸７･溝８　出土遺物

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　位置と地理的環境

畑中遺跡は、岡山県瀬戸内市邑久町山田庄395番地６に所在する。（第１図）

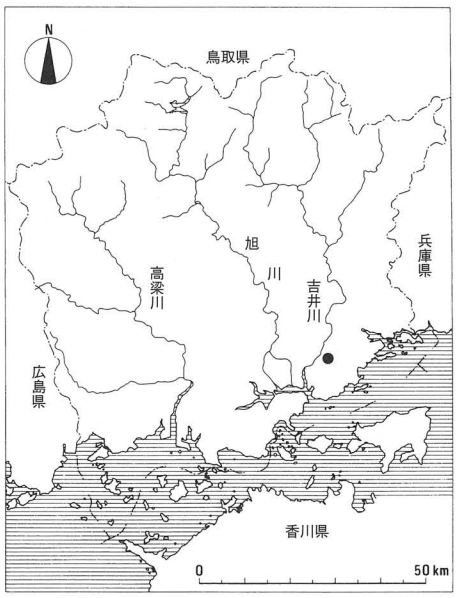
本遺跡の所在する瀬戸内市は、岡山県の東南部に位置し、西は県都・岡山市、北は備前市に接している。地勢は、市内の西端には県下三大河川の一つである吉井川が流れ、吉井川の左岸には長船・邑久地域に肥沃な平野部が広がり、市街地と田園地帯が広がるほか、東部地域や海岸部は丘陵地となっている。また、南部は「瀬戸内市」の名称となっている瀬戸内海に面し、島嶼や海岸等自然景観に恵まれている。

瀬戸内市の総面積は125.51K㎡であり、半分以上を邑久地域（68.71 K㎡）が占めている。土地利用現況を概観すると、地域の西端を流れる吉井川及びその支流の千町川、干田川の堆積作用により平坦な沖積平野が開け、市街地や水田地帯として利用されている。邑久駅及び市役所周辺、長船駅及び長船支所周辺では、近年の宅地開発により都市化が進展している。農地については、沖積平野では主に水田として、丘陵地の南面する斜面では畑として野菜やぶどうやみかんなどの果樹園として利用されており、全面積の約３割を占めている。山林については、瀬戸内市を東西方向に横断する形で広がっている。その面積は全面積の約５割を占めている。

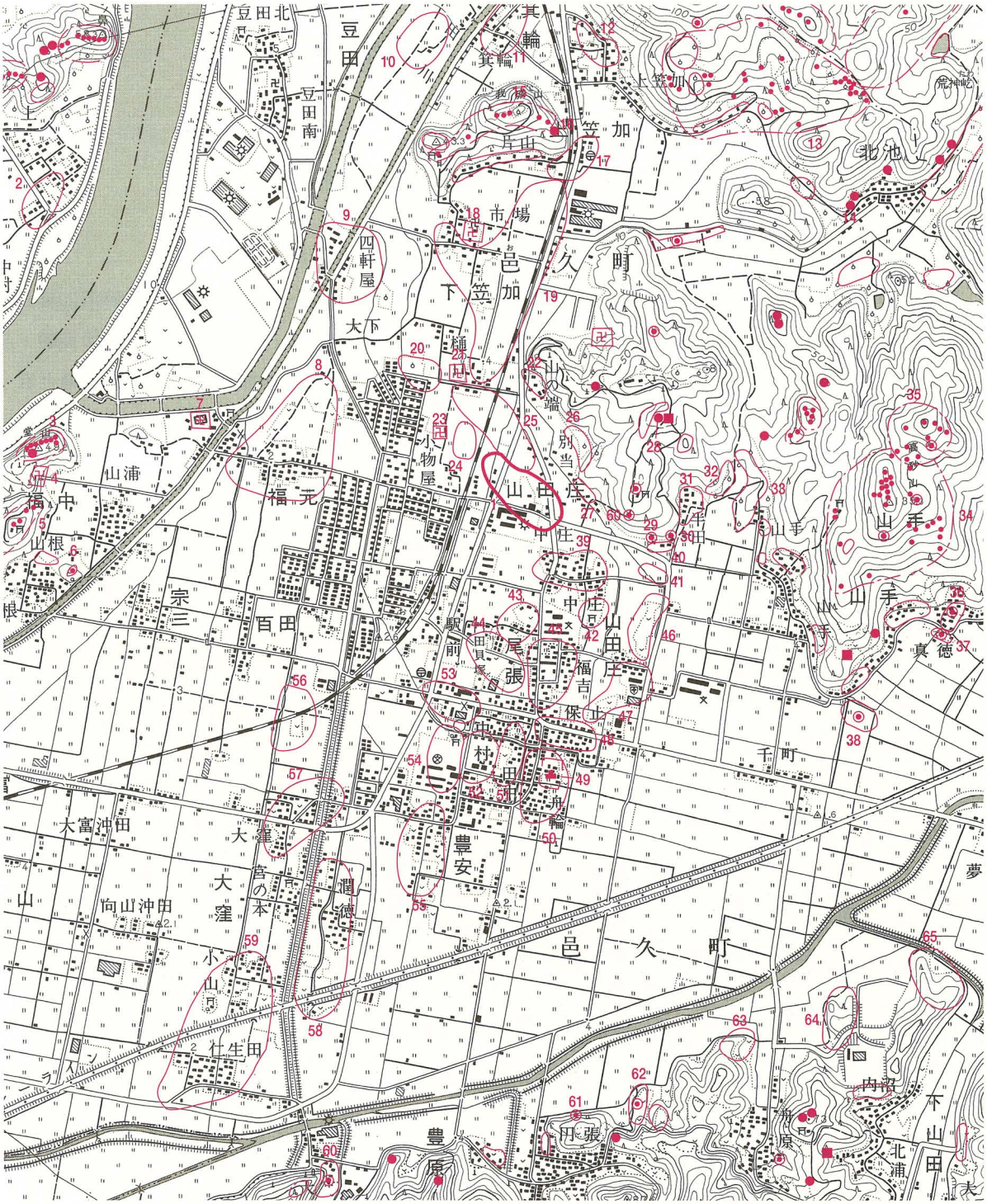
畑中遺跡の立地する吉井川下流域東岸の沖積地は、縄文時代後期以降の吉井川の活発化した堆積作用により急速な低微高地の形成によるものである。その沖積平野も、山塊から派生した丘陵や独立丘陵により、いくつかの単位平野として小地域に区分ができる。北から南に向かってその平野を辿ると、北側の熊山と南側の西大平山から派生した丘陵部に挟まれた南北約0.5km、東西約3.0Kmの細長く延びた長船町長船から備前市大内にかけての香登平野、吉井川下流東岸平野の中央部に独立丘陵としてある甲山や桂山の北側までの南北約1.5Km、東西約3.0Kmの長船町服部・土師・磯上・牛文地区の長船平野、北の邑久町・長船町境の独立丘陵南の牛窓半島から児島湾口に延びる丘陵地帯に囲まれた邑久町中西部の東西約3.5km、東西約5.0Kmに及ぶ、最大規模を測る千町平野の３つの沖積平野に区分される。畑中遺跡はこの千町平野の中心部よりやや北西に所在する。

畑中遺跡は、邑久町の西部、吉井川の沖積作用によって形成された千町平野の中央北縁にあたる微高地上に立地し、現標高は約2.4ｍである。現在把握されている遺跡の範囲は、長さ約320ｍ、幅約190ｍを測り、南東-北西主軸の長円形域を占める。

平野中央部の弥生時代の拠点的な集落である門田遺跡の北約500ｍに位置し、比較的近い位置関係にある。



第１図　遺跡位置図（黒丸印）



1．畑中遺跡
2．百枝月南庄司遺跡
3．福中堂山古墳群
4．大平山善興寺跡
5．福山宮山古墳群
6．山根古墳
7．善覚寺跡
8．福元遺跡
9．四軒屋遺跡
10．箕輪下遺跡
11．箕輪遺跡
12．上笠加水汲田遺跡
13．上笠加古墳群
14．北池１号墳
15．我城山古墳群
16．我城山１号墓
17．上笠加国城遺跡
18．大楽院跡
19．下笠加遺跡
20．下笠加後着遺跡
21．清楽院跡
22．下笠加山ノ端遺跡
23．サアナ寺跡
24．サアナ遺跡
25．熊山田遺跡
26．山田庄北谷遺跡
27．山田庄別当遺跡
28．西郷免古墳
29．山田庄宮下貝塚
30．山田庄宮坂貝塚
31．山田庄半田遺跡
32．山田庄四町畑遺跡
33．山田辻畑遺跡
34．高砂山古墳群
35．八木山古墳群
36．真徳貝塚Ａ
37．真徳貝塚Ｂ
38．真徳貝塚
39．山田庄堀内遺跡
40．山田庄宮坂遺跡
41．山田庄川屋遺跡
42．山田庄本神遺跡
43．山田庄東光院遺跡
44．門田貝塚
45．山田庄福吉遺跡
46．オンザ遺跡
47．山田庄北畑遺跡
48．水南遺跡
49．尾張城跡
50．尾張広崎遺跡
51．尾張助三東遺跡
52．助三畑遺跡
53．堂免遺跡
54．馬場崎遺跡
55．豊安遺跡
56．百田遺跡
57．大窪遺跡
58．潤徳遺跡
59．仁生田遺跡
60．大橋貝塚
61．豊原倉ケ端貝塚
62．円張東貝塚
63．下山田梶ケ鼻遺跡
64．下山田鳥博遺跡
65．下山田扇ケ端遺跡

第２図　畑中遺跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

畑中遺跡の所在する千町平野周辺部での最古の遺物は、船原梶ケ端貝塚(註1)から出土したナイフ形石器で、背後の低丘陵上に遺跡が想定されている。近年になって、内陸低位部で旧石器時代の石器の出土が知られるようになり、西谷遺跡（長船町西須恵）(註2)や亀井戸廃寺（備前市佐山）(註3)など、キャンプサイト的な小規模遺跡の存在が確認されている。

後氷期の世界的な気候の温暖化で、縄文時代早期に現在の千町平野が瀬戸内海に続く海となる縄文海進が進行する。

縄文時代前期には、海を挟んで北に宮下貝塚(註4)、南に大橋貝塚(註5)が形成される。さらに中期末から後期初頭の山手貝塚、後期以前では真徳貝塚Ｂ(註6)が形成されている。これらの貝塚のうち、大橋貝塚は、前期から後期初めまでの長期にわたって居住が継続されている。貝塚の広がりも面積にして約3,000㎡と吉井川東岸下流域で最大規模を測り、当地域での中核的集落であったと考えられる。

後期前半から突帯文土器出現前の晩期の土器が熊山田遺跡(註7)やヤマトシジミで形成される小規模の貝塚を伴う山田辻畑遺跡(註8)が存在する。また、畑中遺跡から北へ約600ｍに位置する下笠加遺跡(註9)や南へ約600ｍに位置する堂免遺跡などで突帯文土器の出土が見られるように、瀬戸内海の海水面の降下と旧吉井川の土砂の堆積によって急激な陸化が進み、沖積地に人々の生活の痕跡が見られはじめる。熊山田遺跡での後期前半の土器の出土から千町平野の陸化が縄文時代後期前半まで遡る可能性が高くなった。このことから、瀬戸内海の海水が入り込んでいた千町平野の丘陵南端部に位置し縄文時代前期（羽島下層式）から後期（福田ＫⅡ式）までの長期にわたり吉井川下流の拠点的な縄文遺跡である大橋貝塚の居住が継続された時期の終末に相前後している。これらの遺跡の動きから、縄文時代中期まで丘陵裾や谷部に貝塚を形成して定住していた居住地を、後期以降になって一部の集団は、一部微高地が形成された沖積地へ生活基盤となる農耕や狩猟による食料確保の適地を求めて、また、一部の集団は、大橋貝塚の立地する丘陵北裾から同丘陵を南に超えた瀬戸内海に面する低い丘陵裾に位置する縄文時代後期から晩期の貝塚である黒和貝塚などへ、貝の採集や漁労による適地を求めて居住地を移動または拡散していった縄文時代後期の転機の一端を示している。

弥生時代になると、旧吉井川の堆積作用によって下笠加から仁生田に、細長く弧状の自然堤防が形成される。この微高地は、旧吉井川の中・小の支流でいくつかに分断されるが、前期以降になって全域に集落が形成される。その中でも中核的な集落として、門田貝塚が存在する。数回に及ぶ発掘調査によって数条の大規模な溝や貝塚の存在が明らかにされた。また弥生時代前期後葉の土器型式とされた「門田下層式」よりさらに古い前期前葉の土器も出土し、集落の開始時期が古く遡ることが明らかになった(註10・11・12)。

畑中遺跡の所在する地域は、地理的立地条件の良さから、近年各種の開発に伴う発掘調査が行われ、畑中遺跡(註13)・堂免遺跡(註14)・熊山田遺跡などで弥生時代前期の遺構が検出されていることから、前期段階に微高地の中心地では比較的多くの集落が形成されていることが明らかにされつつある。助三畑遺跡では、中期中葉の竪穴住居や掘立柱建物だけでなく４条の大規模な溝も検出されている(註15)。特異な遺構遺物としては、熊山田遺跡(註16・17)で直径5.5ｍの円形を呈する竪穴住居の中央穴の両脇に小ピットをもつ住居を検出した。住居形態から「松菊里住居」と呼ばれるものである。また、住居の

柱の取り穴から壺と甕の中間的な器形で朝鮮系無文土器に類似した土器が出土し、住居形態と共に朝鮮半島との関わりを示すものとして注目される資料である。

中期中葉以降、微高地だけでなく、微高地周辺部の水田の拡大と人口増に伴い、遺跡の分布は微高地上から千町平野を望む丘陵上や丘陵裾部へ移動する。これらの遺跡として真徳貝塚・蔵が端貝塚・円張東貝塚・船原梶ケ端貝塚・扇ケ端貝塚等があり、いずれも小規模な貝塚を伴っている。また後期後半以降には、門田遺跡・百田遺跡・山田庄北畑遺跡・堂免遺跡など集落内で土器製塩も行われている。弥生時代を通じて当地域は、安定した水稲耕作を生産力の基盤に、邑久地域の中心地として古墳時代に発展する母胎となる。しかしながら、千町平野東側部分については、千町平野の中央部に自然堤防が形成されて小河川の排水ができなくなり、中世の段階まで後背湿地として取り残されるのである。

弥生時代の墓制については明らかでない点が多いものの、沖積地の遺跡である堂免遺跡から、木棺小口溝を持つ土壙墓に近接して３基の円形周溝（墓）が検出された。周溝はいずれも全周しなく、２基の墳墓の周溝を部分的に共有するものや、周溝の一部がブリッジ状になって切れているものがある。１基の周溝墓からは、中央部に組合せ式の木棺痕跡が検出されている(註14)。また、門田貝塚や助三畑遺跡からは、壺と鉢を合わせた土器棺が出土している。丘陵部では、千町平野を南に望む下笠加の独立丘陵に位置する我城山弥生墳丘墓（１号墓）は墳丘20.0ｍ×14.0ｍ、高さ2.0ｍを測る長方形を呈する墳墓で、墳丘部に比較的広い平坦部を認めることができる。内部主体については不明である。遺物として口縁部外面に綾杉文や鋸歯文を施した特殊壺形土器、特殊器台形土器片、石杵が採集されており、吉井川東岸で唯一の特殊器台・壺を伴う弥生墳丘墓として注目される(註18)。

古墳時代の集落遺跡としては、助三畑遺跡・門田遺跡・堂免遺跡で弥生時代の集落の延長上で溝や井戸が検出されているが、５世紀後葉以降の集落の変遷については明確でない。

千町平野周辺部では、平野を望む独立丘陵の頂部から尾根にかけて、小規模な円墳や方墳が群集して築造されている。千町平野の北側の位置する山手地区の標高135ｍの高砂山山頂から標高149ｍの八木山の尾根筋にかけて、約120基にのぼる低平な古墳群が築造されており、丘陵単位で大きく４つの支群に分かれるが、全体を高砂山古墳群として瀬戸内市内でも有数の前半期の群集墳を形成している。内部主体は箱式石棺や小竪穴式石郭で、丘陵斜面では横穴式石室である。邑久考古館長の長瀬薫氏により副葬品として内行花文鏡２面、変形四獣鏡１面、捩文鏡１面の鏡をはじめ、玉類や鉄器が出土している(註19)。

古墳時代後半になると、邑久地域の前方後円墳築造系譜の最終段階となる２基の前方後円墳が、千町平野北東の邑久町との町境の長船町亀ケ原に築造される。１基は金鶏塚古墳で、明治27年（1894）に開墾で墳形が大破され、石室から画文帯神獣鏡１面ほかが出土したと伝えられる。墳丘の測量によって墳長が約35ｍの前方後円墳であることが判明し、後円部から採集された埴輪が川西編年Ⅴ期の６世紀前葉と推定されている。もう１基は、金鶏塚古墳より約30ｍ南の地点に所在する亀ケ原大塚古墳で、後円部を向け合う形に築造されている。亀ケ原大塚古墳は墳長が約40ｍの前方後円墳で、埋葬施設として前方部に古墳の主軸に直交する全長約７ｍの横穴式石室が築かれ、後円部にも横穴式石室の存在が推定されている。詳細な時期については不明であるが、おおむね６世紀後葉と考えられている。この２基の古墳は邑久地域最後の前方後円墳で、須恵器生産を掌握・管理していた首長の墓と考えられている(註20)。

高砂山の南斜面をはじめ豊原・福中地区の丘陵端部の斜面に、横穴式石室を内部主体とする小古墳が築造される。高砂山ではほとんどの古墳の埋葬施設が無袖式の横穴式石室で、須恵質の陶棺が納められているものが多い。これらの小古墳群は、６世紀後葉から７世紀にかけての須恵器窯跡群の分布と重なっているので、長船町釜が原古墳群とともに須恵器製作工人集団の墳墓と推定される。

邑久町本庄の水落古墳からは、畑の開墾中に横穴式石室に納められた須恵質の切妻家形陶棺が出土し、身と蓋の妻部分に焼成前に書かれた「南」の文字が線刻されている。陶棺が小形化しており、７世紀頃のものと考えられる(註21)。

また古墳時代後半から平安時代の瀬戸内市から備前市の丘陵地域で特筆すべき遺構は、恵まれた陶土と蒔材を擁して造られた、約130基もの須恵器生産遺跡である邑久古窯跡群の存在である。邑久古窯跡群の開始は、現在確認されているのは長船町土師の木鍋山１号窯跡(註22)の６世紀中葉からで、５基ないし６基で構成される牛窓町長浜の寒風古窯跡群(註23・24・25)の７世紀から８世紀初頭をピークに11世紀頃まで丘陵地域の窯の位置を移動しながら連綿と存続していく。寒風古窯跡群では供膳具類の須恵器だけでなく、陶棺・鴟尾・硯・陶馬や文字がヘラ描きされた須恵器も生産されており、単なる地方窯というより官窯的性格を窺わせる。

奈良時代の尾張地域は、『和名抄』や『続日本紀』によると、律令体制下で備前国邑久郡の中心地の尾張郷に属する。門田遺跡からは大規模な掘立柱建物の一部と見られる柱穴群が検出され円面硯、須恵器、緑釉陶器などの遺物も出土しているから、同地に官衙的な施設の存在が想定される(註26)。寺院跡としては、山田庄半田地区の緩やかな丘陵南斜面の半田集落に重なる形で半田廃寺が存在すると推定されている。７世紀末から鎌倉時代の瓦片が採集されている(註27)。

千町平野地域で、現在まで遺構が明らかに残っているものに条里遺構がある。平野南部を流走する千町川周辺部を除き、ほぼ全域に条里地割りが残存している。当地の坪割りは「縦行き連続式」で、左下を起点として上へ数える。条里地割の時期については、考古学的調査が行われていないので不明であるが、比較的陸地化が早かった尾張地域を中心に施行され、周辺部は古代の坪割りを延長し、中世の段階まで長期間を要して開墾されたと考えられる。

中世になると、建久四年（1193）に備前国は東大寺再建の造営国領になり、中世を通じて南都勢力の荘園が数多く存在している。北約６㎞地点には正安元年（1229）成立の『一遍上人絵伝』に描かれた「福岡の市」で有名な福岡があり、南西約５㎞には吉井川の河口右岸に中世から金岡庄の湊町として栄えるとともに、西大寺観音院の門前町として商工業が発展した金岡・西大寺地区がある。このことにより、当地は山陽道にも近く、陸上交通や瀬戸内海沿いの海上交通や舟運による物資集散地に近接した要所としての地理的要因と、肥沃な千町平野の農業基盤を背景に、集落の安定が見られる。このことは、門田遺跡、堂免遺跡、助三畑遺跡、熊山田遺跡などで青磁・白磁・瓦器などの多くの広域流通品の出土によっても知られる。特に助三畑遺跡の井戸４からは多量の吉備系土師器・備前焼・亀山焼の在地の土器とともに、畿内系土師器、東播系須恵器、和泉産瓦器、常滑焼のみならず青磁・白磁の貿易陶磁器も出土している。さらに土器や陶磁器とともに養和元年（1181）の紀年銘を墨書した題籤が共伴していることによって、中世の商品の流通交易関係や中世土器の併行関係を知る基礎資料となっている(註15・28)。（第２図）

註

（1）平井泰男「熊山田散布地ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』68　岡山県教育委員会　1988
（2）福田正継『西谷遺跡』　長船町教育委員会　1985
（3）田代健二『亀井戸廃寺確認調査報告』　備前市教育委員会　1984
（4）三杉兼行「宮下貝塚」『岡山県大百辞典』下　山陽新聞社　1980
（5）岡本寛久『大橋貝塚発掘調査報告書』　邑久町教育委員会　1979
（6）平井泰男「真徳貝塚Ｂ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』68　岡山県教育委員会　1988
（7）河本清・福田正継・中野雅美・馬場昌一・関幸代「熊山田遺跡」『邑久町埋蔵文化財発掘調査報告』１　邑久町教育委員会　2004
（8）大谷博志・白石純「山田辻畑遺跡」『瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告』2　瀬戸内市道南北線埋蔵文化財発掘調査委員会・瀬戸内市教育委員会　2009
（9）金田善敬「下笠加遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』122　岡山県教育委員会　1997
(10) 近藤義郎「門田貝塚」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県　1986
(11) 岡田　博「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55　岡山県教育委員会　1983
(12) 馬場昌一『史跡門田貝塚環境整備事業報告書』　邑久町教育委員会　1998
(13) 平井泰男・光永真一「畑中遺跡確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会　1982
(14) 馬場昌一「堂免遺跡」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(15) 馬場昌一「助三畑遺跡」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(16) 馬場昌一「熊山田遺跡」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(17) 秋山浩三「熊山田遺跡の無文土器系土器」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(18) 馬場昌一「我城山弥生墳丘墓」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(19) 馬場昌一「高砂山古墳群」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(20) 平井　勝・宇垣匡雅「岡山県長船町亀ケ原所在の前方後円墳－亀ケ原大塚古墳と金鶏塚古墳－」『古代吉備』第12集古代吉備研究会　1990
(21) 岡田　博「水落古墳」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(22) 江見正己「木鍋山一号窯」『岡山県史考古資料』　山陽新聞社　1986
(23) 山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27　岡山県教育委員会　1978
(24) 山本悦世『寒風古窯址群』吉備人出版　2002
(25) 馬場昌一「寒風古窯跡群」『瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告』1　瀬戸内市教育委員会　2009
(26) 岡田　博「門田遺跡」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(27) 岡本寛久「半田廃寺」『邑久町史考古編』　瀬戸内市　2006
(28) 橋本久和「瓦器椀編年の今日」『中世考古学と地域・流通』　真陽社　2009

第２章　調査の経過と調査体制

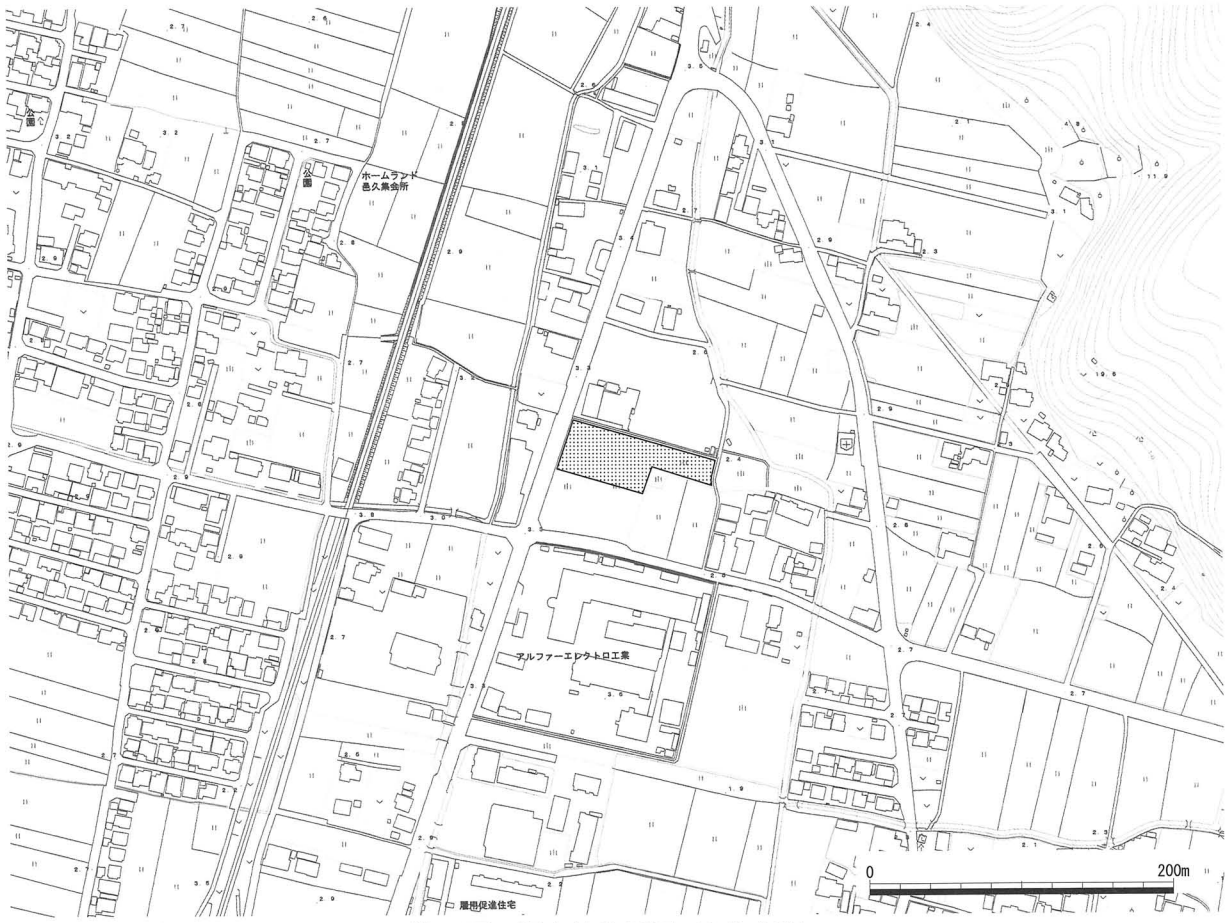
第１節　調査に至る経緯

畑中遺跡は、瀬戸内市邑久町の西部、吉井川の沖積作用のよって形成された微高地上に立地し、現標高は約2.4ｍである。推定されている遺跡の範囲は、長さ約320ｍ、幅約190ｍを測る。弥生時代前期の貝塚として著名な国指定史跡「門田貝塚」から北約500ｍの地点にあたっている。

平成22年度、大阪ガス株式会社による姫路－岡山高圧パイプライン敷設工事が計画され、史跡地内にシールドトンネルの両発進立坑やステーション建設について協議があった。

このため、ステーション計画により地下掘削範囲について協議を行い、平成22年５月14日付けで大阪ガス株式会社から埋蔵文化財発掘届が提出された。

畑中遺跡は今回の計画地に隣接する店舗の新築工事に伴い平成４年に発掘調査を実施しており、弥生時代前期から中世の竪穴住居や溝を検出していることから、今回の計画地にも遺構の存在が想定された。そこで瀬戸内市教育委員会は、平成22年７月16日に２×２ｍの試掘穴を３ヶ所設定し確認調査を実施して遺跡の密度を把握することとした。確認調査の結果、計画地の中央部と東端部において弥生時代のピット、溝状の落ち込みを確認した。



第３図　調査地位置図（1/5,000）

今回の確認調査や以前の発掘調査結果をふまえ、地下の影響を受ける施設をまとめ東西100ｍ、南北36ｍと東部外周部を調査対象地とし、そこで事業主体者側と瀬戸内市教育委員会による協議を行い、全面発掘調査の体制、経費、調査期間等の協議を行った。

第２節　調査の体制と地区区分・調査方法

１　調査の体制

現地発掘調査は瀬戸内市教育委員会が担当し、調査、遺構実測、報告書作成等の業務補助をフジテクノ㈲へ委託し実施した。調査の体制は次のとおりである。

瀬戸内市教育委員会

平成22年度～平成24年度

教育長　山﨑　宗則（平成22年4月1日～平成24年12月24日）
　　藤原　一成（平成25年1月21日～平成25年3月31日）
教育長職務代理者
　　安木　義忠（平成24年12月25日～平成25年1月20日）
教育次長　福池　敏和（平成22年4月1日～平成24年3月31日）
　　安木　義忠（平成24年4月1日～平成25年3月31日）
社会教育課
課　　長　馬場　昌一（平成22年4月1日～平成25年3月31日）（報告書担当）
参　　事　嶋田　　学（平成24年4月1日～平成25年3月31日）
課長補佐　岡田　　誠（平成22年4月1日～平成23年3月31日）
　　吉﨑　知子（平成22年4月1日～平成25年3月31日）
　　今吉　崇文（平成24年4月1日～平成25年3月31日）
総括主幹　今吉　崇文（平成22年4月1日～平成24年3月31日）
主　　幹　大谷　博志（平成24年4月1日～平成25年3月31日）（調査、報告書担当）
係　　長　大谷　博志（平成22年4月1日～平成24年3月31日）
主　　査　村上　　岳（平成24年4月1日～平成25年3月31日）
　　若松　拳史（平成22年4月1日～平成25年3月31日）
主　　任　深川　　順（平成22年4月1日～平成25年3月31日）
　　横山ひろみ（平成24年4月1日～平成25年3月31日）
臨時職員　関　　幸代（平成22年4月1日～平成25年3月31日）（報告書担当）

協力

古川　久雄（調査、報告書担当）フジテクノ㈲・日本考古学協会会員
山本　宗昭（調査、報告書担当）フジテクノ㈲
三好　加納・安藤　憲輔・小泉　健・筈尾　征司（測量担当）フジテクノ㈲
大阪ガス株式会社　幹線建設プロジェクト部姫路岡山ライン建設チーム
鴻池組・奥村組共同企業体　ＨＯライン岡山工事事務所

柳生写真館（遺物写真撮影）

発掘作業員

荒内 清　浮田 新示郎　中村 邦弘　町田 好之　水田 満　（瀬戸内市シルバー人材センター）
芦田 二男　梅森 一正　恵美 行隆　正分 良江　野吹 一哲　花高 和彦　藤原 脩治　藤原 住一
松田 康太　村上 勝万

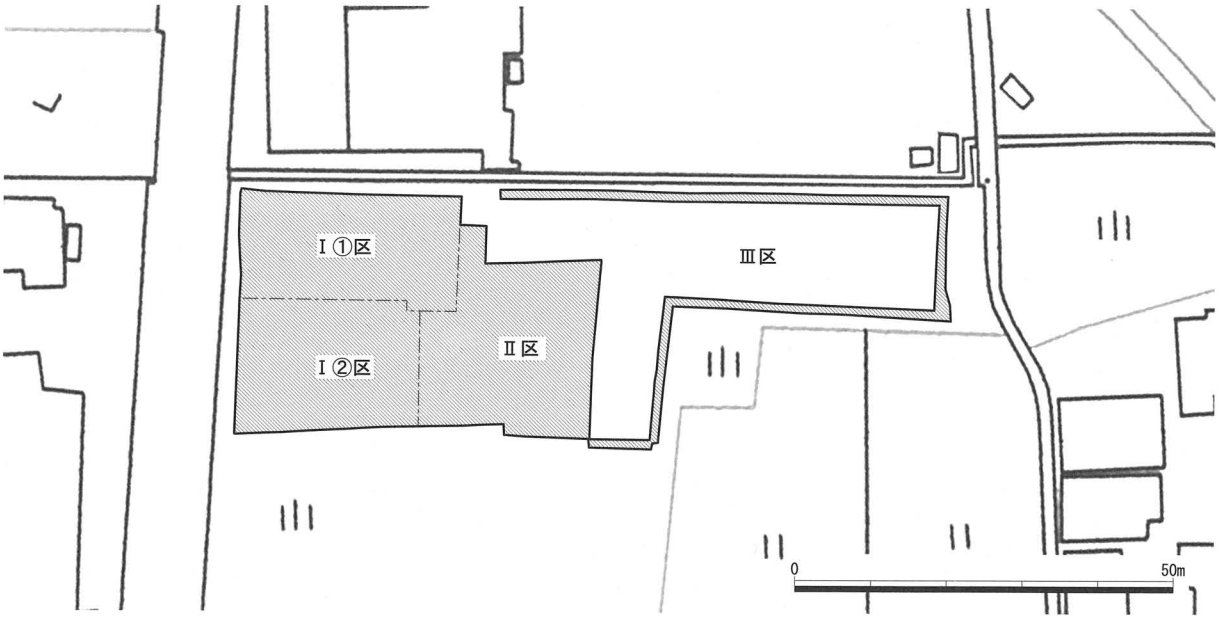
２　調査の方法と地区区分

調査対象地（工事予定地）は、東西100ｍ、南北36ｍの長方形のうち南東部を除く約2900㎡。これを大きく三分し、掘削工事が深部に及ぶ西部を主たる調査区としてⅠ・Ⅱ区、掘削予定深度の浅い東部をⅢ区とした。さらに、主たる調査区を東西に分けた西半（Ⅰ区）を南北に二分し北西部を１①区、南西部をⅠ②区とした。Ⅰ・Ⅱ区の調査面積は1315.47㎡となる。

敷地東部のⅢ区については全面調査を断念、外周の擁壁設置予定部分のみのトレンチ調査とし、遺構の上面検出と土層断面記録にとどめた。Ⅲ区の調査面積は130.58㎡である。

Ⅰ・Ⅱ区の調査は、事前に遺構面（地山面）直上まで重機掘削で掘り下げ、遺構検出を行った。検出した遺構には、アルファベット大文字二文字（ＳＨ・ＳＥ・ＳＫ・ＳＤ等）の遺構記号と二桁の数字により遺構番号を与え、出土遺物と図面・各種データの管理に努めた。なおこの遺構別記号・番号については、報告書作成段階で変更し、ピットを除く遺構種ごとに漢字表記の遺構名（竪穴住居・井戸・土壙等）を与え番号も再付与したため、本書における記載とは異なっている。混乱・誤解をさけるため刊末に新旧遺構名対照表（第11表）を掲げたので参照いただきたい。

遺構の図化・記録にあたっては、原則としてデジタル計測図化を採用した。断面図関係および遺物出土状況の図化については、デジタル計測のみならず図化作業（写真補正→トレース図化→プリントアウト）を現場事務所で行い、直ちに現地での手書き補正・土色注記・垂直レベル記入等を行うなど、測量班のデジタル技術と調査員・補助員の目視・手描き技術を併用する方法で作業の効率化を図った。



第４図　調査地区割り図（1/1,000）

ピットに関しては、総数280を越え（掘立柱建物をなすもの、後に井戸・土壙として扱ったものを含む）、個別の断面図化は断念したが、全数の法量計測・土色注記を行い、台帳を作成するとともに、半掘断面・完掘状況の撮影についても全数について実施した。

出土遺物は、遺構番号・層位・日付等を記入したラベルを付して袋詰めし、袋別に通し番号を与えて日々出土遺物台帳を作成した。記録写真は35mmフィルムのモノクロ・リバーサルに加えてデジタルカメラを併用し、デジタルカメラでは適宜遺構の掘削過程や作業風景の記録にも努めた。

第３節　調査の経過

現地調査は平成22年11月15日より開始した。その直前に県道223号（箕輪尾張線）に面したⅠ区（調査区西半）の遺構面直上までの重機掘削を終え、Ⅱ区（調査区東半）を残土置場としていたが、残土搬出と工事進行の都合上、その北半部（Ⅰ①区）を先行して作業を終え埋め戻す必要があったため、最優先で調査に着手した。

まず、堆積土層の概要を把握するため北側外周壁の壁切りと側溝掘りを行い、順次北側から遺構検出を進めた。作業着手翌日の16日には調査区北西部の壁沿いで竪穴住居らしき円形の遺構と東西方向に流走する溝を検出した。続いてその住居・溝に切られる溝二条と井戸らしき円形遺構も検出した。この時点で、当初の予測に反して多数の遺構が遺存していることがわかり、調査予定日数をにらんで、より迅速な作業が求められた。最終的には、Ⅰ①区だけでも竪穴住居２棟・溝３条のほか井戸・土壙・ピット多数を検出し、11月29日に全景撮影、30日には補足的な掘り下げ及び記録作成を行いⅠ①区の調査を完了した。

ただちにⅠ①区の埋め戻しを開始するとともにⅠ②区の調査に着手し、12月４日までには中央部を南北に走る溝、西壁沿いと東端部に性格不明の黒褐色土の広がりを確認し、数棟の掘立柱建物になるであろう多数のピットを検出した。中央の溝はⅠ①区で検出した大土壙（井戸７）に接続することが明白で、断面は明瞭なＶ字を呈し、大形井戸から導水する中世の水路（溝８）と考えられた。西壁沿いの遺構は、その形状と性格の把握に難渋したが、最終的には弥生時代後期の素掘り大形井戸（井戸２）と判明した。東端部の大きな遺構については竪穴住居の可能性も考えたが、平面形が不整形でさらに東半を検出できなかったため、西半の平面検出にとどめ、Ⅱ区の調査に残すこととした。

こうした経緯をへて、Ⅰ②区の調査は12月15日に全景撮影・遺構計測等を終え完了した。

第５図　調査風景（2010年12月15日）

第６図　調査風景（2011年１月12日）

このⅠ②区の調査と併行して、Ⅱ区に積み上げた残土の搬出をすすめ、続いてⅡ区の表土掘削も15日までには終えていたので、ただちにⅡ区の調査に着手した。

Ⅱ区では、東端で南北に走る幅５ｍほどの自然河道を検出した。これは６～７世紀頃の須恵器を出土する古墳時代河道と弥生土器のみを含む弥生時代河道、さらに無遺物の先行河道が重なっており、その状況把握に手間取るとともに予想外の遺物量に困惑することとなった。またⅠ②区東端で検出していた性格不明遺構については、長径12ｍにおよぶ不整形な落ち込みとなり、その底面でさらに井戸２基・土壙４基（弥生時代前期）を検出した。また、その落ち込み埋土上面とその周辺には多数のピットがあり、中世（13世紀頃）の掘立柱建物を確認した。

一方、Ⅰ②区・Ⅱ区の調査と併行してⅢ区のトレンチ調査を行った。12月10日、Ⅲ区南・東トレンチの重機掘削から始め、北トレンチを含めて遺構平面検出と土層断面図・遺構平面（上面）図作成、および写真撮影等を終えたのは21日である。

Ⅱ区の調査は、年末年始の休みを挟んで平成23年１月19日に全景撮影を実施し、翌20日には河道等の補足掘削、土層注記、遺構平面形測などを行って完了した。

現場稼働日数は、実働43日である。

調査日誌抄

平成22年

11月12日～13日(土)　Ⅰ区の重機掘削。Ⅱ区を残土置場とし、Ⅰ区を遺構面直上まで掘り下げる。

11月15日(月)　本日よりⅠ区北半(Ⅰ①区)の調査開始。ベルトコンベアの設置。北壁の壁切り、側溝掘削、および分層。検出精査。

11月16(火)～18日(木)　遺構面精査・遺構検出続行。北壁断面撮影。北壁沿いに竪穴住居１を検出、土壙・溝・ピット等多数検出。検出状況撮影。溝１・７も一部検出。竪穴住居２検出。井戸７を一部掘り下げ。

11月19(金)・20日(土)　溝２検出。竪穴住居１・２掘り下げ。井戸７は南部の輪郭が不明、北半のみ掘り下げ。溝１・７にトレンチ設定・掘り下げ。

11月24日(水)・25日(木)　溝７を西から順次掘り下げ、須恵器が多く出土。竪穴住居１・２も床面まで掘り下げ、全景撮影。井戸７は南肩の一部検出。溝が取り付いて南へ伸びる。溝２、および土壙５・６等も掘り下げ。

11月26日(金)～28日(日)　竪穴住居１・２床面遺構の精査・一部半掘および断面計測撮影。井戸４南半のみ掘り下げ後湧水面まで全掘。溝１・７も掘り下げ続行。各種検出遺構の断面計測撮影および図化をほぼ終了（土層注記未）。ピット群断面撮影。竪穴住居１・井戸４、完掘全景撮影。溝７ベルト除去。ほぼ完掘。土壙４、遺物出土状況撮影、のち取り上げ。検出遺構全体平面計測開始。全体清掃。

11月29日(月)　西と東から全景撮影。土壙・溝等個別遺構完掘全景撮影。遺構平面計測続行。Ⅰ区南半（Ⅰ②区）検出面精査。

11月30日(火)　竪穴住居２全景撮影。本日でⅠ区北半（Ⅰ①区）の調査を終了。Ⅰ②区西部、検出面をさらに10㎝程度重機掘削。井戸７から南へ続く幅２ｍの溝（溝８）を検出。

12月２日(木)～４日(土)　Ⅰ①区埋め戻し開始。Ⅰ②区検出面精査。西と南の外周に側溝掘削。中央部に南北の溝８、西部と東部にピット多数検出。また東部には黒褐色土の大きな広がりがあり、弥生時代の何らかの遺構となると思われるが性格不明。検出遺構略測。

12月６日(月)～８日(水)　溝８掘り下げ。東部黒褐色土部分（落ち込み？）に探査トレンチ設定掘削。遺物は弥生土器（前期）のみ。溝８より西の遺構（土壙・ピット）掘り下げ。溝１はほぼ完掘。遺物出土状況・ベルト断面撮影。ピットの半掘・土色注記。井戸２・土壙７・溝３掘り下げ。

12月９日(木)～14日(火)　ピット断面撮影後全掘。土壙７遺物出土状況撮影。井戸２の断面観察、二つの遺構の合体と判明。西側壁沿いで弥生土器がまとまって出土。溝８も掘り下げ。井戸２・溝８掘り下げ続行。Ⅲ区外周部を重機によりトレンチ掘削。井戸２掘り下げ続行。遺構の南北の壁がほぼ垂直にたつことを確認。遺構平面測量開始。Ⅲ区東・南トレンチ遺構検出、および略測。調査区全面清掃開始。

12月15日(水)　調査区全面清掃。東と西から全景撮影。その後個別遺構撮影。井戸２は最深部の確認。激しい湧水が発生し掘削を断念、即時埋め戻す。溝８、南壁およびベルト沿いを最深部掘り下げ。調査区全体の遺構平面測量。掘立柱建物の断面計測。Ⅱ区の排水作業、および遺構検出作業。本日でⅠ②区の調査を終了。

12月16日(木)・17日(金)　Ⅱ区壁切り・検出面精査・遺構検出。東壁沿いに自然河道がある。南西部に広がる黒褐色土の上面精査。竪穴住居の可能性も考えたが、極めて不整形な平面形となり竪穴住居ではなさそう。Ⅲ区北トレンチの壁切り・検出面精査。

12月18日(土)　南西部黒褐色土上面検出ピット掘り下げ・断面撮影。土壙１遺物出土状況撮影、および平面実測。東部自然河道の平面検出。北壁・南壁沿いに側溝トレンチ設定、河道の断面観察を行う。河道の黒褐色土からは須恵器が多く出土。Ⅱ区全体の遺構の状況がほぼ判明。

12月20日(月)～22日(火)　自然河道に中央トレンチ設定・掘削。最上層掘り下げ。弥生土器・須恵器とともに平安中世の土師器・須恵器も出土。溝６も掘り下げ。北壁トレンチ断面撮影、および断面実測。Ⅲ区北トレンチも撮影・実測。

12月24日(金)・25日(土)　落ち込み遺構上面・周辺ピットの掘り下げおよび断面撮影・全景撮影。P-186・209の遺物出土状況撮影・遺物取り上げ。

平成23年

１月７日(金)　本日より年始作業。ピット掘り残し完掘。落ち込み遺構・自然河道掘り下げ。両遺構とも弥生土器大量出土。前者は弥生前期、後者は弥生後期および須恵器。

１月８日(土)～11日(火)　落ち込み遺構掘り下げ。南部に遺物集中。別遺構が存在するようだ。自然河道掘り下げ続行。南部に弥生土器集中部検出。土壙８・２３も掘り下げ。

１月12日(水)　落ち込み遺構南端部に３遺構（土壙19・20、井戸２）検出。井戸２は最深部から弥生前期の甕ほぼ１個体分出土。落ち込み遺構北部でも井戸３を検出、掘り下げ。自然河道の弥生土器集中部撮影。溝３・７も掘り下げ。

１月13日(木)・14日(金)　井戸２・土壙３・溝３の遺物出土状況撮影。落ち込み遺構中央ベルト撮影・除去。溝３・７、井戸３掘り下げ。自然河道下層流路掘り下げ

１月15日(土)　自然河道（古墳時代河道）掘り下げ終了。中央ベルト断面撮影。土壙２・溝６掘り下げ。

１月17日(月)　井戸３は出水のため完掘を断念。残余のピット、半掘・撮影・注記。溝６断面撮影。残余のピット断面撮影・注記。

１月18日(火)　自然河道（古墳時代下層流路）精査・掘り下げ。土壙２最下層遺物検出・撮影。溝６と自然河道の接続部精査・掘り下げ。溝７に切られた土壙24掘り下げ。全体清掃。

１月19日(水)　全体清掃・全景撮影。自然河道（弥生時代河道）掘り下げ。検出遺構全体平面測量。シート・土嚢等かたづけ・撤収。

１月20日(木)　自然河道の下層、溝６の遺存部精査・掘り下げ。井戸５・土壙11掘り下げ・撮影。検出遺構全体平面測量。個別遺構撮影。発掘機材のかたづけ・撤収。本日で現地調査終了

第４節　出土遺物整理と報告書作成

現地調査終了後、図面データの基礎整理、写真台張・遺物台張ほか各種台帳作成、出土遺物洗浄・分類等の１次的資料整理を平成23年３月までにはほぼ終了した。

引き続き報告書作成にむけて、個別遺構図のデジタル編集と土器・石器の実測（200点目標）に着手した。そして、翌平成24年３月には、一部のトレースも含めて遺物実測を終了し、ようやく報告書執筆・編集の段階にはいった。平成24年夏から秋にかけ、原稿執筆と併行して、掲載図面の修正および各種調整、図版写真の選定、刊末掲載の各種一覧（遺構一覧・遺物一覧）の編集を進めた。また、遺物の写真撮影は柳生写真館へ委託した。

第３章　発掘調査の成果

第１節　基本層序と遺構面

調査区内における現地表面の標高は約2.2ｍで、ほとんど高低差はなく平坦である。一方、遺構検出面（地山面）はＩ区南壁部が最も高く、標高1.9ｍを測るが、Ｉ区北部・Ⅱ区は1.6～1.7ｍ程度で、東ないし北東に向かって微妙にレベルが下がっている。

基本層序は、無遺物の「地山」としたものを含め、大きく４層に分層することができる（第７図）。

Ｉ層は、主としてＩ区に分布する盛土で、水田耕土の上に十数cmから20cm程度盛られている。かさ上げとしてはあまりに薄く意味をなしていないので、道路沿いの当該地に残土を遺棄し均した程度に考えておきたい。Ⅱ層は旧水田耕土の灰色粘質土であり、10～20cmの厚さで調査地内全域に分布する。

Ⅲ層は、遺構面を覆ういわゆる遺物包含層である。Ⅱ区南部では暗灰黄色粘質土（Ⅲ①層）と黒褐色粘質土（Ⅲ②層）の上下に分層したが、調査区全体に広がるのは下層の黒褐色粘質土である。遺物は弥生時代前期から中世のものを希薄に含んでおり、明らかな近世陶磁器はみられなかった。

Ⅳ層は、かなり明るい色調のオリーブ褐色粘質土で、まったく遺物を含んでいないので、地山として取り扱った。その上面（同一面）で弥生時代（前期～後期）・古墳時代（後期）・中世の大別３時期の遺構を検出している。その標高は前述のように1.7m前後である。

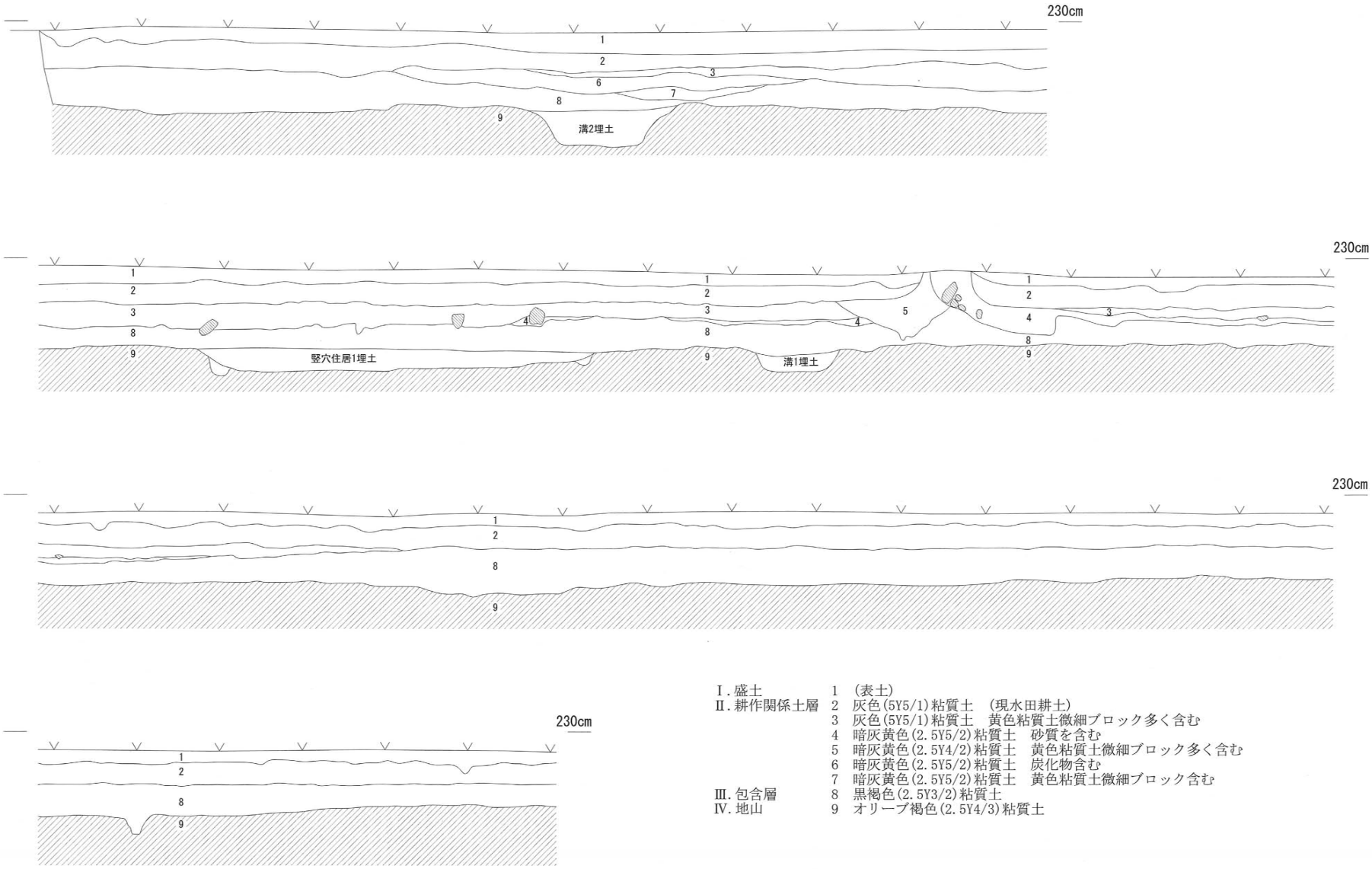
遺構（地山）面の約1ｍ下、標高0.7～0.8ｍには帯水層（砂層）が存在する。今回の調査では、井戸２・３・４の最下層確認でこの帯水層まで掘り抜いたため、勢いよく水が噴出する事態となった。それは放置すれば調査の進行に支障をきたすので、井戸５・７ではあえて下層確認を実施しなかった。この帯水層は周辺地域一帯に広範に広がっているようで、近隣の試掘調査等でも多く確認されている。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１　弥生時代遺構の概要　（第９図、図版１～３）

検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟、井戸３基、土壙約20基（推定弥生時代を含む）、溝６条、性格不明の落ち込み1か所、自然河道1本を数える。一部を除いてほとんどを同一面で検出し、明瞭な切り合い関係をもつものも少なかった。出土遺物から時期の特定できるのでは弥生時代前期・後期の遺構が多く、一部に中期のものもみられる。土壙については、遺物がほとんど出土しなかったものについては時期不明遺構として取扱い、ここでは多少とも時期判断の根拠を示し得る14基のみ取り上げることとする。また自然河道については、明らかに須恵器を含む古墳時代の河道と、弥生土器のみを出土する河道、さらにそれに先行する無遺物の河道が重なり、各時代の遺構（特に溝）と微妙な切り合いを示すが、この項では河道全体の検出状況と堆積土層、弥生時代河道の検出状況について述べる。

以下、個別の遺構について記述をすすめる。

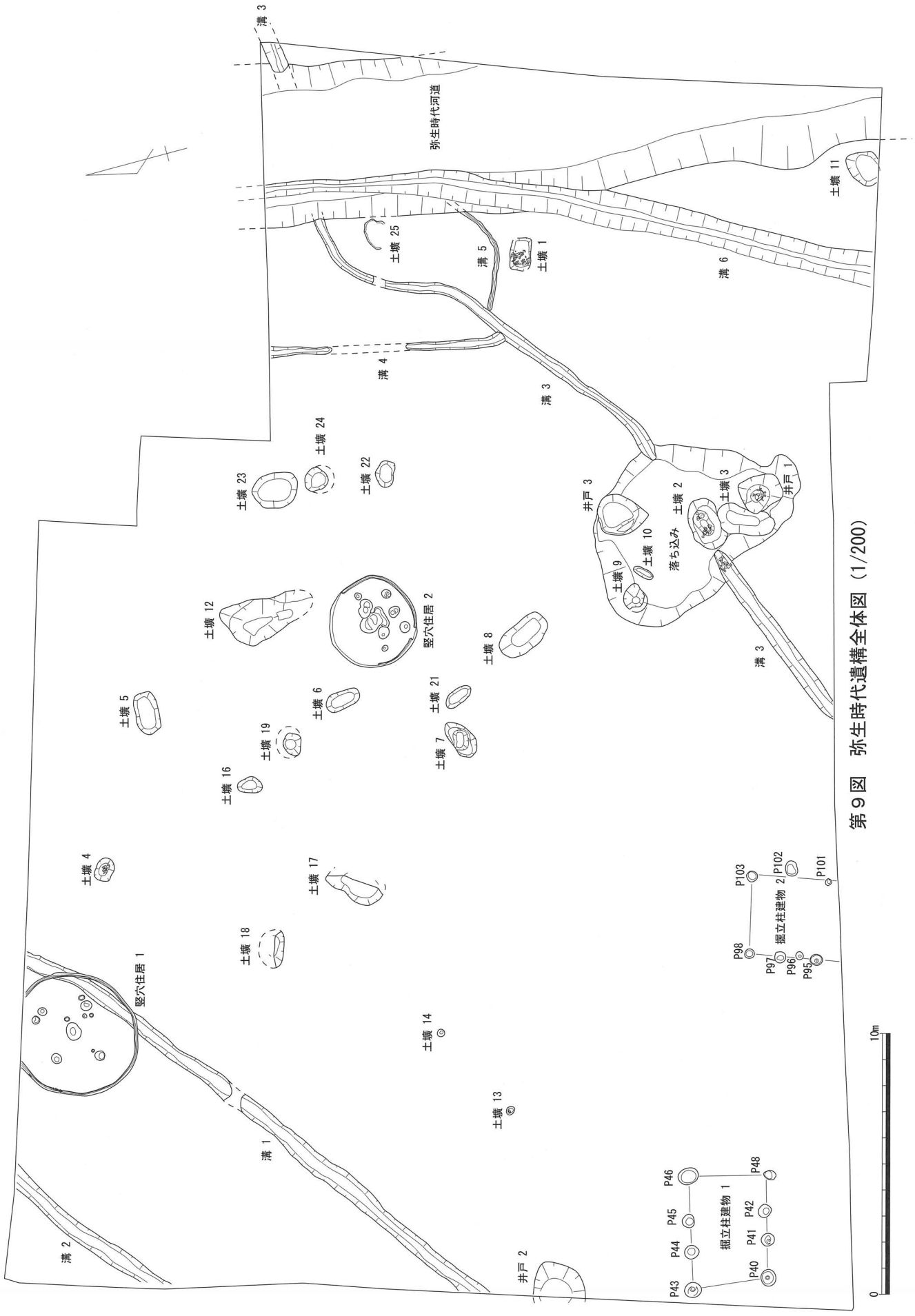


Ⅰ.盛土　1　(表土)
Ⅱ.耕作関係土層　2　灰色(5Y5/1)粘質土　(現水田耕土)
3　灰色(5Y5/1)粘質土　黄色粘質土微細ブロック多く含む
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　砂質を含む
5　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　黄色粘質土微細ブロック多く含む
6　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　炭化物含む
7　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　黄色粘質土微細ブロック含む
Ⅲ.包含層　8　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
Ⅳ.地山　9　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土

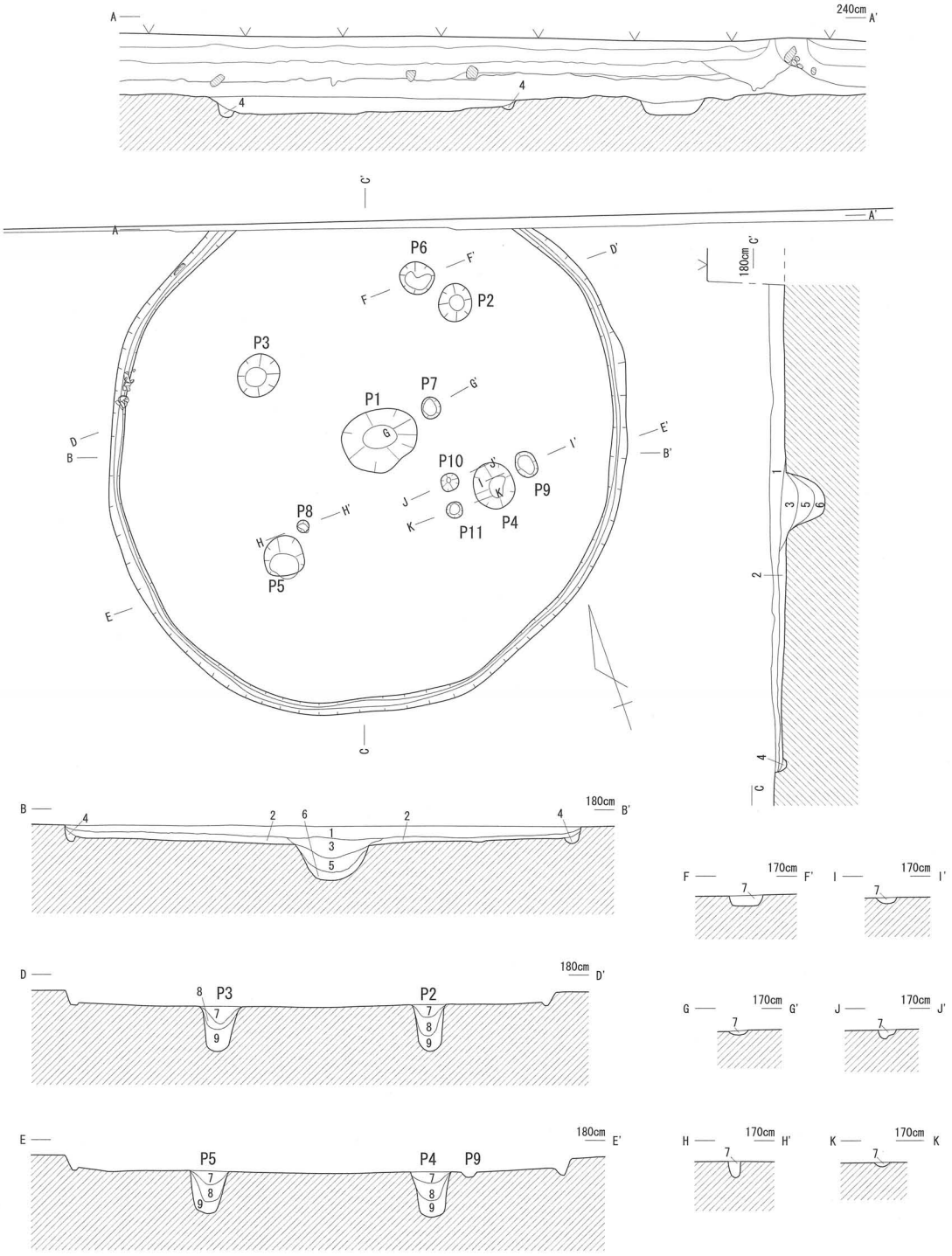
0　2m

第７図　Ⅰ区北壁土層断面図（1/40）

第８図　Ⅰ～Ⅲ区検出遺構全体図（1/250）



第９図　弥生時代遺構全体図（1/200）



1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
2　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土　炭化物含む
3　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　炭化物含む
4　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
5　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　やや暗い、炭化物含む
6　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　粘性強い
7　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
8　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　粘性強い

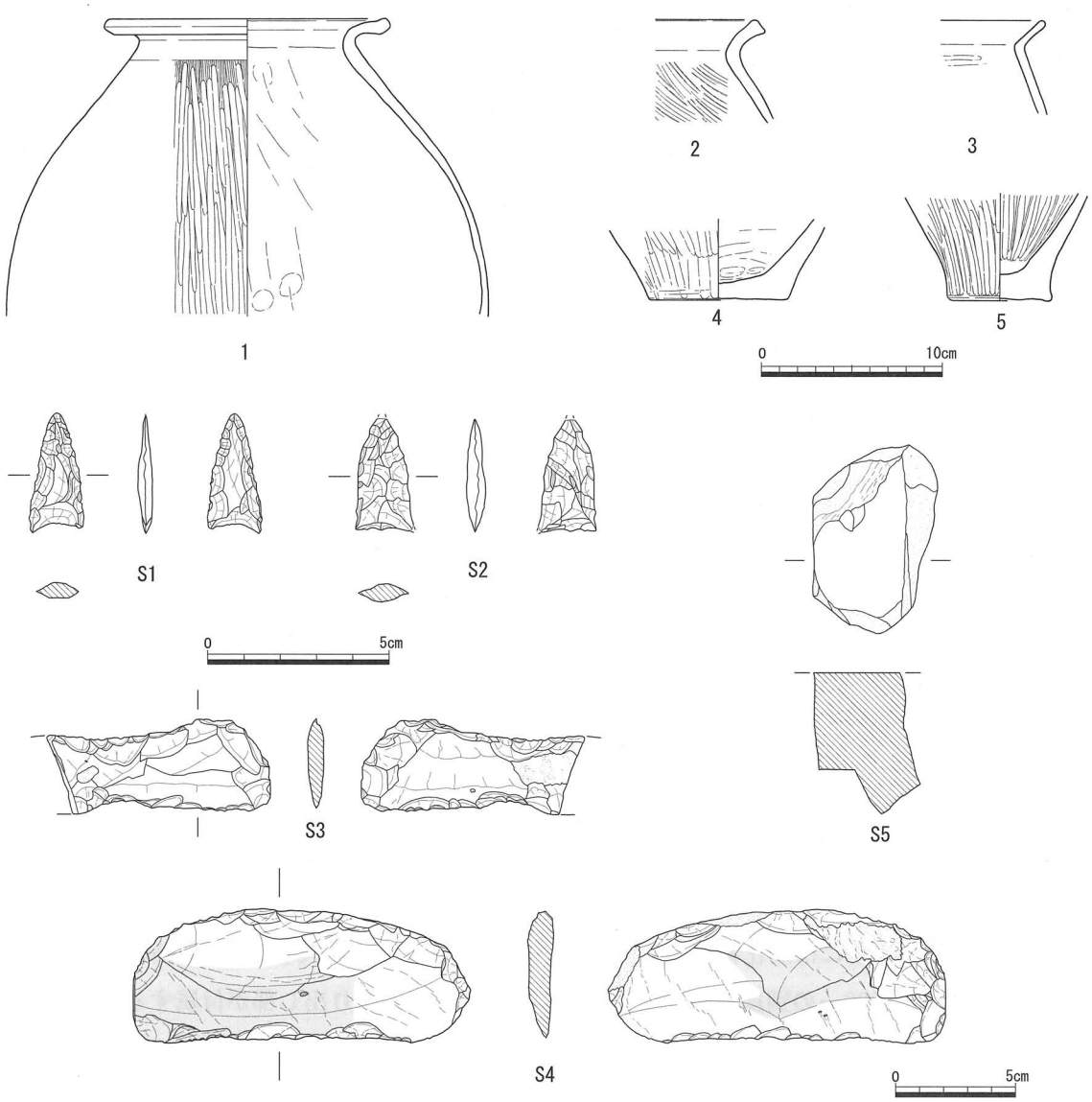
第10図　竪穴住居１平・断面図（1/60）

２　竪穴住居

竪穴住居１（第10･11図、図版４･26-5･28-1）

Ｉ区北壁沿いやや西寄りで検出した。北側の一部は調査区外になり、南東側は溝１を切っている。平面形はやや歪んだ円形で、検出面の標高は1.64ｍである。住居北端にかかる調査区外周壁断面をみると、厚さ15㎝程度の住居埋土の上を、弥生時代から中世の遺物を希薄に含む包含層（第Ⅲ②層・厚さ15～20㎝）が直接覆っており、中世以降の削平により本来の遺構掘削面（弥生時代の生活面）を完全に失っていることがわかる。住居は、長径499㎝、短径471㎝、検出床面積は14.91㎡を測り、周壁は最大検出高14㎝、その内周には床面からの深さ５㎝程度、幅12㎝前後の小溝（周壁溝）が全周する。

床面では11個のピット（Ｐ１～Ｐ11）を検出した。主柱穴と考えられるのはＰ２～Ｐ５の4個で、いずれも直径35～41㎝、深さ38～41㎝、柱間は最大200㎝、最小173㎝を測る。埋土は黒褐色～暗灰黄色



第11図　竪穴住居1出土遺物（1/4･1/3･1/2）

の粘質土、明瞭な柱痕は検出できなかった。4個の主柱穴の間（中央）にあるＰ１は、長径64cm、短径54cmの楕円形を呈し、深さ35cm。主柱穴よりやや浅く、平面的には大きいため、柱穴ではなく、いわゆる中央土壙にあたるものであろう。このほか、床面の東半部でＰ６～Ｐ10の5個の小ピットを検出したが、深さが深いものでも12cm、最も浅いものは３～４cm程度であり、建物の構造等にかかわる遺構とは考えられない。

出土遺物は多くないが、西側周壁溝上で少しまとまった弥生土器、やはり北西側周壁溝内で打製石包丁Ｓ４とスクレイパーＳ３（うちＳ３は調査区外周トレンチ内出土）、Ｐ２の南側とＰ４の東側で打製石鏃Ｓ１・Ｓ２、南西側周壁沿いで一面のみ研磨された砥石片Ｓ５が出土した。

そのほか、主として床面直上付近で弥生土器極小片とサヌカイトの剥片・砕片46点が出土している。この石器以外のサヌカイト片は住居南側を中心に分布しており、量的に案外多いことも注目すべきであろう。石器製作工房の可能性も考えられる。

出土遺物は、土器は図化できた甕１～５のみで、甕１・２は「く」の字に外反した口縁部の端部を肥厚し、甕１の外面調整は頸部近くをタテハケメ、以下胴部はタテヘラミガキを施す。内面調整はオサエ後ナデを施す。甕３は「く」の字に外反した口縁部を持つ。甕４・５は平底の底部で、甕５は細くすぼまっている。甕５の内外面調整は丁寧なタテヘラミガキを施す。石器は、サヌカイト製の凹基式の石鏃Ｓ１・Ｓ２で、Ｓ２は先端部を欠く。Ｓ３は端部を欠くが細身のスクレイパーの可能性があろう。Ｓ４は使用により両面に摩耗痕が残る、完形のサヌカイト製の打製石包丁。Ｓ５は一面に使用痕が残る砥石片である。

竪穴住居１の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

竪穴住居２（第12図、図版５･28）

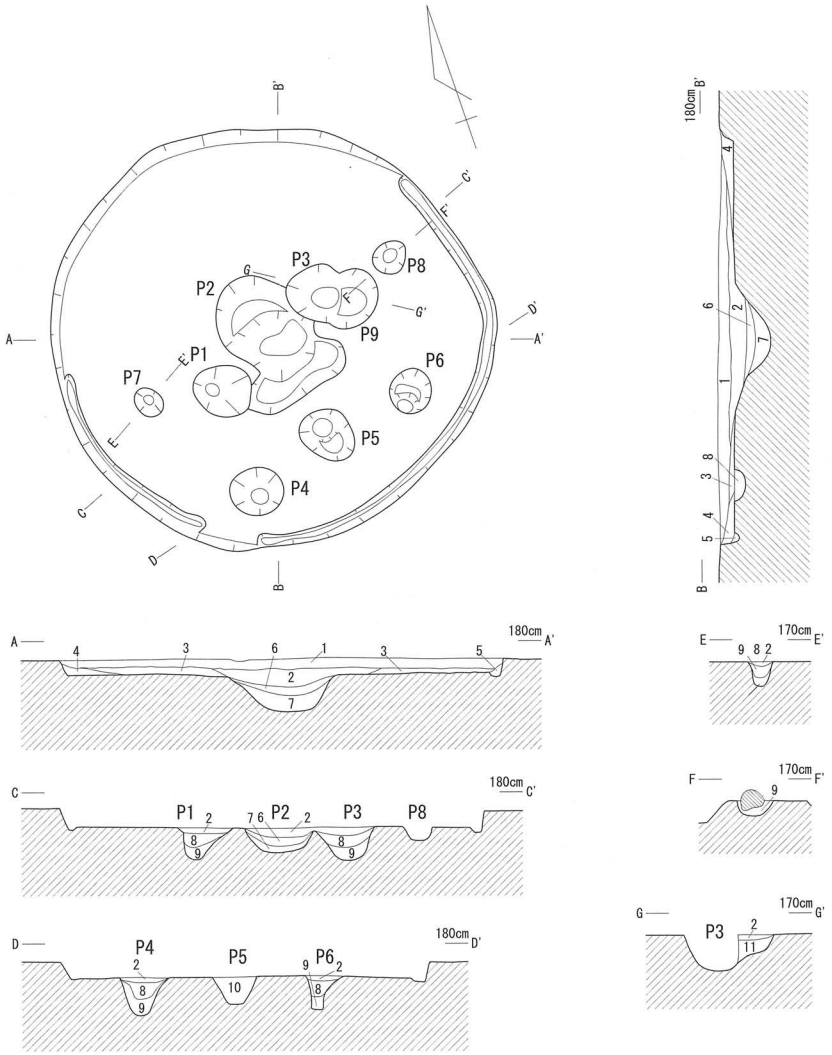
調査区中央北寄り（Ⅰ-①区南東部）、竪穴住居１の南東15.5ｍで検出した。検出面の標高は1.66ｍ、平面形は長径340cm、短径337cmのほぼ円形で、床面積は8.01㎡を測る。周壁は、検出高14cmで、その内周には幅12cm、床面からの深さ約4cmの小溝（周壁溝）がめぐるが、北西側1/3は検出できず、南部の約40cmも途切れていた。

床面で９個のピット（Ｐ１～Ｐ９）を検出した。主柱穴と考えられるのはＰ１とＰ３の２個で、南西側のP1は長径46cm、深さ43cm、北東側のＰ３は長径45cm、深さ41cmを測り、その柱穴間距離は117cm。埋土は黒褐色・暗灰黄色の粘質土である。Ｐ３はすぐ東に接するやや浅いＰ９（長径50cm、深さ19cm）を切るが、その意味するところはよくわからない。Ｐ１の西北西（心々距離51cm）にはＰ７（長径33cm、深さ45cm）、Ｐ３の東側（心々距離61cm）にはＰ８（長径29cm、深さ22cm）がある。いずれも小さく浅目で、主柱の補助柱的なものが設けられたと思われる。

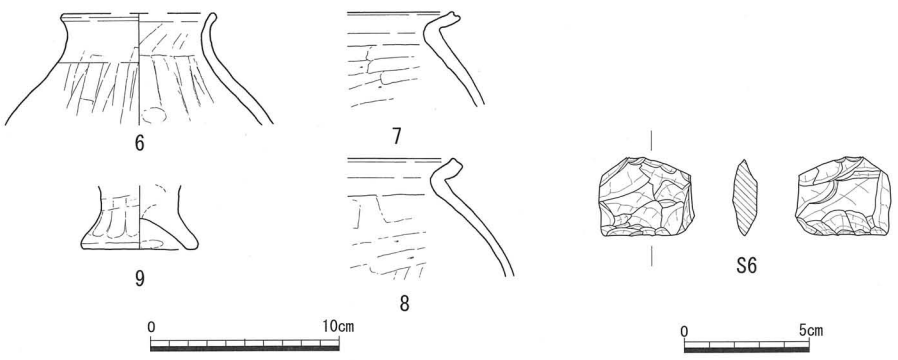
２本の主柱穴の間にあるＰ２は、長径88cm、短径69cm、深さ27cmを測り、中央土壙と思われる。埋土最上層の黒褐色粘質土層は、Ｐ３の最上層と一体化しており、同時進行的に埋没したと考えられる。最深部の黒褐色粘質土層には炭化物を多く含んでいるので、屋内炉として使用された灰穴と思われる。なお、南東側には長径90cmの別遺構が連接したようにみえる浅い張り出し部が付属する。

Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３の南東側には、Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６が同じ方向に並んでいる。Ｐ４は長径42cm、深さ43cm、Ｐ５は長径44cm、深さ45cm、Ｐ６は長径36cm、深さ28cmを測る。埋土はＰ４・Ｐ６がＰ１・Ｐ３とほぼ同じ黒褐色・暗灰黄色粘質土、P5は炭化物を多く含む黒褐色粘質土単層であった。

このＰ４～Ｐ６の性格について少なくとも、Ｐ１～Ｐ３やＰ７・Ｐ８とともに住居屋蓋を支える柱



1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
2　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
3　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土
4　黄褐色(2.5Y5/4)粘質土　灰色粘質土微細ブロック含む
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　地山微細ブロック含む
6　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土
7　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　炭化物含む
8　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　粘性強い
10　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　炭化物多く含む
11　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　地山微細ブロック含む



第12図　竪穴住居２平・断面図（1/60）・出土遺物（1/4･1/3）

の一部とするには、かなり特殊な構造を考えないかぎり無理があるのではないかと思われる。現状で最も可能性が高いのは、先行する同規模同構造の竪穴住居をもう１棟想定することである。Ｐ４・Ｐ６は、Ｐ１・Ｐ３と規模・埋土ともに類似し、主柱穴とするに充分であり、またＰ５は埋土に炭化物を多く含んでＰ２と同様の中央土壙であった可能性が高い。さらに、柱穴間距離がＰ１～Ｐ３よりやや長いものの、Ｐ４～Ｐ６が一直線上に並ぶ位置関係も類似する。

仮に、先行する古い方を住居Ａ、今回全形を検出した新しい方を住居Ｂと呼ぶなら、住居Ａを取り壊したあと、その床を切り込んで同構造の新しい住居Ｂをつくったのではないかと考えられる。その後、古代・中世の遺物を含む包含層（第Ⅲ②層）が、南東側やや高いレベルに残っていたであろう住居Ａの床面をもすべて削平した上に形成され、新しい住居Ｂの床面に住居Ａの主柱穴と中央土壙のみが残ったのではないかと考えられる。

もともと竪穴住居２は、直径3.4ｍにすぎない二本柱の小型簡易構造であり、主柱穴と同等の柱穴が複数ある場合は、今回のように新旧の住居が重なっているか、もしくは住居と直接関係のない別遺構と考えるほうが理解しやすいと考えられる。

出土遺物は、口縁部がわずかに開きながら端部を丸くおさめる甕**６**で、外面調整は板状の工具で縦方向にナデ。内面調整はシボリ後オサエ、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。短く「く」の字に外反した口縁部の端部わずかに窪めた甕**７・８**で、外面調整は縦方向にハケメ、内面調整は口縁部の屈曲部近くまでヨコヘラミガキを施す。台付き鉢の台部と考えられる鉢**９**である。外面調整は押さえを施す。石器**Ｓ６**は、サヌカイト製の楔形石器である。

竪穴住居２の時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉頃と考えられる。

３　掘立柱建物

掘立柱建物１（第13図、図版６-1）

調査区南西隅に、20数個のピットが集まっている部分がある。その中には径50～60㎝前後の大きいものと、径30㎝前後の小さいものがあり、前者（Ｐ40～46・48）で構成される建物が掘立柱建物１、後者からなるのが掘立柱建物４である。

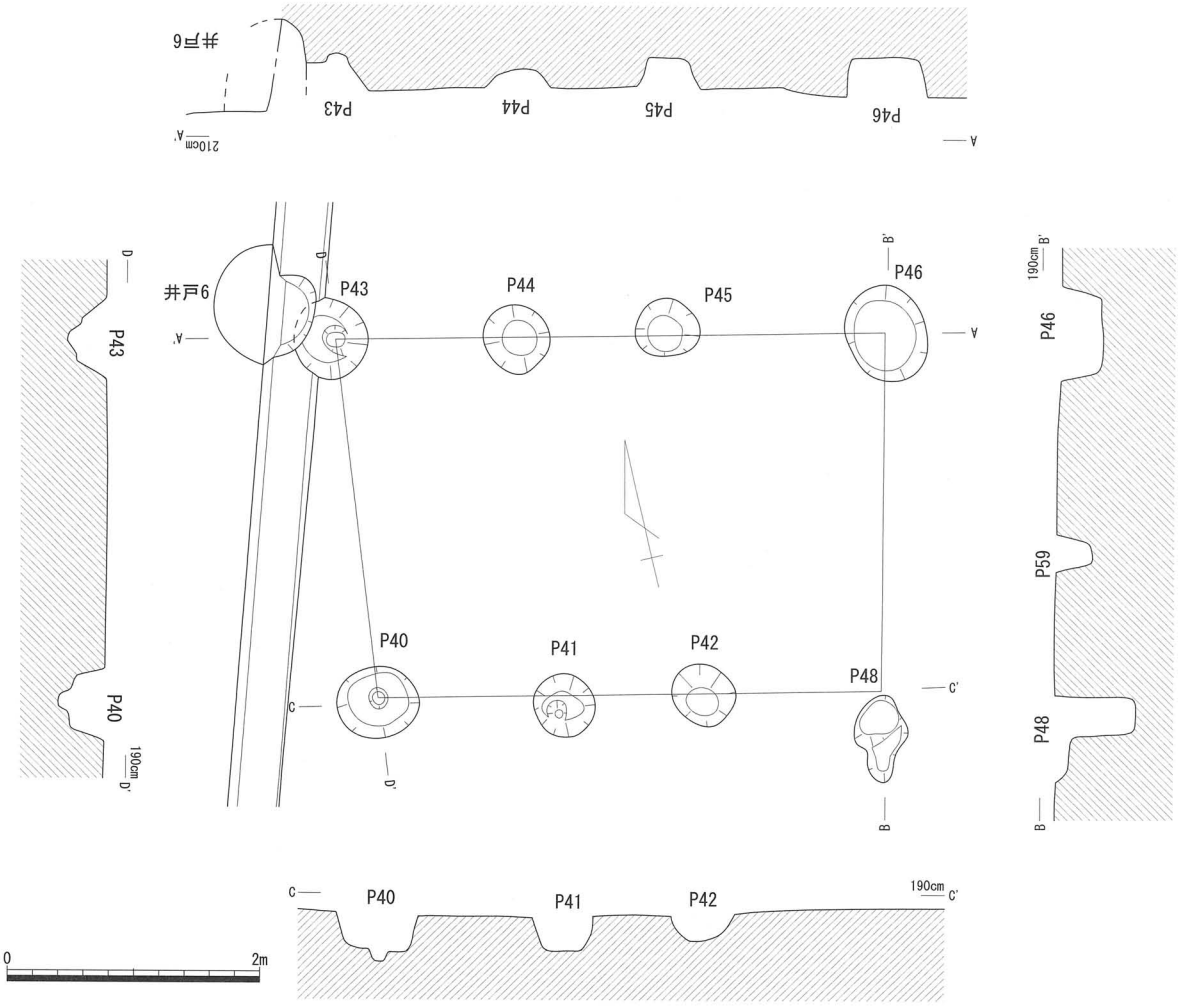
掘立柱建物１は、桁行３間梁行１間の建物で、西北西－東南東（Ｎ-76°-Ｗ）を桁行軸とする。ただ、梁行西面285㎝・東面307㎝、桁行北面429㎝・南面398㎝を測り、かなり歪な平面形である。また、南と北の桁行柱間が120～170㎝に対して、東と西の梁行１間が307・295㎝と２倍ほどにもなる。

柱穴の平面形は、円形ないし不整円形で、その寸法は、Ｐ46が最も大きく長径77㎝・深さ40㎝を測るが、他は長径50～60㎝・深さ20～40㎝程度である。埋土はすべて暗黄灰色粘質土で、少量の弥生土器片が出土した。またＰ45では、小片ながら弥生後期に比定できる高杯脚裾とともに、かなり硬質に焼き締まった焼土片数点が出土した。

３間×１間の平面形で梁行柱間が桁行柱間の倍というのは、中世の建物にはあまり例がなく、弥生時代の掘立柱建物（高床建物か？）にしばしば見られるものであり、出土遺物の面からもこの掘立柱建物１を弥生時代後期のものと考えてよいであろう。あるいは、Ｐ61が高床建物の棟持柱になる可能性も考えられる。

掘立柱建物２（第14図、図版６-2）

調査区南壁沿い、溝８の西側で検出した。Ｐ95・97・98・101・102・103からなり、桁行２間梁行



第13図　掘立柱建物１平・断面図（1/60）

１間であるが、南が調査区外となるので、もう１間増えて桁行３間となる可能性が高い。

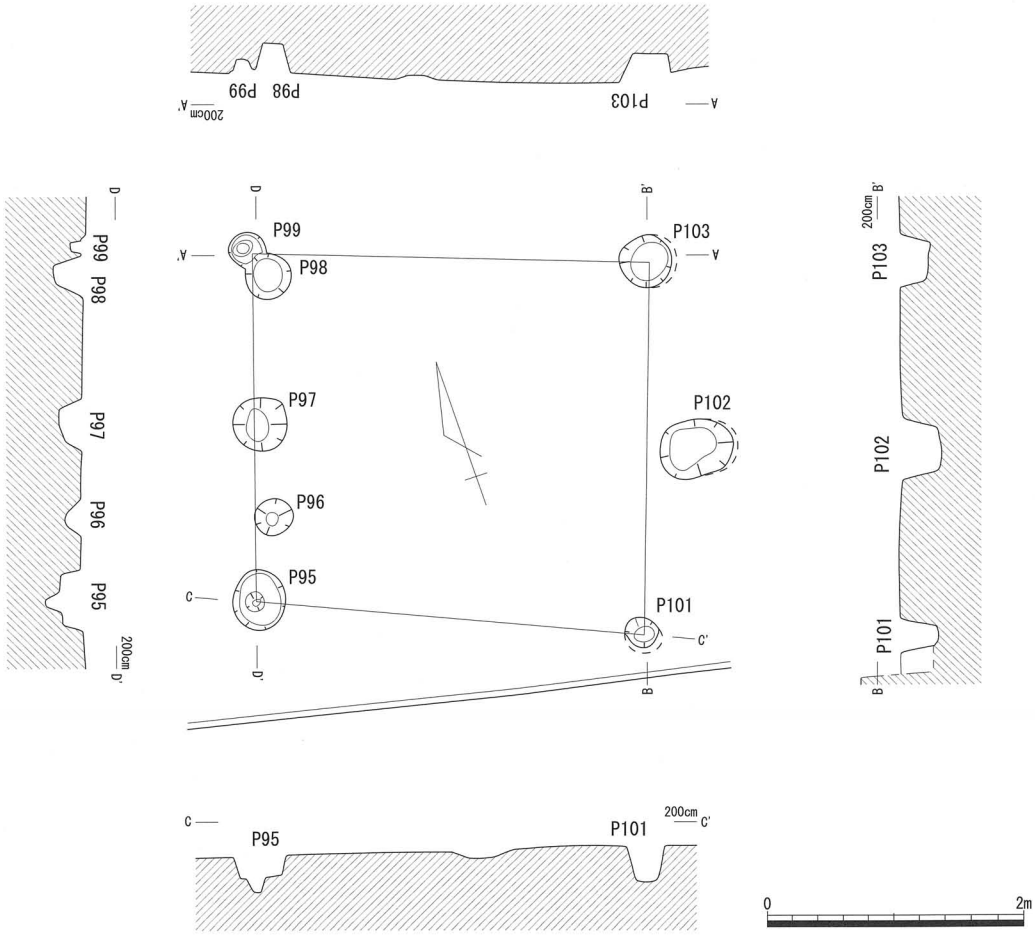
西面桁行２間分が260㎝であるので、３間とすれば推定桁行390㎝、そして北面梁行１間は298㎝である。床面積は２間×１間ならば7.75㎡、３間×１間なら11.62㎡となる。桁行軸は、N-20°-Eである。

柱穴の平面形は円形もしくは不整円形で、Ｐ102がかなり大きくＰ103が小さいが、他は径40㎝前後である。埋土はやはり暗黄灰色粘質土。遺物は極めて少なく、弥生土器小片少量が出土した。

柱穴の平面形が中世の建物よりやや大きく、２間（３間）×１間という平面構造、さらに梁行１間の柱間が桁行１間の柱間の倍以上あるなど、前項掘立柱建物１と共通の特徴をもつ。柱穴から古代・中世遺物を出土していないことも加味して、本建物を弥生時代の掘立柱建物（高床建物？）と考えて問題ないであろう。

４　井　戸

井戸と考えられる遺構は３基検出した。このほか「土壙」と分類した中にも、平面形状が丸く井戸を掘ろうとした可能性があるものも含まれるが、掘削深度が浅く、湧水層まで達していなかったので



第14図　掘立柱建物２平・断面図　（1/60）

ここでは除外した。

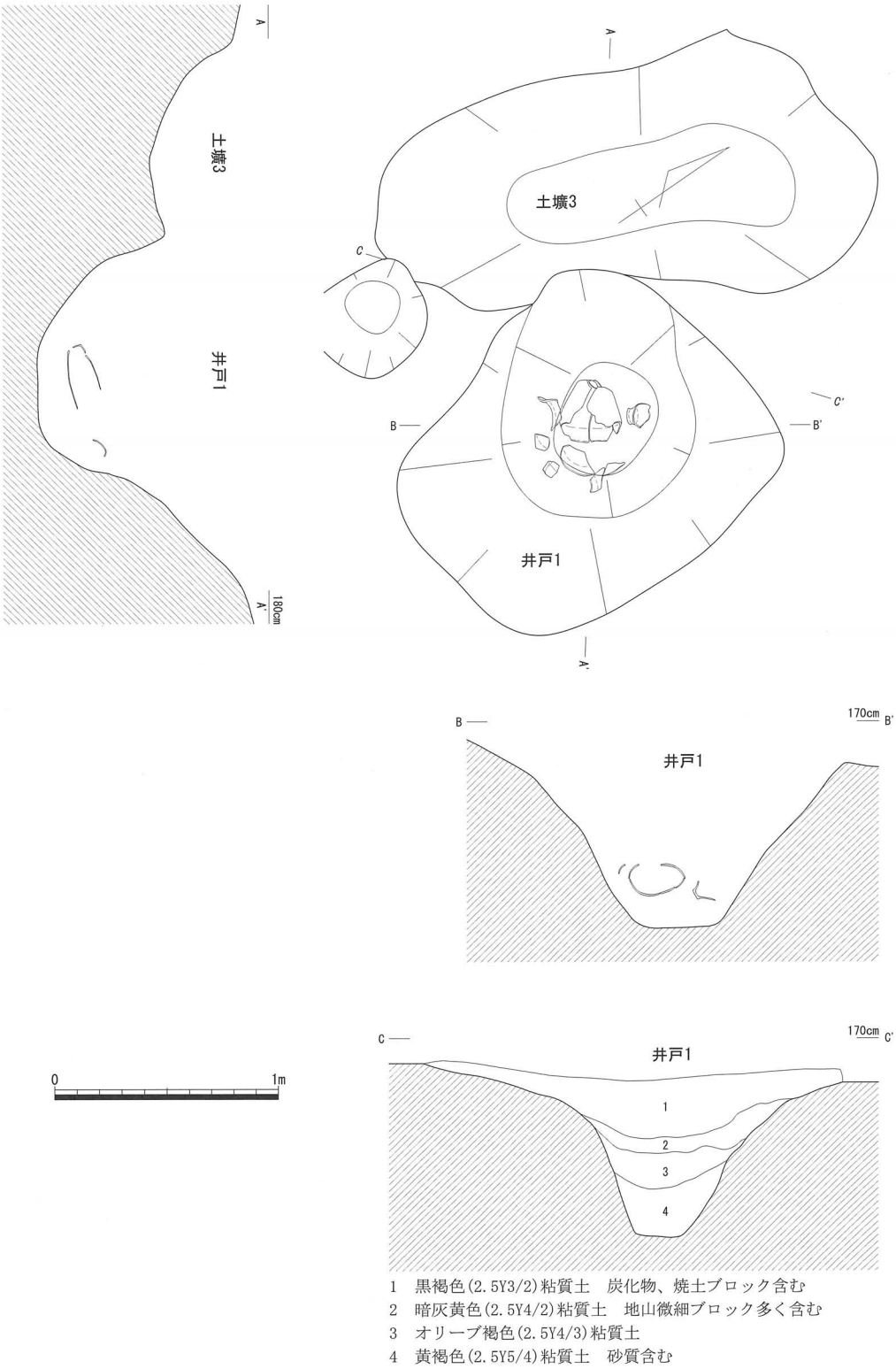
井戸１（第15･16図、図版７･26-1･28-1）

Ⅱ区の南西部で、不整形な大きな落ち込みを検出した。長径8.7ｍ前後、短径5.8ｍ前後、検出面からの深さ20～30㎝程度である。比較的平らな底面で、性格不明の小土壙・小ピットとともに大きな土壙と井戸を各２基検出した。そのうち落ち込み内南端で検出したものが、井戸１である。

井戸１は、検出当初から井戸として認識できたものではなかった。落ち込み内中央ベルトの南西側がほぼ底に達したところで３基の土壙状遺構を検出し、最終的にはその南端のものを弥生時代前期の井戸と認識して井戸１、北側の２基を土壙２・３とした。

井戸１の平面形は、壁面が大きくラッパ状に開いた上端で隅丸長方形に近い楕円形で、長径（北西－南東）156㎝、短径（北東－南西）134㎝、急斜面がめぐる遺講下半部は長径（東西）110㎝、短径（南北）86㎝を測る。深さは、検出面（落ち込み底レベル）から75～80㎝程、南側の落ち込み肩からは、160㎝前後を測る。

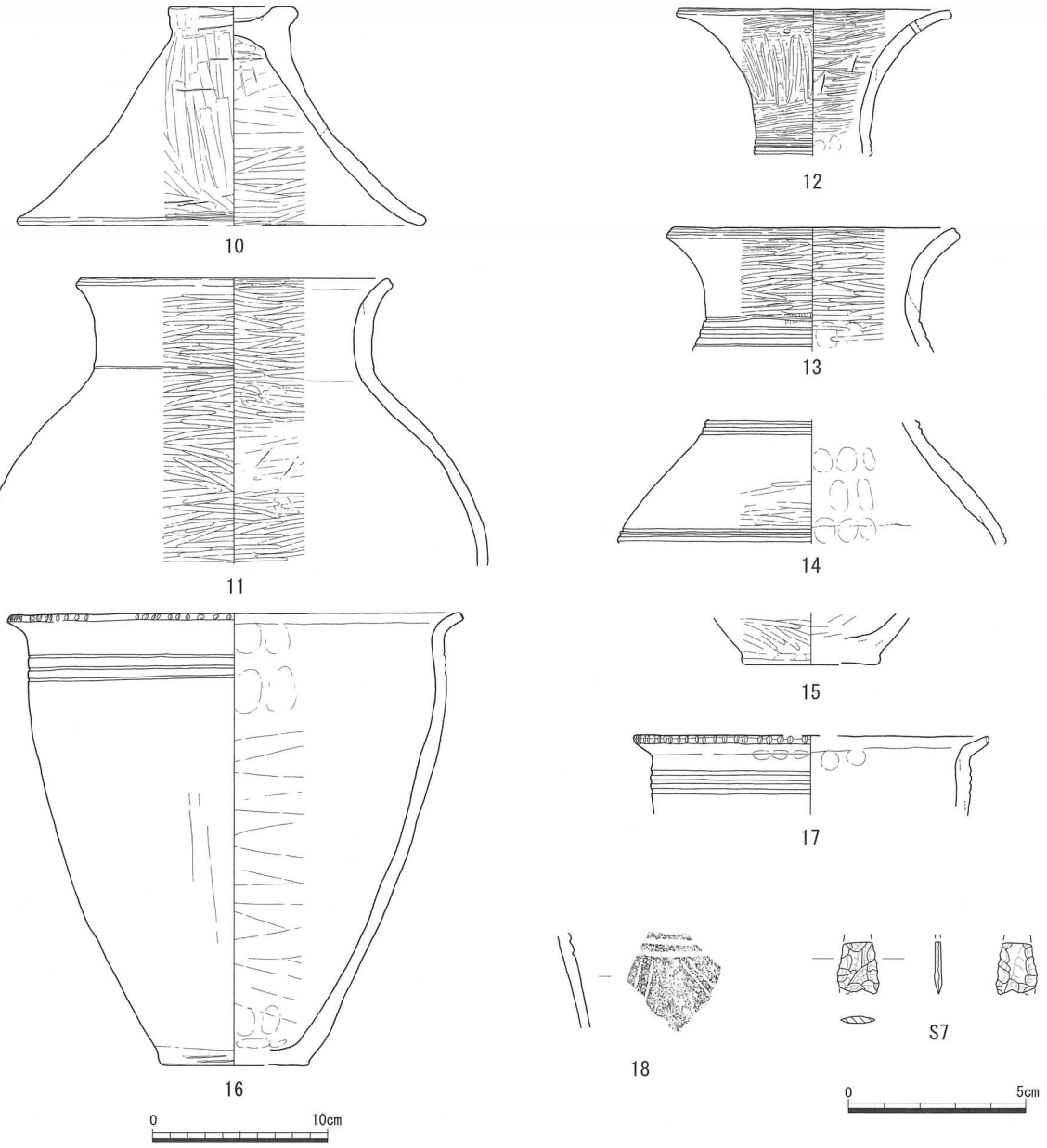
底面は、下層の湧水層（砂層）までは達していないが、少量の水は絶えることなく染み出していた。埋土の中層・下層は、比較的明るい色調のオリーブ褐色や暗黄褐色粘質土で、下層・最下層には石鏃Ｓ７１点を含む多くの遺物が出土した。特に底面直上では、復元完形の弥生前期甕１個体分16がまとまって出土した。



1　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　炭化物、焼土ブロック含む
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック多く含む
3　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土
4　黄褐色(2.5Y5/4)粘質土　砂質含む

第15図　井戸１平・断面図（1/30）

出土遺物は、土器と石器が認められた。土器は、甕の蓋10は裾部が緩やかに開き端部を丸くおさめる。つまみ部分の中央部が窪み周囲が突出している。外面調整は幅の広い工具による縦方向にナデ、内面調整は横方向に幅の狭い工具による丁寧なヨコナデを施す。11～15・18は壺である。広口壺11は口縁部が緩やかに外反する。頸部と胴部の境界部分に段を持つ。内外面の調整はヨコヘラミガキを施す。広口壺12はラッパ状に大きく開く口縁部の上部に２個の焼成前穿孔を認める。穿孔の２個が対と



第16図　井戸１出土遺物（1/4･1/2）

なり計４個で蓋を止める紐穴と考えらえる。頸部に３条以上のヘラ描き沈線を施す。外面調整はヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ、内面調整はヨコヘラミガキを施す。広口壺13は口縁部が緩やかに外反し、端部に沈線状の窪みを認める。頸部に４条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面ともヨコヘラミガキを施す。15は平底の壺底部片と考えらえる。壺18は胴部肩の破片で２条の横方向のヘラ描き沈線の下に２条の沈線で山形文施す。16・17は甕である。甕16は口縁部を短く外反し端部に刻目を施す。胴部上部に３条のヘラ描き沈線を施す。底部中央部は焼成後穿孔されている。外面調整は縦方向にナデ、内面調整は横方向に工具ナデを施す。石器は、サヌカイト製の凹基式の石鏃Ｓ７で先端部を大きく欠く。

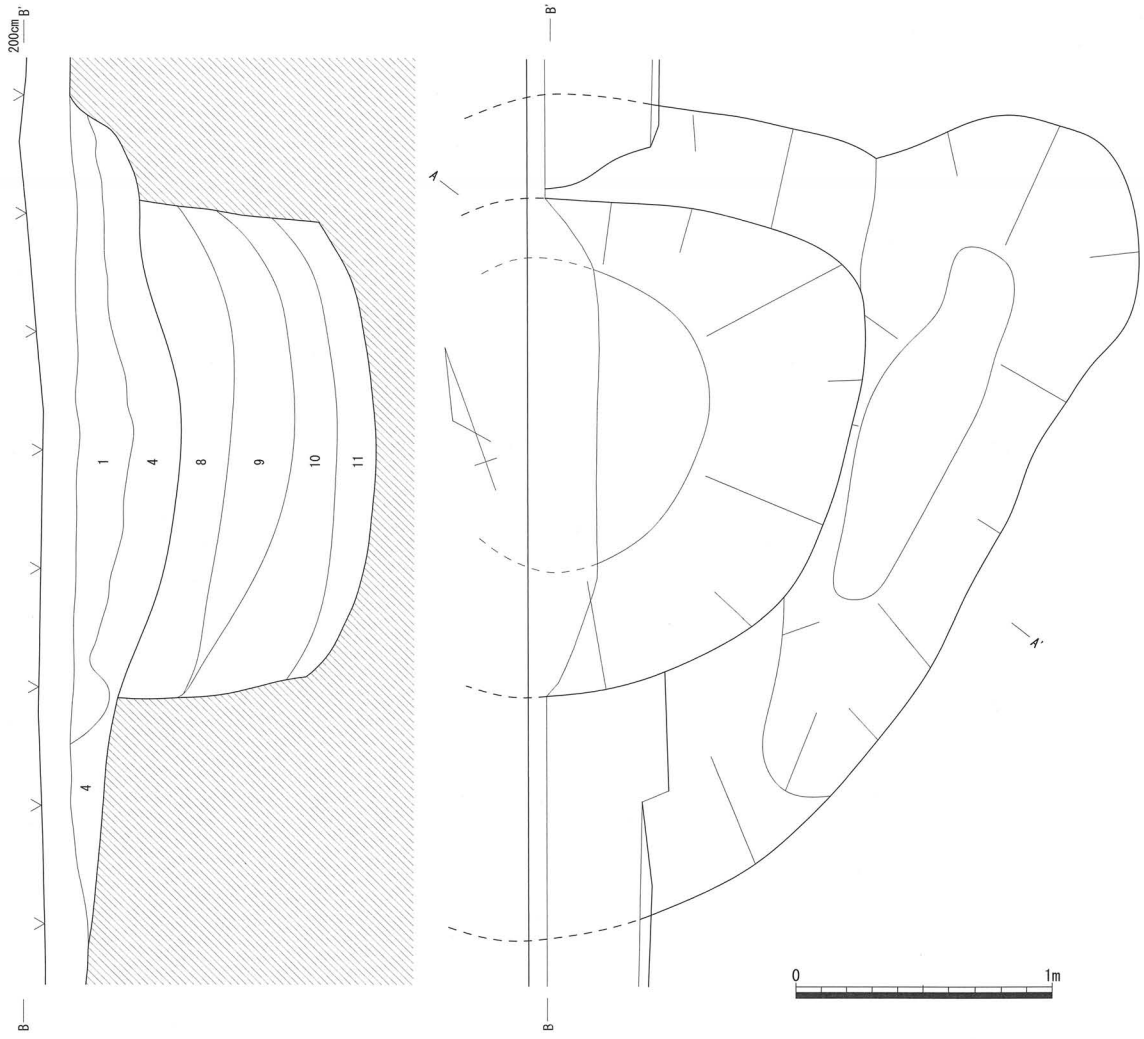
井戸１の時期は、出土遺物から弥生時代前期中葉と考えられる。

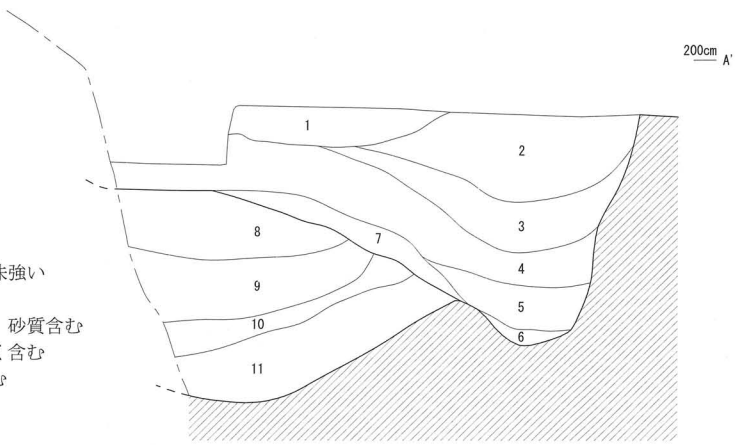
井戸２（第17･18図、図版８･27-2）

Ｉ区西壁沿いで検出した。上面検出当初は輪郭が不整形かつ不鮮明で、どのような遺構になるのか

まったく予測ができなかったため、北東―南西に主軸をもつ土壙を想定して北西－南東方向に土層観察用ベルトを設定した。

西壁断面の土層は、大きくレンズ状の堆積を示し、遺構の中央近い部分の断面と考えられたが、北西－南東方向のベルトではそれに対応せず、南東に向かって下降する堆積が認められた。さらに検出面から70～90㎝の深さでは、西壁断面に近いところで弥生時代後期の土器の比較的大きな破片が集中する部分（第17図９層下部）が見られ、その下はやや明るい黄灰色系粘質土（同10・11層）となっていたが、東側では遺物がほとんどなくやや暗い色調の灰色粘土・シルト（同５・６層）であった。





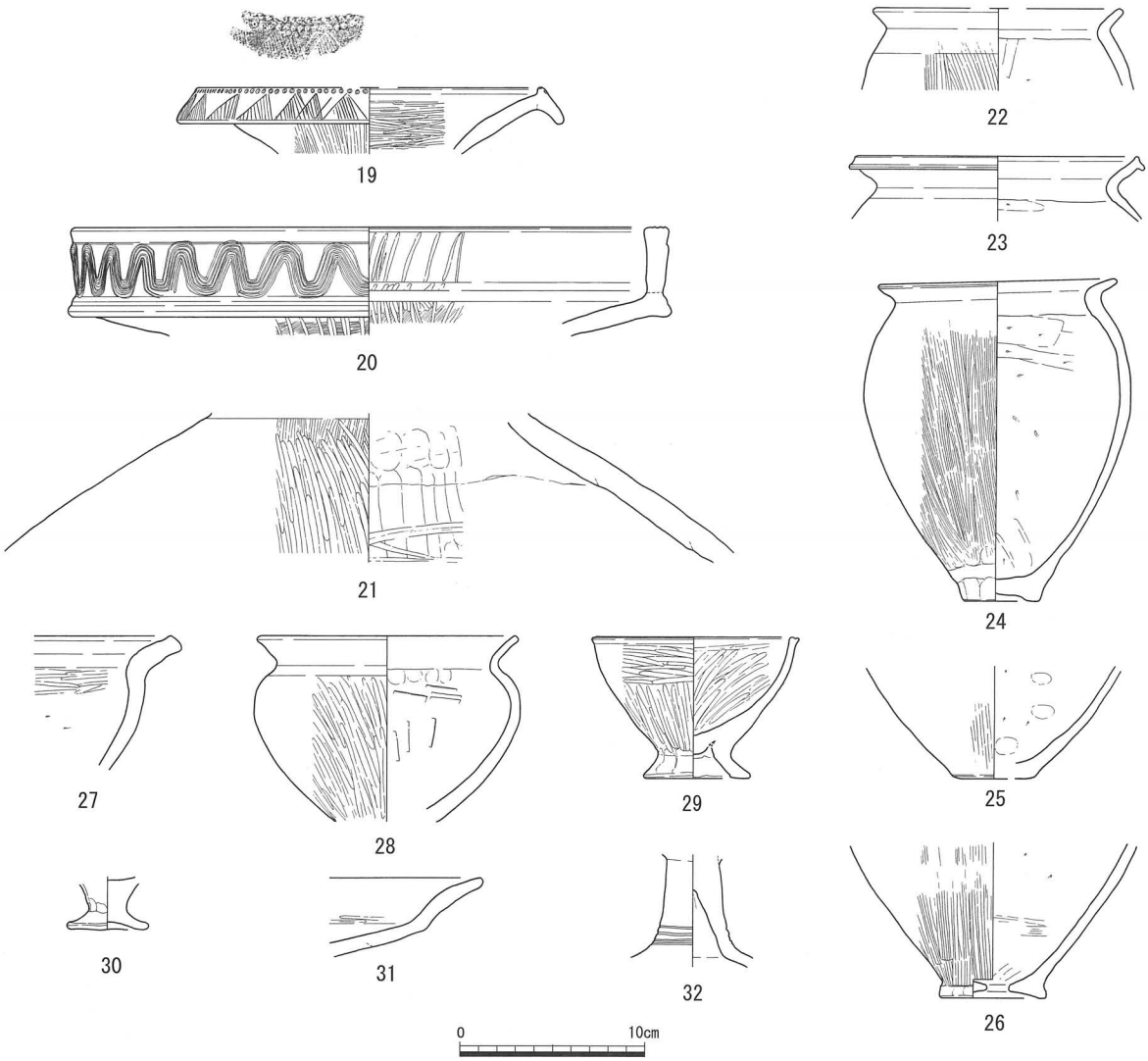
1　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
3　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土
4　オリーブ黒色(5Y3/2)粘質土
5　灰色(5Y4/1)粘土
6　灰色(5Y4/1)シルト
7　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　やや黄色味強い
8　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　砂質含む
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　やや暗い　砂質含む
10　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土　砂質やや多く含む
11　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土　砂質多く含む

第17図　井戸２平・断面図（1/30）

検出面から約1.5ｍ、ほぼ地山と考えられる土層まで掘り進んだところで、断面を精査検討した結果、２つの遺構が切り合い重なっているものとの判断に至った。実際、深部の地山面に稜線が現われ、底が二つに分かれるという状況になった。仮に古い方の遺構をＡ、新しい方をＢと呼ぶと、平面円形の遺構Ａが完全に埋まった段階で、その東側を切り込むように楕円形の遺構Ｂが掘られ、その遺構Ｂは西側肩つまり遺構Ａ埋土を崩しながら埋まった、あるいは埋められたと思われる。そして遺構Ｂ埋没最終段階の窪みは遺構Ａの上をほぼ覆ってしまい、その結果上面では不整形かつ不鮮明な形状で検出されたのではないかと考えられる。

遺構Ａは、西半分が調査区外にあり東肩も遺構Ｂで壊されているので、平面形は推測するしかないが、およそ円形であったと思われる。一方、西壁断面には遺構Ａの断面形状のほぼ全形が現われているのでこれを観察し検討してみる（第17図）。上部の１・４層は遺構Ｂの一部であるのでこれを除外し、８～11層が遺構Ａにあたる。南北の壁面は垂直に近い角度で掘り込まれ、南北幅（直径）は約200㎝を測る。底はほぼ平らといってよいほどゆるやかに窪み、底の幅（直径）180㎝を測る。最深部は検出面から118㎝（標高0.6ｍ付近）にある。

埋土は大きく４層に分けられるがいずれも暗灰黄色～黄灰色の粘質土で、そのうち上半の８・９層



第18図　井戸２出土遺物（1/4）

に弥生土器を含み、特に９層下半には大きな破片が集中していた。またこれらの層は大まかにはレンズ堆積状をなすものの、細かな互層をなしている部分はみられない。どちらかといえば自然埋没ではなく、一気に埋められた可能性が高い。

このような西壁断面の観察・検討から、この遺構Ａを弥生時代の大型素掘り井戸と考えた。

いっぽう遺構Ｂは、深部の形状から推測すると、本来長径300㎝、短径120㎝程度の長楕円形平面を呈するものではなかったかと推定される。断面をみると、南東側の壁はかなり急角度で掘り込まれているのが分かる。それに対し北西側の壁は極めて緩やかな斜面をなしている。先述のように、本来はもっと急角度で掘られていたものが崩れたとみるべきと考えられる。

埋土は、最上層の黒褐色粘質土（１層）は、上を覆う包含層（第７図Ⅲ-8層）の一部とも考えられるが、３～６層はオリーブ黒褐色もしくは灰色の粘質土・粘土で、遺構Ａより微妙に粒子が細かい。また、底は検出面から95㎝、標高0.8ｍ付近にあり、遺構Ａより約20㎝高い。

遺物については、掘り下げる段階で遺構Ａと遺構Ｂを分離することができていないので、明瞭に特定することができない。しかしながら掘削段階の印象として、出土遺物は西壁部に集中し遺構Ｂに対応する東半部ではほとんどみなかったこと、全体として須恵器をはじめ古墳時代以降の遺物を含んでいないことの二点は指摘できる。つまり実測し得た遺物はすべて遺構Ａ、つまり井戸１埋土中のものと考えてよい。

出土遺物は壺19～21、甕22～26、鉢27～29、高杯31・32、製塩土器30である。壺19は大きく開く口縁端部を上下に拡張し、外面に鋸歯文と端部近くに一列の竹管文を施す。また壺20は口縁部を垂直に立ち上げ、端部は水平に仕上げる。口縁部外面には６条が一単位の櫛状工具で流水文を施す。外面調整はヨコハケメ後縦方向に荒いヘラミガキ、内面調整はハケメ、ナデ後荒いタテヘラミガキを施す。甕22・24は口縁部を「く」字状に短く外反し端部は肥厚しない。甕24の底部はやや上げ底を呈する。外面調整は縦方向にハケメ、内面調整は胴上部までヘラケズリを施す。甕23は口縁部を「く」字状に短く外反し端部を上下に肥厚する。甕26は底部がやや上げ底で、中央部が焼成後穿孔されている。また、底部の端部をつまみ出している。外面調整は縦方向にハケメ、内面調整はヘラケズリを施す。鉢27・28は口縁部を「く」字状に折り曲げる。鉢27は大形の鉢で器壁が厚い。鉢28は球形の鉢部を呈し、器壁は薄い。小形の鉢29はやや内湾しながら伸びて端部を水平に終わる。「ハ」字状に開く脚部を付けている。外面調整は鉢の下半部がタテヘラミガキ、上半部がヨコヘラミガキ、内面調整は斜め方向にヘラミガキを施す。高杯31は杯の皿部から口縁部が上方へ湾曲しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。高杯32は脚部近くの柱状部に４条のヘラ描き沈線を施す。製塩土器30は高さが低く、外方へ開く脚部である。

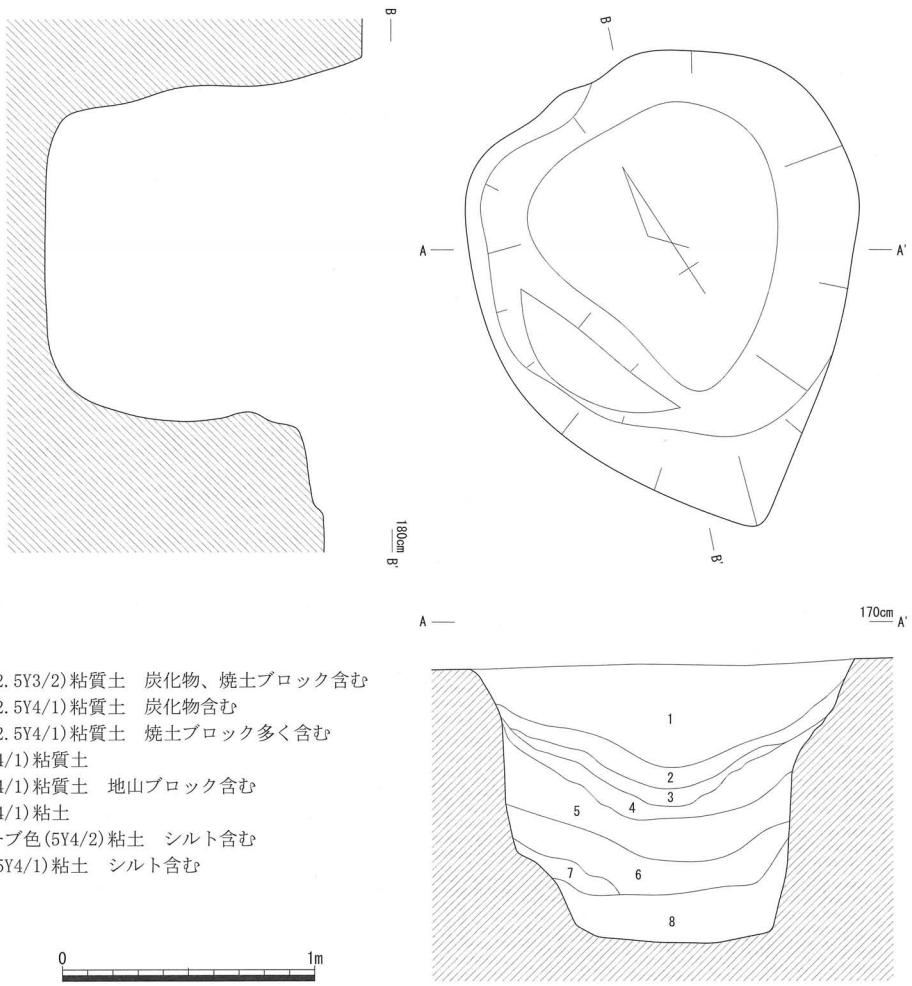
井戸２の時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉頃と考えられる。

井戸３（第19図、図版６-3）

井戸３は、後述の落ち込み内北端で検出した。平面形がかなり大きな円形であったので、上面検出当初から井戸であろうとの予測のもとに掘り進めた。その結果、平面形とともに垂直に近い急角度の側壁、湧水層直上までの深さがあることから考えて、井戸と見て間違いないとの結論に達した。

検出面での直径は約150㎝、底面で径80～90㎝、検出面（落ち込み底面）からの深さ110㎝を測る。

検出面からの深さ約50㎝のところに焼土片と炭を多く含む土層が厚さ７～８㎝でレンズ状に堆積しており、その上は上層の落ち込み埋土に類似する黒褐色粘質土、下は黄褐色の地山ブロックを多く



第19図　井戸３平・断面図（1/30）

含む灰色粘土・粘質土からなる。内周壁は上半がやや開いた傾斜面となるが、下半はほぼ垂直ないしオーバーハングする部分もある。おそらく、内壁の崩落を伴いながら半ばまで埋没したところで、焼土・炭等を投棄し、一気に埋めたのではないかと思われる。

遺物は、焼土層より上に弥生土器小片を多く含むが、焼土層より下では遺物をほとんど出土しなかった。

５　土　壙

土壙状の遺構は、各時代の住居・溝・ピット群とともに、多数検出した。その数は、最終的に井戸と判断したものを除外して、合計25基に達する。しかしながら、遺物がほとんど出土しなかったものも多く、古墳時代や古代・中世の遺構と同一面上で検出したため、すべての時期を特定することはできない。ここでは、そのうち検出状況や出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる14基について説明する。

土壙１（第20図、図版９-1･26-3）

Ⅱ区の中央やや東寄り、溝３と溝６の間で２つのピットに切り込まれた平面形が長方形を呈する土壙を検出した。長軸方向をN-70°-Wにとって西北西－東南東を主軸とする。長軸長125㎝、短軸長78㎝を測る。出土状況からみて、集中している土器群は明らかに遺構内遺物であるが、どちらかという

と土器小片・細片多数が遺構検出面のレベルに水平堆積している状態で、上下に折り重なるといった様子はみられなかった。さらに遺構検出面からわずか７～８㎝で底面が現われ、その底面付近には遺物をほとんど含んでいなかった。埋土は、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質土層単層である。

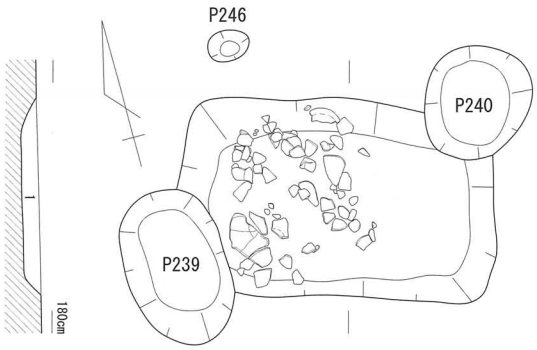
検出面からわずか７～８㎝という深さから考えれば、本来の掘削面はもっと上にあったはずであり、長方形の平面形からも土壙墓の可能性が高いように思える。遺物はその検出状況から供献や副葬としてはとらえにくいが、自然流入ではなく何らかの意味を込めて破片の状態で投入されたとみるべきではないかと考えられる。

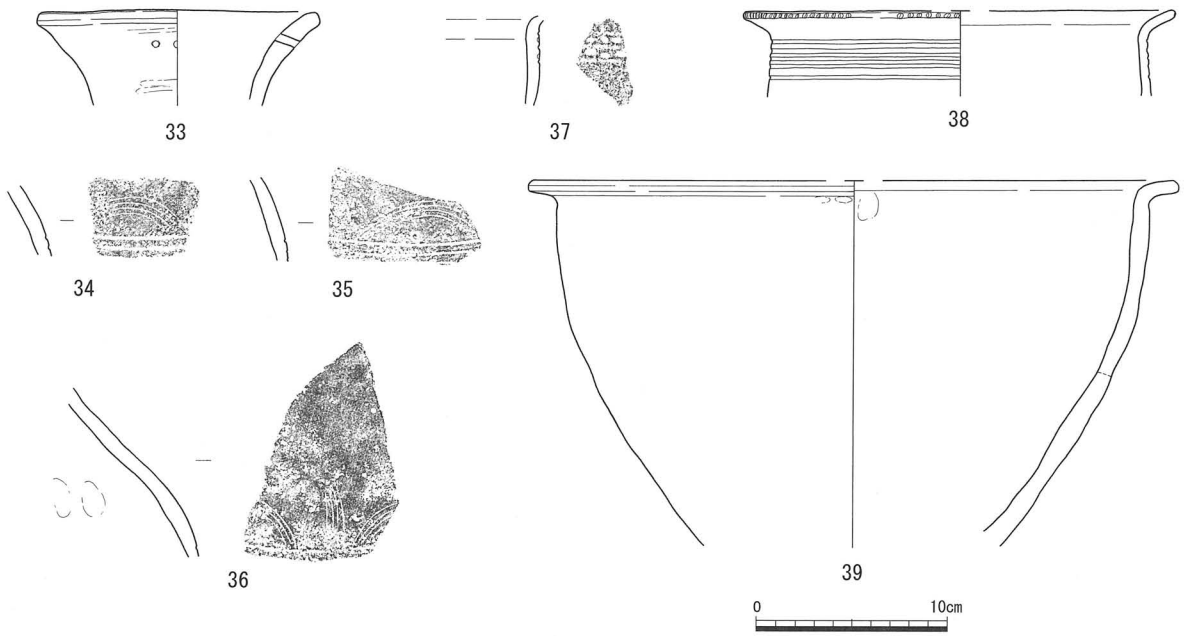
出土遺物は、壺33～36、甕37･38、鉢39である。広口壺33は口縁部が緩やかに開き、上部に２個の穿孔を認める。穿孔の２個が対となり計４個で蓋を止める紐穴と考えらえる。内外面ともヨコナデ後ヨコヘラミガキを施す。壺34は肩部片で２条のヘラ描き沈線とその上側に４条を単位とした重弧文を施す。壺35は肩部片で３条のヘラ描き沈線とその上側に４条を単位とした重弧文を施す。壺36は肩部片で１条のヘラ描き沈線とその上側に４条を単位とした重弧文とその間に垂直方向の沈線を施す。甕37は胴部の上部に３条のヘラ描き沈線を施し、沈線の間に楕円状の工具による刺突を施す。甕38は口縁部を「く」字状に折り曲げ端部に刻目を施す。胴部上部に５条のヘラ描き沈線を施す。鉢39は口縁部を緩やかに「く」字状に曲げている。

土壙１の時期は、出土遺物から弥生時代前期中葉と考えられる。

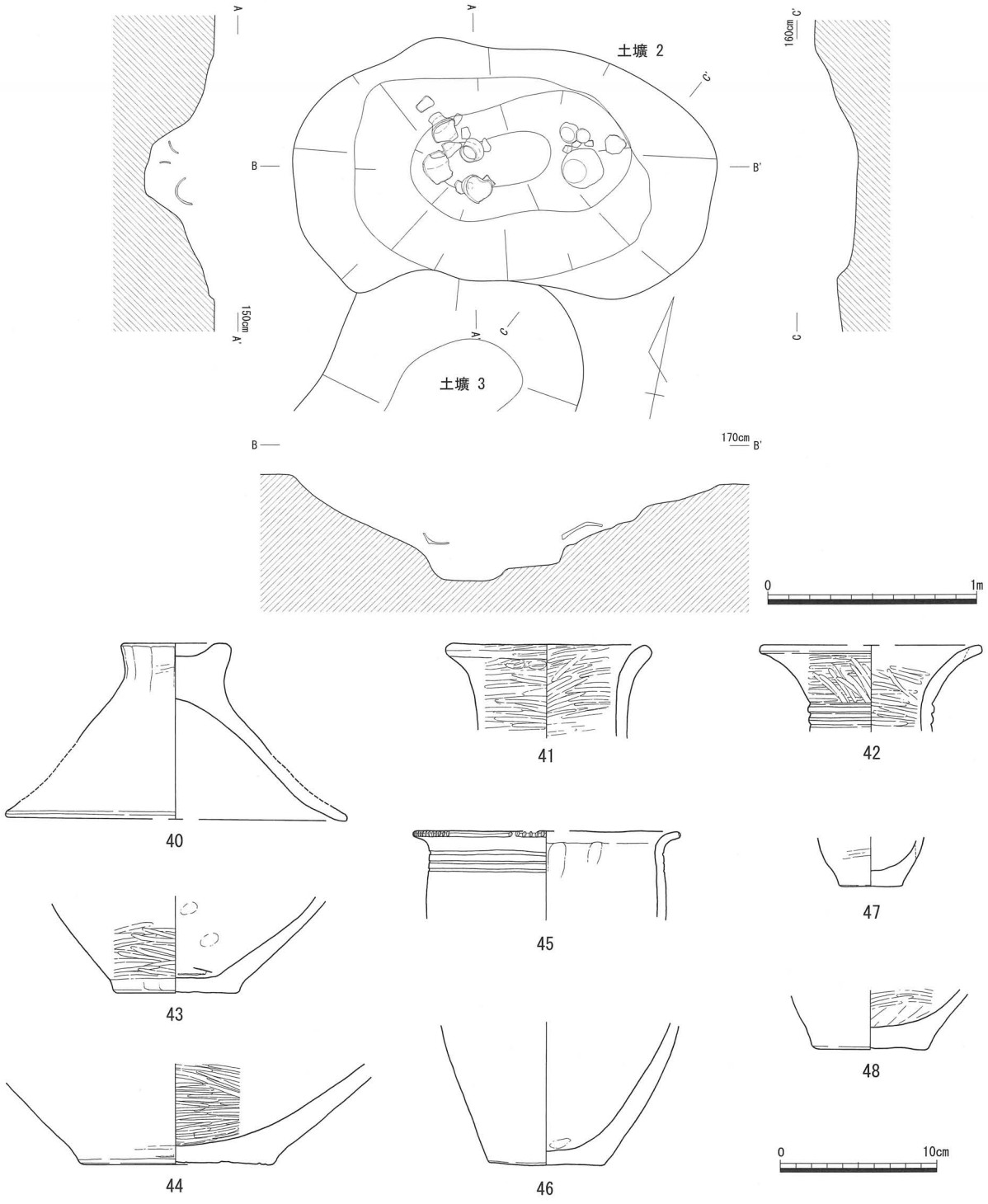
土壙２（第21図、図版９-2）

Ⅱ区南西部で検出した大きな落ち込みの底面では、井戸２基と大小の土壙５基を検出した。土壙２は、そ





第20図　土壙１平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）



第21図　土壙２平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）

のうちほぼ中央に位置するもので、落ち込みの長軸方向に設定した探査トレンチにも、その中央最深部で焼土層を伴い遺物の集中する部分として、当初から現われていた。

そして落ち込み底面を精査するなかで、その中央から南部に先の井戸１と土壙２・同３を検出した。ただしこの３遺構は、最初からそれと判別できた訳ではなく、上層埋土はほぼ一体化して切り合い関係が不明であり、掘り進めた結果３つの遺構に分かれることが判明し、最終的に土壙２基と井戸１基が合い接するという状態で検出されたわけである。土壙２はそのうち北側の遺構にあたる。

平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸方向をＮ-84° -Ｅとし、およそ東－西の主軸をもつ。長径200㎝、短径110㎝を測る。底面は緩やかなすり鉢状をなして最深部は肩からの深さ52㎝に達する。

埋土は上下２層に分かれる。上層は黒褐色粘質土で、下層は焼土片を多量に含む灰黄色粘質土となる。上下層とも多くの土器片を含むが、特に下層の焼土層には、弥生時代前期の壺・甕・蓋などの大きな破片が出土した。先に、本土壙からわずか1.5ｍ北に位置する井戸３埋土下層に、投棄された焼土の層があることを指摘した。積極的根拠はないものの、この土壙２と井戸３の焼土層は同時に、あるいは相前後して形成されたものと推測される。

出土遺物は、蓋40、壺41～44・48、甕45～47である。甕の蓋40は裾部が緩やかに開き端部を丸くおさめる。つまみ部分の中央部が窪み周囲が突出している。壺41は口縁端部近くを緩やかに開く。内外面調整は荒いヨコヘラミガキを施す。壺42は口縁部が大きく開き、端部を丸くおさめる。頸部に２条の削り出し突帯を施す。内外面ともヨコヘラミガキを施す。壺43・44・48は底部片ですべて平底である。壺44の底部・内面調整は丁寧なヘラミガキを施す。甕45は口縁部を「く」字状に外反し、端部に刻目を施すが、一部刻目を施さない部分が認められる。胴部上部に３条のヘラ描き沈線を施す。

土壙２の時期は、出土遺物から弥生時代前期中葉と考えられる。

土壙３（第22図、図版９-3･26-2）

土壙３は、先述のような過程で井戸１と土壙２の間で検出した。

平面形は長楕円形で、長径221㎝、短径93㎝を測り、北半の方がやや幅広い。長軸方向をＮ-27° -Ｅとし、およそ北北東－南南西の主軸をもつ。底面の形状は、南北に長い皿形を呈する。南部は上層の落ち込み南肩に近いため深さ40㎝程度はあるが、北部は土壙２と接している関係で、肩から15㎝程度の深さしかない。

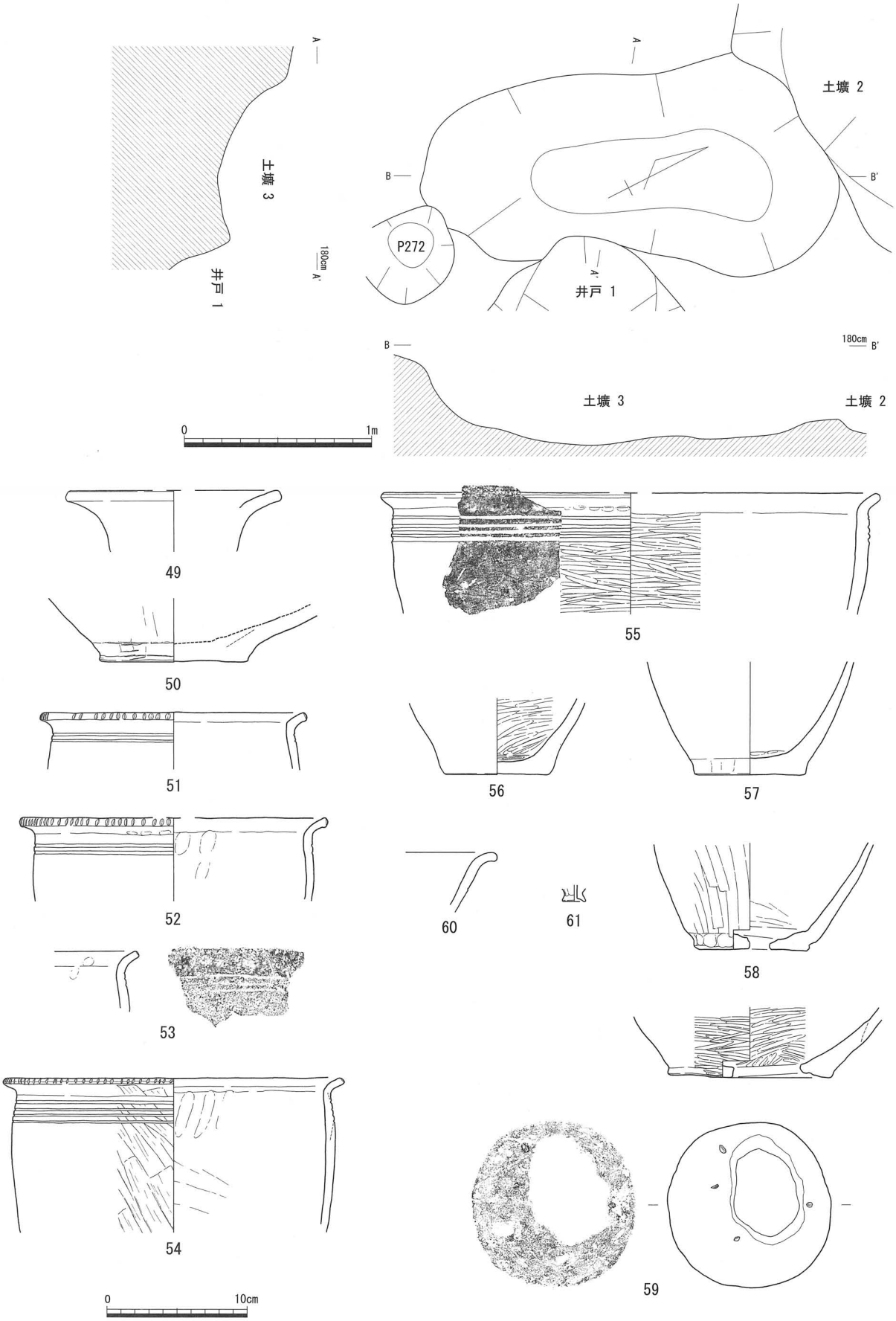
埋土は、黒褐色粘質土層単層である。多量の遺物を含んでおり、特に南半部では弥生時代前期の比較的大きな土器片が集中して出土した。

出土遺物は、壺49・50・59、甕51～58、鉢60、ミニチュア土器61である。広口壺49はラッパ状に大きく外反する口縁部を有する。壺の底部59は平底の底部の中央部に焼成後穿孔を施す。また、底部に４ヵ所籾圧痕を認める。内外面とも丁寧なヨコヘラミガキを施す。甕51・52は口縁部を短く外反し端部に刻目を施す。胴部上部に２条のヘラ描き沈線を施す。甕53は口縁部を短く外反し端部に刻目を施す。胴部上部に３条のヘラ描き沈線を施す。甕54・55は口縁部を短く外反し、55は端部に刻目を施す。胴部上部に４条のヘラ描き沈線を施す。甕54の外面調整はハケ状工具による斜め方向にナデ、内面調整は押さえとヨコナデを施す。甕55は器壁も厚く、口径も他の甕と比べ比較的大きい。内外面の調整は共にヨコヘラミガキを施す。甕56～58は平底の底部で、甕58は2.1㎝×1.6㎝の大きさの焼成後穿孔が行われている。鉢60は口縁部を緩やかに「く」字状に曲げ、端部を丸くおさめる。ミニチュア土器61は鉢の脚部片と考えられる。中央に径５㎜の焼成前の穿孔が施されている。

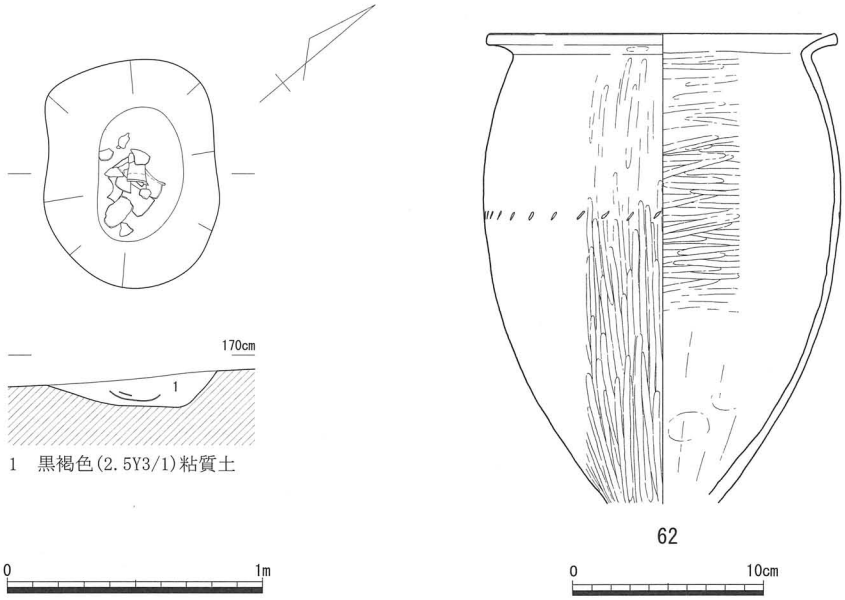
土壙３の時期は、出土遺物から弥生時代前期中葉と考えられる。

土壙４（第23図、図版10-1･27-1）

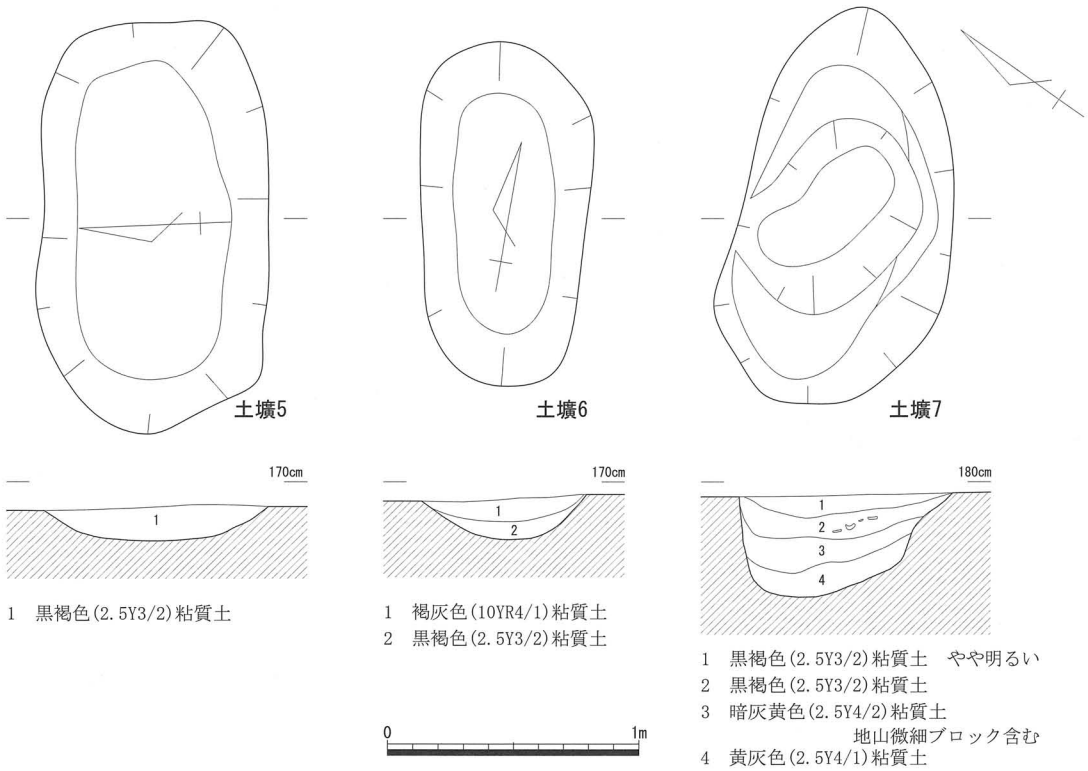
Ｉ区北端部、竪穴住居１と土壙５の中間で検出した。平面形は楕円形ないし隅丸長方形で、長軸方向をＮ-54° -Ｗとし、およそ北西－南東方向を向く。底は皿形、長径90㎝、短径65㎝、検出面からの深さ14㎝を測る。埋土は黒褐色粘質土で、底部を欠くものの弥生時代中期の甕１個体分が出土した。横倒しで押しつぶされたような状態であり、別個体の土器片をほとんど含まないことから考えて、土



第22図　土壙３平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）



第23図　土壙４平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）



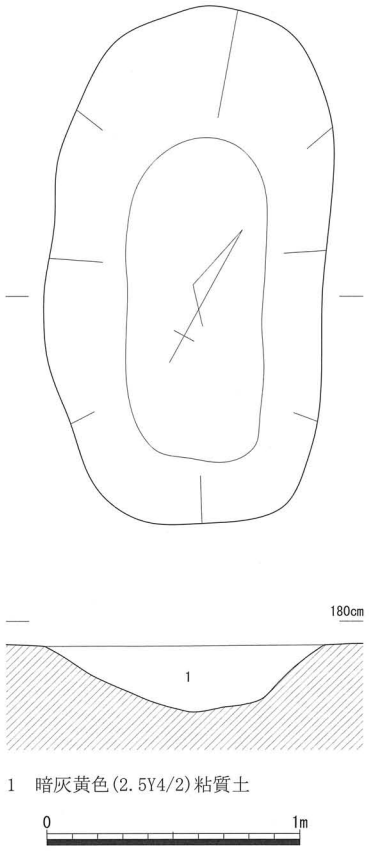
第24図　土壙５・６・７平・断面図（1/30）

器棺墓とみて差し支えないのではないかと推測される。

出土遺物は、甕62のみで、口縁部を「く」字状に折り曲げ端部をわずかに肥厚する。長胴を呈する胴部の最大胴部に「ノ」字状文を施す。底部を欠く。外面調整はタテヘラミガキ、内面調整の下半部1/3はタテヘラミガキないし縦方向にナデ、上半部2/3はヨコヘラミガキを施す。

土壙４の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙５（第24図、図版10-2）



第25図　土壙８平・断面図（1/30）

Ｉ区北部で検出した。長楕円形ないし隅丸長方形状の平面形で、長軸方向をＮ-84°-Ｗとし、およそ東西方向を向く。底面は皿形を呈し、長径162㎝、短径90㎝、深さ15㎝を測る。埋土は黒褐色粘質土の単層、遺物は少ないながら弥生土器小片のみ出土した。

土壙６（第24図）

Ｉ区東部、竪穴住居２の北西側で検出した。平面形は長楕円形で、長軸方向をＮ-10°-Ｗとし、およそ南北方向の主軸をもつ。長径137㎝、短径66㎝、深さ16㎝程度で、底の形状は皿型を呈する。埋土は褐灰色・黒褐色粘質土で、弥生土器小片のみ少量出土した。

土壙７（第24図、図版10-3）

調査区のほぼ中央、竪穴住居２の南西で検出した。平面形は長楕円形で、長軸方向をＮ-65°-Ｅとし、東北東－西南西の主軸をもつ。長径158㎝、短径85㎝、検出面からの深さ40㎝を測り、土壙４～６と較べてかなり深い。埋土は黒褐色・暗灰黄色・黄灰色等の粘質土４層からなり、２層目の黒褐色粘質土に弥生土器片を多数含んでいた。

底面の形状は皿型を呈するが、長辺側は垂直に近い角度で掘り込まれており、全体的な形態からは土壙墓の可能性が考えられる。

土壙８（第25図）

調査区のほぼ中央、竪穴住居２の南で検出した。平面形はやや長方形ぎみの長楕円形を呈し、長軸方向をＮ-26°-Ｗにとって北北西－南南東を主軸とする。長径205㎝、短径108㎝、深さ26㎝を測り、全体的に大きな皿形を呈する。埋土は暗灰黄色粘質土の単層で、遺物は少なく弥生土器小片を出土したのみである。

土壙９（第26図）

落ち込み内の北西端で検出した小土壙である。平面形はおよそ楕円形を呈し、推定長径（東西）110㎝、推定短径（南北）90㎝、検出面からの深さは最大15㎝しかない。

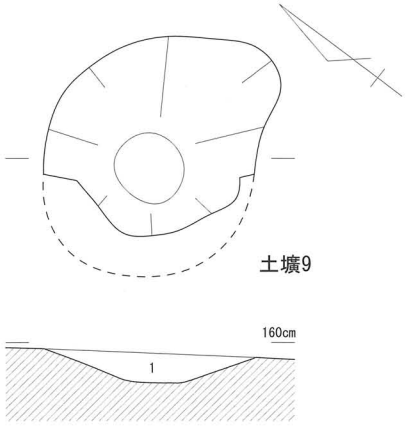
小さく浅い皿形といった印象であるが、性格は不明である。

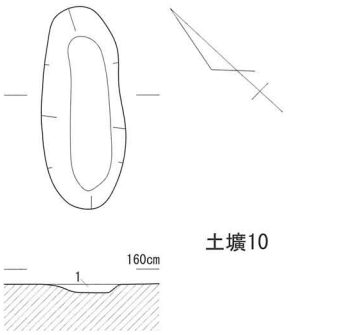
土壙10（第26図）

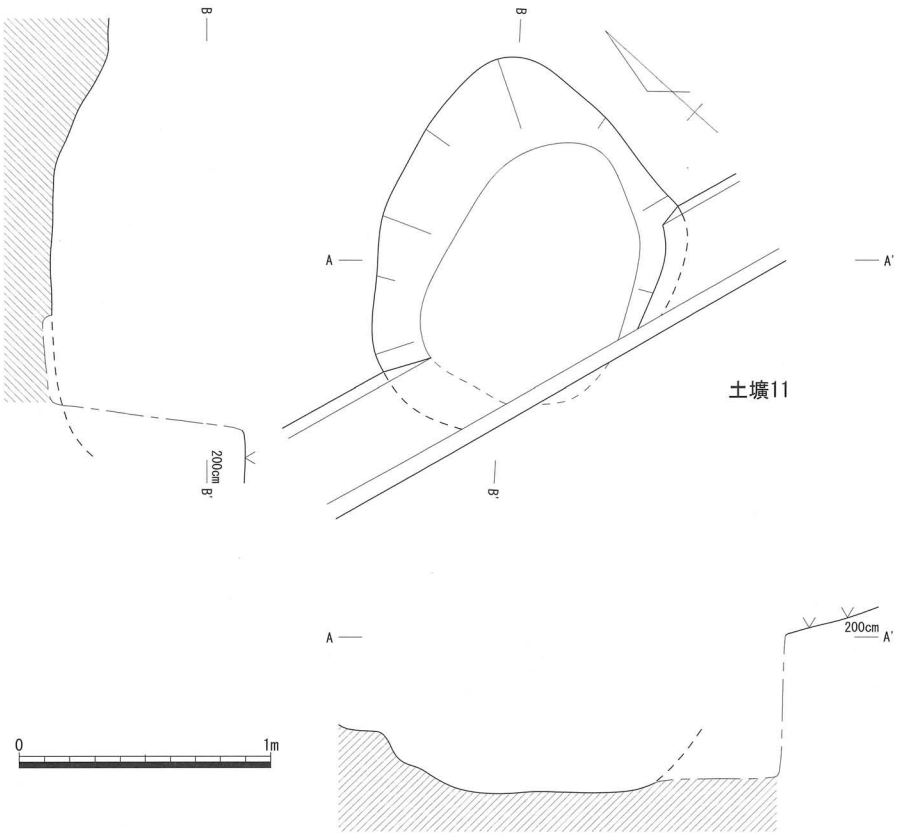
落ち込み内の西部、土壙９の東で検出した小土壙である。長径81㎝、短径33㎝を測り、平面形は長楕円形を呈する。検出面からの深さは最大でも５㎝しかない。長軸方向をＮ-44°-Ｅとし、およそ北東－南西の主軸をもち、埋土は暗灰黄色粘質土、遺物はまったく出土していない。

土壙11（第26図、図版11-1）

調査区南壁側溝トレンチの東端は自然河道にかかっているが、そのすぐ西、溝６との間に土壙状の落ち込みが１か所みられた。河道肩からはわずかに西へ離れるが、弥生時代河道埋土が薄く上面を覆っているため、すぐに平面検出というわけにいかなかった。そして調査最終段階に至って、調査区南東角部での河道精査および弥生時代河道の掘り下げにともない、ようやく全体を検出することができた。







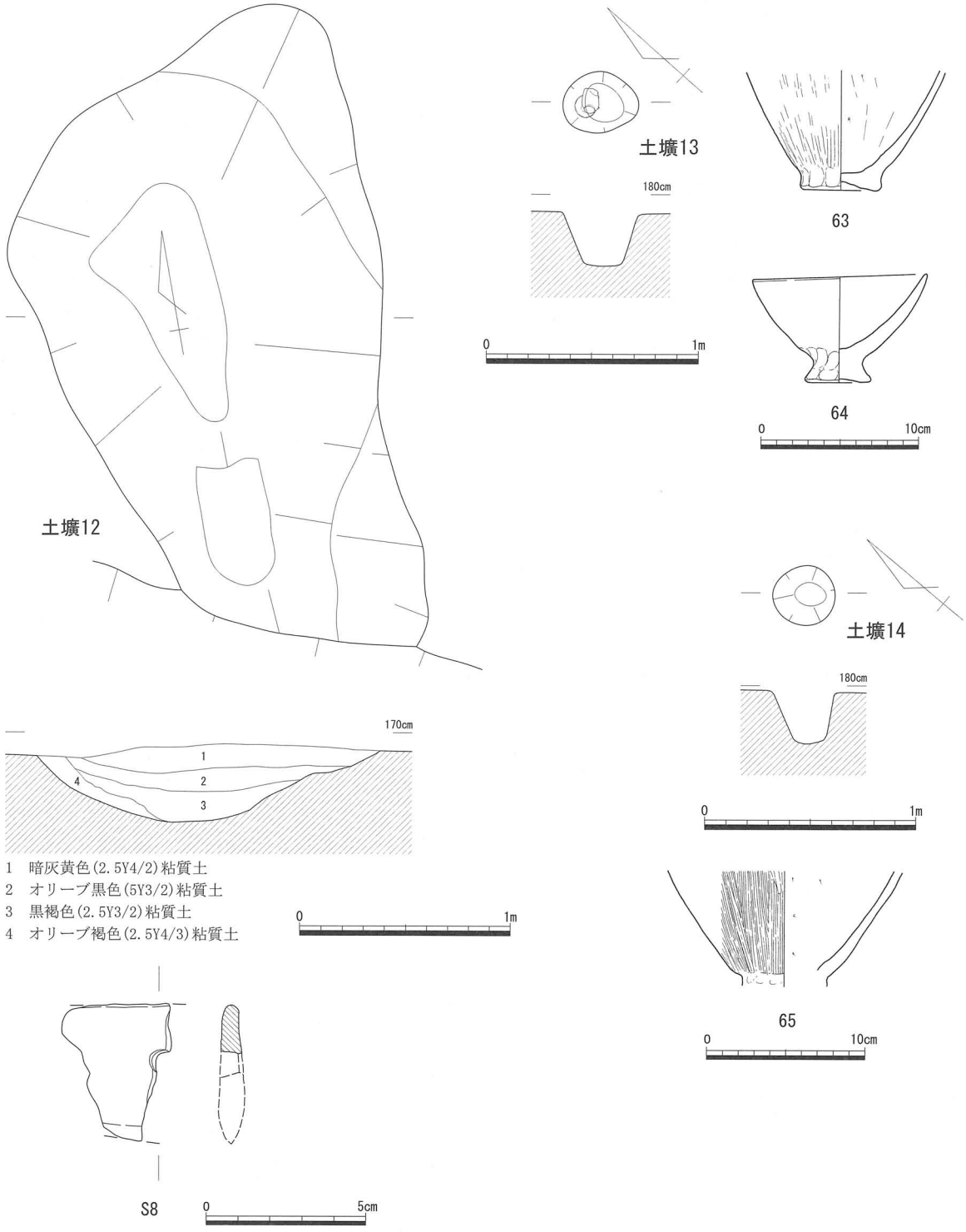
第26図　土壙９・10・11平・断面図（1/30）

遺構の南西端は調査区外となるうえ、側溝トレンチの部分も検出できていないが、平面形は150㎝×120㎝の不整楕円形、もしくは丸みのある長方形状になるものかと思われる。深さは検出面から約30㎝、底は比較的平坦になっている。埋土は暗黄灰色粘質土の単層で、弥生土器片少量が出土した。

出土遺物が少ないため、遺物のみから弥生時代遺構とするには若干の躊躇を覚えたが、断面観察からは弥生時代河道より下位になることが明らかであり、溝６と同時存在の可能性が高い。

土壙12（第27図、図版28-1）

竪穴住居２の北、古墳時代の溝７の北側に接して検出した。上面検出時には、このあたりの溝７埋土が大きく不整形に北へ広がっているように見え、輪郭不鮮明で切り合いもまったく見えなかった。

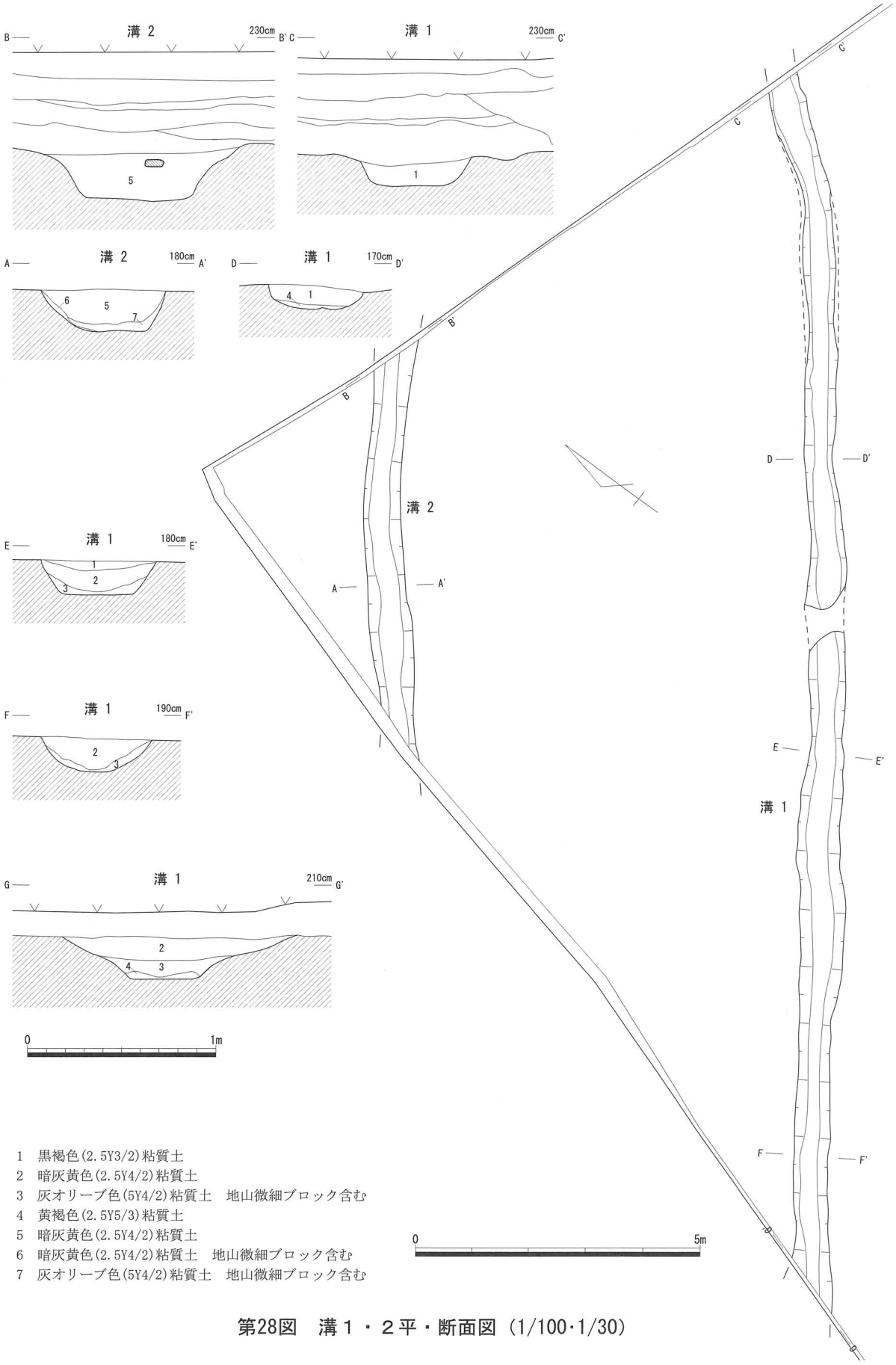


第27図　土壙12・13・14平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4･1/2）

とりあえずベルトを残して掘り進めた結果、図のような形になったが、掘りあがった結果を見ても、何かを目的として掘られたものとはいいがたい。

大まかには、長径約280㎝・短径約150㎝の不整楕円形を呈し、深さ40㎝を測る。長軸方向はＮ－２°－Ｗ。外周壁から底にかけてなだらかなすり鉢状をなし、明瞭な底面はない。埋土は、上部が暗灰黄色・オリーブ黒色の粘質土、下部は地山ブロックを含む黒褐色・オリーブ褐色の粘質土である。遺物は少量の弥生土器片と磨製石包丁片がある。遺物からみれば弥生時代遺構の可能性が高い。

出土遺物は、石器のみで磨製石包丁片Ｓ８である。１個の紐穴の円孔が穿孔されている。



1　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
3　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
4　黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
5　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
6　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
7　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む

第28図　溝１・２平・断面図（1/100・1/30）

土壙13（第27図、図版11-2･27-3）

Ⅰ②区の北部、掘立柱建物３の北西角柱穴から西へ２ｍの位置に検出した。ピット状の小土壙で、平面は長径36㎝・短径29㎝の楕円形、深さ26㎝を測る。埋土は暗灰黄色粘質土で、弥生時代後期の鉢（ほぼ完形）等が出土した。また、埋土深部には焼土・炭化物（炭片）がみられた。

出土遺物は、甕**63**、鉢**64**である。甕**63**の底部は上げ底を呈する。外面調整は縦方向に粗いハケメ、内面調整はタテヘラケズリを施す。鉢**64**は茶椀形の鉢に底部をつまみ出してやや上げ底気味の高台を有する完形品である。

土壙13の時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

土壙14（第27図、図版11-3）

前項の土壙13の東北東450㎝、掘立柱建物３の北側に検出した。これもピット状の小土壙で、長径29㎝・短径28㎝のほぼ円形を呈し、深さは25㎝。断面形はすり鉢状をなし、明瞭な底面はない。埋土はオリーブ褐色粘質土である。

甕体部下半（底部欠損）が出土しているが、これは土壙底から10数㎝浮いた位置に据えられたかの状態で検出している。偶然埋土に含まれた遺物ではなく、この小土壙そのものが甕を据え付け固定するための装置であるかもしれない。底部を失っているのも、なんらかの意図をもって敢えて打ち欠いた可能性がある。また甕内部には、意味不明ながら赤茶褐色の焼土が詰まっていた。

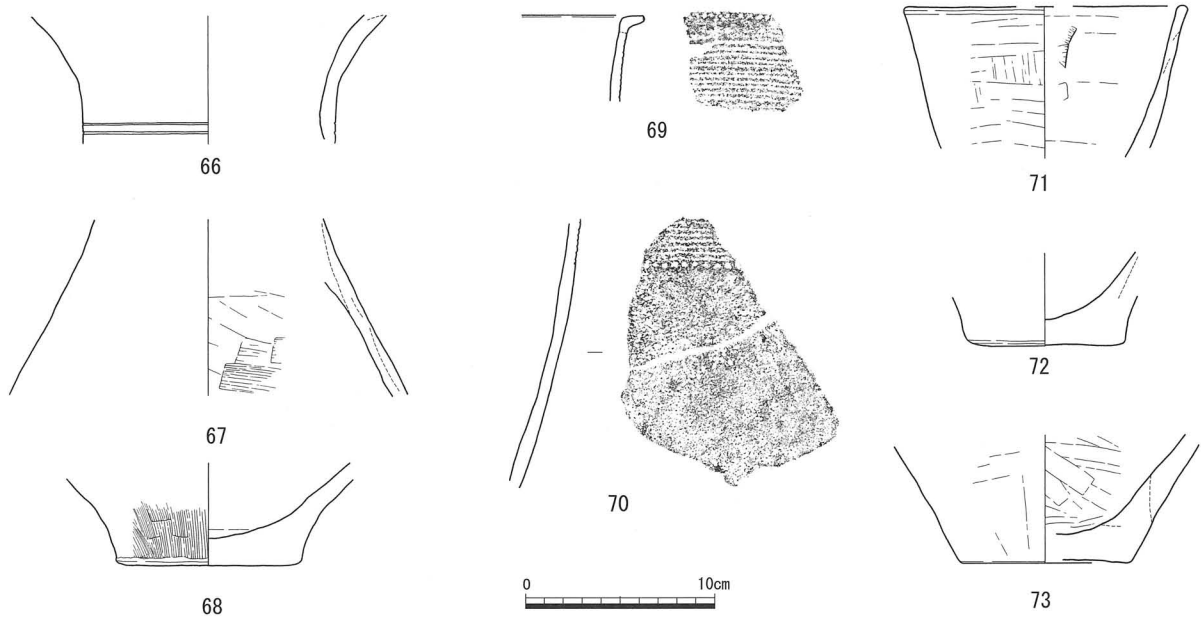
出土遺物は、甕**65**のみで、底部と胴部が外に開きながら立ち上がる胴部片で、タテハケメ後粗いタテヘラミガキ、内面調整はタテヘラケズリを施す。

土壙14の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

６　溝

溝１（第28･29図、図版12-1･2）

調査区の北西部で検出した、南西から北東に向かってほぼ一直線で流走する溝である。古墳時代後期の溝７と交差して切られ、調査区北壁に近いところでは弥生時代中期の竪穴住居１にも切られてい



第29図　溝１出土遺物（1/4）

る。切り合い関係のみから見れば、今回検出した遺構のなかでも古い一群に属すると言える。検出幅は60~80㎝、検出面からの深さは最大17㎝、検出長22.1ｍを測る。埋土は暗灰黄色粘質土を主体とし、かなり淡い褐色系の色調を呈する。

また、竪穴住居１と重なる部分では、住居埋土が溝１埋土を完全に切り込んでいる状況が観察できたが、一方では住居床面精査段階で、溝１最深部が床下に残っているのを確認した。底面の高さおよび勾配をみると、北東端の北壁部で標高1.50ｍ、南西端の西壁部では標高1.61ｍと約10㎝の差があり、北東に向かってレベルを下げている。

遺物は、弥生時代前期の土器が少量出土しているが、検出部南西端に近い西壁から1.6ｍ程の部分ではややまとまった状態の土器群が出土した。

出土遺物は、壺66～68、甕69・70・72・73、鉢71である。広口壺66は頸部から大きく開く口縁部片で、頸部に２条の沈線を施す。壺67は胴部上半分の破片で、内面調整は横方向に工具ナデを施す。壺68は平底の底部片で、外面調整はタテハケを施す。甕69・70は接合をしないが胎土、調整等から同一個体の可能性があるもので、口縁部を短く逆「Ｌ」字状に折り曲げ、胴部上半に12条以上のヘラ描き沈線を施し、沈線文の下には丸い刺突文を配する。甕72・73は平底の底部片である。鉢71はわずかに開きながら立ち上がる鉢部で端面を丸くおさめる。外面調整は縦方向に工具ナデ後横方向にナデ、内面調整はヨコナデを施す。

溝１の埋没時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。

溝２（第28･30図、図版12-3）

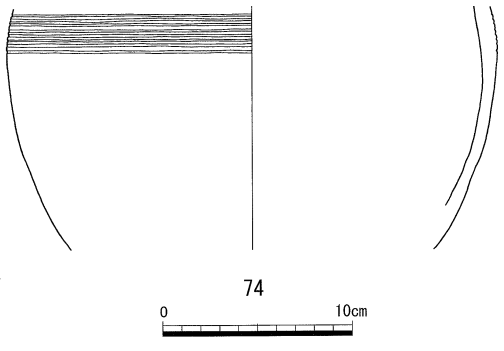
調査区北西隅で検出した。溝１とほぼ平行に、心々距離約7.5ｍを隔てて南西から北東へ直線的に流走する。幅60～80㎝、深さ20㎝前後、検出長7.5ｍを測る。古墳時代の溝７との切り合いは、平面的には確認できていないが、西壁の土層断面をみると、明らかに溝７が溝２を切り込んでいる。また底面の高さは、全体に標高1.43～1.44ｍ程度で、検出範囲を見る限りほぼ水平である。埋土は、最上層に黒褐色系粘質土があるが、大半は溝１埋土とほぼ同じ暗灰黄色粘質土である。

出土遺物は少ないが、調査区北壁から約280㎝付近で弥生前期の壺体部片が出土したほか、少量の弥生土器が出土している。

出土遺物は、壺74のみで、胴張りの胴部片で、胴部最大径部分で８条のヘラ描き沈線を施す。

溝２の埋没時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。

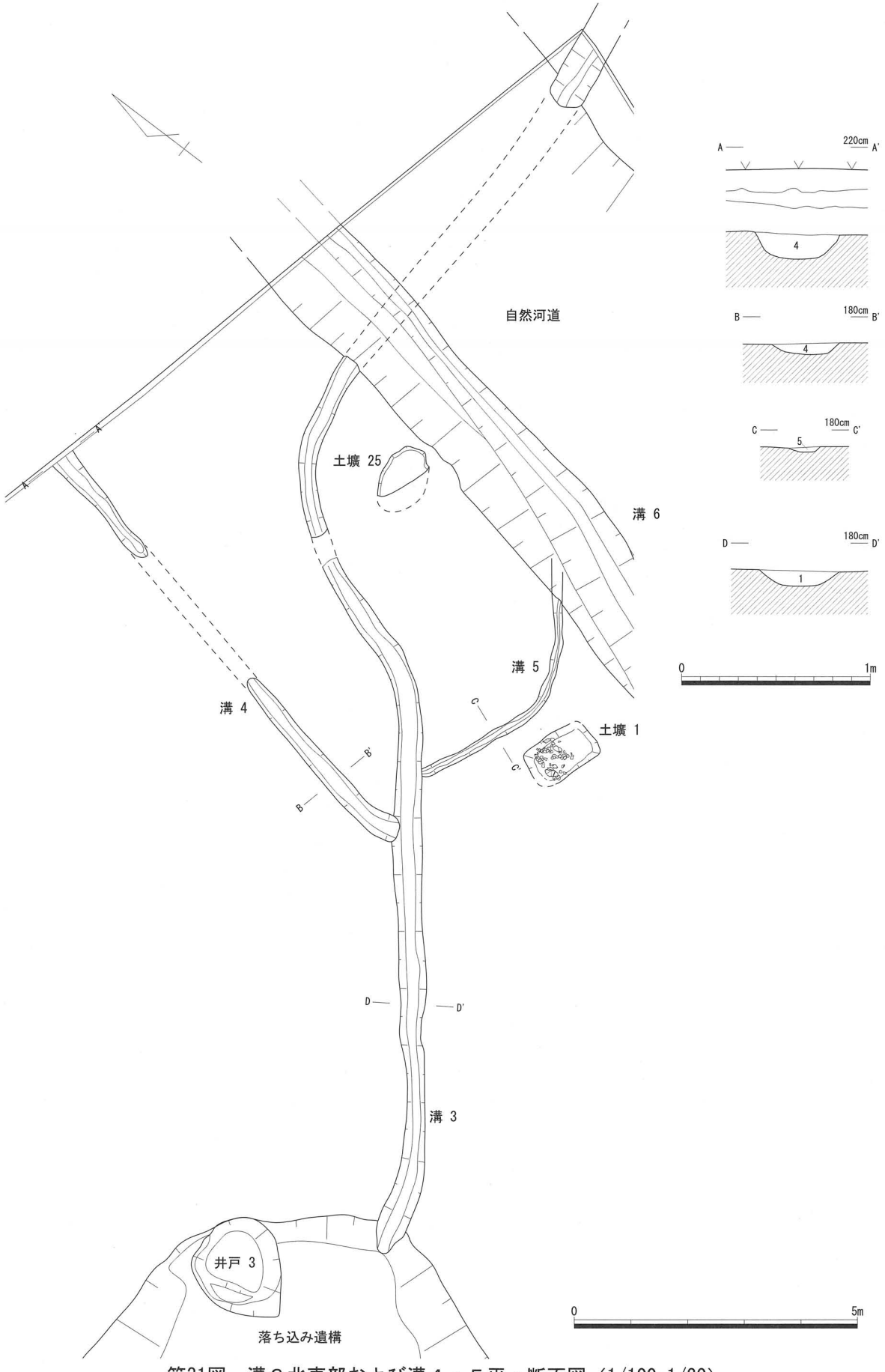
溝１と溝２は、走向と規模（幅・深さ）・埋土がほぼ一致しており、含まれる遺物も類似するものであることから、ほぼ同時に掘られ開口していたものと思われる。それが竪穴住居１に先行するということだけは確認できるが、その性格・用途等については、調査の範囲では解明できなかった。



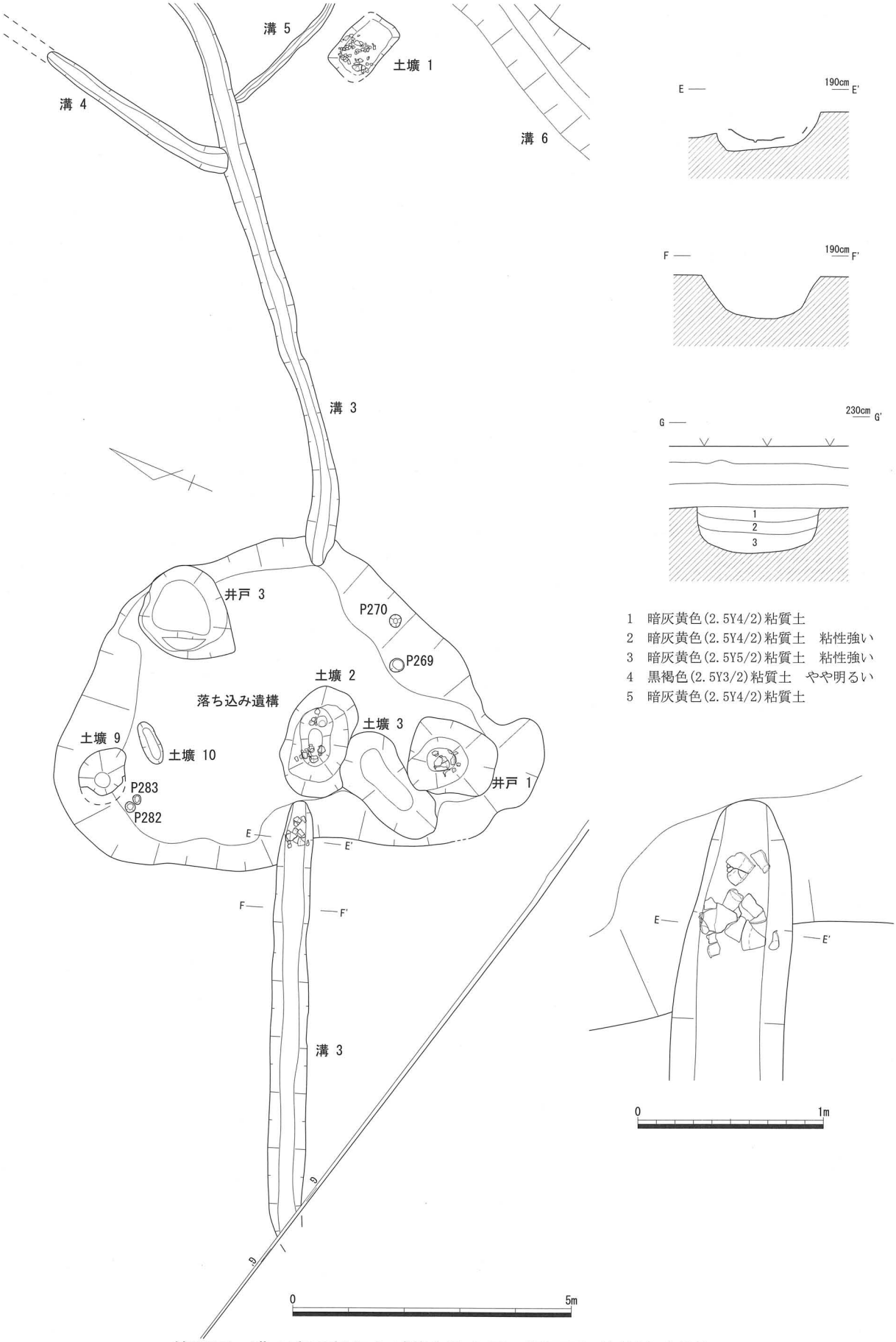
第30図　溝２出土遺物(1/4)

溝３（第31･32･33図、図版13･28-1）

調査区東部（Ⅰ-②区南東部及びⅡ区）で検出した。およそ南西から北東に向かって蛇行しながら流れる。性格不明の落ち込みと自然河道および溝７によって途切れている部分も含めて、検出全長（南



第31図　溝３北東部および溝４・５平・断面図（1/100･1/30）



第32図　溝３南西部および落ち込み平・断面図（1/100・1/30）

西端から北東端までの直線距離）は約34ｍを測る。これを南西から北東に向けて大きく４区分し、１～４区として記述する。

まず１区は、調査区南壁のほぼ中央から東北東に直線的に延び、南壁から7.9ｍのところで落ち込みに吸収されるように途切れる。幅65㎝深さ25㎝を測り、検出部ほぼ中央の南東側肩部を切り込むように、小土壙状のP146がある。直線的に検出したこの溝３の１区は、落ち込みを隔ててそのまま北東へ延長したかの部分に続く。南壁から13.6ｍ（落ち込み中断部を含む。落ち込み北東肩から0.8ｍ）までは、やはり直線的に進み、そこで屈折してやや北へ向きを変える。この屈折部までを１区とする。

この部分の溝３埋土は暗灰黄色粘質土で、落ち込み部埋土とほぼ同じであり、切り合い関係を明瞭に確認することはできなかった。平面図をみると、先行存在した溝３を落ち込みが切り込み分断しているようにしか見えないが、完掘後の深さの関係でこのような図にならざるをえない。

一方遺物から見ると、溝３で唯一まとまって出土した１区の甕（75）は弥生時代中期中葉のものであり、落ち込みでは後述のように前期中葉の土器がかなりの量出土している。したがって、埋土の差・切り合い関係を見出しえなかったとはいえ、遺物から見て溝３は既に埋没していた落ち込みを切り込んで造られたものということになるだろう。

溝３の２区は、先の屈折部から北東約８ｍでさらに北へ向きをかえ屈折する部分までとした。検出最大幅50㎝、深さ10～20㎝を測り、1区よりやや細く浅い。埋土は１区とほぼ同じ暗灰黄色粘質土である。また、この部分では南西側屈折部から約６ｍの北西側に溝４、同じく約７ｍの南東側に溝５が取り付く。ちなみに、この２区のみは走向が溝１・溝２とほぼ同じとなっている。

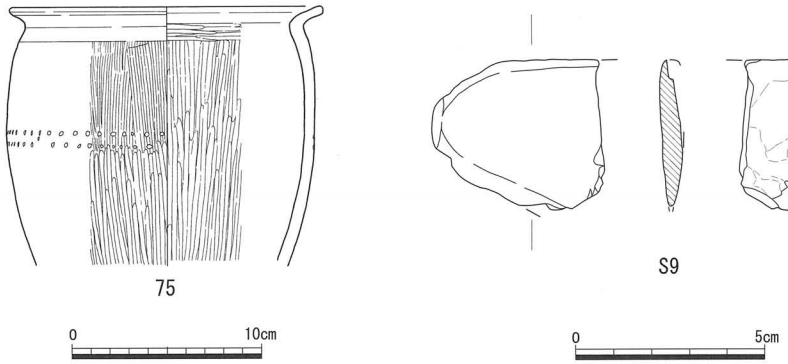
３区は、２区からさらに屈折して北へ向きを変えた後、大きく湾曲して東へ向く、緩やかなＳ字状をなす部分である。検出幅30～40㎝、深さ10～20㎝を測り、埋土はやはり暗灰黄色粘質土である。この部分の溝３は古墳時代の溝７と直行し、明瞭に切られている。さらにはその交叉部の溝７埋土上に、中世のものと思われるP258が掘り込まれている。

４区は、溝３の検出部北東隅、自然河道をまたいで両岸に検出した部分である。河道西岸では、３区からつづいて東北東へ向かい河道で途切れるまで検出長約１ｍ、幅35㎝、深さ10㎝。その延長上の東岸でも、調査区北東隅にあたるところで、検出長約１ｍ、幅50㎝、深さ20㎝である。

平面的な検出状況をみると、明らかに古い溝３を河道が分断しており、特に東岸側では古墳時代の河道埋土（須恵器を含む黒褐色系粘質土層）に溝埋土が切られている状況が確認された。しかし後に自然河道の項で述べるように、西岸側では古墳時代の河道肩が微量の弥生土器片を含む灰黄色系粘質土で構成され、弥生時代河道の肩はその外側にある。その関係もあるのか、弥生時代河道埋土と西岸側にある弥生時代の溝３・溝５・溝６の埋土がほぼ同質・同色の灰黄色系粘質土で、明瞭な切り合い関係をおさえることはできなかった。

とはいえ、弥生時代の“小溝”としかいえないような溝３が、幅４～５ｍの弥生時代河道をまたぐようなかたちで掘られるとは考えにくく、弥生時代のなかで先行存在した溝３を自然河道が分断したとするのが妥当であろう。

一方、溝底のレベルをみると、１区南西端にあたる調査区南壁断面で標高1.60ｍ、２区から３区への屈折部付近が標高1.59ｍ、北東端の河道東で標高1.55ｍと、ほとんど高低差がない。わずかに北東側が低いといった程度である。これをみても、溝３は水路としての用途は考えにくく、何らかの目的をもった排水溝と想定できる。



第33図　溝３出土遺物（1/4･1/2）

遺物は、全体としては非常に少なく、特に３・４区では微量の弥生土器細片しかないが、１区で弥生時代中期の土器群と磨製石包丁Ｓ９片がまとまって出土した。

出土遺物は、甕75と磨製石包丁Ｓ９である。甕75は口縁部を「く」字状に折り曲げ、長胴の器形を示す。胴部に２列の刺突文を施す。外面調整は上半分をタテハケメ、下半分をタテヘラミガキ、内面調整はタテヘラミガキ、胴部の上部にヨコヘラミガキを施す。磨製石包丁Ｓ９は約1/4の破損品で、両面は丁寧に磨かれており穿孔は認められない。

溝３の埋没時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

溝４（第31図）

溝３の２区から北へ分岐して調査区北壁まで直線的に延びる。検出長8.9ｍ、検出部北端の北壁断面で幅40㎝、深さ14㎝を測る。溝３と同じく古墳時代の溝７と交差し切られるが、この付近は重機掘削段階でやや掘りすぎており、遺構検出面自体が溝４の底レベルに等しくなっている。したがって、図上では長さ2.8ｍにわたって溝が途切れたようになっているが、本来は北壁まで一直線で伸び、溝７と交差する部分のみが途切れていた。

溝底レベルは、標高1.57～1.60ｍで、溝３とほとんど同じ。埋土も溝３とほぼ同じ灰黄色粘質土である。

遺物は弥生土器小片が出土したのみである。

溝５（第31図）

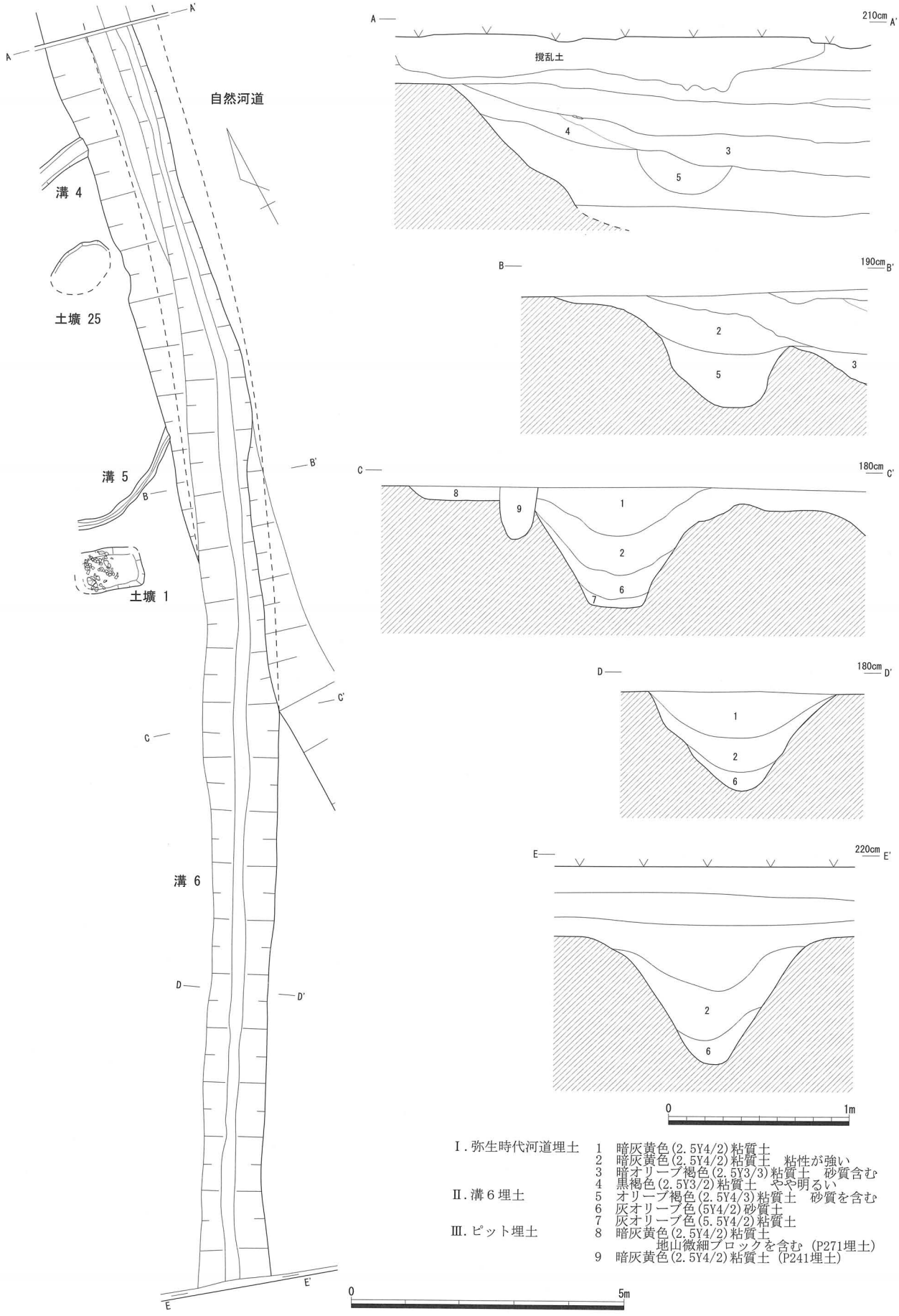
溝３の２区から東へ分岐し、湾曲して北東を向いたのち自然河道に切られて途切れる。検出長４ｍ程度、幅15㎝、深さわずか３㎝足らずの小溝である。溝底レベルは、標高1.70ｍ程度で溝３よりやや高い。

埋土はやはり灰黄色粘質土。遺物はほとんど出土しなかった。

溝６（第34･35図、図版14）

溝６はⅡ区東部で検出した。上面検出状況では、北から南南東へ流れる自然河道より分岐して南南西へ伸びるように見え、河道との切り合い関係は不明瞭であった。その後河道の調査を進めるうち、河道埋土が、須恵器をふくむ古墳時代の黒褐色粘質土（古墳時代河道）と弥生土器のみを含む暗灰黄色粘質土（弥生時代河道）に明瞭に分離できることが判明し、溝６埋土は後者と一体化しつつ前者には切り込まれているようだとの認識に至った。

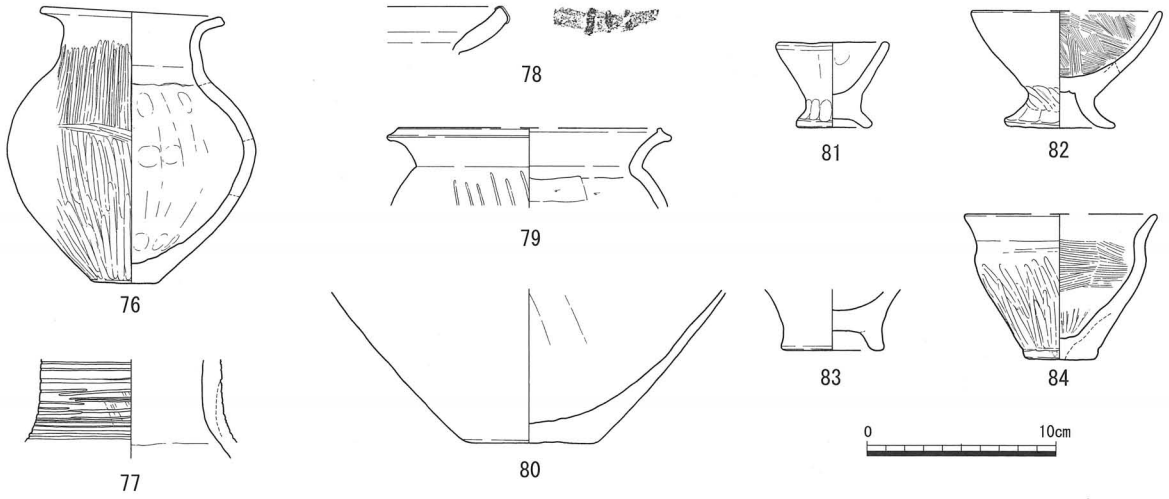
事実、河道から完全に分離している南部（検出長約13ｍ）では、幅110～120㎝、深さ70㎝前後の見事なＶ字溝を検出することができたが、北部ではトレンチ断面観察で弥生時代河道埋土の下に溝６下



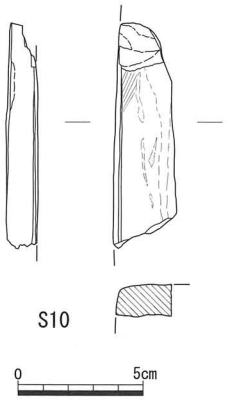
Ⅰ.弥生時代河道埋土
Ⅱ.溝６埋土
Ⅲ.ピット埋土

1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　粘性が強い
3　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土　砂質含む
4　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　やや明るい
5　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土　砂質を含む
6　灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土
7　灰オリーブ色(5.5Y4/2)粘質土
8　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
　　地山微細ブロックを含む（P271埋土）
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土（P241埋土）

第34図　溝６平・断面図（1/100・1/30）



第35図　溝６出土遺物（1/4･1/3）



部が残っていることを確認したのみであった。

河道調査の過程で、溝６との接続部分上面を再度精査検討したが、やはり弥生時代河道埋土（暗灰黄色粘質土）と溝６埋土が分離できず、少なくとも同時埋没を考えざるを得ない状況であった。調査の最終段階でようやく弥生時代河道埋土を除去し、溝６北半の全貌を明らかにすることができた。その結果、弥生時代河道の下にさらに古い無遺物の河道の存在が認められ、その埋土を切り込んだ溝６下部が検出されるとともに、その上部は明らかに弥生時代河道が削り込んでいる様子が確認された。

この状況を整理すると、遺物を含まない古い川が埋まった後に溝６が掘られ、弥生時代河道はその溝を削りながら南南東へ流れると同時に、南南西へ向かう溝南部は半ば埋まってしまったのではないかと思われる。その後川筋の移動に伴い、弥生時代河道と溝６上部は同時進行的に埋没したと思われる。さらに古墳時代後期にいたって川筋が戻り、弥生時代河道埋土を切り込みながら古墳時代河道が形成されたと考えられる。

検出された溝６は、Ⅱ区の北壁から南壁まで貫き、北部は北－南方向、南部はやや湾曲して北北東－南南西の方向、検出長は22.2ｍを測る。調査区南壁の断面で観察すると、溝断面形は見事なＶ字を呈し、幅120㎝、検出面からの深さ70㎝である。一方調査区北壁では、弥生時代河道底より下にあたる部分で幅54㎝、深さ22㎝を測る。北部では上部を削平されて小溝程度の規模になっているが、溝底レベルを比較すると、北壁部で標高1.12ｍ、南壁部では標高1.02ｍであり、およそ10㎝の差で南が低くなっている。

以上、Ｖ字形の断面形状やその規模から、溝６は水路として掘削されたものと考えられる。

埋土は、中層から上層が弥生時代河道とほぼ同じ暗灰黄色粘質土、下層・最下層は灰オリーブ色粘質土である。遺物は、上・中層と下層を分離できていないものの、弥生土器多数と石器１点（緑色片岩製扁平片刃石斧片）が出土している。

出土遺物は、壺76～78・80、甕79、鉢81～84である。短頸広口壺76は平底の底部から胴部中央部に最大径を有し、頸部から口縁部が短く屈曲しながら外反し端部を丸くおさめる。外面調整はタテヘラミガキを施す。ミガキの幅は上半部のタテヘラミガキの方が幅が狭い。内面調整はオサエ後ナデを

施す。長頸壺77は胴部から頸部にかけての破片で、ヘラ描き沈線文を11条以上施す。壺78は外傾する口縁部の端面に３個１単位の棒状浮文を施している。壺80は平底の底部から胴部が斜めに開きながら立ち上がる底部片である。内面調整はタテヘラケズリを施す。甕79は口縁部を短く外反し端部を上下に肥厚する。外面調整は摩耗しているがタテヘラミガキが確認できる。内面調整は頸部までヨコヘラケズリを施す。鉢81はミニチュアとした小形の鉢でおちょこ形の鉢と底部をつまみ出し高台としている。口縁部は楕円形を呈し、ひずみが大きい。鉢82は茶碗状の鉢部の「ハ」字状に開く高台を付けている。内面調整は細かいハケメを施す。胎土は水こしではないが精良である。鉢83は貼り付け高台片である。鉢84は平底の底部と短い口縁部を「く」字状に外反し端部を丸くおさめる。外面調整はタテヘラミガキ、内面調整はヨコハケメを施す。胎土は水こしのように精良である。扁平片刃石斧Ｓ10は、端部が残る２面を残しすべて破損している。外面は使用により摩耗痕が残っている。

溝６の埋没時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

７　落ち込み

落ち込み（第36･37･38図、図版15･26-4･28-1）

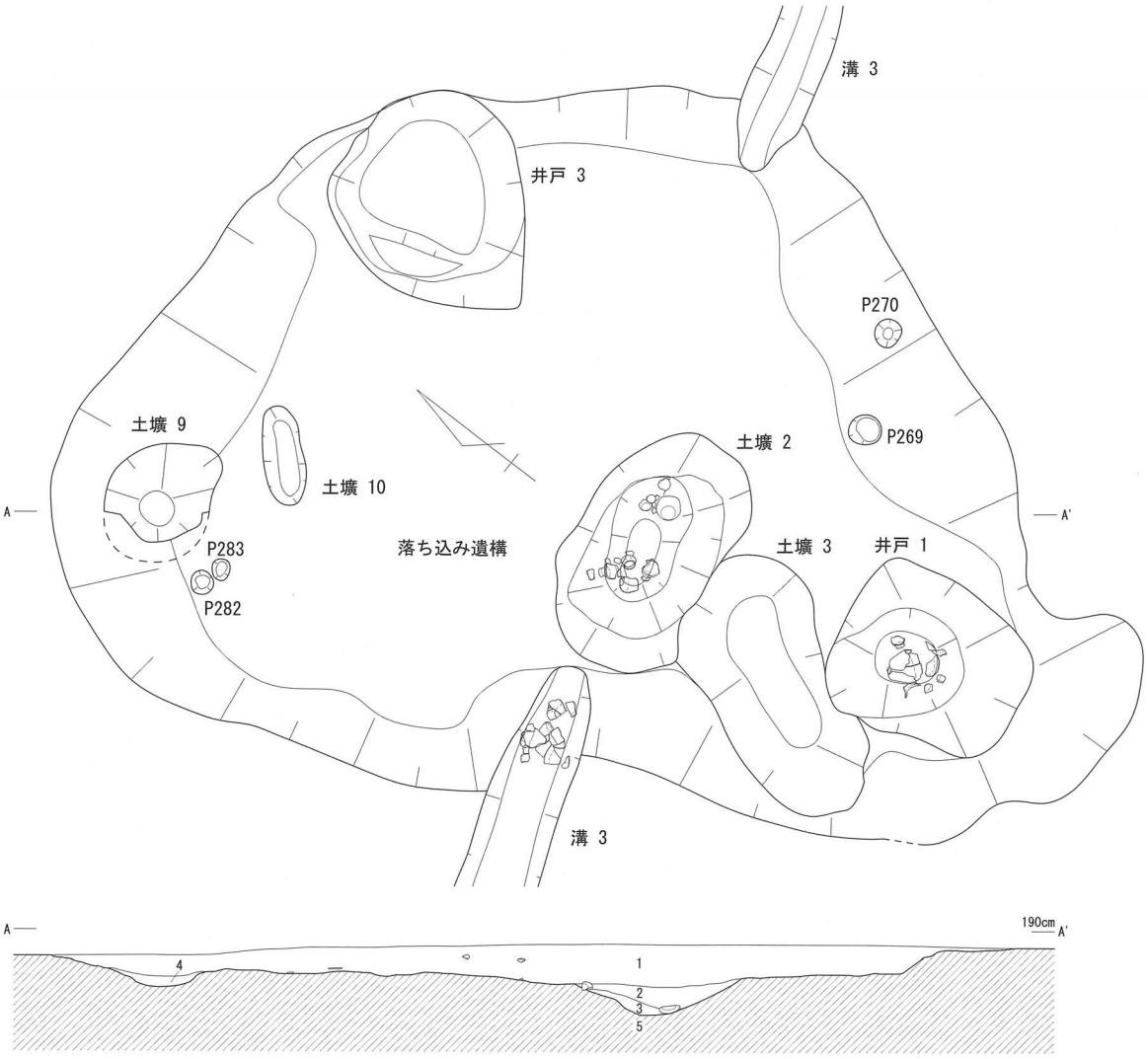
Ⅱ区南西部で検出した大きな落ち込みである。平面形は台形にも近いが、不整形としか言いようのない形状で、長径（北西－南東）12.6ｍ、短径（南西－北東）11.5ｍを測る。上面検出当初は意味のわからない黒褐色土が大きく広がっているといった印象であった。ただ、弥生時代中期の溝３が南西から北東へ中央を貫くように存在しながら、ほとんど埋土が一体化して切り合い関係がみえないこと、明瞭に中世遺物を出土する柱穴・掘立柱建物が落ち込み埋土を切りこんでいることから、弥生時代の遺構であろうことは容易に推定できた。

調査方針を決めるため探査トレンチを設定し、断面観察を行った。その結果、検出面から40～50㎝の深さで底面となり、全体として大きな皿形をなしていることが判明するとともに、埋土は黒褐色粘質土のほぼ単層、須恵器や古代中世遺物を含まず弥生土器のみが出土することを確認した。また、底（地山）面がさらに落ち込んだ部分２か所があり、弥生土器とともに焼土片が出土したことから、下層に遺構の存在する可能性も考えられた。

上面の中世掘立柱建物を調査したのち、全体を掘り下げていったところ、やはり大きく不整形な皿形といった形になり、ほぼ平らな底（地山）面の北端に円形の遺構が現われた。これは上面検出当初から井戸ではないかと予測して調査を進め、出土遺物は少なかったものの最終的に弥生時代の素掘り大型井戸（井戸３）との結論に至った。また南部でも１基の素掘り井戸（井戸１）と２基の土壙（土壙２・３）を検出し、北西部からは小土壙２基（土壙９・10）が現われた。

加えて小ピット若干を検出したが、これらの底面検出遺構と落ち込み全体との関係は、この落ち込みの意味を考える上で重要な点ではないかと思われる。

さらに、遺構同士の関係性を考える上でポイントになると思われる事実として、土壙２・３および井戸１・３等の底面検出主要遺構は、落ち込み上面検出段階ではまったくその兆候が認められず、落ち込み埋土を切りこんで掘られたことは考えられないことがある。とすれば、当時の生活面からあえて大きく一段掘り下げた部分に、さらに掘り下げて井戸や土壙を設けたと考えるか、もしくは井戸・土壙の上部を削りながら大きく一段低い平場をつくったか、二つの解釈が考えられる。言い換えると、生活面より一段低い空間に井戸・土壙が存在し機能していたと想定するか、もしくはそのような空間



1　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　土器片多く含む
2　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　地山微細ブロック多く含む
3　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土　焼土ブロック多く含む
4　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
5　暗オリーブ色(5Y4/3)粘質土　(地山)

0　2m

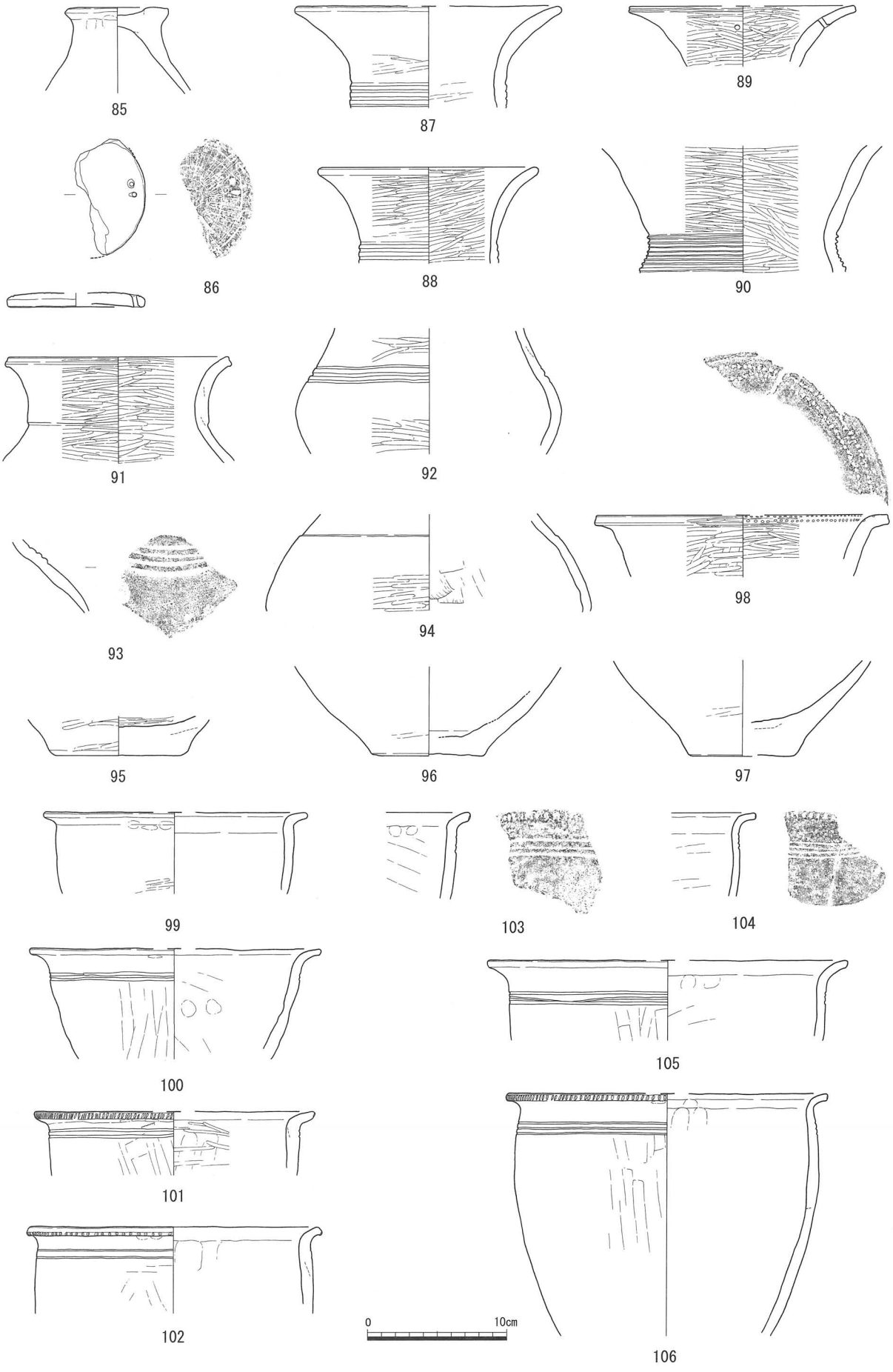
第36図　落ち込み平・断面図（1/60）

がつくられた時点では、井戸も土壙も既に廃絶し存在しなかったと考えるかということである。

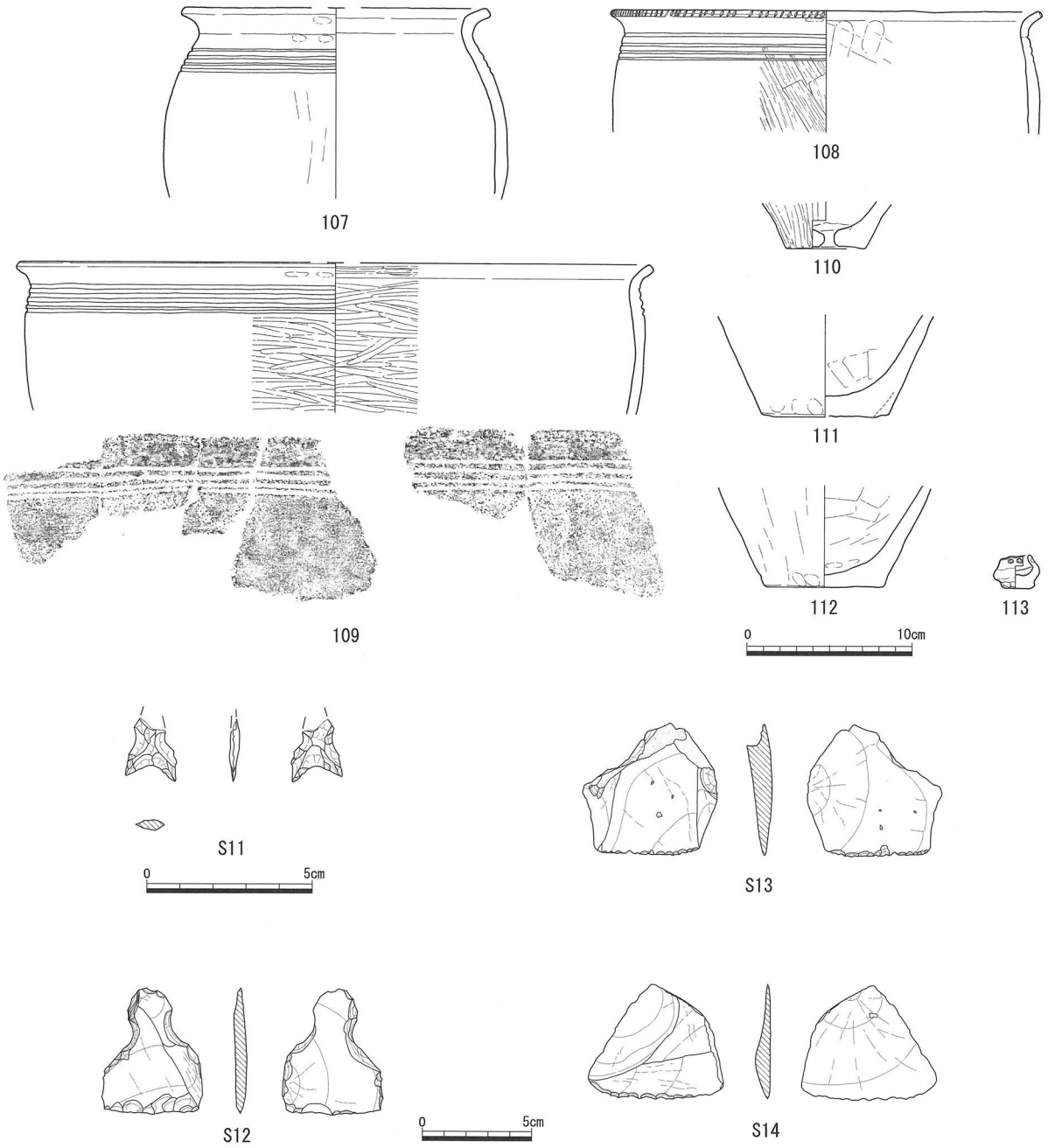
常識的には、当該地のような低湿地で、周囲から水が集まってくるような一段低い場所をあえてつくり、そこに何らかの生活施設を設けることは想定しづらい。やはり、すべての井戸・土壙が廃絶し埋められた跡にこの一段低い空間を設けたと考えるべきであろうが、その性格・意味は不明としか言いようがない。

出土遺物は、土器と石器が認められた。土器は、蓋85・86、壺87～97、鉢98、甕99～112、ミニチュア土器113である。甕の蓋85は裾部を欠くつまみ部分の破片で、つまみ部分の中央部が窪み周囲が突出している。

壺の蓋86は板状の推定径約9.8㎝の円形を呈する。端部近くに２個の穿孔を認める。穿孔の２個が対となり計４個で壺と蓋を止める紐穴と考えらえる。上面には５条の円形ヘラ描き沈線と中心から２条目の円形沈線から端部へ向かい放射状にヘラ描き沈線を施す。内外面の調整はオサエ後ナデを施す。広口壺87・88は口縁部がラッパ状に外反し端部を丸くおさめる。頸部に多条のヘラ描き沈線を施す。



第37図　落ち込み出土遺物１（1/4）



第38図　落ち込み出土遺物２（1/4･1/3･1/2）

広口壺90は８条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面ともヨコヘラミガキを施す。広口壺89はラッパ状に大きく開く口縁部の上部に２個の焼成前穿孔を認める。穿孔の２個が対となり計４個で蓋を止める紐穴と考えらえる。内外面の調整はヨコヘラミガキを施す。広口壺91は口縁部が緩やかに外反する。頸部と胴部の境界部分に段を持つ。内外面の調整はヨコヘラミガキを施す。壺92・93は肩部に３～４条のヘラ描き沈線を施す破片である。壺94は肩部に段を有する。外面調整はヨコヘラミガキを施す。壺95～97は平底の底部片である。鉢98は口縁部を短く「く」字状に折り曲げる。口縁部内側に２列に円形の刺突文を施す。内外面調整はヨコヘラミガキを施す。甕99は口縁部を短く「く」字状に折り曲げる。甕100はやや開きのある胴部から緩やかに「く」字状の口縁部を有する。胴上部に２条のヘラ描き平行沈線を施す。外面調整はハケ状工具による縦方向にナデを施す。甕101・103・106は口縁部

を短く「く」字状に折り曲げ、端部に刻目を施す。また、胴上部に２～３条のヘラ描き平行沈線を施す。外面調整は縦方向に板状工具によるナデ、内面調整はオサエ、ヨコナデ後粗くヨコヘラミガキを施す。甕102は口縁部を短く「く」字状に折り曲げ、口縁端部の下角部に刻目を施す。また、胴上部に２条の細いヘラ描き平行沈線を施す。外面調整は縦方向にナデ、内面調整はオサエ、ナデを施す。甕105は口縁部が緩やかに「く」字状を呈し、胴上部に３条のヘラ描き平行沈線を施す。外面調整は縦方向に板状工具によるナデ、内面調整はオサエ、ヨコナデを施す。甕107・109は口縁部を短く「く」字状に折り曲げる。胴上部に４条のヘラ描き平行沈線を施す。甕109の内外面の調整はヨコヘラミガキを施す。甕110～112は平底の底部片で、甕110の底部の中央部に径６㎜の焼成後穿孔を施す。穿孔は打ち欠いただけでなく綺麗に仕上げている。ミニチュア土器113は平底で胴張りのある無頸壺のミニチュアで完形品である。口縁部外面に２個の円形刺突を施す。外面はオサエ、ナデを施す。

石器は石鏃Ｓ11とスクレイパーＳ12～Ｓ14である。石鏃Ｓ11は両側部をわずかに抉るアメリカ鏃と呼ばれる石鏃で、先端部を欠く。Ｓ12～Ｓ14はスクレイパーで刃部状の調整を持つ。Ｓ12は突出状に柄を打ち出している。

落ち込みの時期は、出土遺物から弥生時代前期中葉頃と考えられる。

８　弥生時代河道

自然河道の上面検出状況と断面観察（第39･40図、図版16）

自然河道は調査区東端で検出した。上面検出当初から、Ⅱ区東部の遺構面に黒褐色粘質土が大きく広がっており、河道埋土の上面観察においては、長期にわたる河道生成過程と周辺遺構との関係を考えるうえで重要な点がいくつか指摘できた（第39・40図）。

①黒褐色土（Ａ層）の西側、河道西岸にあたる地山（オリーブ褐色粘質土）露呈部との間にやや淡い色調の暗灰黄色粘質土（Ｃ層）が帯状に存在し、そこから分岐するような状況で、同一埋土の溝６が南南西へ延びている。

②暗灰黄色土（Ｃ層）を埋土とする溝３・溝５が帯状部に吸収されるように途切れる。

③河道東岸が検出される調査区北東隅では、溝３の延長部と思われる溝が黒褐色土粘質土（Ａ層）に明瞭に切られている。

④古墳時代後期の須恵器等を出土した溝７は、明瞭に暗灰黄色土（Ｃ層）の帯状部分を貫き、黒褐色土（Ａ層）に吸収されるように途切れる。

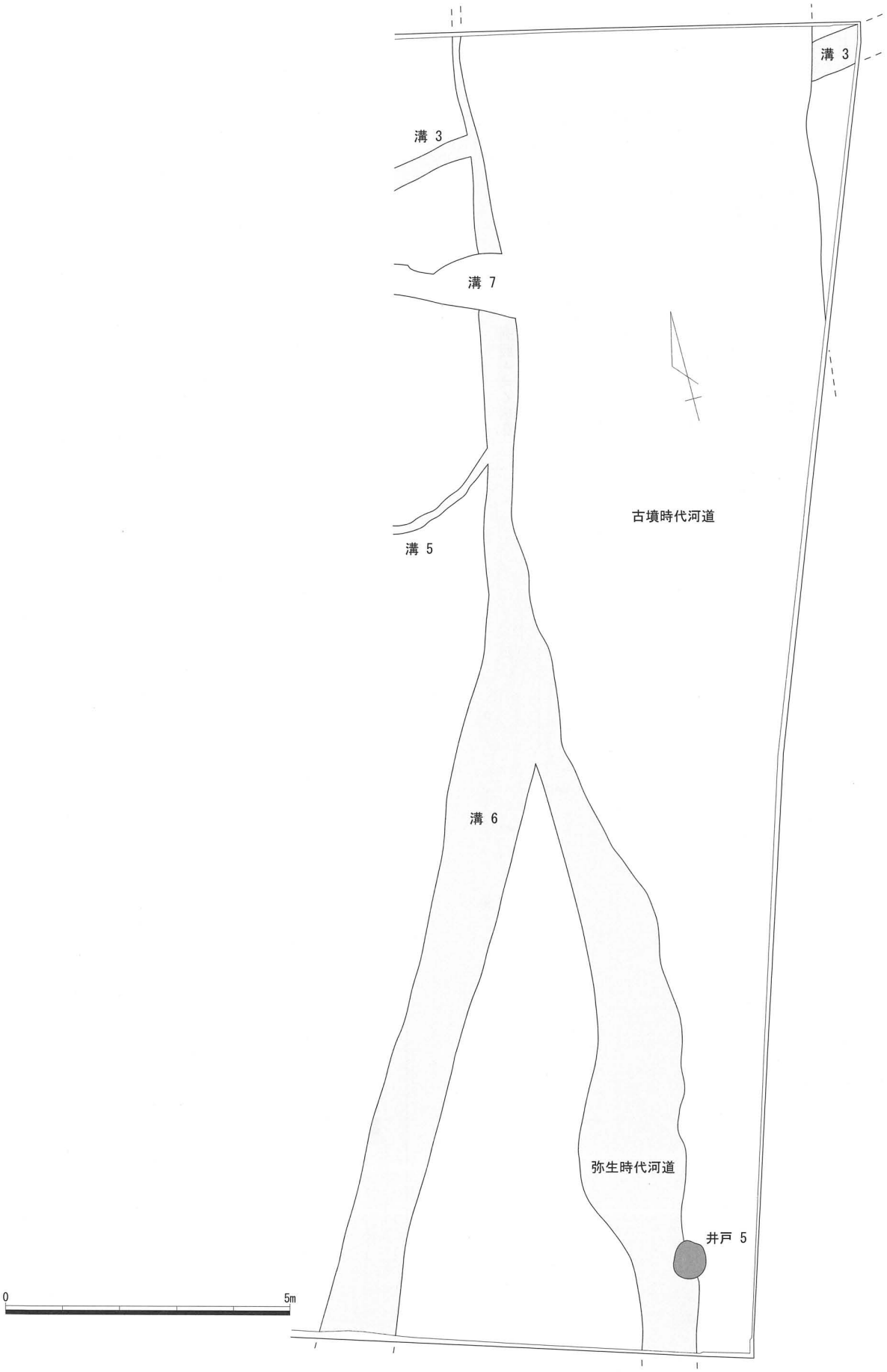
北壁側溝トレンチと中央に設定した探査トレンチの断面観察でも、つぎのような所見が得られた。

⑤黒褐色粘質土（Ａ層）は厚さ20～40㎝（検出面からの深さ40～50㎝程度まで）を測り、その下に灰色粘土・粘質土（Ｂ層）を埋土とする、幅約60㎝深さ約40㎝の下層流路（検出面からの深さ約60㎝）が２条確認された。その下層流路内まで須恵器が出土する。

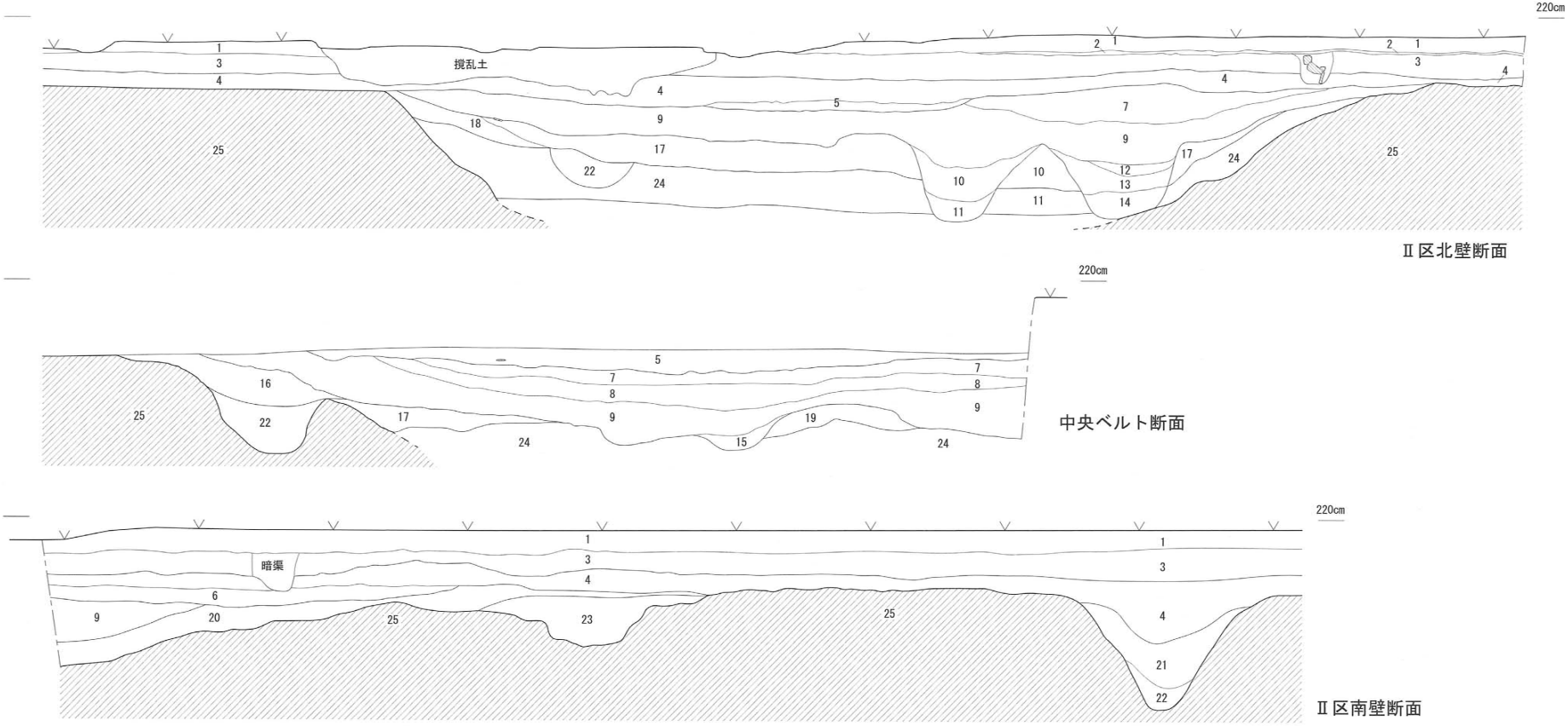
⑥黒褐色粘質土の下には、上面で南北の帯状に検出した暗灰黄色粘質土層（およびそれに対応すると思われる暗オリーブ褐色粘質土層・Ｃ層）があり、さらにその下には灰オリーブ褐色粘質土層（Ｄ層）が存在し、そこまでが河道埋土と判断された。

⑦北壁断面では、溝６と推定される小溝が、Ｄ層を切り込んでＣ層に覆われる。中央探査トレンチでは、溝６が地山（オリーブ褐色粘質土）を切り込んでＣ層に覆われている。

以上の観察結果から、Ａ・Ｂ層を「古墳時代河道」、Ｃ層は希薄（部分的に濃密）に弥生時代後期の



第39図　自然河道上面検出状況（埋土の切り合い）（1/100）



Ⅰ. 耕作関係層
1　灰色(5Y5/1)粘質土（現水田耕土）
2　灰色(5Y5/1)粘質土　黄色粘質土微細ブロック含む
3　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　やや暗い

Ⅱ. 包含層
4　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
5　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
6　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　黄色粘質土微細ブロック含む

ⅢA. 古墳時代河道埋土
7　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　炭化物、砂質含む
8　黒褐色(2.5Y3/1)粘質土
9　黒褐色(2.5Y3/1)粘質土　炭化物含む

ⅢB. 古墳時代河道埋土
10　灰色(5Y5/1)粘質土　砂質土含む
11　灰色(5Y4/1)粘質土
12　黒褐色(2.5Y3/1)粘質土　粘性強い
13　灰色(5Y5/1)粘質土　粘性強い
14　灰色(7.5Y5/1)粘質土
15　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土

ⅣC. 弥生時代河道埋土
16　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
17　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土　砂質含む
18　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　やや明るい
19　灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土
20　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土　黄色粘質土微細ブロックを含む

Ⅴ. 溝６埋土
21　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　粘性強い
22　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土　粘性強い

Ⅵ. 土壙11埋土
23　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土

Ⅶ. 先行(無遺物)河道埋土
24　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土　砂質含む

Ⅷ. 地山
25　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土

第40図　自然河道土層断面図（1/40）

土器を含むため「弥生時代河道」、Ｄ層は無遺物であるので「先行河道」と呼び調査をすすめた。

次に、河道内堆積土層について今少し詳しい所見をのべておく。

黒褐色粘質土層（Ａ層）　西岸部を除く河道内全体に広がり、中央部では厚さ30㎝を測る。大きく３層に分けることができ、上層は粒状変化に乏しく、中層および下層は地山ブロックを含むラミナ構造がわずかに見られる。おそらく流量がほとんど無くなってからの堆積なのであろう。古墳時代後期の須恵器を相当量含んでいる。

灰色粘質土層・灰色粘土層（Ｂ層）　２条の下層小流路の埋土である。グライ化の進行した軟弱な灰色系土層で、細かくみると３層程に分けることができる。下層には砂質を含むラミナ構造がみられ、底面に細砂が堆積している部分もある。Ａ層同様の須恵器を少量検出している。

暗オリーブ褐色粘質土・暗灰黄色粘質土（Ｃ層）　弥生時代河道埋土と考えられる。Ａ層の下、河道内のほぼ全体にあるが、検出中央部では薄く、一部存在しないところもある。西岸沿いではＡ層が無く、検出面に南北の帯状にＣ層が露呈していた。色調は、明るく黄色味の強いオリーブ褐色の地山と黒褐色粘質土（Ａ層）の中間的なもので、砂質を含むラミナ構造がみられる。溝６が分岐する検出中央西部と南部では弥生時代後期の土器がまとまって出土している。

灰オリーブ色粘質土（Ｄ層）　弥生時代河道に先行して存在した河道（先行河道）埋土で、河道内最深部に広範に存在するようだが、北壁側溝トレンチで全く遺物の出土をみなかったので、調査は断面観察のみにとどめている。若干砂質を含むラミナ構造がみられる。ちなみに溝６の北部はこの層を切り込んでいる。

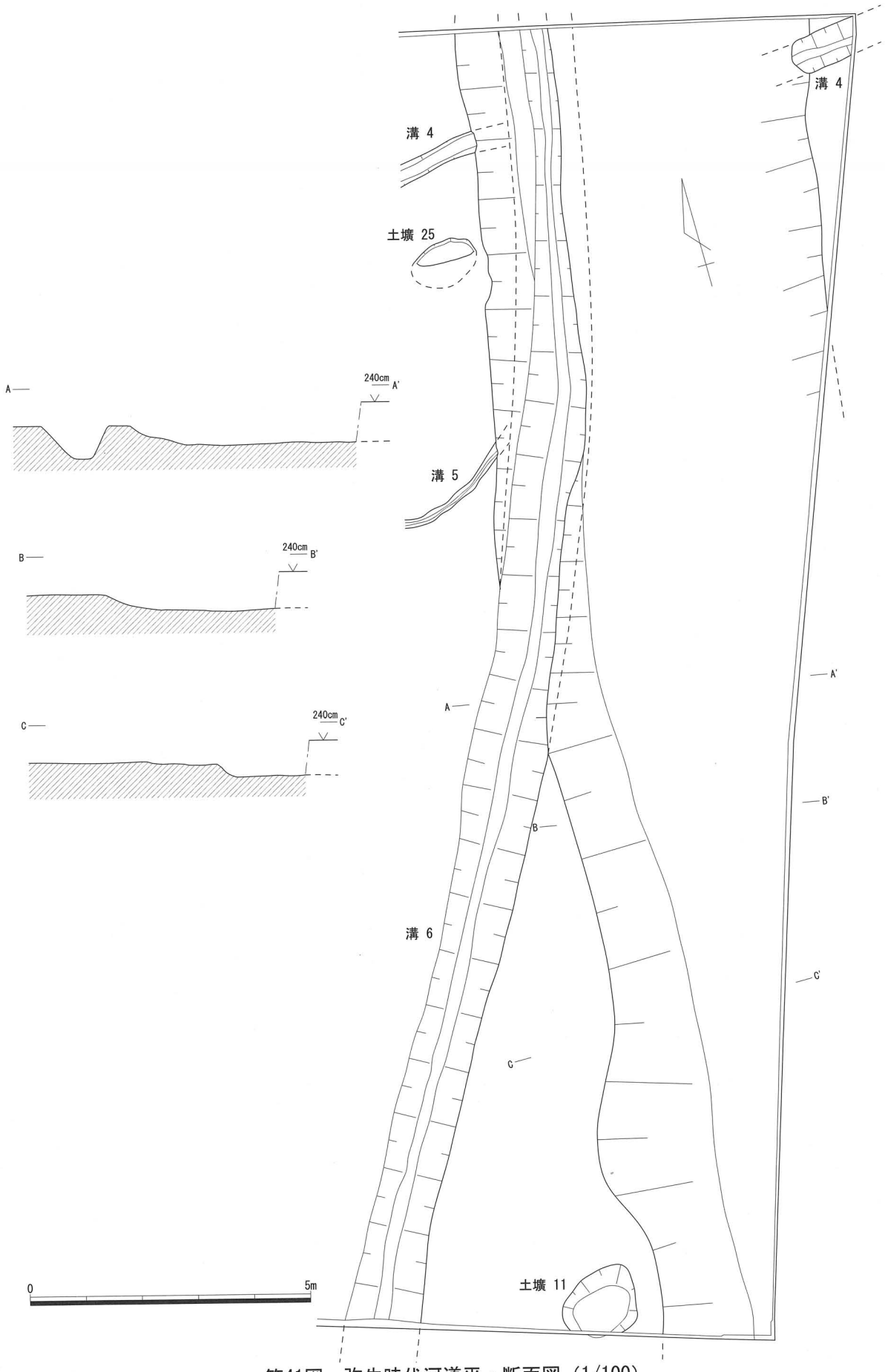
弥生時代河道と先行河道および溝６（第41図、図版17）

Ａ・Ｃ層をすべて除去した状態（第41図）が、弥生時代河道の機能していた姿に近いと思われる。ただし、Ｂ層の下層流路は存在せず、先行する溝６北部は上部が削平されて下部が川床に埋没、同南部の南南西へ分岐する部分もほとんど埋まっていたと考えられる。また、溝３・溝５は埋土（Ｃ層）が一体化し切り合いが不明瞭であるものの、この弥生時代河道に先行するものと考えられ、それに対し須恵器を出土した溝７はＣ層を切り込んでＡ層と一体化する状況であった。

一方、河道東部は多くが調査区外となるので不明であるが、わずかに東岸を検出した調査区北東角では、検出面にＣ層が無く、黒褐色土（Ａ層）が直接地山を覆っている。古墳時代河道が、弥生時代河道の元東岸を削り込んだ結果である。その点を考慮すると、完掘後の状態（第41図）で、検出全長22.5ｍ、川幅６ｍを測るが、おそらく幅5.5ｍ程度だったのではないかと思われる。深さは検出面から50～60㎝程度、河床の標高は1.6ｍ前後で、おそらく北から南へ流走したものと思われるものの、調査の範囲内でその方向を確定することはできなかった。

出土遺物は全体としては希薄であるが、調査区南壁から約４ｍ、東壁から約１ｍの部分と、南壁から約10ｍの溝６が分岐するあたりに弥生時代後期の土器が集中して出土した。前者は、南北2.5ｍ、東西１ｍほどの部分に、斜面に遺棄されたかのごとく弥生土器が集中し、後者は検出面直下の浅いところで径80㎝程度の範囲に弥生時代後期の高杯・甕等の大きな破片が集中して出土した。前者は一括廃棄、後者は何らかの河畔祭祀の跡と考えられる。

一方、さらに下の先行河道はほぼ弥生時代河道の真下と考えてよい。この先行河道の埋没後溝６が掘られているのであるが、溝６検出北部では完全に先行河道と重なっている。この状況から考えると、水流の残っていた北方から、流れの無くなった元川筋を掘って溝とし、南南西方向へ水を引き込もう

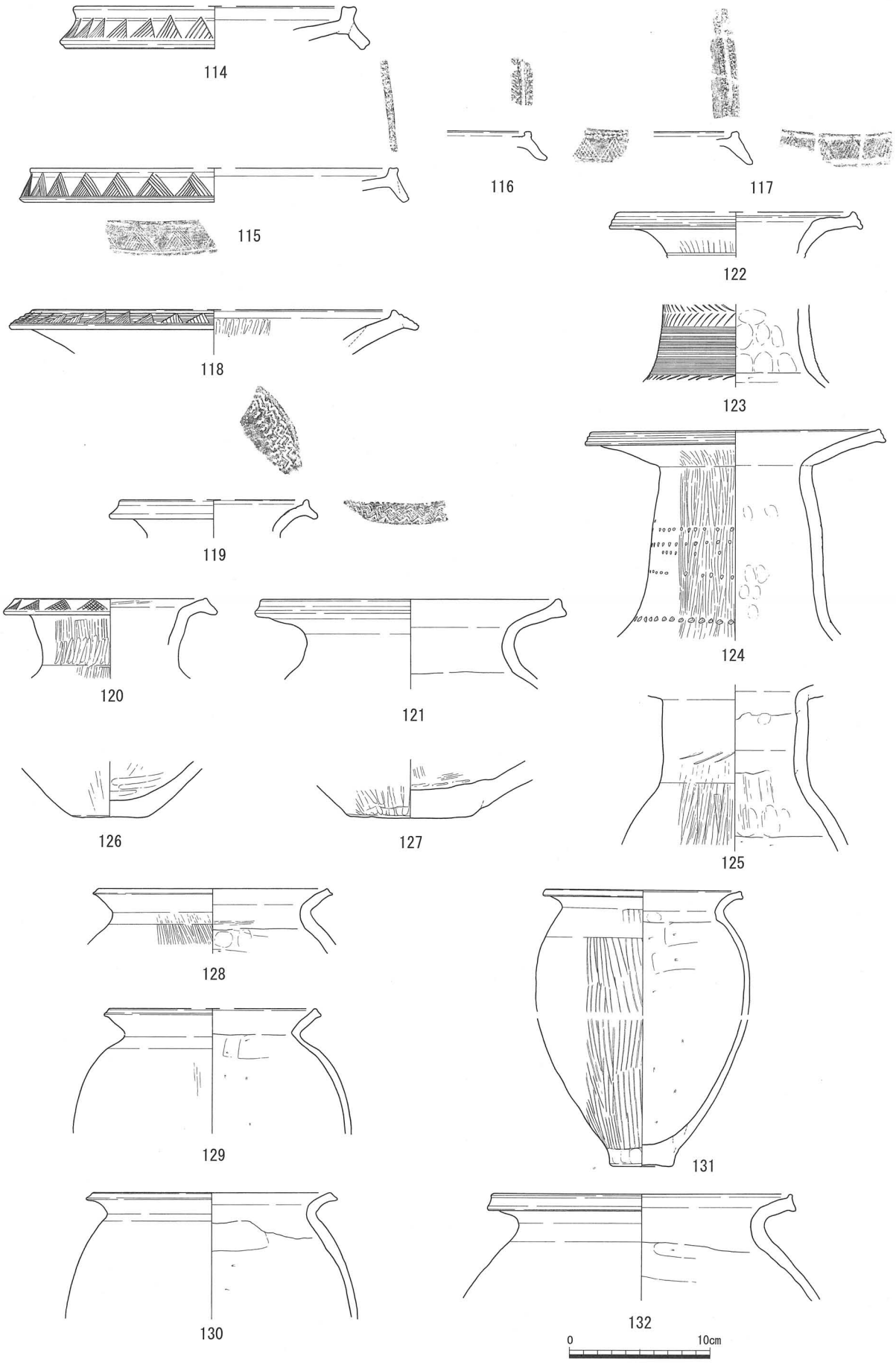


第41図　弥生時代河道平・断面図（1/100）

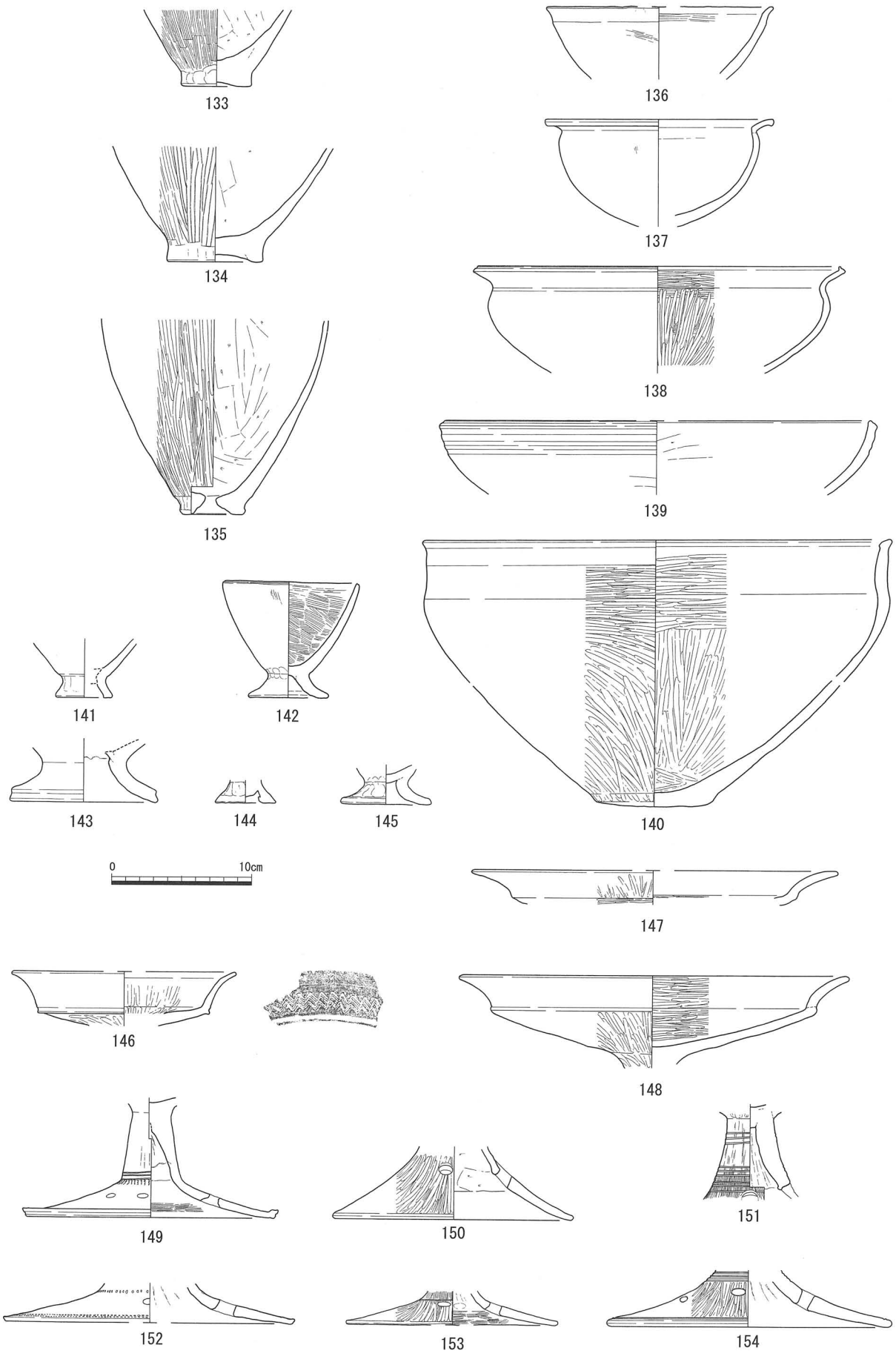
としたのではないかと思われる。おそらくそれは弥生時代中期から後期初め頃のことで、後期になって川筋が戻ってきたため溝６は埋まってしまったということであろうと推測される。

出土遺物（第42･43･44図、図版27-5･28-1）

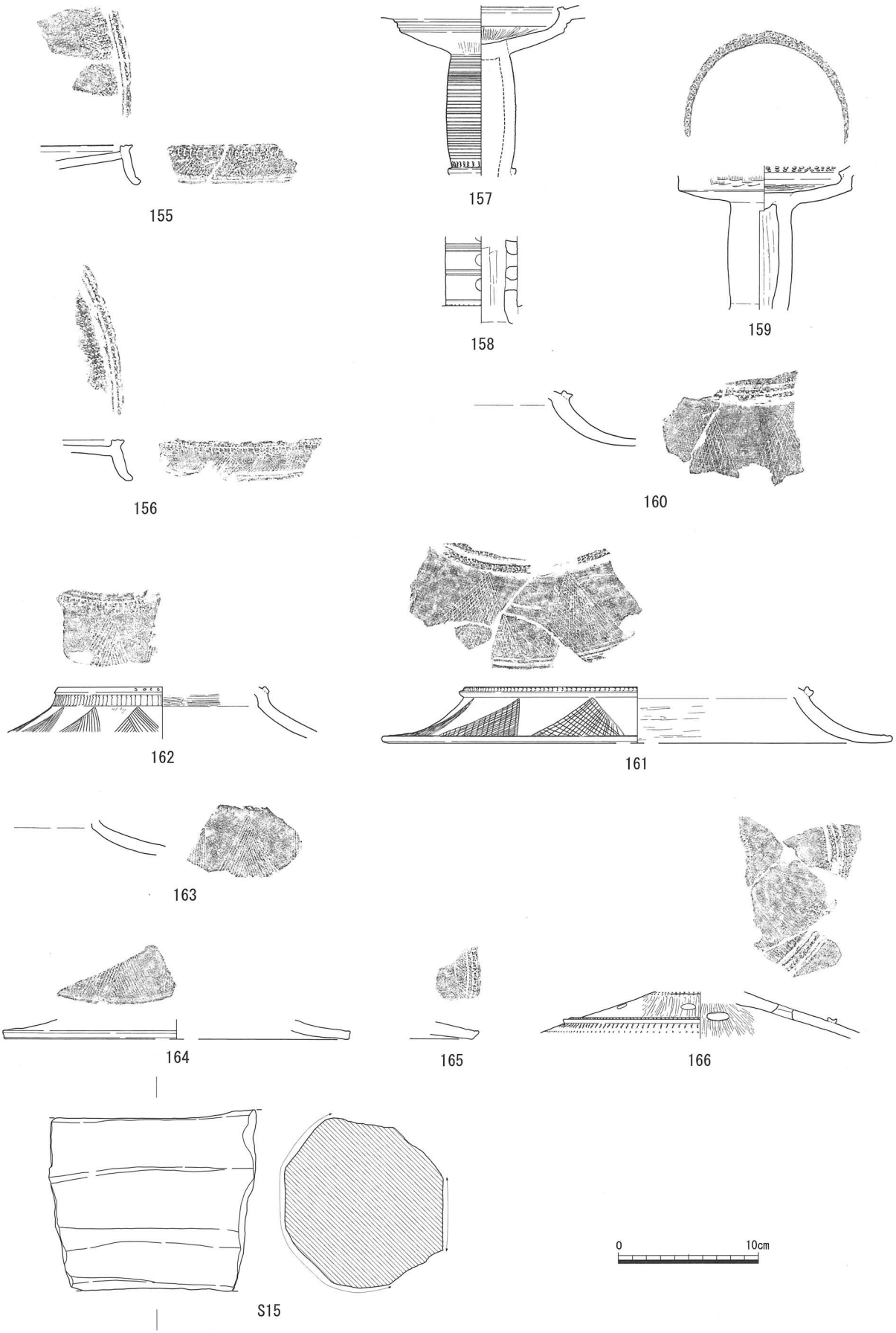
出土遺物は、土器と石器が認められた。土器は、壺114～127、甕128～135、鉢136～143、製塩土器144・145、高杯146～166である。広口壺114・115は大きく開いた口縁部の端部を上下に拡張し、外面にヘラ描きによる114は鋸歯文、115は２つのナナメ方向のヘラ描き沈線による鋸歯文と鋸歯文の下に１条の沈線を施す。また、上方向に拡張した端面に２列の刺突文を施す。広口壺116・117は口縁部の端部を上下に拡張するが、下への拡張が大きく端部を丸く仕上げる。116は外面に格子状の鋸歯文、上に拡張した外面と上端部に２列の刺突文、内面にはヘラ描きによる斜線文の後２列の刺突文を施す。117は拡張した外面に鋸歯文と下部に１条の凹線、上に拡張した上端部に２列の刺突文、内面には３列の刺突文を施す。広口壺118は大きく開いた口縁部の端部を上下に拡張し、ヘラ描き沈線による鋸歯文の後５条の凹線を施す。鋸歯文のヘラ描き斜線は途中で斜線の傾きが変わっている。外面調整はナデ、内面調整はタテヘラミガキを施す。広口壺119は外反する口縁部の端部を上下に拡張し、端面に櫛描き波状文、口縁部内面に櫛描き波状文と２連の竹管状の工具による刺突文を施す。広口壺120・122は口縁部を短く外反し120は下方に肥厚する。122は上下に肥厚する。120は口縁端部に格子状の鋸歯文を施す。広口壺121は口縁部を大きく外反し端部を肥厚する。長頸壺123は頸部片で17条のヘラ描き平行沈線の上端にヘラ状工具による２列にナナメに刺突文、また、下端にナナメに刺突文を施す。長頸広口壺124は頸部が上方に向かいややすぼまり、口縁部を大きく開き、端部がやや拡張され２条の凹線を施す。頸部には４列の棒状の工具による刺突文、頸部から胴部への移行箇所に１列の棒状の工具による刺突文を施す。外面調整は縦方向にハケメを施し、内面調整はい一部オサエ痕を認める。長頸壺125は胴部から延びる頸部がほぼ垂直に立ち上がり口縁部に向かい大きく開く破片である。外面調整は幅４～５㎜程のハケ状工具による縦方向にナデ、内面調整はオサエ後ナデを施す。壺126・127は平底の底部片である。甕128～132は口縁部を「く」字状に外反し端部を肥厚する。130は口縁端部の下側を大きく肥厚し、132は口縁端部の上下を肥厚する。131はやや上げ底で肩の張りがやや弱い形状を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整は頸部下までヨコヘラケズリを施す。甕133・134は上げ底の底部片で外面調整はタテハケ、内面調整はタテヘラケズリを施す。甕135は底部の中央に径７㎜の焼成後の穿孔を施す。外面調整はタテハケ後粗いタテヘラミガキ、内面調整はタテヘラケズリを施す。鉢136は鉢部の張りがなく口縁端部を小さく外反する。鉢137・138は張りのある鉢部で口縁部を「く」字状に折り曲げ端部を肥厚する。138の内面調整は口縁部がヨコヘラミガキ、鉢部はヨコハケ後タテヘラミガキを施す。鉢139は椀状の鉢部の上部外面に３条の凹線を施す。鉢140は平底の底部から大きく開く鉢部を呈し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり端部をわずかに開く。外面調整は鉢部は横方向にヘラミガキ、口縁部はヨコヘラミガキ、内面調整は鉢部上部までタテヘラミガキ、鉢上部から口縁部はヨコヘラミガキを施す。141・143は台付鉢の脚部片。台付鉢143は茶碗形の鉢に「ハ」字状に開く脚部を有する。内面調整はヨコナデを施す。製塩土器144・145の脚部片で144の脚部の端部を「ハ」字状に踏ん張る形状を呈する。外面調整はヘラケズリを施す。145の脚部は端部を「ハ」字状に外反する形状を呈する。外面調整はオサエを施す。高杯146はやや小形で皿部から口縁部を外反しながら立ち上げ、端部を細く仕上げる。口縁部の下半部に６条１単位のクシ状工具による波状文を施す。内外面調整はヘラミガキを施す。器壁は他の高杯と比べ薄く、胎土は２㎜以下の長石、石英、角閃石



第42図　弥生時代河道出土遺物１（1/4）



第43図　弥生時代河道出土遺物２（1/4）



第44図　弥生時代河道出土遺物３（1/4）

を多く含む。焼成は良好である。在地土器ではなく播磨地域からの搬入品であろうと推察される。高杯147・148は杯部片で、浅い皿部から口縁部が上方へ湾曲しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面調整は粗雑なタテヘラミガキ、内面調整はヨコヘラミガキを施す。高杯149～154は脚部片で柱状部から屈曲し裾部が外方へ大きく広がる。149は柱状部の下部に３条の沈線、脚部の上部に櫛状工具による刺突文、下部に半裁竹管状工具による刺突文を施す。また、脚部に２個一対と考えられる焼成前穿孔が施される。150は脚部に４個の穿孔が施される。151は柱状部に３条の沈線を３段にわたり施す。また、脚部に４個の穿孔が施される。152は脚部の上部に棒状工具による１段の刺突文、下部に２段の棒状の工具による刺突文を施す。また、脚部に穿孔が施される。153は柱状部と裾部の境に１条の沈線、裾部に穿孔が施される。154は柱状部と裾部の境に４条以上の沈線、裾部に穿孔が施される。装飾高杯155･156は口縁部片で水平に大きく開いた口縁部の端部を上下に拡張し、外面に鋸歯文と半裁竹管状工具による３連の刺突文を配する。上の拡張する端面には２条の凹線を施す。口縁部の内側には鋸歯文と半裁竹管状工具による３連の刺突文を配する。装飾高杯157～159は柱状部片で157はエンタシス状の柱状部に全体にわたり36条の沈線、下部に半裁竹管状工具による２連の刺突文を施す。柱状部と脚部の接合部に１条の突帯を張り付ける。灰皿状の杯部から大きく開く杯部の境に突帯を貼り付け、杯部の内側に鋸歯文を配する。158は柱状部の３段以上の円形穿孔と１～３条の平行沈線を施す。下部には１段の刺突文と突帯の剥離した痕跡が認めらえる。159はエンタシス状の柱状部を有する。灰皿状の杯部から大きく開く杯部の内側に竹管状工具による２列の刺突文を配する。装飾高杯160～166は２段の屈曲しながら外方する脚部片で、160・161は下段の大きく開く裾部外面に斜格子の鋸歯文を施す。脚部の境に中央部がやや窪む突帯を貼り付け、端面に半裁竹管状工具による２連の刺突文を施す。上段の裾部の外面には半裁竹管状工具による４連以上の刺突文を施す。162～164は下部の裾部外面に左下がりの沈線後右下がりの沈線を引く順番で鋸歯文と櫛状工具による刺突文を施す。上部の裾部の境に断面方形の突帯を貼り付け端面に竹管状工具による刺突文を施す。165は裾部外面に鋸歯文と半裁竹管状工具による１列の刺突文を施す。166は「ハ」字状に大きく開く裾部に突帯を貼り付け、端面に半裁状工具による刺突文を施す。上段の裾部に２段以上の半裁状工具による刺突文と計６個と考えられる円形穿孔を施す。下段の裾部には２段の半裁状工具による刺突文と１段以上の刺突文を施す。外面調整はタテヘラミガキ、内面調整はタテハケメを施す。

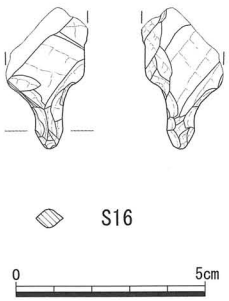
石器は、棒状の両端部を欠く、断面不整８角形の砥石Ｓ15でその内５面が砥石面として使用により摩耗痕が認められる。

自然河道の時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

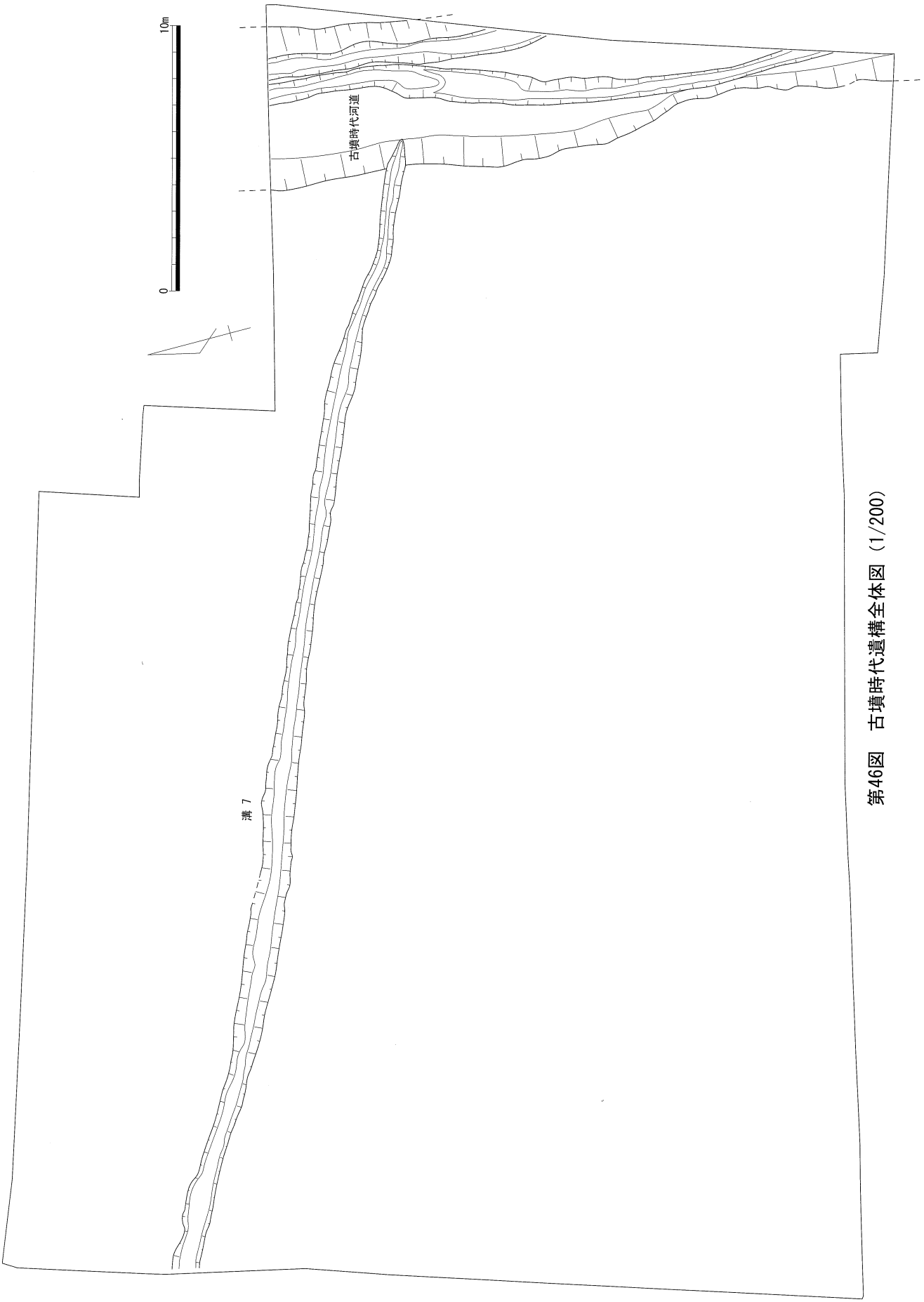
９　遺構に伴わない弥生時代遺物（第45図、図版28-1）

本調査区では、遺構面を覆う遺物包含層に遺物が少なく、出土遺物の大半は何らかの遺構に伴うものである。とはいえ、その包含層遺物とともに、重機掘削時・遺構検出時や調査区外周側溝トレンチ出土など、帰属遺構を特定できない遺物も多く存在している。ここではそのうち実測しえた遺物のなかで、弥生時代に属する石器のみをとりあげる。

石錐Ｓ16は錐部の断面が菱形を呈し、縦長のつまみ部分を欠いている。



第45図　Ｉ区検出面出土石器（1/2）



第46図　古墳時代遺構全体図（1/200）

第３節　古墳時代の遺構と遺物

１　古墳時代遺構の概要（第46図）

古墳時代の遺物を出土した遺構としては、溝７と自然河道がある。自然河道については、古墳時代のものと弥生時代のもの、さらに先行する無遺物の河道が重なっているが、その概要は弥生時代の項で述べたので、ここでは古墳時代の河道検出状況と須恵器を中心とする出土遺物についてのみ述べる。

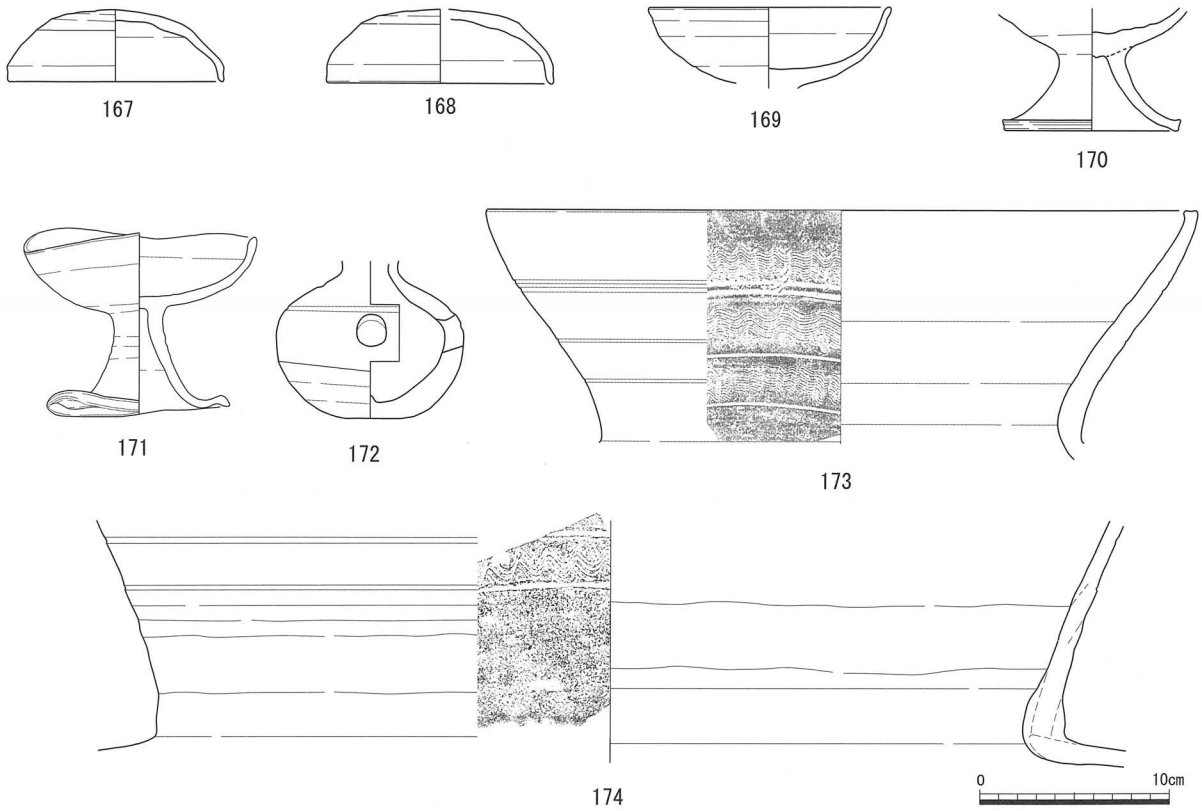
２　溝

溝７（第47･48･49･50図、図版18･28-2）

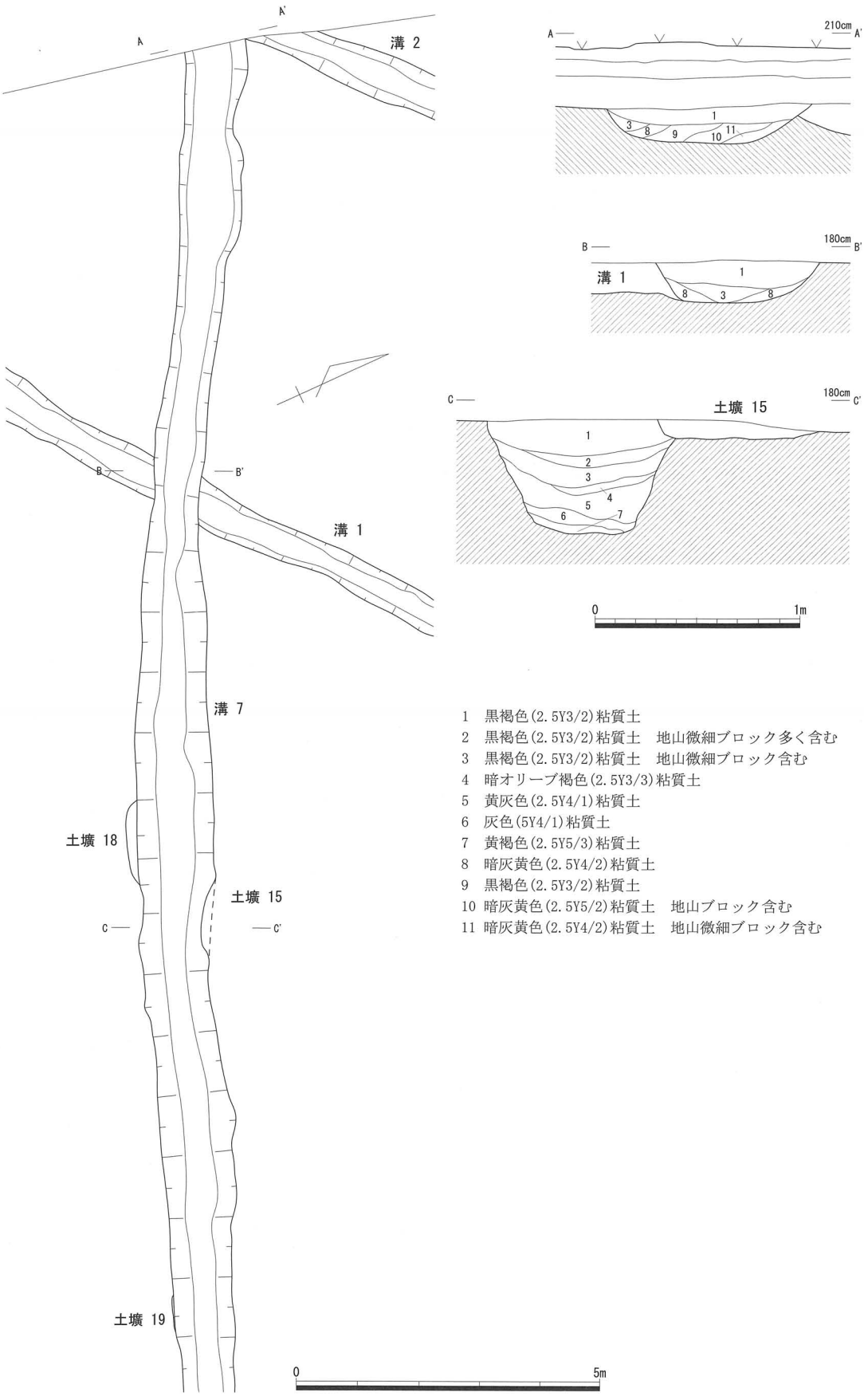
溝７は、調査区北半部で西壁から自然河道まで43.4ｍを検出した。微妙な湾曲はあるものの、全体としてはほぼ直線的に西北西から東南東へ延び、検出面では顕著な黒褐色粘質土を埋土とする。

検出長40ｍを越えるため他遺構との切り合い関係も多く、弥生時代の溝１～４および弥生時代河道埋土を切り込んで、東端は古墳時代河道に接続している。また、土壙18・19・24は遺物が出土していないので時期不明ながら、これらも溝７により明瞭に切られており、逆に土壙15とピット258は溝７を切り込んでいた。一方、土壙19・25と古墳時代河道は、埋土が一体化し切り合いがまったく見えなかった。

溝の寸法や断面形状をみると、検出西端の西壁部で幅100㎝、深さ18㎝、皿形の断面形で底の標高は1.60ｍである。ここから東に向かって徐々に深くなり、西壁から13ｍ付近（土壙15・18周辺）では幅1.3ｍ、深さ60㎝前後（底の標高0.98ｍ）と、最も幅広で深い。このあたりから東の断面形は逆台形

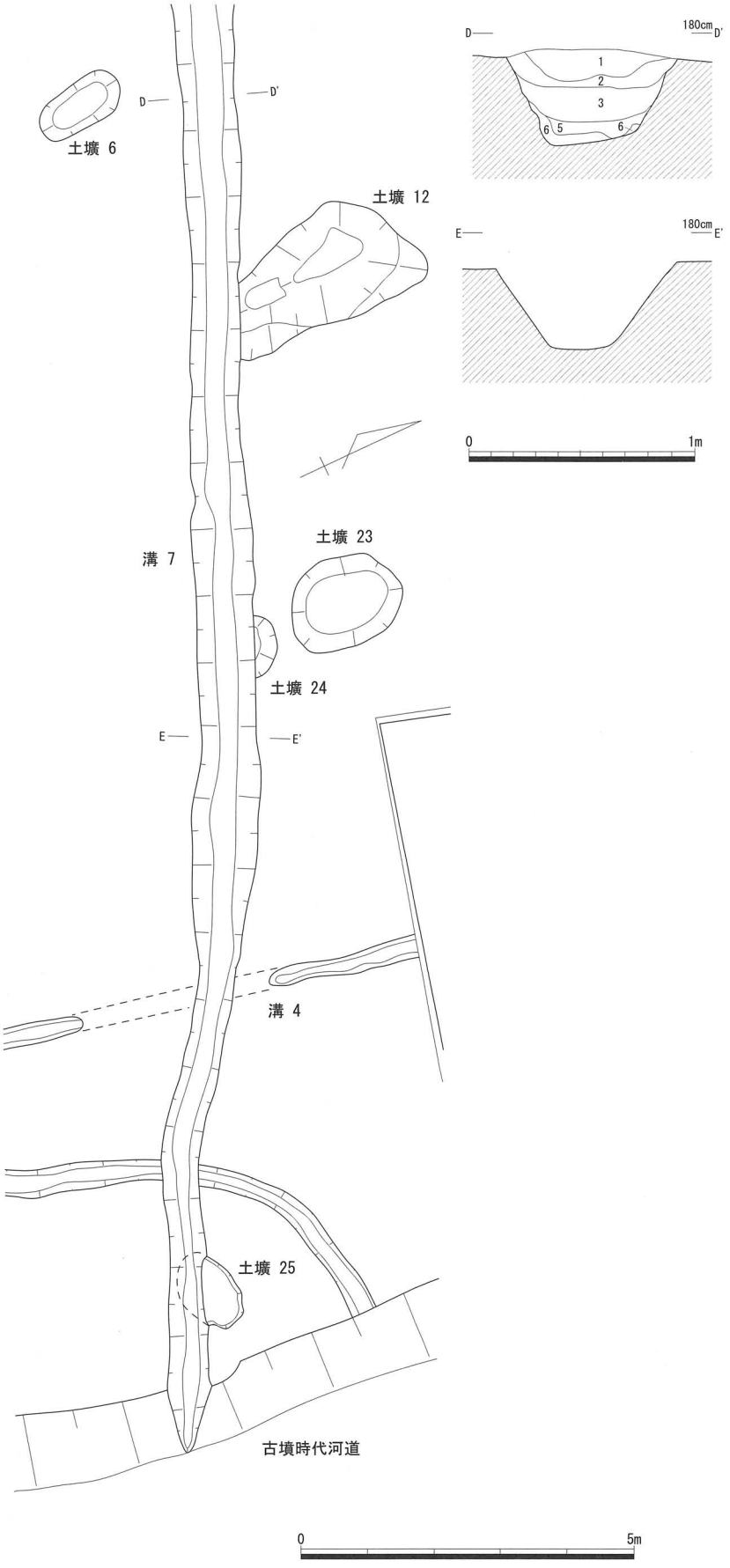


第47図　溝７出土遺物１（1/4）



1　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
2　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　地山微細ブロック多く含む
3　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　地山微細ブロック含む
4　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土
5　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土
6　灰色(5Y4/1)粘質土
7　黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
8　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
9　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
10　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　地山ブロック含む
11　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む

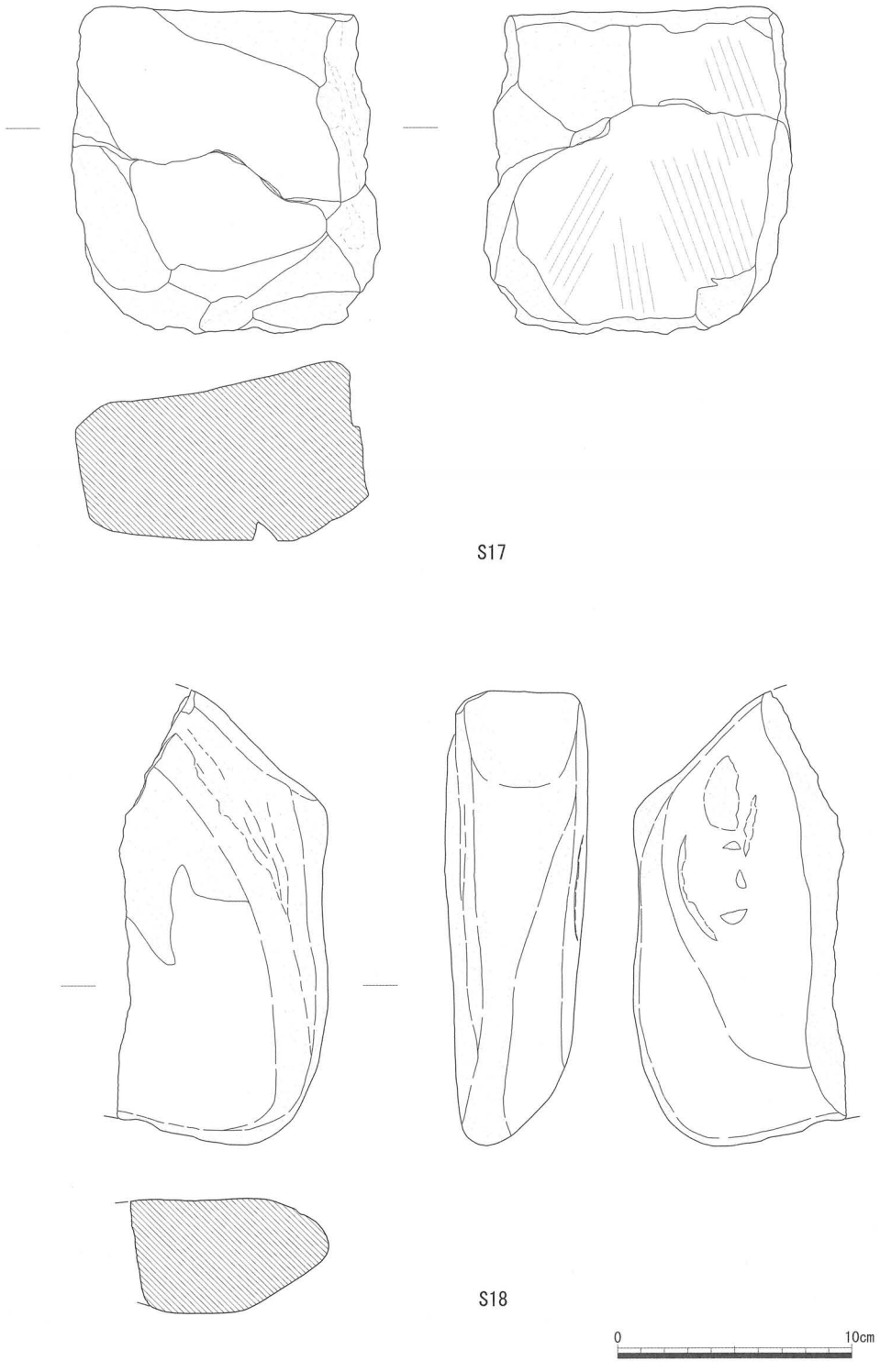
第48図　溝７平・断面図（西半）(1/100･1/30)



第49図　溝７平・断面図（東半）(1/100･1/30)

を呈する。西壁から27～28ｍ付近（土壙19周辺）になると再び底レベルが上がり、幅70～80㎝、深さ40㎝前後（底の標高1.32ｍ）を測る。東端の古墳時代河道と接続する部分では、さらに底レベルを上げて幅60㎝、深さ30㎝（底の標高1.40ｍ）となる。

埋土は、中層から上はすべて黒褐色粘質土であるが、下層は一様ではなく地山小ブロックを含む黄灰色・暗灰黄色・黄褐色等の粘質土からなる。ただし、砂質・シルト質の部分はほとんど無く、水流



第50図　溝７出土遺物２（1/3）

の痕跡を指摘しがたい。つまりこの溝は「水路」としてとして掘られたのではないようである。おそらく、低湿地を耕地化するための排水溝、もしくは何らかの区画溝の一部ではなかろうか。

遺物は、弥生土器・砥石とともに、６世紀後半～７世紀初め頃の須恵器が多数検出されている。その遺物内容と時期は、古墳時代河道のものにきわめて近い。

溝７の遺物は、須恵器を中心としてコンテナ３～４箱分程度もあり、実測可能点数も数十点に及ぶが、その中から厳選し、167～174の須恵器８点とＳ17・Ｓ18の砥石２点を掲載した。

167・168は瀬戸内市分類Ａ類の杯蓋で、ともに口径11.5cm前後と比較的小形である。169は同種の杯蓋を逆転させて脚を取り付けたような高杯杯部で、体側部から口縁部にかけて丸味をもち、装飾性はまったくない。170は体部下端から脚部にかけて遺存するもので、小型高杯と思われるが、183～185のような脚付椀になる可能性もある。171は完存に近い小型高杯であるが、口縁部・脚部共大きく歪んでいる。

172は、口頸部を欠き体部のみ完存する瓶である。底部がわずか径３cm程の平坦面をなし、微妙に肩が張るものの、球形に近い体部である。肩部に１条の凹線をめぐらす。173・174は共に大型甕の口頸部である。173は、大きく外上方に開く頸部の上端をわずかに内湾させて口縁とし、上端面は水平に切っている。外面には３段の櫛描き波状文を描き、それぞれの下に２条・１条・１条の沈線を付加した文様帯をめぐらす。174は、頸部径47cmに及ぶ大型の甕頸部である。口縁部を欠くため全体はわからないが外面下半を無文で残し、上半に波状文と沈線を組み合わせた文様帯を２～３段めぐらすようである。

Ｓ17・Ｓ18は弥生時代の砥石と思われる。Ｓ17は砂岩製で大きく破損したものの２片が遺存するのみであるが、それでも重さ2,364ｇを測る。上面は使用痕で凹面をなし、反対面（下面）にも使用痕が見られる。Ｓ18は輝石安山岩を使用し、大きく二つに割れた１片と思われる。これも上下２面の使用が認められる。

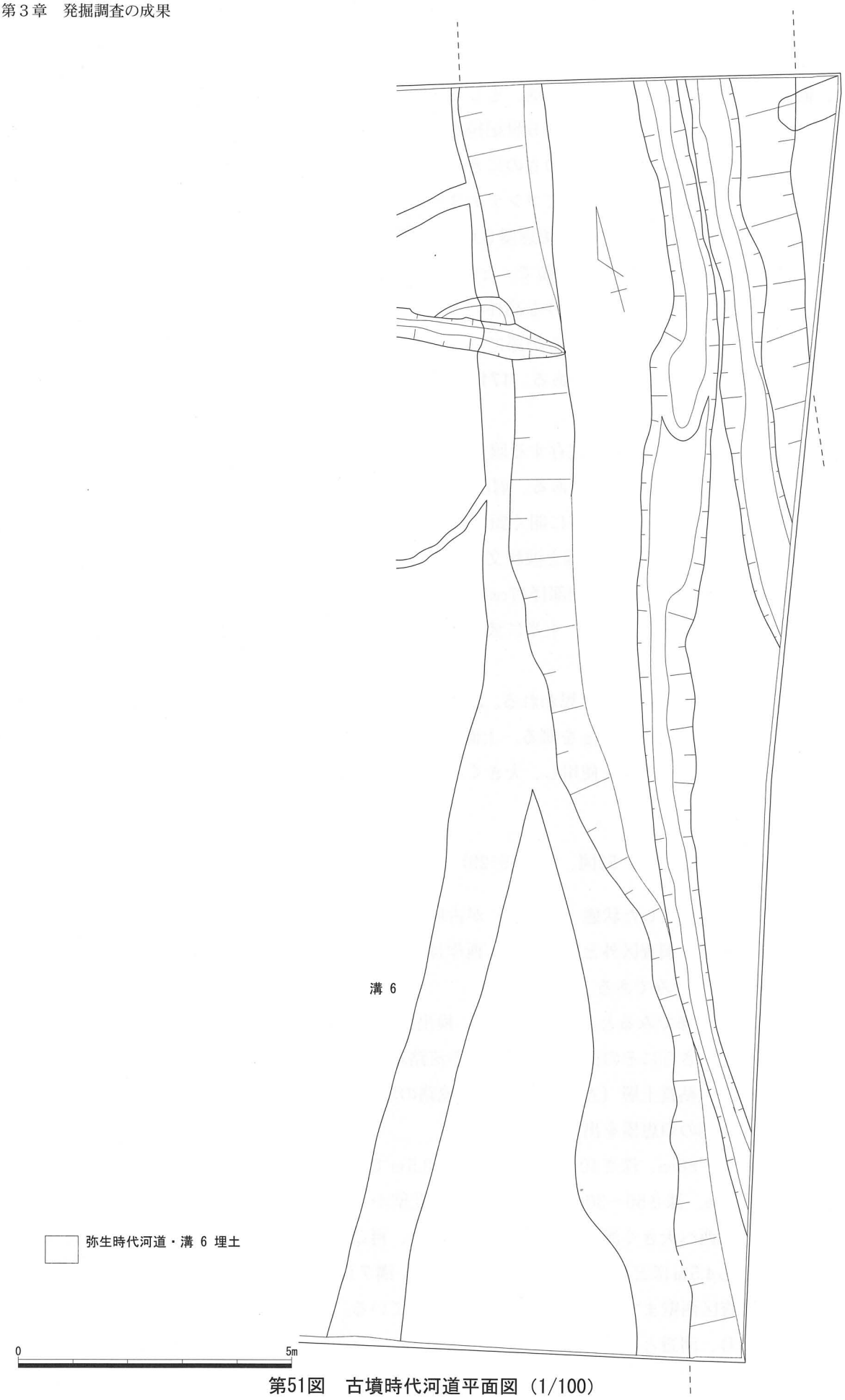
３　古墳時代河道（第51･52図、図版19･29）

Ａ・Ｂ層をすべて除去した状態（第51図）が古墳時代後期の川の姿であろう。ほぼ南北に流れるようであるが、南東部は調査区外となるので、西岸は北壁から南壁まで22.5ｍを検出したが、東岸は北部の5.3ｍを検出したのみである。

両岸を検出した北部でみると、幅5.5～６ｍ、検出面からの深さ30～40cmで比較的平坦な幅広の底（Ｃ層上面）があり、さらにその面を東西二筋の小流路が切り込んでいる。幅広の底までを全面的に埋めているのが黒褐色粘質土層（Ａ層）、２筋の小流路の埋土が灰色粘質土・灰色粘土（Ｂ層）であり、ともに古墳時代後期の須恵器を出土する。

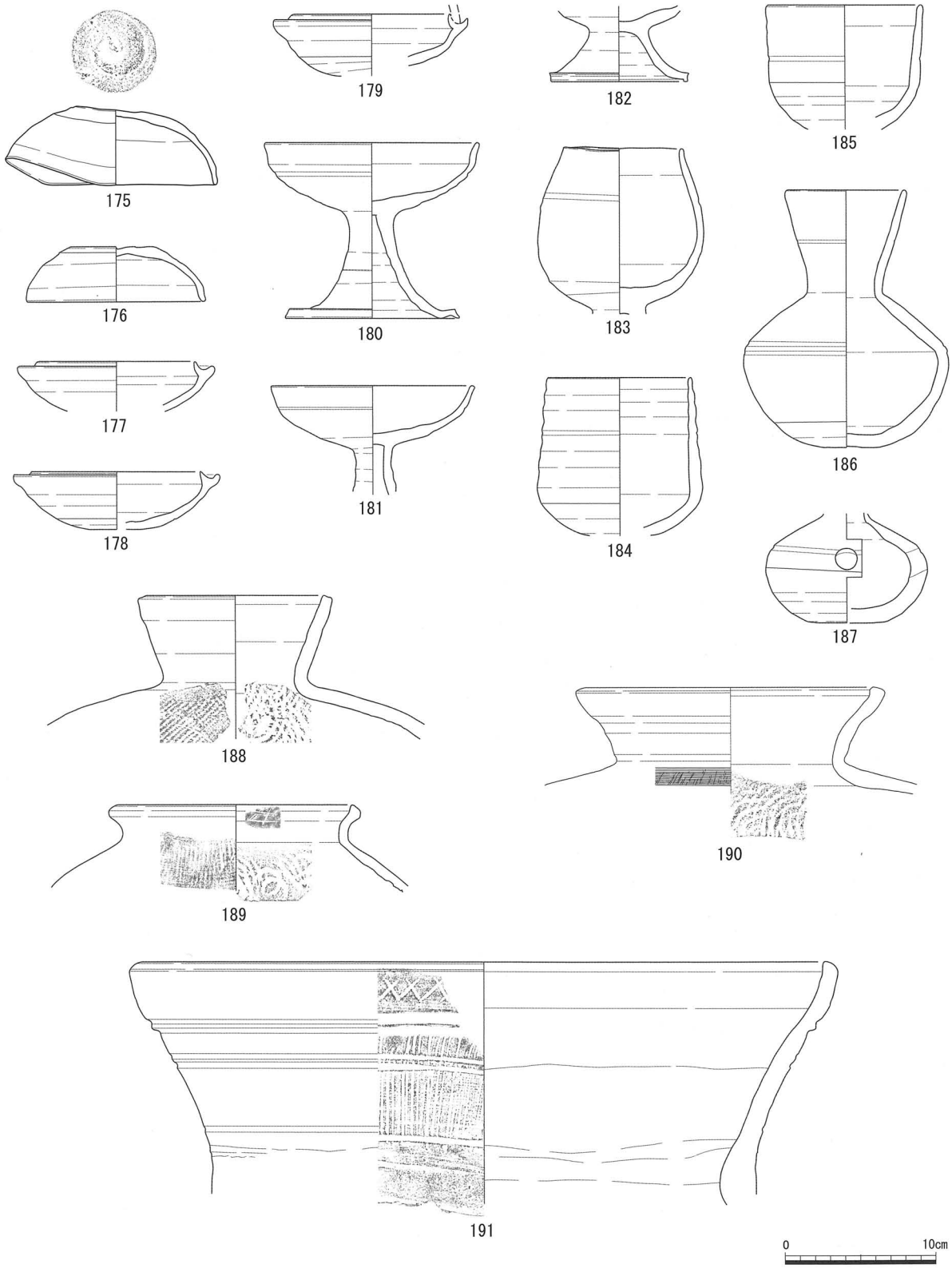
東流路は、幅70～80cm、深さ40～20cm、検出長10.5ｍで、河道内東端をほぼまっすぐ流れる。西流路は、幅50～100cm、深さ50～30cm、検出長20ｍ。北壁から６ｍほどは東流路の西側に寄り沿うように流れ、そこから西へ大きく湾曲して西岸に接した後、再び東へ離れてゆく。

一方、北壁から4.5ｍほどの西岸に溝７が取り付く。溝７は、須恵器を出土する古墳時代後期の溝で、ここから調査区西壁までほぼ直線で47ｍを検出している。埋土上層は古墳時代河道とほぼ同じ黒褐色粘質土であり、河道との接続部の切り合いはまったく確認できなかった。遺物の内容もほとんど同じであるので、同時進行的に埋没したものと考えてよいであろう。



第51図　古墳時代河道平面図（1/100）

このような検出状況から推測すると、弥生時代後期後半もしくは古墳時代初頭に他所へ移動していた川筋が、古墳時代後期になって調査地周辺に戻り、弥生時代河道埋土を削り込んで幅５～６ｍの河道を形成したものと思われる。その後再び川筋が移動したため流水量が減少し、川底をさらに削り込んで流れる２本の小流路となったのであろう。その小流路は、徐々に水量が減る過程で、灰色粘土・



第52図　古墳時代河道出土遺物（1/4）

粘質土（一部に灰色細砂・シルトーＢ層）を堆積しつつ埋まっていった。そして最後、水流が完全に無くなった後、河床湿地のような状態でやや時間をかけて上部に堆積したのが黒褐色粘質土層（Ａ層）なのであろう。

これらの、河道成立から埋没への過程は、Ａ・Ｂ層に含まれる遺物の内容からみて古墳時代後期、６世紀後半から７世紀前半の100年ほどのうちに進行し、７世紀後半以降は三度川が戻ることがなかったということになるであろう。

出土遺物は、弥生土器を除き古墳時代の須恵器だけでも実測可能なものが数十点にのぼるが、ここでは厳選して主な須恵器17点の図を掲げる。

175～179は杯類（身・蓋）である。175は、天井部に回転ヘラ切り痕を残すが、その外周に回転ヘラ削りを加えて丸みを持たせる。口径14.0cmを測るが、口縁が大きく歪んでいるため本来口径13cm程度のものであろう。176の蓋は口径11.7cmの小型品であるが、天井部が回転ヘラ切りと回転ヘラ削りで径5.5cm程度の明瞭な平坦面をなしており、逆転した杯身の可能性も充分ある。177～179の杯身は、いずれも立ち上がりが極めて低い。180・181はよく似た形態の高杯で、杯部底と口縁部の境界の凹線が特徴的である。182は小型高杯の脚であろう。

183～185は、口縁から体部にかけて筒形をなし丸い底部に低い脚部を取り付けた形態で、脚付椀と呼ばれるものである。体側部に凹線をめぐらすものが多く、183では口縁を大きく内傾させて口すぼまりにつくっている。186の長頸壺は本来脚を取り付けるタイプではないかと思われるが、回転ヘラ削りにより底部を丸く仕上げている。187の瓶は口頸部を遺存しないが、その下端遺存部でみると頸部下端径３cm程度でかなり細くつくっており、底部は回転ヘラ削りで径５cm程度の平底にする。

188は、胴径30数cmに及ぶ中型甕と同様の叩き成形の体部に、斜め外上方に開く小さな口頸部を取り付けた、ある種の大型壺である。189も胴径30数cm程度と思われるが、こちらは小さく外反する口縁をもつ甕で、口縁内面に「菱井桁」とも呼べるヘラ記号が観察される。焼成が不良で灰白色を呈する。190も中型甕で、大きく外反する頸部からわずかにＳ字カーブをなして口縁が立ち上がり、上端はわずかに外向きの端面をつくっている。191は口縁の遺存が少ないため頸部で径を求めたが、口径45cm、体部径は80cm程もあろうかと思われる大型甕の口頸部である。外上方に大きく開く頸部から若干内湾する口縁の上端に明瞭な端面をつくる。口縁外側面には、交差する斜線を連接した「連続×（バツ）文」とも呼びうる文様帯をめぐらし、その下は凹線と凸帯で頸部との境を画する。頸部外面は、横方向のカキ目調整痕の上に、太い４本を単位とする櫛状工具で連続縦線文を施し、さらにその上から上２条下１条の凹線文をめぐらしている。なお下端の破断面には、頸部と体部の接合痕跡（剥離痕）が明瞭に観察される。

第４節　古代・中世の遺構と遺物

１　古代・中世遺構の概要（第53図）

古代・中世の遺構も、弥生・古墳時代遺構と同一面で検出した。ただし、明瞭に古代の遺物を出土する遺構が検出された訳ではなく、平安時代にさかのぼる可能性を残す遺構を含むという程度の意味で「古代・中世の遺構」とした。

種類としては、掘立柱建物・柵囲い遺構と井戸があり、特徴的なものとして、井戸と水路を一体的に構築した「湧水・導水施設」と呼べるものがある。また掘立柱建物を構成する柱穴以外の多数のピットも、遺物の出土如何にかかわらずその多くは中世のものと思われる。

また今回の調査では、遺物量の極めて希薄な遺物包含層の人力掘削を断念し、弥生・古墳時代の遺構面（つまり地山面）に調査をしぼったため、結果的に弥生・古墳時代遺構と同時に同一面で多数の中世遺構を検出することとなった。ところが、後に詳しく触れるように、湧水・導水施設を構成する溝８の断面（調査区南壁断面）をみると、水田耕土直下、つまり遺物包含層の上面から掘り込まれていることが明らかであり、この遺構が中世前期にさかのぼる可能性が高いことから、ほぼ近い時期と考えられる他の掘立柱建物等も、本来の遺構面は包含層上面にあった可能性がたかい。あくまでも断面観察による結果論ではあるが、今後の周辺地での調査の際には留意する必要があろう。

２　掘立柱建物

掘立柱建物３（第54図、図版20-1）

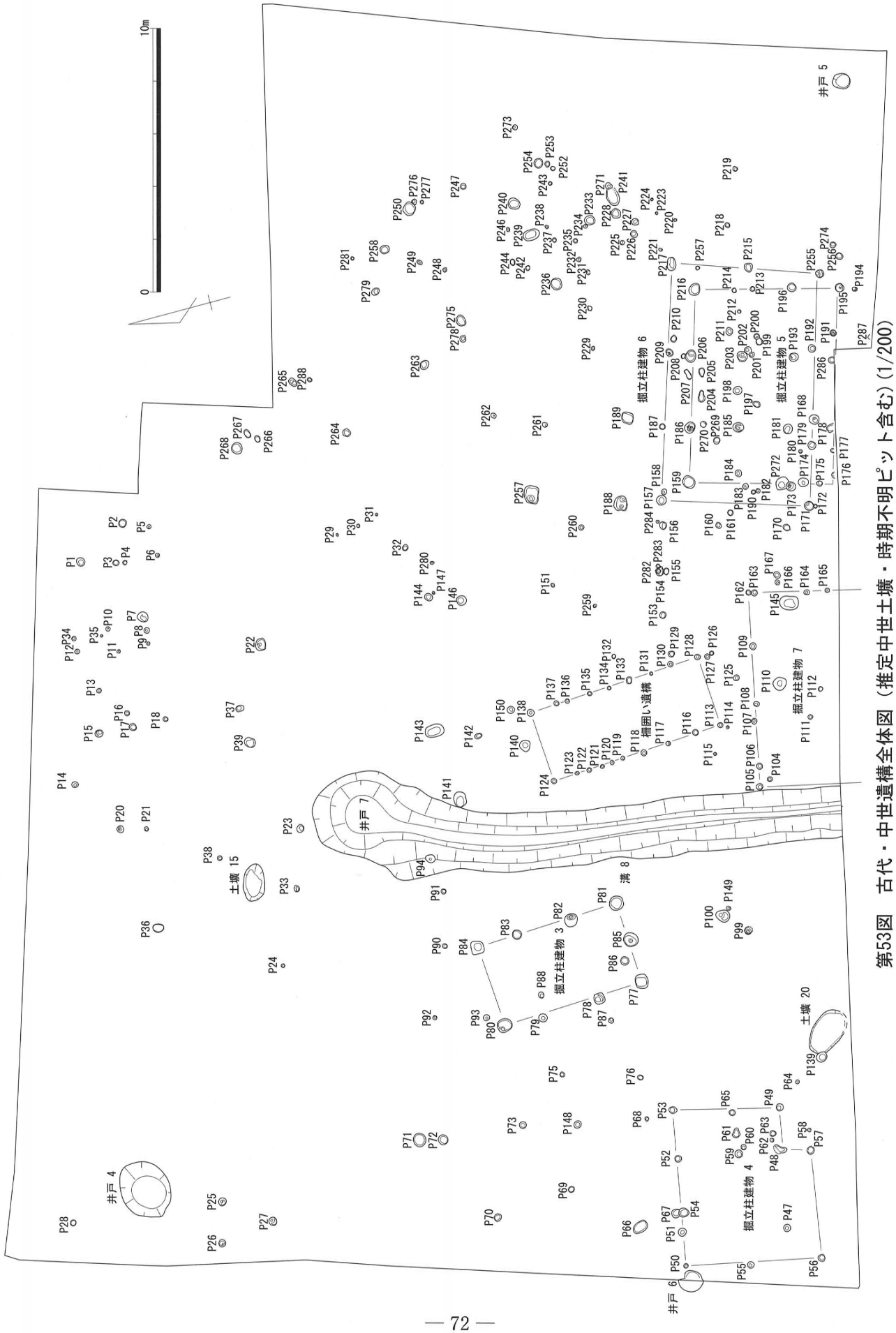
調査区の西部、溝８の西側で検出した。周辺にピットが少なく建物の重複も見られないので、きわめてわかりやすい検出状況である。Ｐ77～Ｐ85の９個の柱穴からなり、桁行３間梁行２間の建物であるが、北面梁行の中央柱穴は検出できなかった。桁行の主軸をＮ－３°－Ｗにとり、ほぼ南北方向を指向している。西面桁行Ｐ77とＰ80の心々距離は554㎝、南面梁行Ｐ77とＰ81の心々距離は330㎝、床面積17.93㎡を測る。

柱穴の平面形をみると、北端のＰ80・Ｐ84とＰ77・Ｐ78は隅丸方形に近いのに対し他はほぼ円形であり、規則性はない。そして、四隅と南面中央の柱穴は径50～60㎝、深さ30㎝前後（Ｐ81のみは深さ12㎝）とかなり大きく、桁行の北から二本目（Ｐ79・83）は東西共径36㎝、深さ10～20㎝と小さい。何らかの上屋構造に起因するものであろうか。

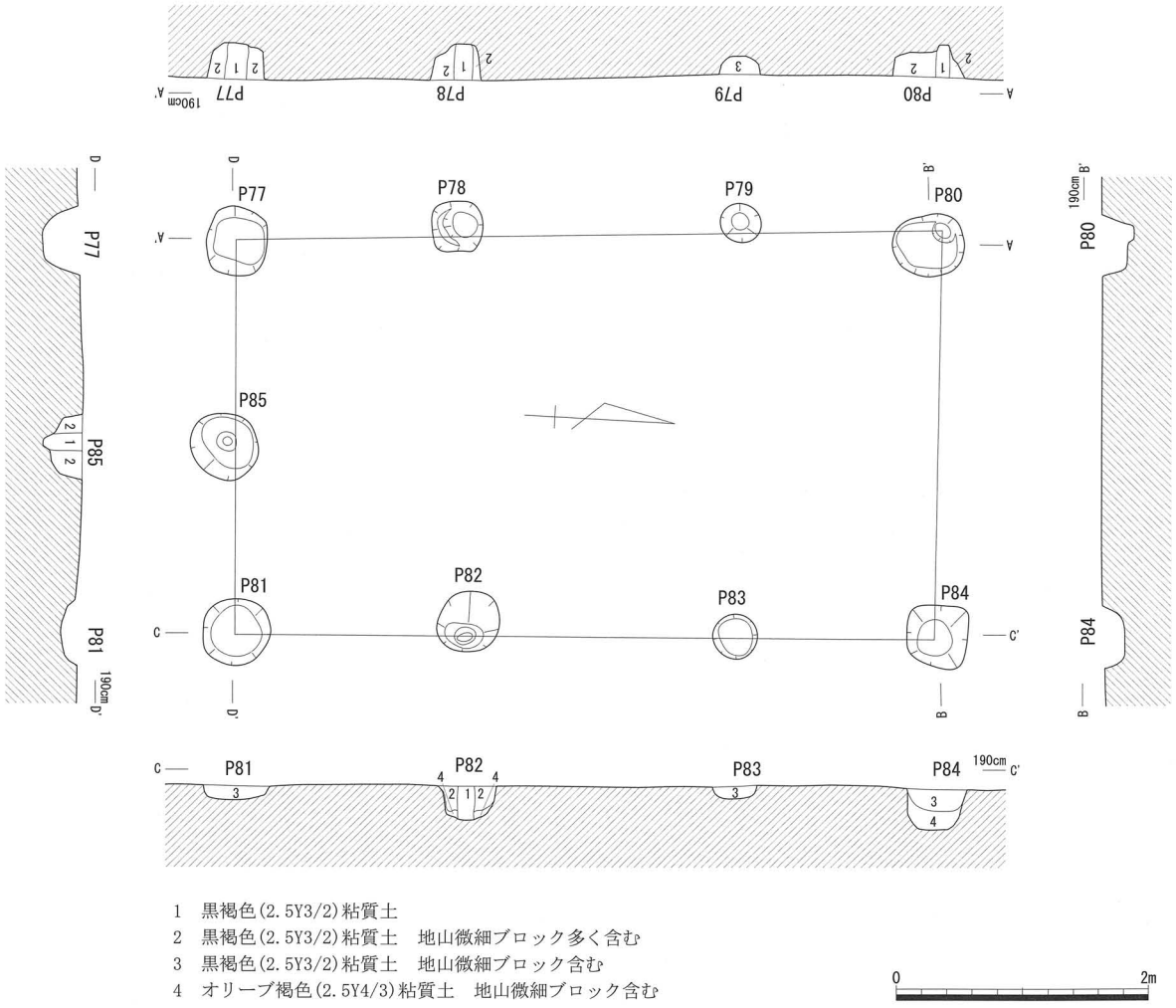
また、Ｐ77・78の二つの柱穴では、平面検出段階からかなり明瞭な柱痕がみられ、Ｐ80・82・85でも、平面では不明瞭であったが断面で柱痕を検出することができた。

埋土は、いずれも周辺ピットと大差ない暗灰黄色粘質土で、少量の土器小片を出土した。時期を詳細に推定できるほどのものはほとんどなかったが、須恵器片を少量含み、Ｐ77では土師質鍋の把手が出土している。

一方、この掘立柱建物３のもつ軸線方向も注目される。つまり、他の建物の軸線が磁北方向より10°ないし20°東に振った方向を基準とし、おおよそ当地域の条里に従っているのではないかとみられるのに対し、この建物は磁北方向からわずかに西へ振った方向を軸線としている。さらに、柱穴が他の建物より相対的に大きく、完全でないにせよ律令期の建物に多い方形を指向していることも注目に値



第53図　古代・中世遺構全体図（推定中世土壙・時期不明ピット含む）(1/200)



第54図　掘立柱建物３平・断面図（1/60）

しよう。

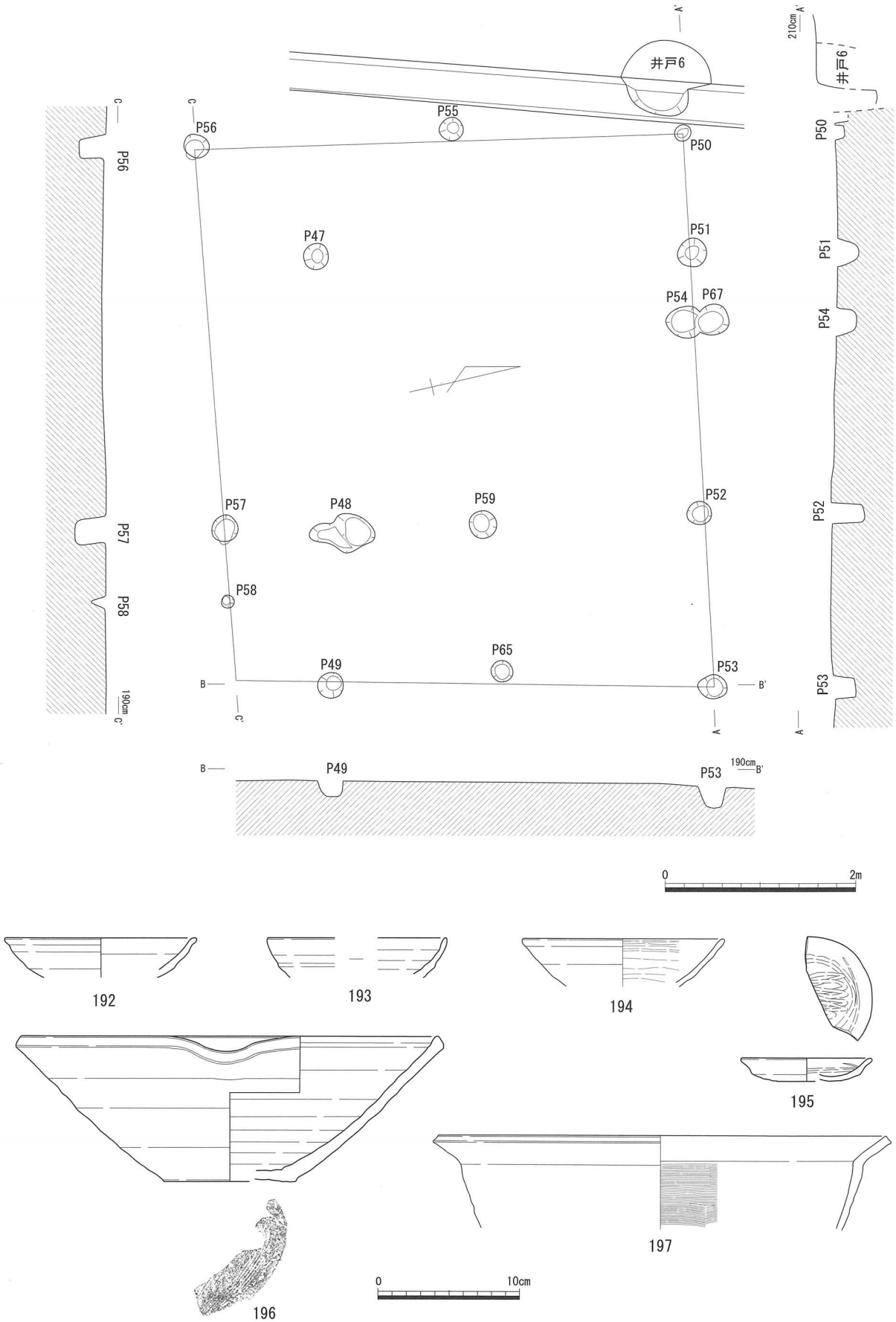
邑久郡域における条理の成立時期も不明ななかで、本建物の時期を条理と関連させて考えるのはあまりにも早計ではあるが、少なくとも当地域における中世的土地開発以前（たとえば平安中後期～鎌倉初期）のものという言い方はできるかもしれない。

掘立柱建物４（第55図、図版20-2･21-1･30-1）

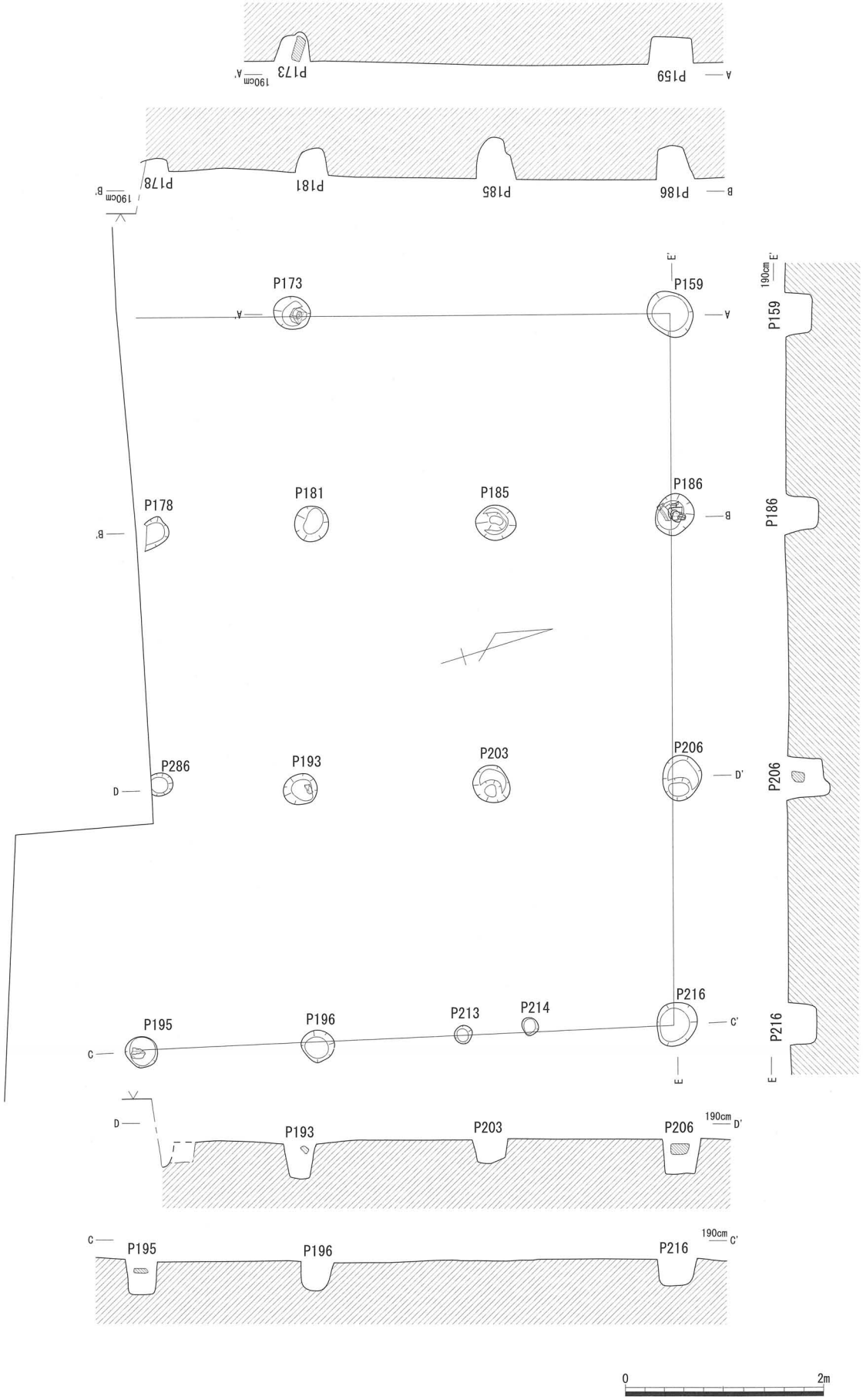
調査区の南西隅、掘立柱建物１と重複する位置で検出した。Ｐ47～53・55～57・59・65の12個の柱穴からなり、全体としては桁行３間・梁行３間の建物であるが、南東隅の柱穴がないため、桁行３間・梁行２間の南面西２間分に庇が付くと考えたほうがよいかもしれない。

北面桁行（Ｐ50－Ｐ53、３間分）595㎝、東面梁行（Ｐ53－Ｐ49、２間分）404㎝、西面梁行（Ｐ50－Ｐ56、３間分）518㎝を測り、桁行主軸はＮ-80° -Ｗ。およそ西北西－東南東に棟をもつ建物である。柱穴の寸法は径・深さとも20数㎝を前後するものが多く、建物規模の割には小さい。埋土は暗黄灰色粘質土で、掘立柱建物１とほぼ同じである。ちなみに、歪な平面形のＰ48は、掘立柱建物柱１と同４の柱穴が合体してしまっているものと思われる。

遺物は、Ｐ47・51・52・56・57・59等で土師器椀・皿（糸切）や、備前系須恵器椀、畿内系瓦器椀・皿、東播系須恵器片口鉢、および土師器鍋が出土しており、13世紀頃の建物ではないかと思われる。



第55図　掘立柱建物４平・断面図（1/60）・出土遺物（1/4）



第56図 掘立柱建物５平・断面図（1：60）

192（P52）は吉備系土師器椀の小片である。白色系の色調で若干砂粒を含む。**193**（P59）備前系須恵器の椀である。内外面ともロクロナデの痕跡が著しい。**194**（P60）は畿内産（和泉型）瓦器椀である。口縁内端面と体部内面に粗くらせん状磨き（暗文）がみられ、焼成良好である。**195**（P57）は畿内産（和泉型）瓦器小皿である。器形と成形法は基本的に同時期の畿内の土師器皿と同じで、外底部の指頭痕と口縁外面のヨコナデ痕が著しい。見込み部にジグザグ状、口縁内面にラセン状の暗文が施される。**196**（P54）は東播系（神出・魚住産）須恵器片口鉢である。口縁部の肥厚は少なく、体部内外面と外底面の糸切り痕が著しい。**197**（P57）は、半球形の体部と「く」の字に屈曲して開く口縁が特徴の土師器鍋である。遺存してはいないがおそらく三足が付くと思われる。

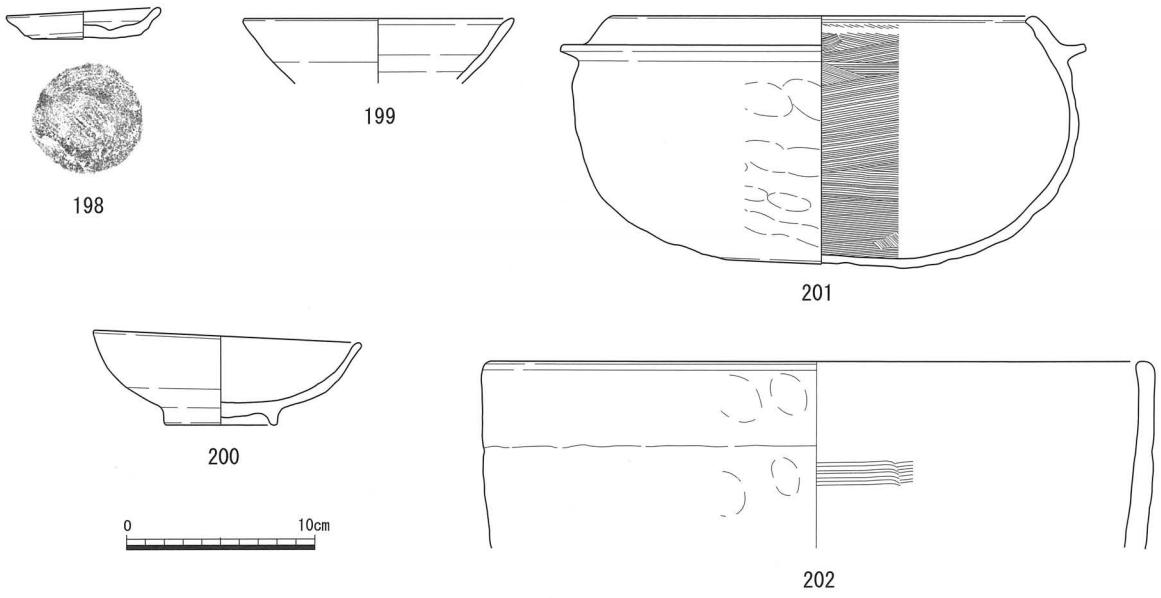
掘立柱建物５（第56･57図、図版20-3･21-2･30-2）

調査区南東部、自然河道や溝６の西側、弥生時代の落ち込み埋土上を含むあたりにも多数のピットを検出した。現地で検討を重ね、整理した結果、中世の掘立柱建物跡が新旧２棟重なっていると判断するにいたった。そのうち、P159・173・178・181・183・185・186・193・195・196・203・206・216・286の14個の柱穴からなるのが掘立柱建物５である。

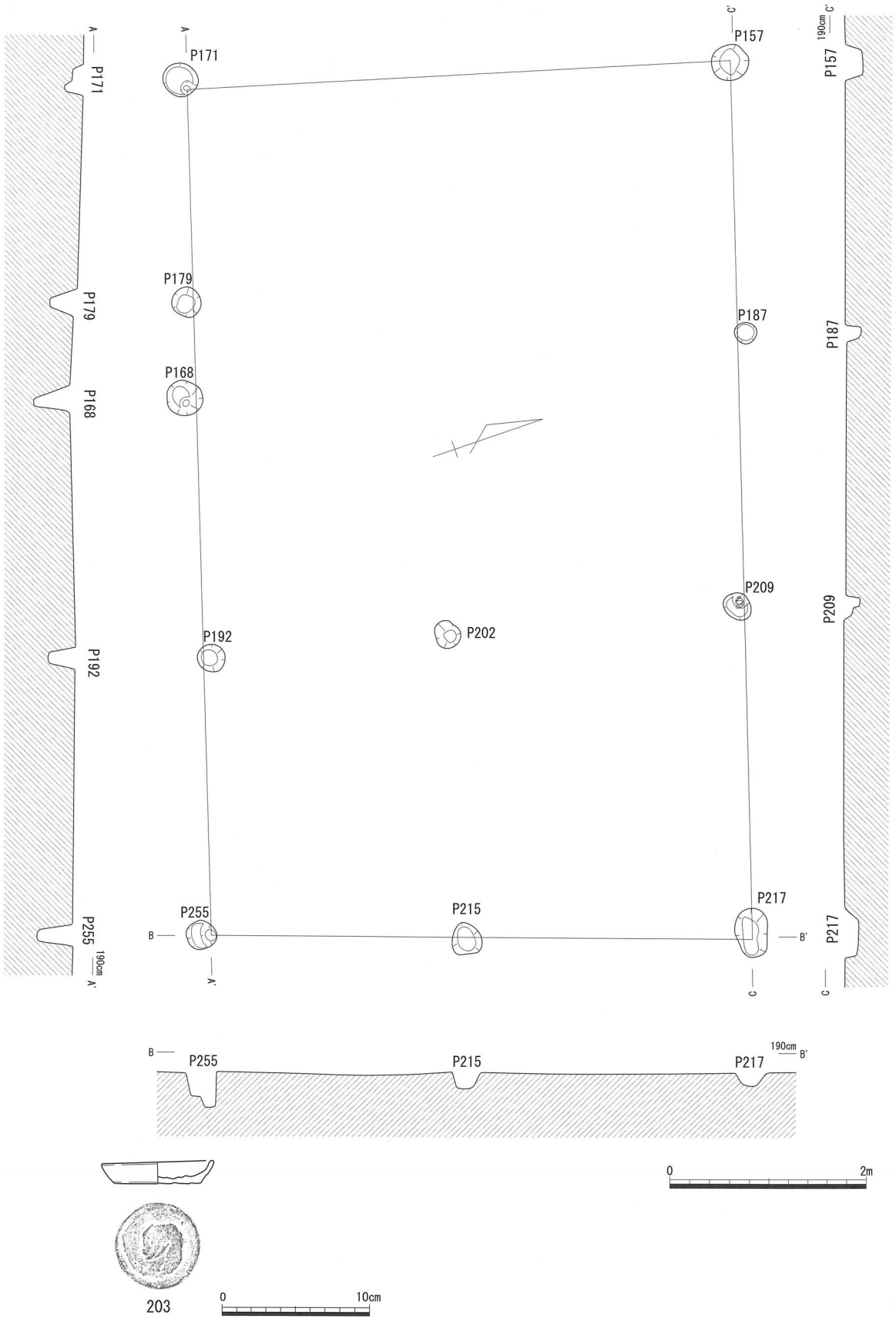
桁行３間・梁行３間の建物で、桁行軸をN-73°-Wにとり、およそ西北西－東南東に棟をもつ。ただし、南側が調査区外となるため、南へもう２～３間延びて北北東－南南西に棟を持つ大形建物になる可能性もないではない。

北面桁行（P159－P216）730㎝、東面梁行（P216－P195）650㎝、床面積47.45㎡を測る。柱穴は、円形もしくは不整円形で径30～40㎝前後、深さも25～40㎝程度。埋土はほとんどが暗灰黄色粘質土である。梁行東端柱列のうち、北から２個目の柱穴が存在せず、その位置（P196とP216の中間ライン上）に、径20㎝に満たないP213・P214がある。あるいは妻側に設けた入口（何らかの扉）の存在を示しているのかもしれない。

遺物は、多くの柱穴で弥生土器小片とともに中世の須恵器・土師器・瓦器片が出土しているが、特にP186では土師器椀・土師器糸切小皿（ともに完形）と瓦質土器鍔付鍋（復元完形）がまとまって



第57図　掘立柱建物５出土遺物（1/4）



第58図　掘立柱建物６平・断面図（1/60）・出土遺物（1/4）

検出されている。これらの遺物から、掘立柱建物５はおよそ13世紀頃の建物と思われる。

また、Ｐ173・193・195では、拳大よりやや大きい角礫が検出された。おそらく柱根を安定させるため意図的に投入されたものであろう。

198（P186）はロクロ成形の完存小皿である。外底面は、糸切りに弱く回転ヘラ削りを加えているようで、さらに板目圧痕らしき痕跡も見られる。**199**（P216）は、備前系須恵器の杯（椀）と思われる。内外面のロクロ成形痕が著しい。**200**（P186）は吉備系土師器椀であろう。器表の磨滅により成形・調整の詳細は不明である。外底部には比較的高いしっかりした高台が貼り付けられる。

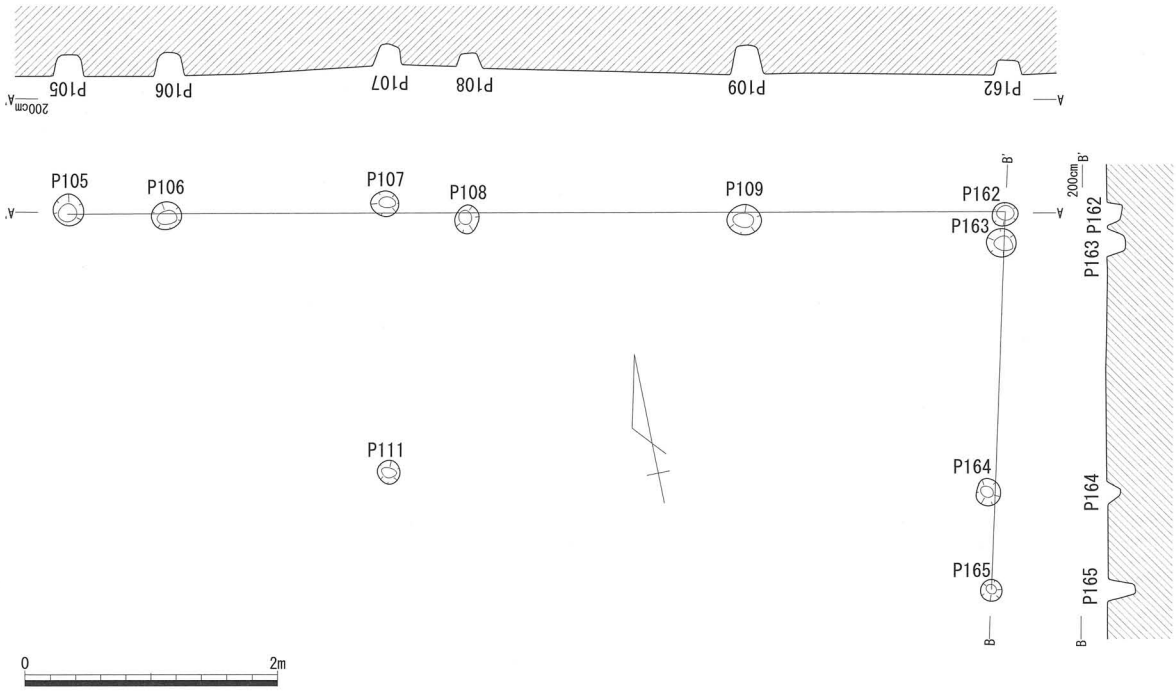
201（P186）は、京都系（おそらく楠葉産）瓦質土器鍔付鍋である。口縁は大きく内傾して内向する小さな端面をつくり、外面側の口縁直下にはやや上向きの小さな鍔をめぐらす。体部は扁球形で、内面に細かなハケ目調整、外面には顕著な指頭成形痕が残る。成形・調整・焼製とも良好でかなりの優品である。**202**（P203）は、口径34㎝を測る土師器の大型品であるが、直立する口縁部のみのため全形不明である。おそらく、体部下半から底部にかけて丸く成形した鍋もしくは鉢であろう。

掘立柱建物６（第58図、図版20-3･21-3･30-3）

調査区南東部､掘立柱建物５と重複する位置で検出した。Ｐ157・168・171・179・187・192・202・209・215・217・255の11個の柱穴からなり、桁行３間梁行２間の建物で桁行軸をＮ-73° -Ｗにとるが、南が調査区外となるため、南へもう１間延びて３間×３間になる可能性もある。

北面桁行900㎝、東面梁行580㎝、１間あたりの柱間が280～300㎝、床面積62.2㎡にもなる。また、桁行南面西から２個目の柱穴がなく､その位置（Ｐ171とＰ192の中間ライン上）にＰ168とＰ179がある。やはり平側に設けた入口であろうか。

柱穴の平面形は円形もしくは不整円形で、径25～30㎝と、建物規模と柱間の広さの割には小さい。埋土は、周辺ピット同じ暗灰黄色粘質土である。遺物はＰ209から土師器小皿（糸切）完形1点大形土



第59図　掘立柱建物７平・断面図（1/60）

師器鍋片を検出したほか、Ｐ192・202を始めとする多くの柱穴から、中世の吉備系土師器椀・土師器小皿（糸切）や鍋、備前系須恵器椀・畿内系瓦器椀等の小片が出土した。

203（P209）は、ロクロ成形、外底面は回転ヘラ切りの完存小皿で、にぶい黄橙色を呈する。

掘立柱建物７（第59図）

調査区南壁沿い中央部、溝８の東側で検出した。Ｐ105～109・162が東西方向に一列で並び、Ｐ162から南へ直行方向にＰ164・165、Ｐ107から南直行方向にＰ111がある。それらから、一応桁行３間梁行２間の建物を想定した。

北面桁行739ｍｃｍ、柱間は中央（Ｐ107－Ｐ109）が最長で283ｃｍを測り、桁行軸はＮ-78°-Ｗとなる。また、Ｐ162－Ｐ164間の柱間が222ｃｍであるのでこれを基準に考えると、２間分の桁行は444ｃｍ、床面積は32.81㎡と推定できる。柱穴はすべて円形、径は20～20数ｃｍ程度と小さく、埋土は暗黄灰色である。

遺物は極めて少なく、中世の土師器・須恵器等の小片少量を検出したのみである。

３　柵囲い遺構

柵囲い遺構（第60図、図版22-1）

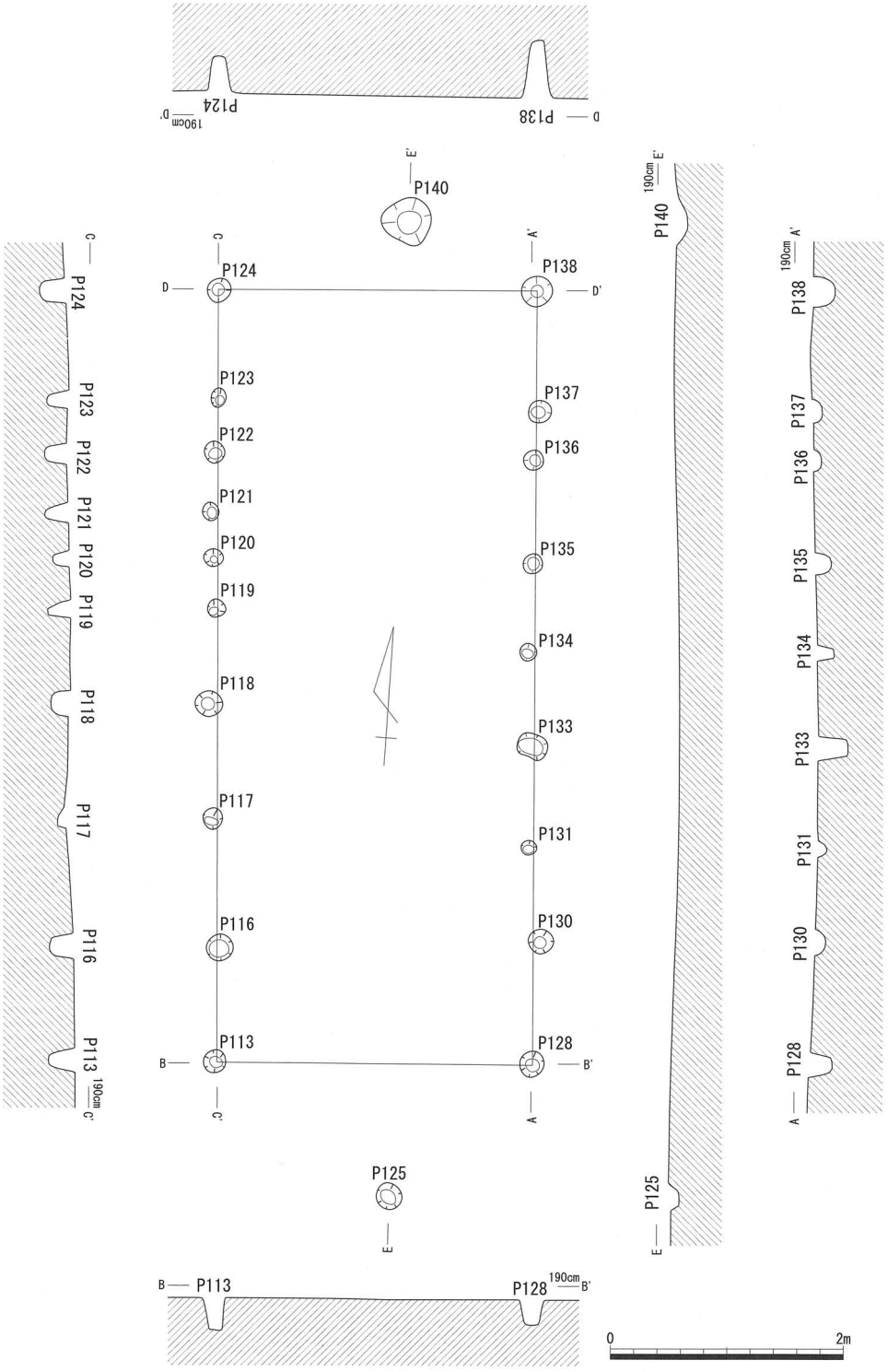
掘立柱建物７の北側、溝８の東に、径10数ｃｍから20ｃｍ前後の小ピットが２列連なっている。西列がＰ113・116～124の10個で全長665ｃｍ。東列がＰ128・130・131・133～138の９個で全長664ｃｍを測る。両列の長さはほぼ同じで平行に並び、軸線はＮ-５°-Ｗにとっている。ピットの間隔は一定していないが、西列が41～110ｃｍ、東列が45～107ｃｍ、両列の間隔は275ｃｍ程である。

このピット列を一応「柵」と呼んだが、通常のイメージの柵とするには全長が短く、２列平行の意味を説明しきれない。一方では、このピット列の南北両端をそれぞれつなぐと長大な長方形となり、なんらかの簡易な建物というふうに見えなくもない。しかしながら、簡易とはいえ建物として屋根を想定し、ピットを柱穴とするにはあまりに小さすぎる。

種々検討した結果、何らかの目的をもった「柵囲い」ではないかとの考えにいたった。当然のことながら、この小ピット列は、「掘立柱」ではなく「打ち込み杭」であろう。これを柵状に並べて構築し、長方形の内部に何かを囲い込むものではなかったか。あるいは、南北両短辺側にやや離れるＰ125とＰ140も合わせて、長六角形の平面構造であった可能性もあり、さらに周辺のＰ114・115・126・127・129・132・150も、補強杭や扉構造材として打たれたかもしれない。

いずれにせよ、それ以上のことは「想像」の域を出ないので差し控えるが、とりあえずこの遺構について、単なる「柵」ではなく、杭列構造による小規模な「柵囲い遺構」と呼んでおきたい。その用途・目的として、たとえば「養鶏施設」のようなものを考えてみたが、どうであろうか。

なお、出土遺物がほとんどないので、遺構の時期についてはなんとも言えないが、２列平行のピット列の軸線方向は、掘立柱建物３に極めて近い。他の弥生時代や中世の建物と全く方向性を異にすることを重視すれば、掘立柱建物３と同じ平安末くらいまではさかのぼらせてよいのではなかろうか。



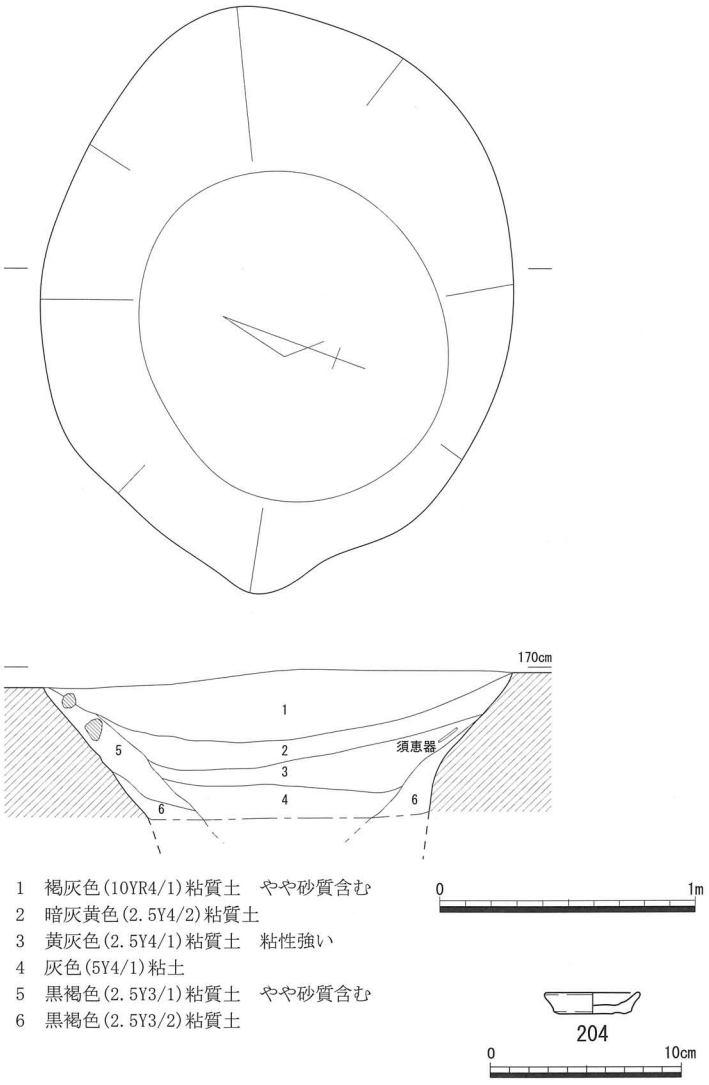
第60図　柵囲い遺構平・断面図（1/60）

４　井戸

井戸４（第61図、図版22-2･30-5）

調査区北西部で検出した。素掘りの大型井戸で平面楕円形を呈し、長径233㎝、短径184㎝を測る。検出面から65㎝、標高1.05ｍ付近まで掘り下げ断面観察を行っているが、それ以下は湧水が多く調査を断念した。最終的には遺物確認の意味も含めて検出面下120㎝程度まで掘り下げたが、厚い青灰色粘土と湧水により明瞭な底を確認するにいたっていない。

図化できた断面を観察すると、両側の壁沿いには初期の流入土と思われる黒褐色粘質土があり、中央深部は灰色（青灰色）粘土、検出面から-50㎝より上は褐灰色・暗灰黄色等の粘質土が厚く堆積している。また壁面傾斜は、検出面から50㎝前後を境として、上は約50度、下は80度前後（ほぼ垂直）となり、下部は直径1.1ｍ程度でまっすぐ円筒状に掘られているようである。さらに、下層・最下層の灰色粘土層内に、石組や木製・土器製等の溜枡や井筒の存在も考慮したが、確認できなかった。



第61図　井戸４平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）

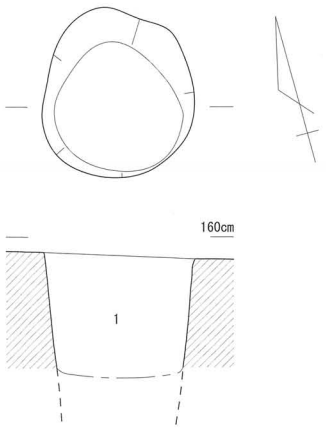
遺物は、褐灰色・暗黄灰色系粘質土より土器小片ではあるが比較的多く出土している。弥生土器は少なく、ほとんどが中世の須恵器・土師器で、近世の陶磁器類はまったくみられない。図示しえたのは1点のみであるが、ほかに吉備系土師器椀・備前系須恵器椀・畿内系瓦器椀・土師器皿・土師器鍋・須恵器甕があり、畿内産瓦質土器三足釜脚も1点確認している。

出土遺物から井戸の機能していた時期を特定するのは難しいが、遺物内容は掘立柱建物４・５・６の柱穴出土のものに近い。およそ13世紀頃のものと考えてよいであろう。

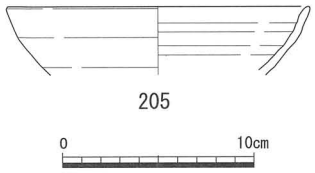
204はロクロ成形の土師器小皿である。外底面には回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

井戸５（第62図）

調査区南東隅、自然河道上に検出した。弥生時代河道埋土を切り込む小型井戸で、平面は長径65㎝短径55㎝の不整円形である。検出面から約20㎝より下は、径10～20㎝程度の円礫・角礫が大量に投入されていた。礫とともに数点の陶磁器が出土しており、明瞭に時期のわかるものはなかったが、中世後期のものではないかと思われる。



第62図　井戸５平・断面図
(1/30)



第63図　井戸６出土遺物
(1/4)

井戸６（第63図、図版22-3･30-4）

調査区南西部、掘立柱建物１の北西角柱穴Ｐ43を切り込み、調査区外周側溝・外周壁から調査区外にかけて検出した。

Ⅰ②区西外周壁精査過程で、水田耕土直下から掘り込まれた大きなピットの存在を確認し、精査したところ側溝底面よりさらに下に続くことがわかった。そこで側溝部分を掘り下げると、径60㎝程度で垂直に掘り込まれた小型素掘り井戸ではないかとの認識にいたった。しかし遺構の西半は調査区外となる上、東側は掘立柱建物１のＰ43が接しているため、側溝底から約60㎝（標高1.0ｍ前後）で掘り下げを断念した。

ちなみに埋土は、上部が井戸４上層類似の褐灰色～黄灰色粘質土、下部は灰色粘土である。遺物は微量の土師器片を検出したのみである。一方、調査区外の部分では、水田耕土直下の面を若干掘り拡げ平面形状の確認を試みたところ、径96㎝の半円形の輪郭を確認した。

これらの所見を整理すると、本遺構は水田耕土直下（つまり包含層上面）から掘り込まれた小型の素掘り井戸で、掘り込み面で径90～100㎝、下部では径50～60㎝、深さは掘り込み面から140～150㎝（推定）に達すると思われる。

本遺構については、掘り込み面が耕土直下であることと、積極的に中世遺構と判断するだけの遺物を検出しなかったため、調査の中では近世の井戸と断定し、写真記録のみで個別遺構図（平面・断面）作成はあえてしなかった。しかし、少量の出土遺物を検討したところ確実に近世に降るものは見られず、逆に小片ながら中世の須恵器椀を確認した。遺物量が少ないので根拠としては弱いが、一応中世の井戸と結論づけておきたい。

一方では、湧水・導水施設の溝８が遺物から明瞭に中世前半期の築造と考えられるにもかかわらず、掘り込み面が水田耕土直下（包含層上面）であることは次項で述べる。さらには、上部埋土が井戸４・７および溝８の上部埋土に類似することからも、この井戸６が中世のものであることは充分考えられる。

205は、備前系須恵器の椀と思われる。内外面にロクロ成形痕が著しい。

５　湧水・導水施設

井戸７・溝８（第64･65･66図、図版23･30-6）

調査区の中央やや西より、竪穴住居２の西、溝７の南にある大きな土壙状遺構が井戸７、そこから南へまっすぐ伸びる溝が溝８である。

Ⅰ①区の調査の過程で、南中央に大きな土壙状遺構を検出し、中世の大型井戸かとの仮定のもと調査区を南へ拡張して平面全形の検出に努めた。しかし、南側の肩をどうしても確認することができず、この段階では南北５ｍ以上にもなる大土壙か、もしくは土壙から南へ溝が伸びているのか、いくつか

の可能性を考えつつも、遺構の形状・規模・性格とも判断がつかなかった。

立体的な構造についても、土壙中央に東西方向のベルトを残し掘り下げたが、検出面から約１ｍ、標高1.1ｍ付近より湧水が多く、完掘を断念せざるをえなかった。このベルト部分で土壙外周壁を見ると、約50°の傾斜角をもつすり鉢状である。また埋土は、検出面下45㎝前後以下は黄灰色・灰色粘土が厚く（25㎝以上）、その上は暗灰黄色・黄灰色粘質土が堆積している。全体として大きなレンズ堆積であり、時間をかけて徐々に埋まったかと思える。

続いてⅠ②区の調査に入ると、重機掘削直後の遺構面検出段階で、調査区中央を南北に貫通する幅２ｍの溝状遺構が現われた。まさしく先の大土壙から南に続く溝であり、大土壙と溝が一つのセットとして機能したものとの考えにいたった。

この溝（溝８）については、土層観察用ベルトを２か所残して掘り下げたが、むしろ溝がほぼ直交し現地表までの土層が観察できる調査区南壁の方が都合よく、明瞭なＶ字を呈する溝の断面構造もよくわかる（第65図）。まず、溝の掘り込み面は検出面より明らかに上で、水田耕土直下（標高1.95ｍ付近）であり、この面では幅250㎝に達する。東西両壁面の傾斜は、およそ３段階に分けてきつくなるようで、上部は約30度、中ほどは約45度、深部は約75度にもなる。深さは、ここも湧水のため最終確認ができていないが、壁際の一部を排水しながら掘り進めたところ、掘り込み面から125㎝（検出面から110㎝、標高0.75ｍ）付近に底があることがわかった。底での溝幅は約30㎝にすぎず、明らかに水を流すことを目的とした断面構造と言えるかもしれない。またこの部分での埋土は大きく三層に分かれ、掘り込み面から約90㎝（標高1.0ｍ付近）より下は顕著な灰色粘土、その上の掘り込み面から40～50㎝程度までは地山微細ブロックを含む暗灰黄色粘質土、最も上は黄褐系粘質土である。

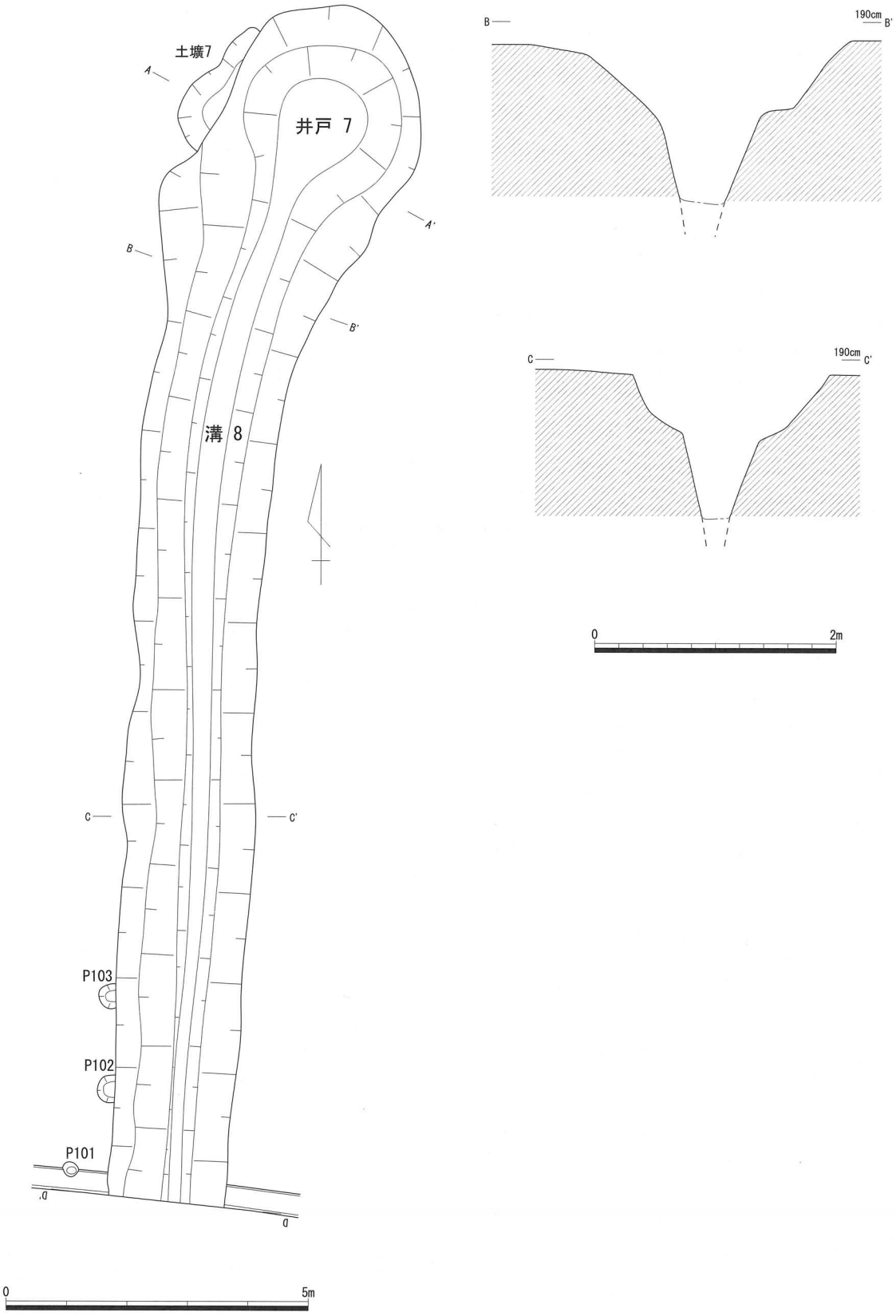
ちなみに、中層の暗黄灰色粘質土までは全体を掘り下げ、最下層にあたる灰色粘土層の掘り下げは三か所のトレンチ部に限った。しかしながら、南壁部での埋土・断面構造とほとんど同じ状態で北へつづき、大土壙（井戸７）へそのまま接続していることを確認することができた。

結局、大土壙（井戸７）は直径3.5ｍに達し、南南西方向へ開口して溝８につながるという全体形状が判明した。残念ながら底まで完掘・確認していないので、推定の域を出ないうらみも残すが、断面擂鉢形の底の深さは、掘り込み面から1ｍ以上（1.2ｍ程度、標高0,7ｍ付近か？）あったと思われる。明らかに湧水面まで掘りぬいていることから、「井戸」としての意味をもつ遺構であることは間違いないが、通常の「汲み上げる」ためのものではなく、湧水させた水を深い溝（溝８）により南方へ「常時導水」することを目的としたものと理解することができよう。

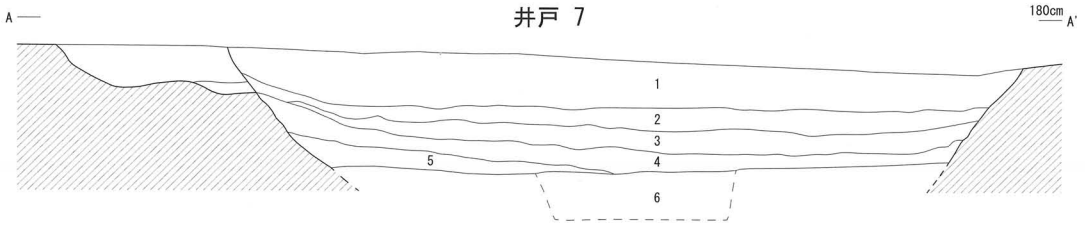
溝８は、大土壙（井戸７）に取り付く部分ではやや西に振っているが、すぐに微妙な湾曲で南に向かい、南壁から約13ｍあたりより南はほぼ直線で南南西（Ｎ－９°－Ｅ）へ流れる。

出土遺物は、両遺構とも層位的な分離ができていない問題はあるが、主として大土壙（井戸７）の上・中層（粘土層より上）でかなり多くを検出している。古いものでは古代の瓦・須恵器杯もあるが、主体は鎌倉・南北朝期（13～14世紀頃）の土師器・須恵器・瓦器の椀・皿や須恵器甕・鉢、土師器鍋、瓦質土器三足釜等、および微量の中国製青磁・白磁碗であり、備前焼擂鉢は若干含むものの中世後期（15～16世紀）以降の遺物はまったくみられない。

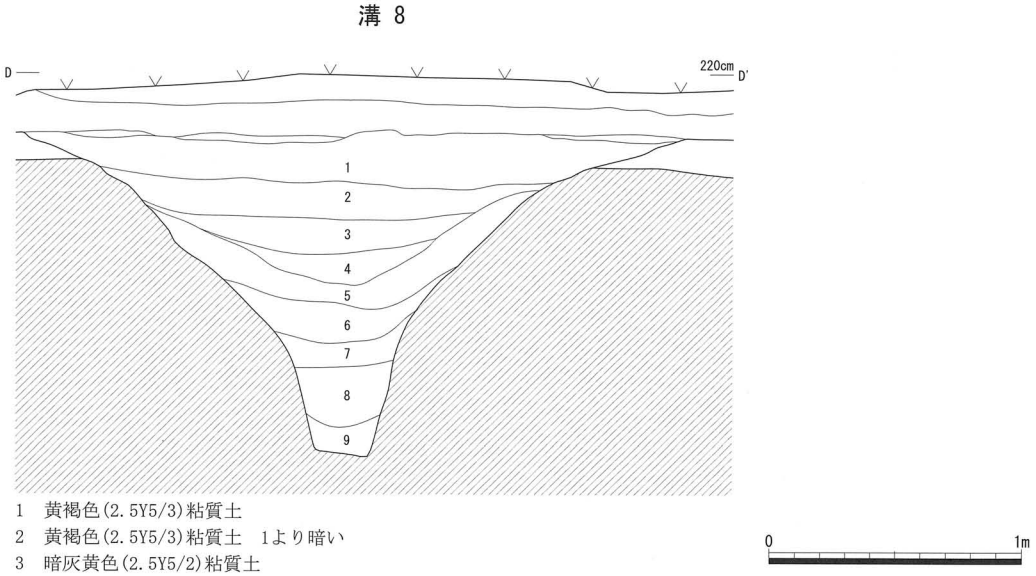
206は吉備系土師器椀で、灰白色を呈する。207は畿内産瓦器椀（和泉型）である。内底面の暗文は斜格子状とみられ、体部内面の磨き調整も比較的密に施されている。208は、高台部のみの破片であるが龍泉窯系青磁碗である。高台外面と内底面に青緑色の青磁釉が厚く施される。209は備前焼擂鉢



第64図　井戸７・溝８平・断面図（1/100・1/50）



1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　炭化物含む　1よりやや暗い
3　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
4　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土　地山微細ブロック含む
5　黄灰色(2.5Y5/1)粘土
6　灰色(5Y4/1)粘土

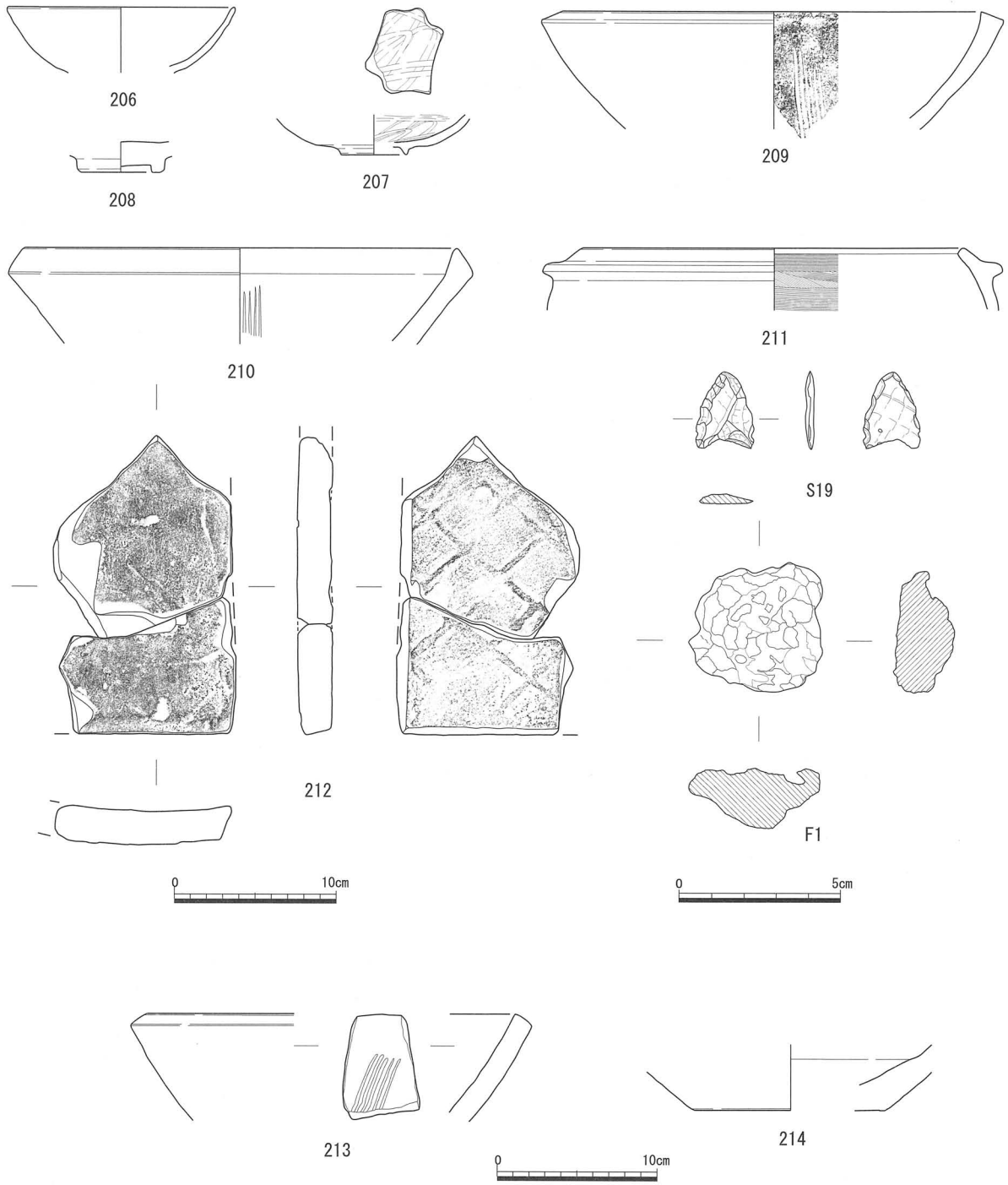


1　黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
2　黄褐色(2.5Y5/3)粘質土　1より暗い
3　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土　炭化物含む　3より暗い
5　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
6　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土　地山微細ブロック含む
7　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土　粘性強い　6より暗い
8　灰色(5Y4/1)粘土
9　灰色(7.5Y4/1)粘土

第65図　井戸７・溝８土層断面図（1/30）

である。わずかに内湾しつつ開く口縁部をやや厚くし、内外面に直交する端面をつくっている。内面の摺り目は６本単位の櫛目が１単位みられるのみで、かなり粗く施されているようである。210も備前焼擂鉢であるが、口縁上端をやや上に肥厚させている。209より焼成がやや不良で全体に灰白色を呈する。共に真壁編年のⅢ期に属するものであろう。211は、201と同様の京都系（おそらく楠葉産）瓦質土器鍔付鍋である。大きく内傾する口縁部の外面直下に小さく鍔をめぐらしたもので、鍔はやや上向きの印象すらある。体部内面は細かなハケ目調整、外面は指頭成形痕が著しい。この種の形態の鍋には、体側部に三足がつく可能性がたかい。

212は、凸面に大きな格子目の叩き痕をもつ平瓦である。本遺跡の性格から見て瓦の出土は極めて違和感があるが、実は直線距離で西400ｍに、鎌倉時代まで存在したと推定される半田廃寺跡があり、これと類似の格子叩きの平瓦も採集されている。



第66図　井戸７・溝８出土遺物（1/4･1/2）

S19は、弥生時代のサヌカイト製の凹基式石鏃である。Ｆ１は鉄滓片である。小形の椀型滓とみられ、周辺に鍛冶炉が存在したのかもしれない。

213は備前焼擂鉢小片である。すり目の状態等209に類似するが、口縁部の肥厚はほとんどない。214は、どちらかというと瓦質土器に近い焼成の鉢の底部である。すり目はなく、砂粒をほとんど含まない胎土から東播系とは考え難い。亀山窯産の可能性が考えられる。

206～212・S19・Ｆ１は井戸７、213・214は溝８より出土した。

６　ピット

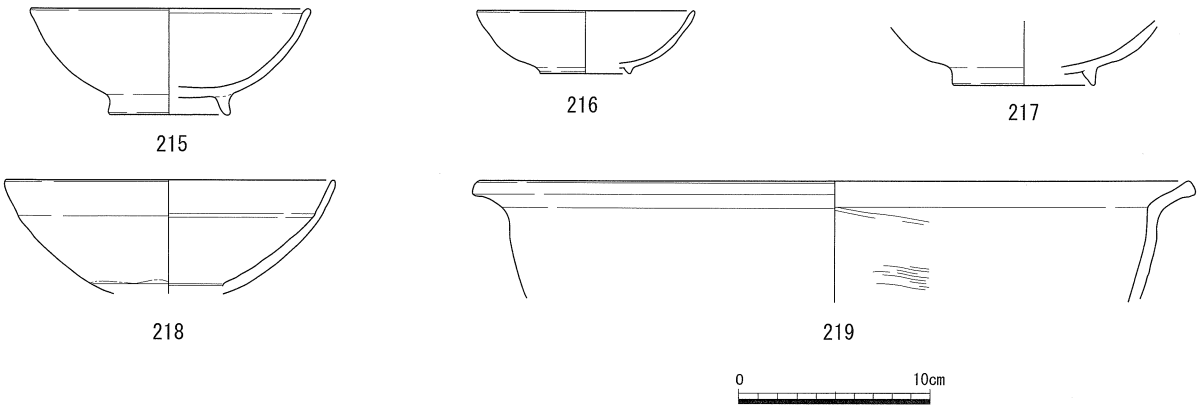
調査区内では、竪穴住居・溝・土壙等顕著な遺構のほかに、大小のピットを多数検出した。ピット番号を付与したものが283（欠番５箇所除く）あり、そのうち掘立柱建物や柵囲い遺構を構成するものとしてすでに記述したものを除いても180箇所を越える。さらにそのうち遺物を出土したものが85ヶ所で、弥生土器のみを出土し弥生時代のピットと考えられるものも少量あるが、ピット出土遺物の多くは中世のものである。これらから、遺物を検出しなかったものも含めピットの大多数は中世遺構の可能性がたかい。

建物等を明瞭に構成しないピットのなかには、４～５個のピットが一直線上に並ぶもの、５～７個がＬ字状やＴ字状をなすものもある。中でもＰ154～155・160・170は、掘立柱建物６の西側でＬ字に並び、いずれも少量の中世遺物を検出している。掘立柱建物５・７も含め、隣接しつつ建物軸を近似するため、何らかの関係がありそうにも思えるがよくわからない。

７　遺構に伴わない中世遺物（第67図）

重機掘削後の遺構面精査や調査区外周側溝掘削等で検出した遺物は、包含層のものと遺構を特定できないものが混在するが、なかには遺物として注目すべきものも含まれる。特にⅡ区の自然河道最上層は、上部の包含層が深部に残ったものらしく、多数の中世遺物を含んでいた。

215～217は吉備系土師器椀である。215は口径14.6cmと大きく、貼り付け高台もしっかりと高い。217も近い形態の高台である。216は口径11.4cmと小さく貼り付け高台も小さく低い。218は、いわゆる同安窯系青磁碗である。内面の劃花・櫛目はみられない。219は、半球形の体部と「く」の字に開く口縁をもつ土師器鍋である。三足がつく可能性が高い。



第67図　遺構に伴わない遺物（中世）（1/4）

第５節　時期不明の遺構

１　時期不明遺構の概要

多数検出した遺構のうち、ほとんど遺物が出土しなかたため積極的に時期判断のできない遺構もある。ここではそれらの遺構について取り上げ、層位や切り合いである程度の推定が可能なものについてはその都度ふれる。

２　土壙

土壙15（第68図）

調査区西壁から約14ｍ付近、古墳時代の溝７の北側肩を切り込む位置に検出した。長径143㎝・短径79㎝の楕円形を呈し、検出面からの深さは10㎝にすぎない。長軸方向はＮ-68°-Ｗ。遺物がまったくみられず時期不明ながら、溝７を明瞭に切り込んでいることから中世遺構の可能性がたかい。

土壙16（第68図）

土壙15の東4.8ｍ、溝７の北側に接するような位置に検出した。長径94㎝・短径61㎝の楕円形、深さ12㎝の断面皿形である。遺物はほとんどなく、時期不明。

土壙17（第68図、図版24-1）

湧水・導水施設の井戸７の西側、井戸７に切られる形で検出した。検出部分（遺存部分）をみる限り、長径213㎝以上、短径80㎝以上の不整楕円形をなし、深さは20㎝程度。底は少し凹凸があるものの平坦になるようである。埋土は井戸７より明らかに黒味の強い暗灰黄色粘質土で、弥生土器小片を少量検出した。中世遺構に切られていることからも、弥生時代の土壙である可能性が充分あるが、一応時期不明遺構に含めておく。

土壙18（第68図）

調査区西壁から約12ｍ、土壙15の南西側で、溝７に大きく切られてその南壁に貼りつくような位置に検出した。検出部分では長さ142㎝・幅36㎝・深さ32㎝を測り、本来の平面形を推定すると長径150㎝前後・短径80㎝前後の楕円形になり、長軸方向はおよそＮ-66°-Ｗと思われる。

埋土は黒褐色粘質土で遺物はまったく検出していない。弥生時代土壙の可能性が高いが、一応時期不明と言わざるを得ない。

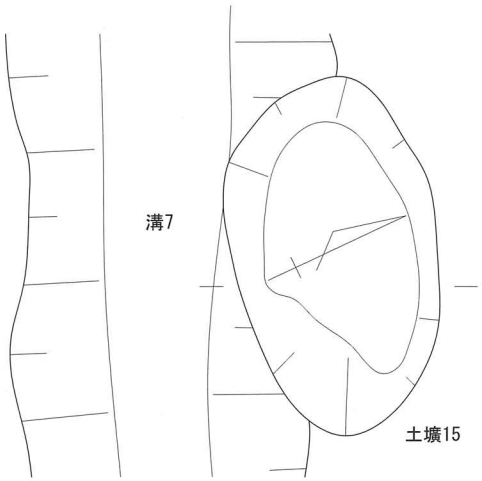
土壙19（第69図、図版24-2）

調査区西壁から20.5ｍ、南東側の土壙６と北西側の土壙16の間、溝７の南壁から底にかけての位置に検出した。検出部分では長径90㎝・短径70㎝の楕円形、深さ75㎝を測り、底は径40㎝程の円形をなし平坦である。溝７に大きく切られる前の本来の平面形を推定すると、径90～100㎝程度の円形、断面形は逆台形であったと思われる。埋土は地山微細ブロックを含む暗灰黄色粘質土で、遺物は検出していない。

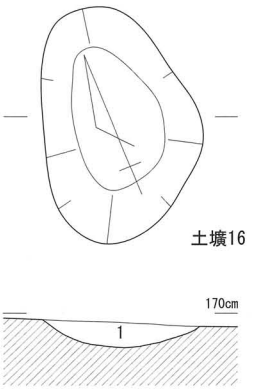
溝７に切られている点と平面・断面形状から、弥生時代の素掘り小型井戸ではないかとも思える。

土壙20（第69図）

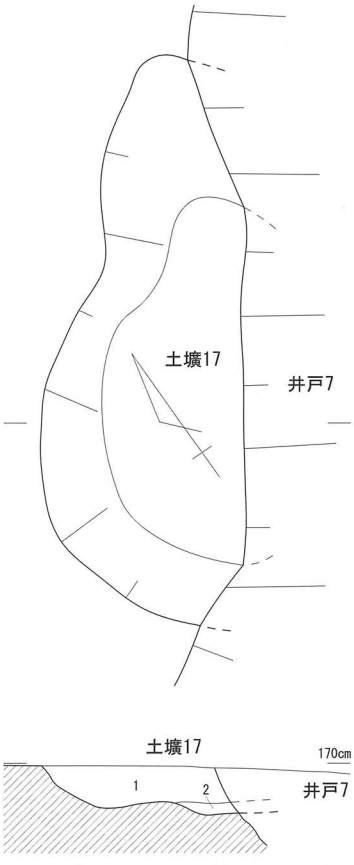
調査区南西部、掘立柱建物１・４と同２の間、南壁沿いに検出した。南端部は外周側溝トレンチにかかっているので検出できていないが、長径185㎝・短径111㎝の楕円形の平面を呈し、長軸方向は



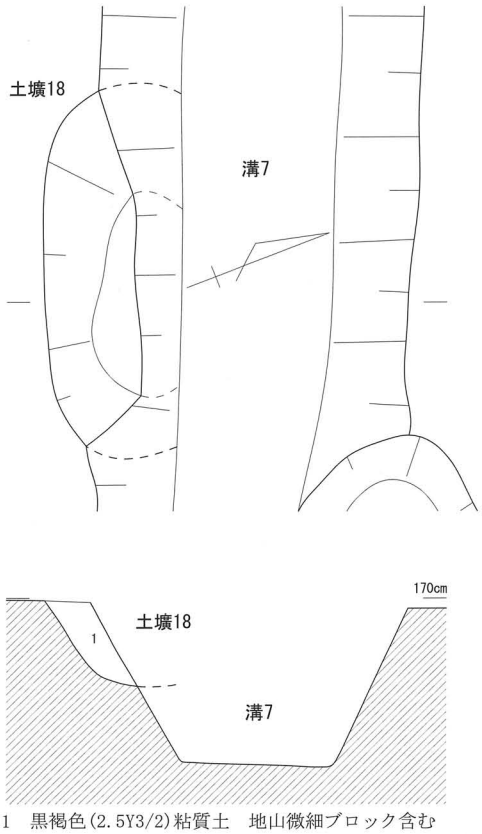
1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土



1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土



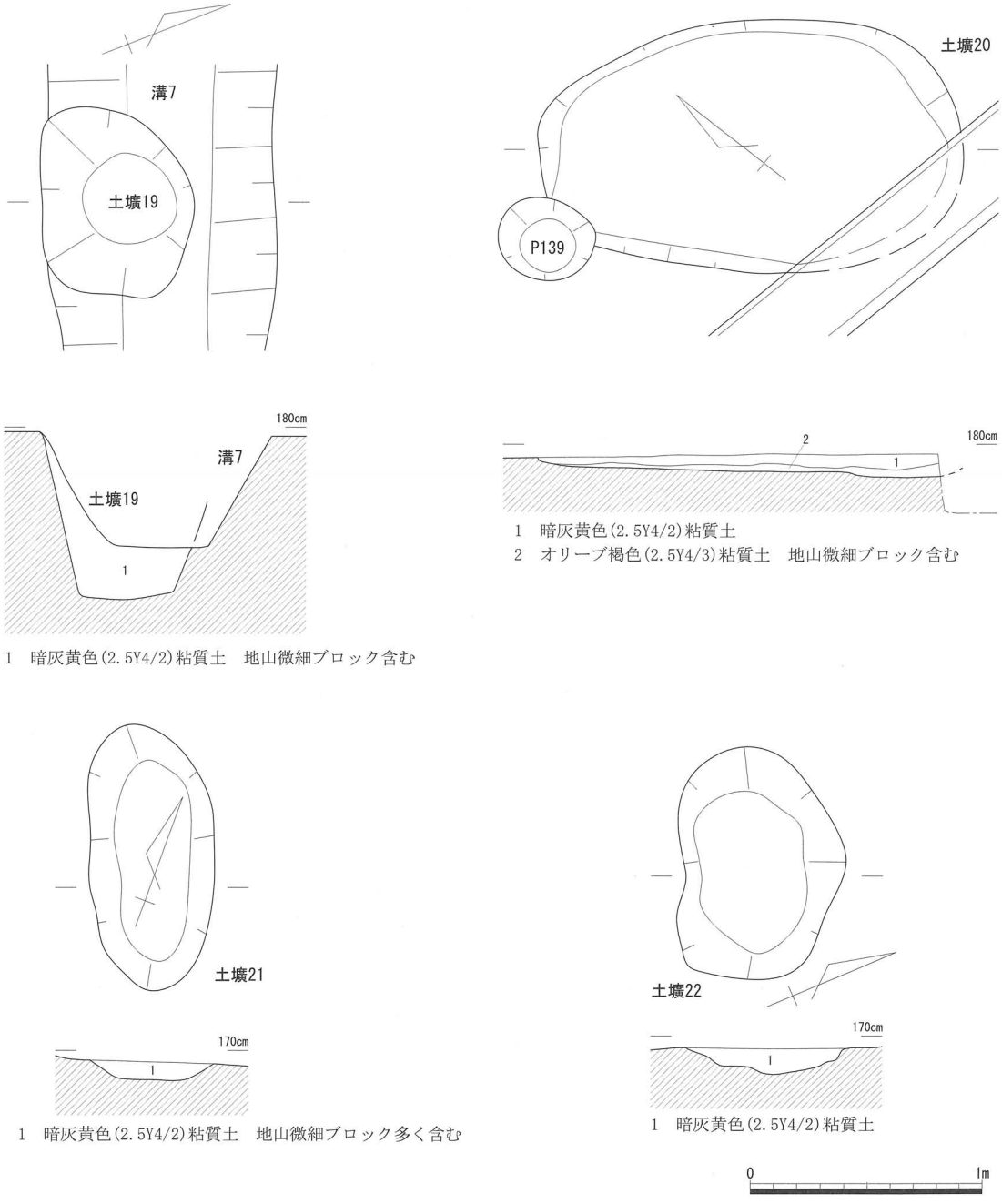
1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　1より暗い



1　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　地山微細ブロック含む

0　1m

第68図　土壙15・16・17・18平・断面図（1/30）



第69図　土壙19・20・21・22平・断面図（1/30）

N-38°-W である。しかし、その平面的な大きさに対して深さは10㎝程度に過ぎず、“遺構“として評価することさえ若干の躊躇をおぼえる。

埋土はかなり淡い色調の暗灰黄色・オリーブ褐色の粘質土で、遺物はまったく検出していない。

土壙21（第69図）

調査区のほぼ中央、竪穴住居２の南西、土壙７の東隣に検出した。長径116㎝・短径55㎝の長楕円形平面を呈し、深さ10㎝、底はほぼ平坦である。長軸方向はN-25°-W、埋土は暗灰黄色粘質土、遺物は弥生土器小片を少量検出した。

長軸方向が、弥生時代土壙と考えた近接の土壙６・７・８と類似もしくはほぼ直交することから、同じく弥生時代に属する可能性がたかいが、遺物があまりに少ないため一応時期不明遺構に含めてお

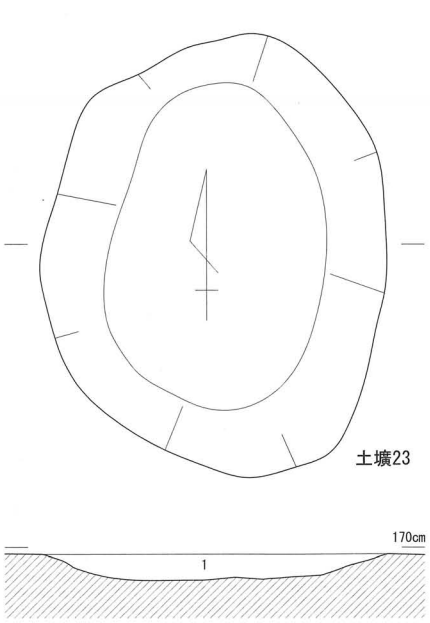
く。

土壙22（第69図）

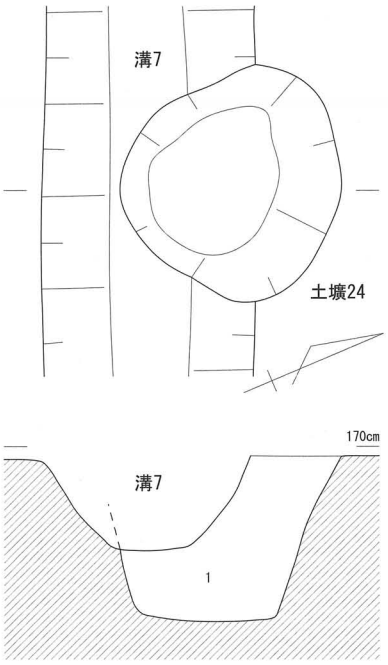
竪穴住居２の東3.5ｍ、溝７の南で検出した。長径101㎝・短径68㎝の不整楕円形を呈し、検出面からの深さは14㎝、長軸方向はＮ-66°-Ｗである。埋土は暗灰黄色粘質土で、遺物は弥生土器小片を微量出土したのみである。

土壙23（第70図）

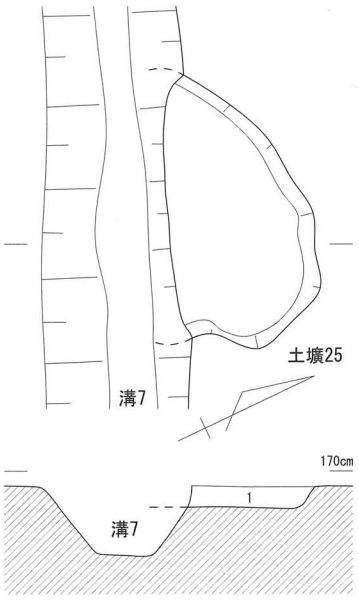
２区北西隅、溝７に切られる土壙24の北に隣接する位置に検出した。平面形は、長径169㎝・短径136㎝を測るかなり大形の楕円形であるが、検出面からの深さは10㎝に過ぎず、断面形はごく浅い皿



1　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土　やや黄色味強い



1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土　地山微細ブロック含む



1　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土　やや明るい、地山微細ブロック含む

第70図　土壙23・24・25平・断面図（1/30）

形といったところである。長軸方向はおよそN－１°－Eで、ほぼ南北方向といってよい。

埋土は、やや黄色味の強い黄灰色粘質土で、遺物は弥生土器小片を微量出土したのみである。

土壙24（第70図）

前項土壙23の南、溝７に切られる状態で検出した。検出状態の平面形は最大径94㎝の不整円形であるが、南側を大きく溝７に切られているため、本来の形状を推定すると径100㎝程のきれいな円形であったと思われる。底面は径50㎝程度の平坦面で、断面形はほぼ逆台形をなす。形状・規模とも、土壙19にきわめて類似する。埋土は、地山ブロックを含む暗灰黄色粘質土で、一気に埋められたかのような状態であった。遺物は少なく、弥生土器小片を検出したのみである。

土壙25（第70図、図版24-3）

溝７の東端部、古墳時代河道と接続する部分の北側に検出した。上面検出状況では、黒褐色粘質土の埋土が溝７および古墳時代河道と完全に一体化し、溝の幅が部分的に広がっているとしか見えなかった。しかし、掘り進めていくと溝の幅が広がっているのではなく、別遺構（土壙）との切り合いがあるとしか見えない状態となり、これを土壙25とした。一方ではこの遺構が弥生時代河道を切り込んでいることは明らかであったが、古墳時代の溝・河道埋土との切り合いが認識できなかった以上、その時期・前後関係は不明と言わざるをえない。

検出部分は、長さ100㎝・幅70㎝・深さ８㎝を測り、遺物はまったく出土していない。

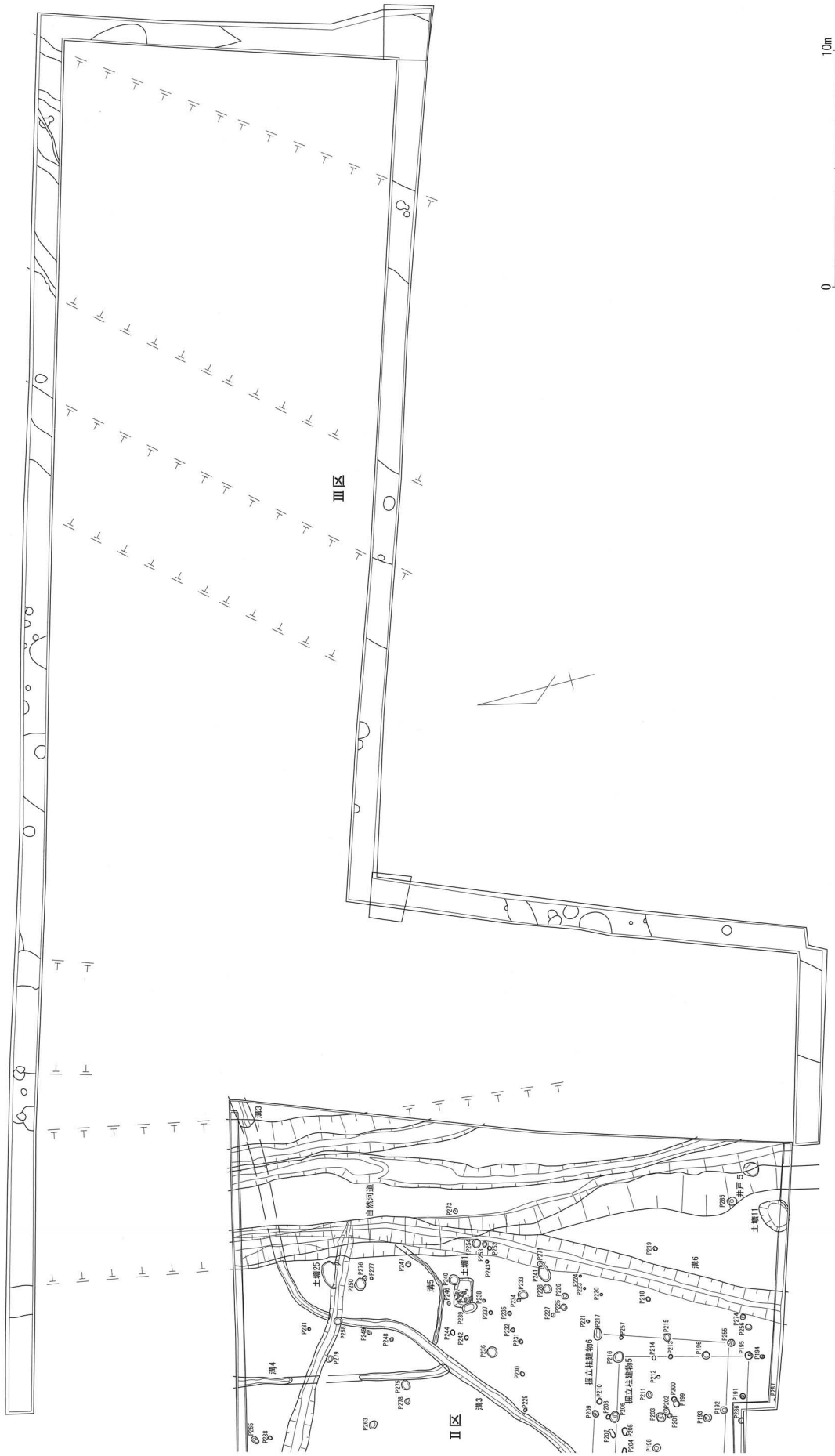
第６節　Ⅲ区トレンチ調査の所見

Ⅲ区は工事対象敷地の東半部で、工事予定深度が浅いことから全面調査を取りやめ、擁壁を設置する外周部分のトレンチ調査にとどめた。その調査内容も、幅１ｍ（総延長141ｍ）のトレンチ内での遺構面の精査と遺構平面検出、および土層断面の観察・記録のみを行い、遺構内の掘り下げは実施しなかった。

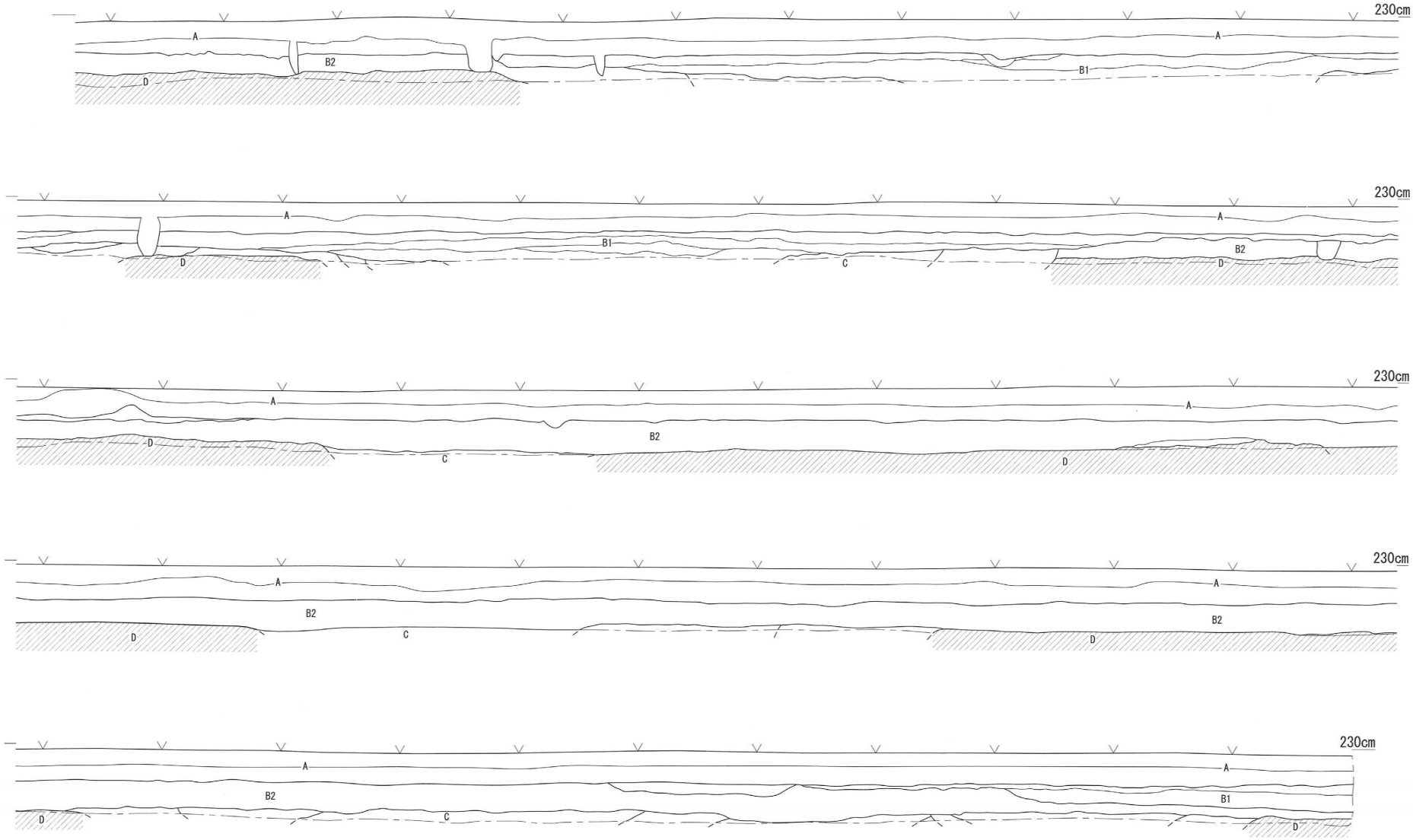
トレンチの掘削深度は、全体に現水田面から１ｍ程度であり、その深さでⅠ・Ⅱ区と共通する地山と各種遺構を検出した。堆積土層もⅠ・Ⅱ区とほぼ一致し、灰色粘質土の耕土・床土、暗灰黄色と黒褐色粘質土の遺物包含層、オリーブ褐色粘質土の地山からなる。黒褐色粘質土は主に遺構・河道埋土である。

遺構は上面検出しかしていないので、詳細は不明としか言いようがないが、密度がやや希薄になるものの、全面に何らかの遺構が遺存することは確認された。トレンチ幅僅か１ｍであるため、検出遺構個々の全形をとらえきれないものがほとんどであるとはいえ、25箇所前後のピットと７～８基の土壙らしき遺構を検出した。また西部で南北方向、東部で北東－南西方向の平行直線的土質変化を確認した。西部のものはⅡ区東端で検出した自然河道の延長部と思われ、東部にも幅２～３ｍと幅７～８ｍ程度の２条の溝もしくは河道の存在が推定される。おそらくこのあたりから南東方向には幾条もの旧河道が存在するのであろう。

遺物は、遺構面精査・遺構検出の過程で少量の弥生土器等が出土したが、積極的に遺構の年代を決めるものでもないので、ここでは取り上げない。



第71図　Ⅲ区トレンチ調査遺構検出状況平面図（1/250）



A 灰色系粘質土（耕土・床土）
B1・B2 暗灰黄色系・黒褐色系粘質土（置換包含層）
C 黒褐色系粘質土（置換埋土）
D オリーブ褐色粘質土（地山）

0　2m

第72図　Ⅲ区北トレンチ北壁土層断面図（1/50）

第４章　まとめにかえて

弥生時代の遺構　弥生土器を出土した遺構は、本文にふれたように竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙・溝・性格不明の落ち込み・自然河道等多岐にわたっているが、その遺物内容を検討すると大きく三つの時期に分けることができる。

弥生時代前期（中葉）井戸１、土壙１・２・３、落ち込み　（後葉）溝１・２、

弥生時代中期（中葉）竪穴住居１、土壙４・14、溝３

弥生時代後期（中葉）竪穴住居２、掘立柱建物１、井戸２、土壙13、溝６、弥生時代河道

三時期に分離してみると、それぞれの遺構分布は比較的散漫で、いずれの時期においても集落の縁辺部ではなかったかと推定される。しかしながら、当遺跡周辺が弥生時代を通じて継続的に生活の場であったことをあらためて示したものといえよう。

土壙のうちの多くは出土遺物が少なく、大まかに弥生時代遺構と判断し得たにすぎない。遺物がほとんど無く時期不明とせざるを得なかった土壙の半数程度も、埋土の類似から弥生時代遺構の可能性が高い。このうち土壙19・24は、直径100㎝足らずにもかかわらず深さ70㎝程度もあり、井戸を意図して掘られたものと思われる。他方土壙５～８・21のように、長径100数十㎝前後の微妙に長方形を指向する楕円形の土壙は、墓（土壙墓）の可能性が考えられよう。

古墳時代の遺構　古墳時代の遺構は、南北に流走する自然河道と、西北西－東南東方で直線的に流れて河道に接続する溝７のみで、共に古墳時代後期（６世紀後半～７世紀初頭頃）の須恵器を多く出土した。

溝は水路というより区画溝の可能性が高く、周辺に付随遺構が見られないことからも、集落遺跡の一部とするにはやや弱い。しかしながら、河道の遺物と合わせ出土した須恵器の内容と量からみて、近傍に集落が存在したことは間違いなかろう。

この時期は、東方および東北方の丘陵・低山地地帯に百数十基の規模で展開する須恵器窯邑久古窯跡群の成立初期といった段階である。操業する窯場の数はまだ少なかったであろうが、その須恵器生産に直接あるいは間接にかかわった人々の生活の基盤が、弥生時代前期以降集落地であり続けた当地周辺の微高地にあったであろうことは容易に想像できる。

現在までのところ、周辺で古墳時代後期の集落遺構の検出例は少ないが、大規模な須恵器窯の存在から考えれば、今後集落遺跡の検出される可能性は充分あるであろう。

古代・中世の遺構　中世の遺構は、13世紀頃と推定される４棟の掘立柱建物と井戸３基、そして井戸と水路が一体的に機能する湧水導水施設があり、桁行方向の違いからそれらよりややさかのぼると考えられる掘立柱建物１棟と柵囲い遺構がある。

掘立柱建物の桁行方向の相違は本文でもふれたように、条里遺構との関連を考慮する必要があり、今後周辺中世遺跡の溝遺構や掘立柱建物と総合的にとらえてゆくことが望まれる。井戸と水路が一体となった湧水導水施設は、類似遺構の検出例を寡聞にして知らない。低湿地内微高地にしてはじめて成立し意味を持つ遺構であり、農業生産・農地開発に伴って築造されたものであろう。岡山県南部には当地同様の低地部は多く、今後周辺で類似遺構の検出される可能性は高いであろう。

第１表　竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)	床面積(㎡)	底面海抜高(cm)	柱穴	焼土面	壁体溝	高床部	カマド	時期
竪穴住居1	円形	499	(14.91)	150	4	無	有	無	無	弥生時代中期中葉
竪穴住居2	円形	340	8.01	153	2	無	有	無	無	弥生時代後期中葉

第２表　竪穴住居1ピット一覧表

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)
P１	68	54	35	114
P２	35	30	38	117
P３	41	36	41	110
P４	43	36	42	108
P５	39	36	40	113
P６	30	29	9	143
P７	20	17	3	145
P８	11	11	15	136
P９	25	19	15	145
P10	17	16	12	138
P11	15	14	13	146

第３表　竪穴住居2ピット一覧表

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)
P1	46	40	43	110
P2	108	(69)	27	125
P3	45	-	41	112
P4	42	40	43	110
P5	44	37	45	109
P6	36	33	28	127
P7	33	32	45	107
P8	29	23	22	131
P9	50	-	19	134

第４表　掘立柱建物一覧表

遺構名	規模	柱間距離(cm)		桁行(cm)	梁間(cm)	面積(㎡)	棟方向	柱穴形状	時期	柱穴ピット番号
		桁	梁							
掘立柱建物1	3×1	115 ～ 175	289 ～ 307	429	307	12.15	N-76° -W	円形・不整円形	弥生時代後期	P40 ～ 46,48
掘立柱建物2	2以上×1	120 ～ 153	300 ～ 342	296	342	7.75	N-20° -E	円形・不整円形	弥生	P95,97,98,101 ～ 103
掘立柱建物3	3×2	157 ～ 219	153 ～ 330	554	330	17.93	N-3° -W	円形・不整円形	中世	P77 ～ 85
掘立柱建物4	3×3?	128 ～ 298	110 ～ 234	595	518	29.94	N-80° -W	円形・不整円形	13C	P47 ～ 53,56,57
掘立柱建物5	3×3以上	263 ～ 343	247 ～ 298	730	650	47.45	N-73° -W	円形・不整円形	13C	P159,178,181,185,186,193,195,196,206,216,272,286
掘立柱建物6	3×2以上	207 ～ 283	148 ～ 193	900	580	62.20	N-73° -W	円形・不整円形	13C	P157,168,171,187,192,202,209,215,217,255
掘立柱建物7	3×2	205 ～ 283	215 ～ 222	739	(444)	(32.81)	N-78° -W	円形・不整円形	中世	P105,107,109,111,162,164

第５表　柵囲い遺構一覧表

遺構名	全長(cm)	柱間距離(cm)	ピット形状	列間距離(cm)	面積(㎡)	時期	ピット番号
西柵列	665	41 ～ 110	円形	275	18.29	中世	P-113・116 ～ 124
東柵列	664	45 ～ 107	円形				P-128・130・131・133 ～ 138

第６表　井戸一覧表

遺構名	構造	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	時期
井戸1	素掘り	隅丸長方形	156	134	87	77	弥生時代前期中葉
井戸2	素掘り	(楕円形)	321	-	118	65	弥生時代後期中葉
井戸3	素掘り	不整円形	156	144	110	37	弥生
井戸4	素掘り	楕円形	233	184	120以上	-	13C
井戸5	素掘り	楕円形	65	55	50以上	-	中世後期
井戸6	素掘り	円形	(96)	-	60以上	-	中世？
井戸7	素掘り	円形	(350)	-	-	-	中世

第７表　土壙一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	時期
土壙１	隅丸長方形	皿形	125	78	9	166	弥生時代前期中葉
土壙２	楕円形	皿形	200	(110)	52	106	弥生時代前期中葉
土壙３	長楕円形	皿形	(221)	93	43	127	弥生時代前期中葉
土壙４	楕円形	皿形	90	65	14	148	弥生時代中期中葉
土壙５	長楕円形	皿形	162	90	15	149	弥生
土壙６	長楕円形	皿形	137	66	16	147	弥生
土壙７	長楕円形	皿形	158	85	40	132	弥生
土壙８	長楕円形	皿形	205	108	26	144	弥生
土壙９	楕円形	皿形	(110)	(90)	15	144	弥生
土壙10	長楕円形	皿形	81	33	5	151	弥生
土壙11	不整楕円形	皿形	(150)	(120)	29	138	弥生
土壙12	不整楕円形	皿形	(273)	152	40	126	弥生
土壙13	楕円形	逆台形	36	29	26	146	弥生時代後期中葉
土壙14	円形	逆台形	29	28	25	152	弥生時代中期中葉

遺構名	平面形	断面形	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	時期
土壙15	楕円形	皿形	143	79	12	159	不明(中世?)
土壙16	楕円形	皿形	94	61	12	156	不明(弥生?)
土壙17	不整長楕円形	皿形	(213)	-	17	152	不明(弥生?)
土壙18	楕円形	逆台形	142	-	32	133	不明(弥生?)
土壙19	楕円形	逆台形	(90)	(70)	75	104	不明(弥生?)
土壙20	楕円形	皿形	(185)	111	12	164	不明(中世?)
土壙21	長楕円形	皿形	116	55	10	157	不明(弥生?)
土壙22	不整楕円形	皿形	101	68	14	153	不明(弥生?)
土壙23	楕円形	皿形	169	136	10	157	不明(弥生?)
土壙24	不整円形	逆台形	(94)	-	67	101	不明(弥生?)
土壙25	不整楕円形	皿形	(100)	(70)	8	150	不明(弥生?)

第8表　溝一覧表

遺構名	上端幅(cm)	底面幅(cm)	検出長(m)	断面形	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	略走向	時期
溝1	49～83	22～43	22.1	逆台形	17	146	南西－北東	弥生時代前期後葉
溝2	61～76	25～43	7.5	逆台形	22	142	南西－北東	弥生時代前期後葉
溝3	30～68	12～40	34.0	皿形	25	154	南西－北東	弥生時代中期中葉
溝4	23～43	8～23	8.9	皿形	14	157	南－北	弥生
溝5	14～17	5～8	4.0	皿形	3	164	南西－北東	弥生
溝6	103～137	9～31	22.2	V字形	71	102	南－北	弥生時代後期中葉
溝7	52～127	20～78	43.4	逆台形	61	98	西－東	古墳時代後期
溝8	197～220	20～47	17.1	逆台形	110	75	南－北	中世

第9表　ピット一覧表

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	備考	建物	遺物
1	34	31	16	152			○
2	31	29	19	157			×
3	25	22	9	165			×
4	18	16	10	164			×
5	17	16	13	153			×
6	17	16	22	147			×
7	42	35	13	155			×
8	22	22	14	160			×
9	14	13	9	158			×
10	17	17	5	157			×
11	14	13	17	149			×
12	19	18	5	157			×
13	19	17	2	164			×
14	25	22	32	128			×
15	31	26	27	135			×
16	20	19	6	160			×
17	28	25	18	149			×
18	19	18	13	153			×
19					欠番		
20	26	24	19	142			×
21	17	15	11	151			×
22	44	40	13	149			○
23	28	27	8	159			×
24	15	14	6	167			×
25	30	29	41	131			×
26	27	25	30	142			○
27	32	29	22	155			○
28	23	22	40	125			○
29	11	8	7	157			×
30	14	12	11	155			×
31	11	10	9	156			×
32	24	20	15	140			×
33	24	20	7	164			×
34	18	17	7	156			×
35	10	9	10	155			○
36	42	32	4	153			×
37	32	23	6	159			×
38	19	18	8	159			×
39	42	34	21	142			○
40	64	56	39	134		掘立柱建物1	○
41	50	48	31	139		掘立柱建物1	○
42	52	45	21	151		掘立柱建物1	×
43	65	-	30	144		掘立柱建物1	○
44	53	50	16	155		掘立柱建物1	○
45	59	30	46	122		掘立柱建物1	○
46	77	62	40	135		掘立柱建物1	○
47	28	26	15	156		掘立柱建物4	○
48	67	36	64	115		掘立柱建物1・4	○
49	27	27	35	143		掘立柱建物4	○
50	18	16	10	163		掘立柱建物4	×
51	31	30	24	145		掘立柱建物4	○
52	26	25	35	140		掘立柱建物4	○
53	31	26	22	149		掘立柱建物4	○
54	38	34	22	148	柱痕あり		○
55	26	25	33	142		掘立柱建物4	○
56	28	24	27	149		掘立柱建物4	○
57	28	27	32	144		掘立柱建物4	○
58	14	13	15	161			×
59	29	28	30	149		掘立柱建物4	○
60	21	20	12	167			○
61	37	24	10	167			○
62	15	14	15	163			×
63	23	22	19	169			○
64	16	14	7	168			×
65	24	22	7	169		掘立柱建物4	×
66	60	40	19	151	柱痕あり		○
67	35	33	42	172			○
68	14	14	11	161			×
69	24	22	3	172			×
70	29	26	20	159			○
71	50	48	25	149			○
72	37	36	13	158			×
73	26	25	9	159			○
74	36	29	26	146		土壙13	×
75	20	18	18	153			×
76	22	18	14	155			○
77	54	48	29	150	柱痕あり	掘立柱建物3	○
78	43	40	30	150	柱痕あり	掘立柱建物3	○
79	36	34	20	156		掘立柱建物3	○
80	60	51	28	150	柱痕あり	掘立柱建物3	○
81	52	52	12	164		掘立柱建物3	○
82	48	42	30	146	柱痕あり	掘立柱建物3	○
83	36	34	10	168		掘立柱建物3	○
84	49	48	33	142		掘立柱建物3	○
85	57	52	32	149	柱痕あり	掘立柱建物3	○
86	32	31	21	160			×
87	20	19	27	148			×
88	22	20	11	166			×

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	備考	建物	遺物
89	29	28	25	152	甕体部下半出土	土壙14	○
90	20	18	16	156			×
91	20	19	19	150			×
92	16	16	6	172			×
93	25	22	21	157			×
94	38	31	18	142			×
95	49	43	30	144		掘立柱建物2	○
96	31	30	15	159			×
97	45	44	19	155		掘立柱建物2	○
98	37	37	25	151	P-99に切られる	掘立柱建物2	○
99	30	27	12	164	P-98を切る		×
100	54	36	19	162			○
101	27	(24)	28	152		掘立柱建物2	×
102	59	45	31	149	溝8に切られる	掘立柱建物2	○
103	41	40	22	160	溝8に切られる	掘立柱建物2	×
104	20	18	22	161			×
105	25	24	23	161		掘立柱建物7	×
106	24	22	20	164			×
107	22	20	18	156		掘立柱建物7	×
108	23	18	11	164			×
109	27	24	25	156		掘立柱建物7	○
110	50	49	20	156			○
111	19	18	22	153		掘立柱建物7	×
112	18	17	9	166			○
113	21	19	27	152		柵囲い遺構	×
114	12	11	9	170			×
115	13	12	8	172			×
116	24	22	21	157		柵囲い遺構	○
117	19	16	9	163		柵囲い遺構	×
118	24	22	46	127		柵囲い遺構	○
119	16	14	19	156		柵囲い遺構	×
120	17	15	15	158		柵囲い遺構	×
121	16	14	15	157		柵囲い遺構	×
122	19	17	21	150		柵囲い遺構	×
123	17	13	21	151		柵囲い遺構	×
124	22	20	31	139		柵囲い遺構	○
125	23	21	10	171		柵囲い遺構	×
126	17	17	11	170			×
127	21	20	17	163			×
128	23	20	21	157		柵囲い遺構	×
129	25	23	12	162			○
130	22	21	20	154		柵囲い遺構	×
131	14	12	9	161		柵囲い遺構	×
132	18	15	14	159			○
133	26	20	27	144		柵囲い遺構	×
134	15	14	15	157		柵囲い遺構	×
135	18	17	27	147		柵囲い遺構	○
136	18	17	17	157		柵囲い遺構	×
137	21	19	16	158		柵囲い遺構	○
138	27	26	48	125		柵囲い遺構	○
139	42	35	33	140	土壙20を切る		×
140	43	40	10	164		柵囲い遺構	○
141	59	46	35	141			○
142	28	19	9	167			○
143	73	46	40	128			○
144	31	27	8	159			○
145	71	52	14	166			○
146	38	37	33	131	溝3を切る		○
147	12	10	5	163			×
148	30	27	12	161			○
149	18	15	16	164			×
150	28	26	11	163			○
151	16	13	8	163			×
152	96	-	60	130	P-43を切る	井戸6	○
153	25	24	19	156			○
154	36	28	19	155	落ち込み上面検出		○
155	24	19	20	155	落ち込み上面検出		○
156	28	27	27	148	落ち込み上面検出		○
157	38	37	18	156	落ち込み上面検出	掘立柱建物6	○
158	23	20	20	156	落ち込み上面検出		○
159	45	43	29	150	落ち込み上面検出	掘立柱建物5	○
160	24	19	36	144	落ち込み上面検出		○
161	22	21	15	164	落ち込み上面検出		○

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	備考	建物	遺物
162	21	18	11	169		掘立柱建物7	×
163	24	23	15	166			○
164	21	19	10	169		掘立柱建物7	×
165	17	-	22	157		掘立柱建物7	○
166	20	18	5	173			×
167	28	23	5	172			×
168	38	34	37	129		掘立柱建物6	○
169					欠番		
170	27	23	16	163			○
171	36	33	18	161		掘立柱建物6	○
172	15	14	18	161			○
173	36	34	30	146	落ち込み上面検出	掘立柱建物5	○
174	39	33	13	162			×
175	23	20	23	153			○
176	24	-	21	156			×
177	16	-	8	168			○
178	27	-	18	157		掘立柱建物5	○
179	30	29	28	145		掘立柱建物6	○
180	15	14	7	168	落ち込み上面検出		×
181	37	35	27	149	落ち込み上面検出	掘立柱建物5	○
182	18	17	32	148	落ち込み上面検出		○
183	22	21	13	166	落ち込み上面検出	掘立柱建物5	○
184	26	24	9	172	落ち込み上面検出		×
185	40	37	44	135	落ち込み上面検出	掘立柱建物5	○
186	43	35	33	143	落ち込み上面検出	掘立柱建物5	○
187	23	22	16	157	落ち込み上面検出	掘立柱建物6	○
188	58	40	30	141	落ち込み上面検出		○
189	51	40	23	146			○
190	17	16	15	165	落ち込み上面検出		○
191	25	23	23	145			○
192	30	28	28	144		掘立柱建物6	○
193	35	32	36	133		掘立柱建物5	○
194	20	16	30	142			○
195	33	30	34	135		掘立柱建物5	○
196	33	31	32	138		掘立柱建物5	○
197	30	23	17	156			○
198	34	30	6	169			×
199	(28)	25	14	159			○
200	22	21	25	148			×
201	21	19	26	148			○
202	(29)	26	36	138		掘立柱建物6	○
203	38	37	32	144		掘立柱建物5	○
204	44	18	14	161			○
205	34	21	78	167			○
206	45	36	43	132		掘立柱建物5	×
207	39	16	10	164			×
208	19	17	5	171			○
209	31	26	17	156		掘立柱建物6	○
210	27	21	12	163			○
211	30	26	19	152			○
212	14	13	15	157			×
213	19	18	19	150		掘立柱建物5	○
214	19	17	11	161		掘立柱建物5	○
215	33	31	16	153		掘立柱建物6	×
216	48	41	32	140		掘立柱建物5	○
217	51	31	14	156		掘立柱建物6	○
218	21	18	7	160			×
219	19	17	20	149			×
220	12	10	18	151			×
221	15	10	9	162			×
222					欠番		
223	11	10	16	155			×
224	11	10	10	160			×
225	27	25	3	169			×
226	27	26	15	158			×
227	16	15	17	156			×
228	39	33	16	157			×
229	16	13	6	159			×
230	20	16	11	156			×
231	19	16	4	165			×
232	19	18	8	162			○
233	40	35	19	155			×
234	15	14	16	156			×

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	備考	建物	遺物
235	17	16	17	153			×
236	44	43	13	156			×
237	17	15	7	163			×
238	14	13	15	157			○
239	63	40	19	153	土壙1を切る		○
240	46	40	21	153	土壙1を切る		○
241	65	46	8	165			×
242	18	17	3	165			×
243	14	14	9	162			×
244					欠番		
245	25	18	4	166			×
246	16	13	14	158			○
247	23	22	11	161			○
248	16	15	6	159			×
249	23	15	25	139			○
250	47	45	19	147			×
251					欠番		
252	18	16	16	155			○
253	23	19	25	147			○
254	37	34	18	156			○
255	32	30	37	133		掘立柱建物6	○
256	27	25	13	158			×
257	66	53	17	158			○
258	35	30	21	141			
259	14	12	4	168			×
260	21	20	14	154			×
261	20	17	17	147			×

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	備考	建物	遺物
262	22	19	12	154			○
263	38	31	9	152			×
264	31	26	22	141			○
265	36	24	18	147			×
266	26	20	27	140			×
267	33	20	32	134			○
268	43	41	15	152			×
269	27	25	18	138	落ち込み底検出		○
270	23	22	23	140	落ち込み底検出		×
271	(26)	23	30	143			○
272	52	44	6	149	落ち込み上面検出		○
273	19	18	5	136			○
274	24	21	13	160			×
275	44	34	10	154			×
276	21	19	21	145			×
277	14	13	6	162			×
278	26	25	12	151			○
279	32	25	9	147			×
280	16	12	8	158			×
281	13	12	4	154			×
282	19	17	17	139	落ち込み底検出		×
283	18	14	22	133	落ち込み底検出		×
284	13	12	12	143			○
285	67	61	41	113			○
286	(23)	-	-	-	Ⅱ区南壁	掘立柱建物5	×
287	(19)	-	-	-	Ⅱ区南壁		×
288	18	15	11	155			×

第10表　ピットと掘立柱建物対照表

ピットNo.	遺構名
40	掘立柱建物1
41	掘立柱建物1
42	掘立柱建物1
43	掘立柱建物1
44	掘立柱建物1
45	掘立柱建物1
46	掘立柱建物1
47	掘立柱建物4
48	掘立柱建物1・4
49	掘立柱建物4
50	掘立柱建物4
51	掘立柱建物4
52	掘立柱建物4
53	掘立柱建物4
55	掘立柱建物4
56	掘立柱建物4
57	掘立柱建物4
59	掘立柱建物4

ピットNo.	遺構名
65	掘立柱建物4
77	掘立柱建物3
78	掘立柱建物3
79	掘立柱建物3
80	掘立柱建物3
81	掘立柱建物3
82	掘立柱建物3
83	掘立柱建物3
84	掘立柱建物3
85	掘立柱建物3
95	掘立柱建物2
97	掘立柱建物2
98	掘立柱建物2
101	掘立柱建物2
102	掘立柱建物2
103	掘立柱建物2
105	掘立柱建物7
107	掘立柱建物7

ピットNo.	遺構名
109	掘立柱建物7
111	掘立柱建物7
113	柵囲い遺構　西柵列
116	柵囲い遺構　西柵列
117	柵囲い遺構　西柵列
118	柵囲い遺構　西柵列
119	柵囲い遺構　西柵列
120	柵囲い遺構　西柵列
121	柵囲い遺構　西柵列
122	柵囲い遺構　西柵列
123	柵囲い遺構　西柵列
124	柵囲い遺構　西柵列
125	柵囲い遺構？
128	柵囲い遺構　東柵列
130	柵囲い遺構　東柵列
131	柵囲い遺構　東柵列
133	柵囲い遺構　東柵列
134	柵囲い遺構　東柵列

ピットNo.	遺構名
135	柵囲い遺構　東柵列
136	柵囲い遺構　東柵列
137	柵囲い遺構　東柵列
138	柵囲い遺構　東柵列
140	柵囲い遺構？
157	掘立柱建物6
159	掘立柱建物5
162	掘立柱建物7
164	掘立柱建物7
165	掘立柱建物7
168	掘立柱建物6
171	掘立柱建物6
173	掘立柱建物5
178	掘立柱建物5
179	掘立柱建物6
181	掘立柱建物5
183	掘立柱建物5
185	掘立柱建物5

ピットNo.	遺構名
186	掘立柱建物5
187	掘立柱建物6
192	掘立柱建物6
193	掘立柱建物5
195	掘立柱建物5
196	掘立柱建物5
202	掘立柱建物6
203	掘立柱建物5
206	掘立柱建物5
209	掘立柱建物6
213	掘立柱建物5
214	掘立柱建物5
215	掘立柱建物6
216	掘立柱建物5
217	掘立柱建物6
255	掘立柱建物6
286	掘立柱建物5

第11表　遺構名(番号)新旧対照表および遺物掲載番号一覧

新遺構名	旧遺構名	遺物実測図掲載番号		
		土器	石器	鉄
竪穴住居1	SH-01	1～5	S1～S5	
竪穴住居2	SH-02	6～9	S6	
掘立柱建物1	SB-02			
掘立柱建物2	SB-06			
井戸1	SK-20	10～18	S7	
井戸2	SK-10	19～32		
井戸3	SK-21			
土壙1	SK-15	33～39		
土壙2	SK-19	40～48		
土壙3	SK-22	49～61		
土壙4	SK-02	62		
土壙5	SK-01			
土壙6	SK-05			
土壙7	SK-12			
土壙8	SK-14			
土壙9	SK-23			

新遺構名	旧遺構名	遺物実測図掲載番号		
		土器	石器	鉄
土壙10	SK-24			
土壙11	SK-28			
土壙12	SK-08		S8	
土壙13	P-74	63・64		
土壙14	P-89	65		
溝1	SD-02	66～73		
溝2	SD-03	74		
溝3	SD-04	75	S9	
溝4	SD-06			
溝5	SD-07			
溝6	SD-08	76～84	S10	
落ち込み	SX-03	85～113	S11～S14	
弥生時代河道	NR-01	114～166	S15	
	遺構に伴わない弥生時代遺物		S16	
溝7	SD-01	167～174	S17・S18	
古墳時代河道	NR-01	175～191		

新遺構名	旧遺構名	遺物実測図掲載番号		
		土器	石器	鉄
掘立柱建物3	SB-01			
掘立柱建物4	SB-03	192 ～ 197		
掘立柱建物5	SB-04	198 ～ 202		
掘立柱建物6	SB-05	203		
掘立柱建物7	SB-07			
柵囲い遺構	SA-01・02			
井戸4	SX-01	204		
井戸5	SK-26			
井戸6	P-152	205		
井戸7	SX-02	206 ～ 212	S19	F1
溝8	SD-05	213・214		
	遺構に伴わない中世遺物	215 ～ 219		

新遺構名	旧遺構名	遺物実測図掲載番号		
		土器	石器	鉄
土壙15	SK-03			
土壙16	SK-04			
土壙17	SK-06			
土壙18	SK-07			
土壙19	SK-09			
土壙20	SK-11			
土壙21	SK-13			
土壙22	SK-17			
土壙23	SK-18			
土壙24	SK-25			
土壙25	SK-27			

第12表　土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴		色調	胎土	備考
				口径	器高	底脚径	外面	内面			
1	竪穴住居1	弥生土器	甕	(15.2)	—	—	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	褐(7.5YR4/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
2	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	—	ヨコナデ	ハケメ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
3	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	—			にぶい黄橙(10YR7/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
4	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	7.7	ミガキ、ナデ	オサエ、ナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	長石，石英，角閃石	
5	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	5.8	ミガキ、オサエ、ナデ	ミガキ、オサエ、ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)，明赤褐(5YR5/8)	長石，石英，角閃石	
6	竪穴住居2	弥生土器	甕	(8.0)	—	—	ヨコナデ、工具ナデ	ヨコナデ、ナデ、シボリ、オサエ	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石，石英，角閃石	
7	竪穴住居2	弥生土器	甕	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	にぶい橙(7.5YR7/3)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
8	竪穴住居2	弥生土器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ	ヨコナデ、ケズリ	にぶい橙(7.5YR7/3)	長石，石英，角閃石	
9	竪穴住居2	弥生土器	鉢	—	—	(6.2)	オサエ、ナデ	オサエ、ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
10	井戸1	弥生土器	蓋	つまみ部6.7～7.0	—	—	ナデ、工具ナデ、ミガキ	オサエ、ナデ、工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石	歪みあり
11	井戸1	弥生土器	壺	(17.2)	—	—	ヨコナデ、ミガキ、段あり	ミガキ、オサエ	灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，雲母，角閃石，黒色粒	
12	井戸1	弥生土器	壺	(15.2)	—	—	ミガキ、ヘラ描沈線3条以上	ミガキ、オサエ	橙(7.5YR7/6)	長石，石英，黒色粒，角閃石，赤色粒	焼成前穿孔2ヶ(穿孔2ヶ1対2ヶ所?)
13	井戸1	弥生土器	壺	(15.7)	—	—	ハケメ、ミガキ、ヘラ描沈線4条以上	ミガキ、オサエ	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石，石英，黒色粒，赤色粒，角閃石	
14	井戸1	弥生土器	壺	—	—	—	ミガキ、ヘラ描沈線2条以上2ヶ所	オサエ、ナデ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石，赤色粒	
15	井戸1	弥生土器	壺	—	—	(7.2)	ミガキ、ナデ	ナデ	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石，赤色粒	
16	井戸1	弥生土器	甕	24.2～25.2	25.9	8.4～8.7	ヨコナデ、ナデ、ヘラ描沈線3条、口縁部刻目	オサエ、ナデ、工具ナデ	灰白(2.5Y8/2)，灰黄褐(10YR6/2)，橙(5YR6/6)	長石，石英，赤色粒，黒色粒，角閃石	煤付着、ふきこぼれのような痕跡、底部穿孔
17	井戸1	弥生土器	甕	(19.8)	—	—	オサエ、口縁部刻目、ヘラ描沈線3条	オサエ	黒褐(10YR3/2)	長石，石英，黒色粒	歪みあり
18	井戸1	弥生土器	壺	—	—	—	沈線2条による山形文	オサエ	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石，石英，雲母，黒色粒，角閃石	
19	井戸2	弥生土器	壺	(18.2)	—	—	ハケメ、ヨコナデ、口縁端部と外面2ヶ所に竹管文、鋸歯文	ヨコナデ、ミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，角閃石，雲母，赤色粒	
20	井戸2	弥生土器	壺	(31.7)	—	—	ヨコナデ、オサエ、ミガキ、ハケメ、凹線、沈線、櫛状工具による流水文	ヨコナデ、ミガキ、ナデ、ハケメ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
21	井戸2	弥生土器	壺	—	—	—	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ	ユビナデ、オサエ、ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
22	井戸2	弥生土器	甕	(13.0)	—	—	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	黒褐(2.5Y3/1)	長石，石英，雲母，角閃石，黒色粒	
23	井戸2	弥生土器	甕	(15.0)	—	—	ヨコナデ	ケズリ	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
24	井戸2	弥生土器	甕	12.5	17.4	3.9～4.1	ヨコナデ、ハケメ、オサエ、ナデ	ヨコナデ、ケズリ	浅黄橙(10YR8/3)，灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，角閃石，雲母，黒色粒，赤色粒	煤付着
25	井戸2	弥生土器	甕	—	—	(4.4)	ハケメ	オサエ、ケズリ	灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石	煤付着
26	井戸2	弥生土器	甕	—	—	5.7	ハケメ、オサエ、ナデ	ケズリ、工具ナデ、ナデ	にぶい褐(7.5YR6/3)	長石，石英，黒色粒	焼成後底部穿孔、煤？付着
27	井戸2	弥生土器	鉢	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ、ナデ？	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
28	井戸2	弥生土器	鉢	(13.6)	—	—	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、オサエ、ナデ、工具ナデ	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石	
29	井戸2	弥生土器	台付鉢	(10.4)	7.6	5.5	ミガキ、ヨコナデ、沈線?1条、オサエ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石	
30	井戸2	弥生土器	製塩土器	—	—	(4.3)	オサエ、ナデ	ナデ	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒	歪みあり
31	井戸2	弥生土器	高杯	—	—	—		ミガキ	浅黄橙(7.5YR8/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒，黒色粒	
32	井戸2	弥生土器	高杯	—	—	—	ヘラ描沈線4条	シボリ	灰黄(2.5Y7/2)	長石，石英，雲母，角閃石，赤色粒	
33	土壙1	弥生土器	壺	(14.3)	—	—	ヨコナデ、ミガキ		浅黄橙(10YR8/3)	長石，石英，角閃石，赤色粒	歪みややあり、穿孔2ヶ残存(2ヶ1対?)
34	土壙1	弥生土器	壺	—	—	—	4条の重弧文、平行ヘラ描沈線2条、ミガキ		浅黄橙(10YR8/4)	長石，石英，黒色粒，角閃石	
35	土壙1	弥生土器	壺	—	—	—	4条の重弧文、平行ヘラ描沈線3条、ミガキ		浅黄橙(10YR8/4)	長石，石英，黒色粒，赤色粒	
36	土壙1	弥生土器	壺	—	—	—	ミガキ、4条の重弧文、重弧文の間の垂直方向の沈線4条、平行ヘラ描沈線1条	オサエ	橙(5YR7/8)	長石，石英，黒色粒	
37	土壙1	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描沈線3条、刺突2段		灰(7.5Y4/1)	長石，石英	

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			特徴		色調	胎土	備考
				口径	器高	底脚径	外面	内面			
38	土壙1	弥生土器	甕	(22.4)	—	—	ヘラ描沈線5条、口縁部刻目		灰白(10YR8/2)	長石，石英，赤色粒，黒色粒	
39	土壙1	弥生土器	鉢	(33.6)	—	—	オサエ、ナデ	オサエ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
40	土壙2	弥生土器	蓋	つまみ部 7.1	11.4	基部 21.6	オサエ、ナデ		灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，赤色粒，黒色粒	
41	土壙2	弥生土器	壺	12.3	—	—	オサエ、ミガキ、工具ナデ、ナデ	ミガキ、工具ナデ	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，角閃石，雲母	
42	土壙2	弥生土器	壺	(13.8)	—	—	ミガキ、削り出し突帯2条	ミガキ	褐灰(10YR4/1)	長石，石英，黒色粒	
43	土壙2	弥生土器	壺	—	—	7.7～8.1	ミガキ	オサエ、当て具痕	浅黄橙(10YR8/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
44	土壙2	弥生土器	壺	—	—	12.3	ケズリ、ナデ	丁寧なミガキ	灰黄褐(10YR4/2)	長石，石英，雲母，角閃石	内面円滑
45	土壙2	弥生土器	甕	(16.7)	—	—	口縁部刻目、ヘラ描沈線3条	オサエ	浅黄橙(10YR8/3)	長石，石英，黒色粒，赤色粒	歪みあり
46	土壙2	弥生土器	甕	—	—	7.2～7.5		オサエ	灰褐(7.5YR4/2)	長石，石英，角閃石	
47	土壙2	弥生土器	甕	—	—	3.7～4.0			灰褐(7.5YR6/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	手づくねではない
48	土壙2	弥生土器	壺	—	—	7.4		ミガキ、オサエ、ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	長石，石英，雲母，角閃石	
49	土壙3	弥生土器	壺	(14.7)	—	—			浅黄橙(10YR8/3)	長石，石英，角閃石，赤色粒	歪みあり
50	土壙3	弥生土器	壺	—	—	10.6	オサエ、ナデ、当て具痕		浅黄(2.5Y7/3)	長石，石英，黒色粒	
51	土壙3	弥生土器	甕	(18.4)	—	—	口縁部刻目、ヘラ描沈線2条、ヨコナデ		灰褐(7.5YR4/2)	長石，石英，角閃石	
52	土壙3	弥生土器	甕	(21.6)	—	—	口縁部刻目、ヘラ描沈線2条、ヨコナデ	オサエ	にぶい黄橙(10YR6/3)	長石，石英，角閃石	煤付着、歪みあり
53	土壙3	弥生土器	甕	—	—	—	口縁部刻目、ヘラ描沈線3条		灰褐(7.5YR6/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	歪みあり
54	土壙3	弥生土器	甕	(23.6)	—	—	口縁部刻目、ヘラ描沈線4条、工具ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	橙(7.5YR6/6)	長石，石英，黒色粒，角閃石	煤？付着
55	土壙3	弥生土器	甕	(35.0)	—	—	ヘラ描沈線4条、ミガキ、オサエ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	橙(7.5YR6/6)	長石，石英，角閃石，雲母	歪みあり
56	土壙3	弥生土器	甕	—	—	7.6	ミガキ	ミガキ	褐灰(7.5YR4/1)	長石，石英	
57	土壙3	弥生土器	甕	—	—	7.9		オサエ	浅黄橙(7.5YR8/6)	長石，石英，角閃石，赤色粒，黒色粒	
58	土壙3	弥生土器	甕	—	—	8.0	工具ナデ、オサエ、ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR6/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	焼成後底部穿孔
59	土壙3	弥生土器	壺	—	—	11.7～12.0	ミガキ、オサエ、ナデ、当て具痕	ミガキ	にぶい橙(7.5YR7/3)	長石，石英，角閃石，赤色粒，黒色粒	焼成後底部穿孔、外底面籾圧痕4ヶ所
60	土壙3	弥生土器	鉢	—	—	—	沈線1条		灰白(10YR8/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石	
61	土壙3	弥生土器	ミニチュア土器	—	—	1.6			浅黄橙(10YR8/3)	長石，石英，角閃石	中心に焼成前穿孔
62	土壙4	弥生土器	甕	(18.0)	—	—	刺突、ミガキ、オサエ	ミガキ、オサエ	にぶい黄橙(10YR7/3)，灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
63	土壙13	弥生土器	甕	—	—	5.1	ハケメ、オサエ、ナデ	ケズリ	灰黄(2.5Y7/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石，赤色粒	
64	土壙13	弥生土器	台付鉢	11.0	6.9	4.1	オサエ		浅黄橙(10YR8/4)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
65	土壙14	弥生土器	甕	—	—	—	ハケメ、オサエ	ケズリ	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石，石英，角閃石	
66	溝1	弥生土器	壺	—	—	—	沈線2条		浅黄橙(7.5YR8/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
67	溝1	弥生土器	壺	—	—	—		工具ナデ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，黒色粒，赤色粒，角閃石	
68	溝1	弥生土器	壺	—	—	9.8	ハケメ		赤(10R5/8)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
69	溝1	弥生土器	甕	—	—	—	沈線12条以上、口縁部刻目		にぶい褐(7.5YR5/4)	長石，石英，角閃石	
70	溝1	弥生土器	甕	—	—	—	沈線7条以上、刺突		にぶい褐(7.5YR5/4)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
71	溝1	弥生土器	鉢	(14.6)	—	—	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石，石英，黒色粒，赤色粒	やや歪みあり
72	溝1	弥生土器	甕	—	—	8.4			橙(7.5YR7/6)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
73	溝1	弥生土器	甕	—	—	(9.1)	オサエ、ナデ	オサエ、工具ナデ、ナデ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
74	溝2	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラ描沈線8条		橙(7.5YR6/6)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
75	溝3	弥生土器	甕	16.2	—	—	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ、2列の刺突	ヨコナデ、ミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石，石英，角閃石	
76	溝6	弥生土器	壺	9.3	14.6	3.6	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	長石，石英，角閃石，雲母	煤付着
77	溝6	弥生土器	長頸壺	—	—	—	ヘラ描沈線11条以上		浅黄橙(7.5YR8/6)	長石，石英，角閃石	
78	溝6	弥生土器	壺	—	—	—	口縁部に3個1単位の棒状浮文	ヨコナデ	にぶい赤橙(10R6/4)	長石，石英，角閃石	
79	溝6	弥生土器	甕	(13.8)	—	—	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ケズリ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石	間隔の空いたミガキ
80	溝6	弥生土器	壺	—	—	7.2		ケズリ	橙(5YR7/8)	長石，石英，赤色粒，角閃石	
81	溝6	弥生土器	鉢	(5.6)～6.6	4.6	4.0	オサエ		橙(5YR7/8)	長石，石英，角閃石，黒色粒	歪み非常にあり(口縁部精円形)
82	溝6	弥生土器	鉢	(9.9)	6.2	5.8	オサエ、ナデ	ハケメ	浅黄橙(10YR8/4)，橙(5YR6.6)	長石，石英，角閃石	胎土精良
83	溝6	弥生土器	鉢	—	—	(5.4)			にぶい黄橙(10YR6/4)	長石，石英，赤色粒，黒色粒	
84	溝6	弥生土器	鉢	(10.1)	7.7	(3.7)～4.2	ミガキ、ナデ、当て具痕	ハケメ、ナデ、シボリ	橙(5YR6/8)	長石，角閃石，赤色粒	胎土精良、歪みあり
85	落ち込み	弥生土器	蓋	つまみ部 7.0～7.6	—	—			灰褐(7.5YR5/2)	長石，石英，黒色粒	
86	落ち込み	弥生土器	蓋	—	—	基部径 (9.8)	オサエ、ナデ、円形・直線のヘラ描沈線	オサエ、ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	長石，石英，角閃石	2ヶ1対の焼成前穿孔
87	落ち込み	弥生土器	壺	(18.4)	—	—	ミガキ、ヘラ描沈線3条以上		にぶい赤褐(5YR5/4)	長石，石英，赤色粒，黒色粒	
88	落ち込み	弥生土器	壺	(15.2)	—	—	ミガキ、沈線2条以上	ミガキ	灰白(10YR7/2)	長石，石英，雲母，角閃石，赤色粒	
89	落ち込み	弥生土器	壺	(15.8)	—	—	ミガキ	ミガキ	橙(7.5YR7/6)	長石，石英，雲母，角閃石，赤色粒	焼成前穿孔2ヶ残存
90	落ち込み	弥生土器	壺	—	—	—	ミガキ、ヘラ描沈線8条以上	ミガキ	橙(5YR6/6)	長石，石英，角閃石，赤色粒，雲母，黒色粒	
91	落ち込み	弥生土器	壺	(15.6)	—	—	ミガキ、段あり	ミガキ	灰黄(2.5Y7/2)	長石，石英，雲母，赤色粒，黒色粒	
92	落ち込み	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラ描沈線3条、ミガキ		灰白(10YR7/1)	長石，石英，黒色粒，赤色粒	

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			特徴		色調	胎土	備考
				口径	器高	底脚径	外面	内面			
93	落ち込み	弥生土器	壺	—	—	—	沈線2条		にぶい褐(7.5YR6/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
94	落ち込み	弥生土器	壺	—	—	—	段あり、ミガキ	工具ナデ	橙(5YR7/8)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
95	落ち込み	弥生土器	壺	—	—	9.8～10.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、オサエ	にぶい橙(7.5YR6/4)	長石，石英，角閃石，雲母，黒色粒，赤色粒	
96	落ち込み	弥生土器	壺	—	—	8.2			明赤褐(5YR5/6)	長石，石英，黒色粒，角閃石	
97	落ち込み	弥生土器	壺	—	—	(7.6)			にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，黒色粒，赤色粒	
98	落ち込み	弥生土器	鉢	(20.6)	—	—	ミガキ、ナデ	2段の刺突、ミガキ	橙(7.5YR6/6)	長石，石英，黒色粒，赤色粒，角閃石	
99	落ち込み	弥生土器	甕	(18.4)	—	—	ヨコナデ、オサエ		灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，雲母，黒色粒，角閃石，赤色粒	
100	落ち込み	弥生土器	甕	(20.6)	—	—	ヨコナデ、工具ナデ、ヘラ描沈線2条、オサエ	オサエ	灰褐(7.5YR4/2)	長石，石英，角閃石，雲母	歪みあり
101	落ち込み	弥生土器	甕	(19.8)	—	—	ヘラ描沈線2条、口縁部刻目、ヨコナデ、オサエ、工具ナデ	オサエ、ヨコナデ、ミガキ	灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，雲母，角閃石	歪みややあり
102	落ち込み	弥生土器	甕	(20.4)	—	—	ヘラ描沈線2条、口縁部刻目、ヨコナデ、オサエ、ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	灰黄褐(10YR4/2)	長石，石英，雲母，角閃石，赤色粒，黒色粒	歪みあり、煤？付着
103	落ち込み	弥生土器	甕	—	—	—	オサエ、ナデ、ヘラ描沈線3条、口縁部刻目	オサエ、ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	長石，石英，赤色粒，角閃石	
104	落ち込み	弥生土器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ヘラ描沈線4条、口縁部刻目	オサエ、ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石，石英，赤色粒，角閃石	
105	落ち込み	弥生土器	甕	(25.2)	—	—	ヘラ描沈線2～3条、ヨコナデ、工具ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒	歪みあり
106	落ち込み	弥生土器	甕	(22.5)	—	—	ヘラ描沈線3条、口縁部刻目、ヨコナデ、工具ナデ	ヨコナデ、オサエ	灰褐(7.5YR4/2)	長石，石英，雲母	煤付着
107	落ち込み	弥生土器	甕	(18.0)	—	—	オサエ、ヨコナデ、ヘラ描沈線4条		にぶい黄橙(10YR7/4)	長石，石英，雲母，角閃石，赤色粒	
108	落ち込み	弥生土器	甕	(25.5)	—	—	ヘラ描沈線4条、口縁部刻目、ヨコナデ、オサエ、工具ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	橙(5YR7/8)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
109	落ち込み	弥生土器	甕	(37.9)	—	—	ヘラ描沈線4条、オサエ、ナデ、ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石，石英，黒色粒	
110	落ち込み	弥生土器	甕	—	—	4.5～4.9	ミガキ		にぶい赤褐(5YR5/4)	長石，石英，角閃石，雲母	丁寧な焼成前底部穿孔
111	落ち込み	弥生土器	甕	—	—	(7.8)	オサエ、ナデ？	工具ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	長石，石英，角閃石	
112	落ち込み	弥生土器	甕	—	—	(7.2)	工具ナデ、オサエ、ナデ	工具ナデ、オサエ、ナデ	褐灰(7.5YR4/1)	長石，石英，雲母，角閃石，黒色粒	歪みあり
113	落ち込み	弥生土器	ミニチュア土器	1.7～1.8	2.0	1.7～2.0	オサエ、ナデ、刺突2ヶ	オサエ、ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	長石，石英，雲母，赤色粒，黒色粒	
114	自然河道	弥生土器	壺	(19.8)	—	—	鋸歯文、ヨコナデ、工具ナデ、ナデ	ヨコナデ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，黒色粒，角閃石，赤色粒	
115	自然河道	弥生土器	壺	(25.9)	—	—	ヨコナデ、2列の刺突、鋸歯文、沈線1条		灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
116	自然河道	弥生土器	壺	—	—	—	ヨコナデ、鋸歯文、口縁端部・外面に2列の刺突	2列の刺突、ヘラ描の斜線文	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
117	自然河道	弥生土器	壺	—	—	—	鋸歯文、凹線?1条、2列の刺突、ヨコナデ	3列の刺突、ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，赤色粒，角閃石	
118	自然河道	弥生土器	壺	(25.6)	—	—	鋸歯文、凹線5条、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	浅黄橙(10YR8/4)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	鋸歯文の方向変わる
119	自然河道	弥生土器	壺	(13.2)	—	—	ヨコナデ、櫛描波状文	櫛描波状文、2連の刺突	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石，石英，角閃石	
120	自然河道	弥生土器	壺	(13.5)	—	—	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ、ナデ、鋸歯文	ヨコナデ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石	
121	自然河道	弥生土器	壺	(21.0)	—	—		ヨコナデ、ケズリ？	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
122	自然河道	弥生土器	壺	(16.6)	—	—	口縁部凹線?2条、頸部沈線1条、ハケメ	ヨコナデ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
123	自然河道	弥生土器	長頸壺	—	—	—	沈線17条、上側2段の刺突、下側刺突	オサエ、ナデ、ケズリ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
124	自然河道	弥生土器	長頸壺	20.4	—	—	刺突5～6段、口縁部凹線?2条、ヨコナデ、ハケメ	オサエ	橙(5YR7/6)	長石，石英，黒色粒，赤色粒	
125	自然河道	弥生土器	長頸壺	—	—	—	ヨコナデ、工具ナデ、ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ、工具ナデ、ケズリ	灰黄(2.5Y7/2)	長石，石英，角閃石，雲母	
126	自然河道	弥生土器	壺	—	—	5.4		ミガキ	浅黄橙(7.5YR8/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
127	自然河道	弥生土器	壺	—	—	9.0～9.5	ミガキ、ケズリ	ユビオサエ、工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石，石英，雲母，黒色粒，赤色粒，角閃石	
128	自然河道	弥生土器	甕	16.2	—	—	ヨコナデ、ハケメ	オサエ、ナデ、工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
129	自然河道	弥生土器	甕	(14.5)	—	—		ケズリ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒，黒色粒	
130	自然河道	弥生土器	甕	(16.8)	—	—		ケズリ	黄橙(7.5YR7/8)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
131	自然河道	弥生土器	甕	13.8	—	4.2	ハケメ、オサエ、ヨコナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ、ケズリ	浅黄(2.5Y7/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
132	自然河道	弥生土器	甕	(21.0)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	浅黄橙(7.5YR8/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
133	自然河道	弥生土器	甕	—	—	(5.0)	ハケメ、オサエ、ナデ	ケズリ	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
134	自然河道	弥生土器	甕	—	—	6.7	ハケメ、オサエ、ナデ	ケズリ	灰黄褐(10YR5/2)	長石，石英，角閃石，雲母，赤色粒	
135	自然河道	弥生土器	甕	—	—	(4.6)	ミガキ、オサエ、ナデ	ケズリ	橙(5YR6/6)	長石，石英，角閃石，黒色粒	焼成後底部穿孔
136	自然河道	弥生土器	鉢	(15.8)	—	—	オサエ、ナデ	ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，黒色粒，赤色粒，角閃石	
137	自然河道	弥生土器	鉢	(16.0)	—	—			灰白(10YR8/2)	長石，石英，赤色粒，角閃石	
138	自然河道	弥生土器	鉢	(25.6)	—	—		ミガキ、ハケメ	にぶい黄橙(10YR6/3)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
139	自然河道	弥生土器	鉢	(30.0)	—	—	ヨコナデ、凹線3条	ヨコナデ、工具ナデ	灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
140	自然河道	弥生土器	鉢	(32.8)	(19.0)	8.3	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	2つの破片より復元
141	自然河道	弥生土器	台付鉢	—	—	(4.0)	ヨコナデ		灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
142	自然河道	弥生土器	台付鉢	(9.5)	8.2	(5.5)	ハケメ、ナデ、オサエ	ハケメ	灰黄(2.5Y7/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
143	自然河道	弥生土器	台付鉢	—	—	10.1		ヨコナデ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			特徴		色調	胎土	備考
				口径	器高	底脚径	外面	内面			
144	自然河道	弥生土器	製塩土器	—	—	(4.4)	オサエ、ケズリ、ナデ	ナデ、ケズリ	灰白(5YR8/2)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
145	自然河道	弥生土器	製塩土器	—	—	(6.4)	オサエ		浅黄橙(10YR8/3)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
146	自然河道	弥生土器	高杯	(15.7)	—	—	櫛描波状文、沈線？凹線？1条、ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	灰黄褐(10YR6/2)	長石，石英，角閃石	器壁薄い
147	自然河道	弥生土器	高杯	(25.8)	—	—	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	浅黄橙(7.5YR8/3)，橙(5YR6/8)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	
148	自然河道	弥生土器	高杯	(27.2)	—	—	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	浅黄橙(10YR8/4)	長石，石英，角閃石	
149	自然河道	弥生土器	高杯	—	—	(17.6)	沈線3条、櫛状工具による刺突、下端部に刺突	シボリ、ナデ、ハケメ	灰白(10YR8/2)	長石，石英，赤色粒，角閃石	焼成前穿孔3ヶ残存(残存位置より2ヶ1対が2ヶ所)
150	自然河道	弥生土器	高杯	—	—	16.7～16.9	ハケメ、ミガキ	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，雲母，黒色粒，角閃石	穿孔4ヶ
151	自然河道	弥生土器	高杯	—	—	—	沈線9条、ハケメ、ナデ	シボリ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，角閃石，黒色粒，赤色粒	穿孔3ヶ残存(残存位置より全体穿孔4ヶ)
152	自然河道	弥生土器	高杯	—	—	(20.3)	刺突3段	シボリ	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石，石英，角閃石，雲母，赤色粒	穿孔1ヶ残存
153	自然河道	弥生土器	高杯	—	—	(14.6)	ハケメ、ミガキ、沈線1条	ハケメ、オサエ、シボリ	灰黄(2.5Y7/2)	長石，石英，角閃石，赤色粒	穿孔1ヶ残存
154	自然河道	弥生土器	高杯	—	—	(20.1)	ミガキ、沈線4条・2条	シボリ	橙(5YR7/8)	長石，石英，角閃石，赤色粒	穿孔2ヶ残存(高低差あり)
155	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	鋸歯文、沈線？1条、凹線？2条、3連の刺突、1列の刺突、ヨコナデ	鋸歯文、3連の刺突	浅黄橙(7.5YR8/3)	長石，石英，角閃石	
156	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	ヨコナデ、3連の刺突、刺突、鋸歯文、凹線？2条	ヨコナデ、3連の刺突、鋸歯文	橙(5YR7/8)	長石，石英，角閃石，雲母	
157	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	沈線36条、2～3連の刺突、貼り付け突帯1条、ヨコナデ、沈線？凹線？2条	鋸歯文、3連の刺突、沈線2条、貼り付け突帯？1条、ミガキ、ヨコナデ	橙(7.5YR7/6)，灰白(2.5Y8/2)	長石，石英，角閃石	
158	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	円孔3段以上、沈線6条以上、貼り付け突帯1条、刺突1段	当て具痕あり	浅黄橙(10YR7/3)	長石，石英，角閃石，赤色粒	残存状況より円孔4ヶ所3段以上
159	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	ヨコナデ、ハケメ	ミガキ、2列の刺突	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，角閃石，黒色粒	
160	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	鋸歯文、貼り付け突帯1条、2連の刺突、4段以上の刺突、工具ナデ、ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石，石英，赤色粒，角閃石	
161	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	(36.0)	鋸歯文、凹線？2条、貼り付け突帯1条、2連の刺突、2連以上の刺突、工具ナデ	工具ナデ、ミガキ？	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
162	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	ハケメ、鋸歯文、刺突、貼り付け突帯	工具ナデ	浅黄橙(10YR8/3)，橙(5YR7/6)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
163	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	鋸歯文、刺突		橙(5YR7/6)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
164	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	(23.0)	鋸歯文		橙(5YR7/6)	長石，石英，雲母，角閃石，赤色粒	
165	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	鋸歯文、刺突1列、沈線3条	ヨコナデ	浅黄橙(10YR8/3)	長石，石英，角閃石，赤色粒	
166	自然河道	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	貼り付け突帯1条、1～4列の刺突5段以上、ヨコナデ、ハケメ、ミガキ	ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石，石英，角閃石，赤色粒	穿孔2ヶ残存(残存位置より穿孔全体6ヶ？)
167	溝7	須恵器	杯蓋	(11.4)	3.8	2.4	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	青灰(5B6/1)	長石、石英、黒色粒	
168	溝7	須恵器	杯蓋	(11.6)	3.9	(3.8)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
169	溝7	須恵器	高杯	(12.8)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
170	溝7	須恵器	高杯	—	—	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	
171	溝7	須恵器	高杯	(12.0)	9.9	9.6	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	歪みあり
172	溝7	須恵器	甕	—	—	2.9	ヨコナデ、ヘラケズリ、凹線1条	ヨコナデ	灰(N6/)	長石、石英、角閃石	
173	溝7	須恵器	甕	(37.2)	—	—	ヨコナデ、櫛描波状文、沈線	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、雲母	
174	溝7	須恵器	甕	—	—	—	ヨコナデ、櫛描波状文、沈線	ヨコナデ、同心円タタキ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	外面の一部に自然釉付着
175	古墳時代河道	須恵器	杯蓋	14.0	5.2	5.2	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	片側のみ歪みあり
176	古墳時代河道	須恵器	杯蓋	11.7	3.8	5.5	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
177	古墳時代河道	須恵器	杯身	(10.4)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	
178	古墳時代河道	須恵器	杯身	(13.6)	3.8	(3.4)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(10Y8/1)	長石、石英	
179	古墳時代河道	須恵器	杯身	12.8	—	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(10Y6/1)	長石、石英、黒色粒	外面に自然釉付着、杯蓋の一部が融着
180	古墳時代河道	須恵器	高杯	(14.0)	11.6	11.4	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
181	古墳時代河道	須恵器	高杯	13.3	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	内外面に自然釉および煤付着
182	古墳時代河道	須恵器	高杯	—	—	(9.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
183	古墳時代河道	須恵器	脚付椀	(7.2)	—	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	内外面に自然釉付着
184	古墳時代河道	須恵器	脚付椀	(9.4)	—	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	明青灰(5B7/1)	長石、石英、黒色粒	内外面に自然釉付着
185	古墳時代河道	須恵器	脚付椀	(10.2)	—	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
186	古墳時代河道	須恵器	壺	(7.8)	18.0	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰(5B6/1)	長石、石英	
187	古墳時代河道	須恵器	甕	—	—	(5.2)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
188	古墳時代河道	須恵器	壺	(11.8)	—	—	ヨコナデ、平行タタキ	ヨコナデ、同心円タタキ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
189	古墳時代河道	須恵器	甕	(18.8)	—	—	ヨコナデ、平行タタキのちカキメ	ヨコナデ、同心円タタキ	青灰(5PB6/1)	長石、石英	
190	古墳時代河道	須恵器	甕	15.5	—	—	ヨコナデ、平行タタキのちカキメ	ヨコナデ、同心円タタキ	灰白(5Y8/1)	長石、石英、黒色粒	
191	古墳時代河道	須恵器	甕	(45.0)	—	—	ヨコナデ、カキメ、凹線	ヨコナデ	青灰(5B5/1)	長石、石英	
192	掘立柱建物4(P-52)	土師器	椀	(13.4)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(2.5Y8/1)	長石、石英	
193	掘立柱建物4(P-59)	須恵器	椀	—	—	—	ヨコナデ、重ね焼き痕あり	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	
194	掘立柱建物4(P-60)	瓦器	椀	(14.2)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ後ヘラミガキ	灰(N5/)	長石、石英	
195	掘立柱建物4(P-57)	瓦器	小皿	(9.2)	1.6	(4.8)	ヨコナデ、底部は不定方向ナデ	ヨコナデ後ヘラミガキ	灰(N5/)	長石、石英	
196	掘立柱建物4(P-54)	須恵器	鉢	(29.2)	9.4	(10.3)	ヨコナデ、底部は回転糸切り	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	
197	掘立柱建物4(P-57)	土師器	鍋	(31.6)	—	—	ナデ	ヨコハケ	にぶい黄褐(10YR5/3)	長石、石英、角閃石、赤色粒	外面に煤付着

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			特徴		色調	胎土	備考
				口径	器高	底脚径	外面	内面			
198	掘立柱建物5 (P-186)	土師器	小皿	8.0	1.6	5.7	ヨコナデ、底部は回転糸切り後板状工具による圧痕	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色粒	外面に煤付着
199	掘立柱建物5 (P-216)	須恵器	坏(椀)	(14.0)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰(5BG6/1)	長石、石英、黒色粒	
200	掘立柱建物5 (P-186)	土師器	椀	14.0	5.0	5.8	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐(10YR6/2)	長石、石英、角閃石、雲母	
201	掘立柱建物5 (P-186)	瓦質土器	鍋	(22.0)	13.3	9.0	ハケ	ヨコナデ、ユビオサエ後ナデ	灰白(N6/)	長石、石英、雲母	外面に煤付着
202	掘立柱建物5 (P-203)	土師器	鍋?	(34.2)	—	—	ナデ	ナデ後ヨコハケ	橙(7.5YR6/6)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色粒	内外面に煤付着
203	掘立柱建物6 (P-209)	土師器	小皿	7.5	1.6	5.9	ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石、石英、雲母、赤色粒	
204	井戸4	土師器	小皿	(4.8)	1.1	(4.0)	ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	長石、石英、赤色粒	
205	井戸6	須恵器	椀	(15.8)	—	—	ヨコナデ、重ね焼き痕あり	ヨコナデ	灰白(N7/)	長石、石英	
206	井戸7	土師器	椀	(14.0)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(5Y8/1)	長石、石英、赤色粒	
207	井戸7	瓦器	椀	—	—	(4.0)	ヨコナデ、貼り付け高台	ヨコナデ後ヘラミガキ	灰白(N7/)	長石、石英、黒色粒	
208	井戸7	青磁器	碗	—	—	(4.8)	ヨコナデ、ケズリ、高台内部を除き施釉	ヨコナデ、施釉あり	灰白(N7/) 釉調:明緑灰(10GY7/1)	長石、石英	
209	井戸7	備前焼	擂鉢	(26.0)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、条線6条一単位	灰黄褐(10YR5/2)	長石、石英	
210	井戸7	備前焼	擂鉢	(26.8)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(2.5Y7/1)	長石、石英、角閃石	
211	井戸7	瓦質土器	鍋	(23.6)	—	—	ナデ	ヨコハケ	灰(N5/)	長石、石英、角閃石	
212	井戸7	平瓦		—	—	—					凸面に格子目叩き痕
213	溝8	備前焼	擂鉢	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、条線5条一単位	黄褐(2.5Y5/3)	長石、石英、黒色粒、赤色粒	
214	溝8	瓦器	鉢	—	—	(11.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白(5Y7/1)	長石、石英、黒色粒	
215	包含層	土師器	椀	(14.6)	5.6	(6.1)	ヨコナデ、貼り付け高台	ヨコナデ	灰白(5Y8/1)	長石、石英、赤色粒	
216	包含層	土師器	椀	(11.4)	3.3	(4.8)	ヨコナデ、貼り付け高台	ヨコナデ	灰白(5Y8/1)	長石、石英	
217	包含層	土師器	椀	—	—	(7.4)	ヨコナデ、貼り付け高台	ヨコナデ	灰白(5Y8/1)	長石、石英、角閃石	
218	包含層	青磁器	碗	(17.2)	—	—	ヨコナデ、施釉	ヨコナデ、施釉	灰白(7.5Y7/1) 釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	長石、石英	
219	包含層	土師器	鍋	(37.2)	—	—	ヨコナデ	ヨコハケ後ナデ	灰黄褐(10YR4/2)	長石、石英、角閃石、雲母	

第13表　石器・石製品観察表

掲載番号	遺構名	器種	計測最大値 (mm)			重量(g)	石材	時期・時代	残存	備考
			長さ	幅	厚さ					
S1	竪穴住居1	石鏃	30	15	4	1.83	サヌカイト	弥生時代中期中葉	完	凹基式
S2	竪穴住居1	石鏃	31	16	5	2.09	サヌカイト	弥生時代中期中葉	先端部欠損	凹基式
S3	竪穴住居1	スクレイパー	87	37	10	39.40	サヌカイト	弥生時代中期中葉	端部欠損	
S4	竪穴住居1	打製石包丁	141	55	11	118.10	サヌカイト	弥生時代中期中葉	完	
S5	竪穴住居1	砥石	76	50	58	297.90	班れい岩	弥生時代中期中葉	欠	一部磨製
S6	竪穴住居2	楔形石器	47	31	10	15.18	サヌカイト	弥生時代後期中葉	欠	
S7	井戸1	石鏃	14	12	2	0.50	サヌカイト	弥生時代前期中葉	先端部欠損	凹基式
S8	土壙12	磨製石包丁	34	43	8	11.23	頁岩	弥生時代	欠	
S9	溝3	磨製石包丁	44	40	6	14.98	絹雲母片岩	弥生時代中期中葉	3/4欠損	
S10	溝6	扁平片刃石斧?	89	25	13	56.70	緑色片岩	弥生時代後期中葉	欠	
S11	落ち込み	石鏃	15	15	3	0.64	サヌカイト	弥生時代前期中葉	先端部欠損	アメリカ式
S12	落ち込み	スクレイパー	47	45	7	16.72	サヌカイト	弥生時代前期中葉	完	
S13	落ち込み	スクレイパー	60	61	11	34.32	サヌカイト	弥生時代前期中葉	完	
S14	落ち込み	スクレイパー	52	60	7	22.71	サヌカイト	弥生時代前期中葉	完	
S15	自然河道	砥石	146	129	116	3,511.00	細粒花崗岩	弥生時代後期中葉	欠	断面不整八角形
S16	I区検出面	石錐	36	21	9	5.23	サヌカイト	弥生時代	つまみ部欠損	
S17	溝7	砥石	141	129	78	2,364.00	砂岩	弥生時代	欠	
S18	溝7	砥石	165	88	62	1,780.00	輝石安山岩	弥生時代	欠	
S19	井戸7	石鏃	22	17	3	1.29	サヌカイト	弥生時代	完	凹基式

第14表　鉄製品（鉄滓）観察表

掲載番号	遺構名	器種	計測最大値 (mm)			重量(g)	時期・時代	残存	備考
			長さ	幅	厚さ				
F1	井戸7	椀形鍛冶滓	60	56	27	118.00	中世?	欠	

図版 1

1　Ⅰ①区全景（東から）

2　Ⅰ①区全景（西から）

図版２

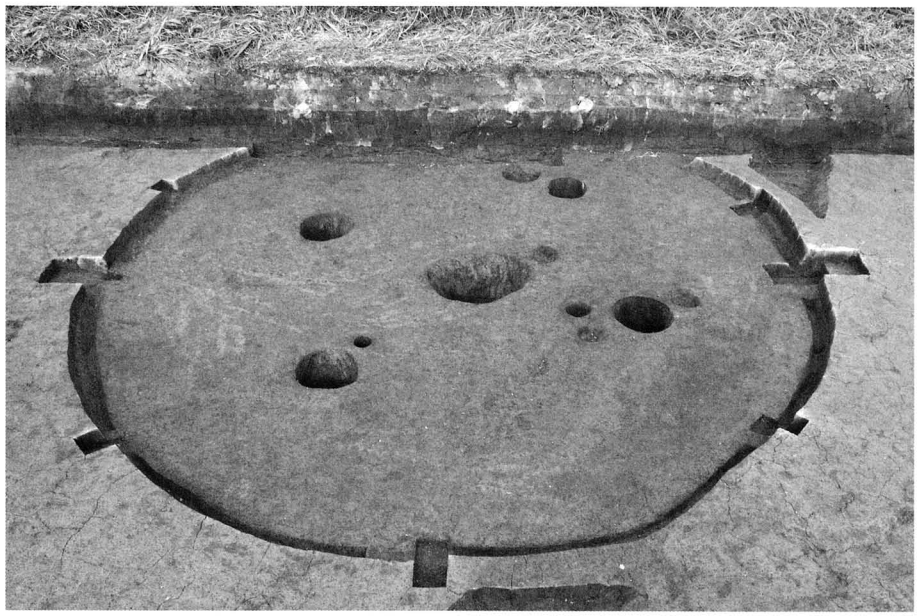
１　Ⅰ②区全景（東から）

２　Ⅰ②区西半（北から）

１　Ⅱ区全景（西から）

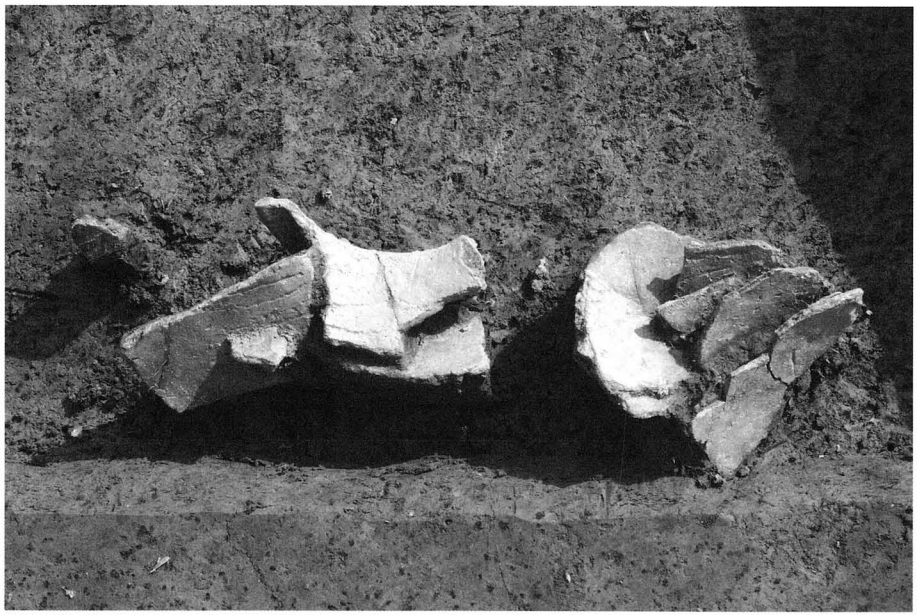
２　Ⅱ区全景（北から）

図版 4

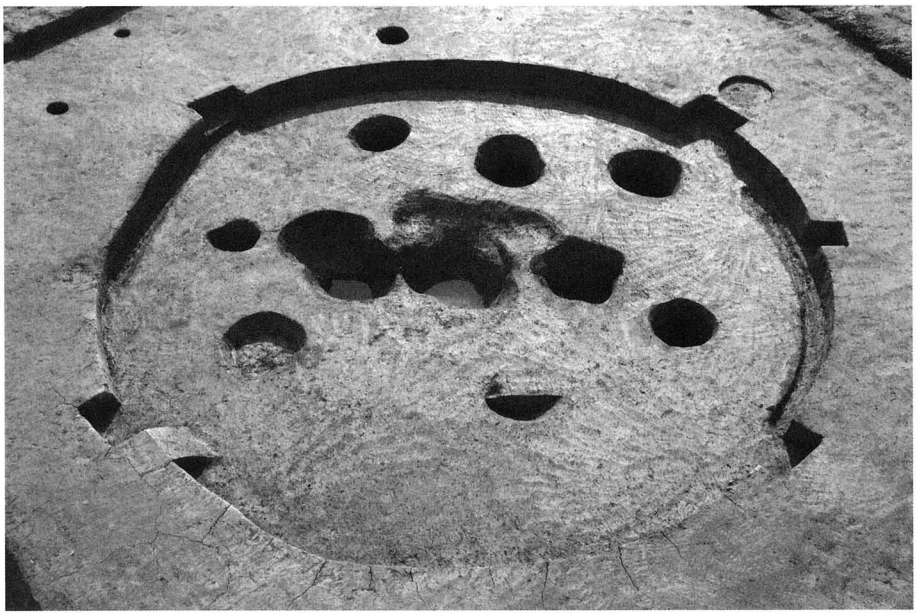


1　竪穴住居 1
（南から）

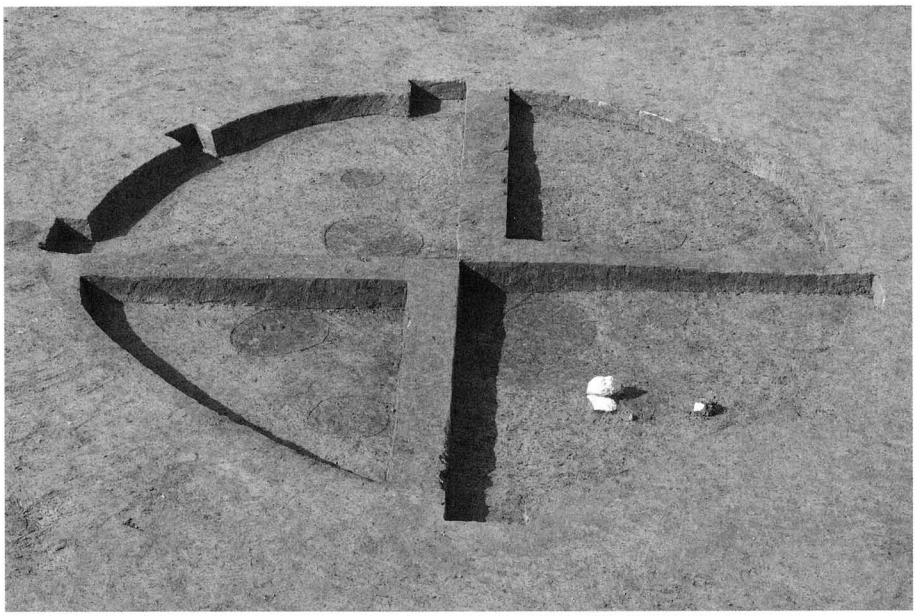
2　竪穴住居 1
遺物出土状況
（南西から）



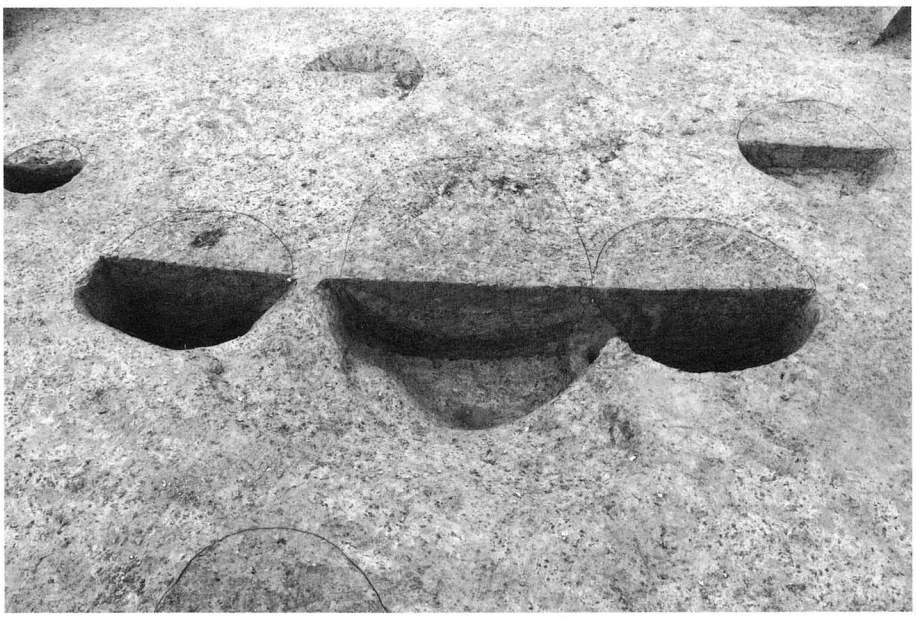
3　竪穴住居 1
遺物出土状況
（西から）



1　竪穴住居２
（北西から）



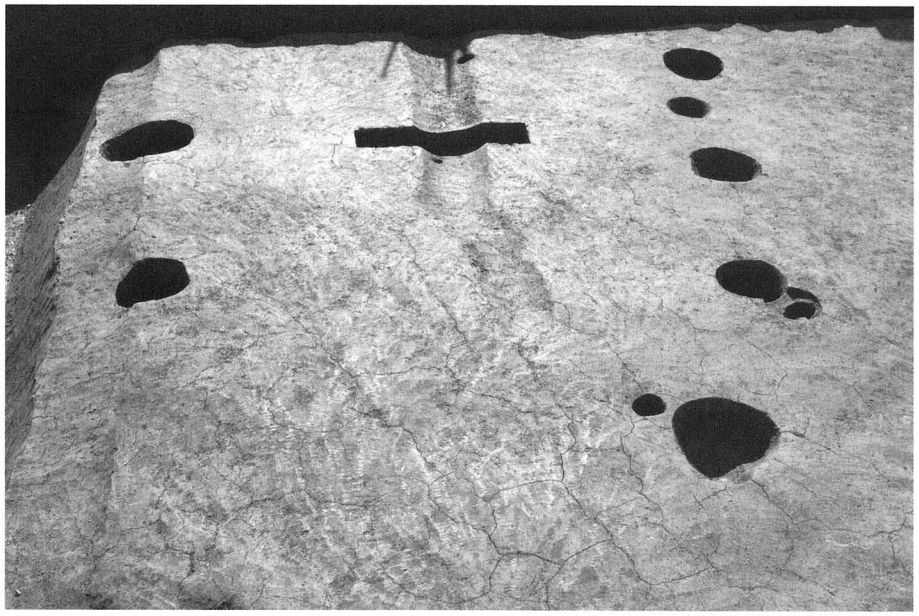
2　竪穴住居２
（南東から）



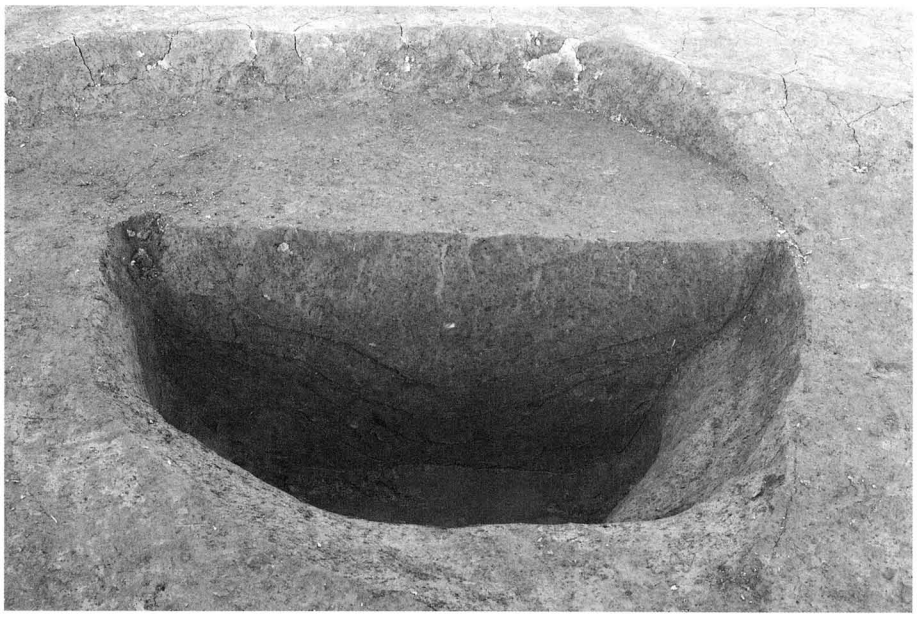
3　竪穴住居２
柱穴断面
（南東から）

図版 6

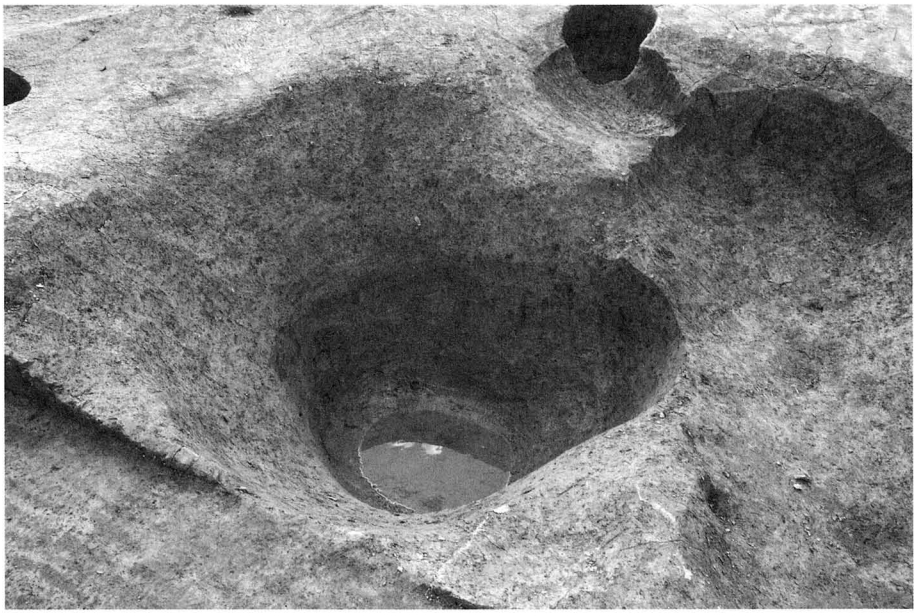
1　掘立柱建物１
（西から）



2　掘立柱建物２
（北から）



3　井戸３
（南から）



１　井戸１
（北から）

２　井戸１
遺物出土状況
（南東から）

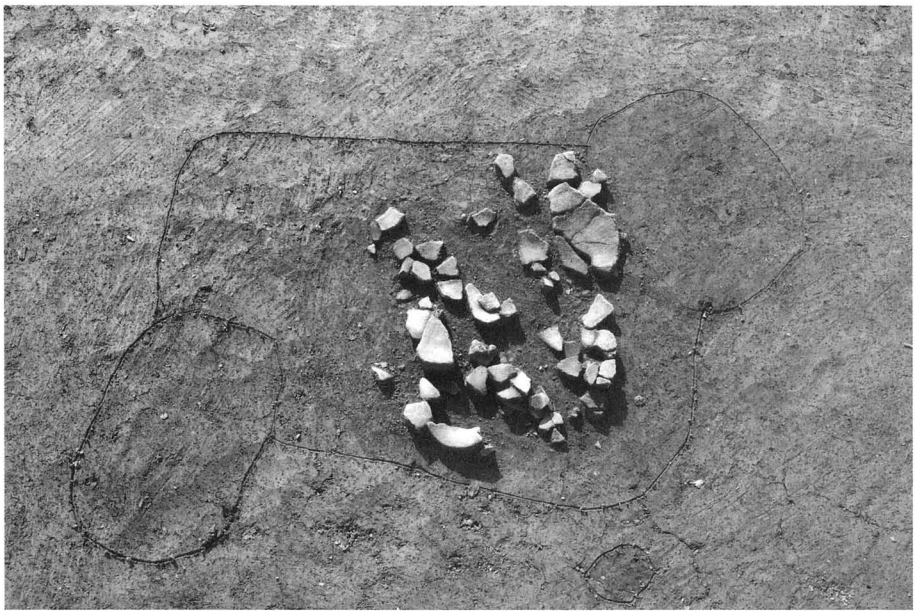
３　井戸１
遺物出土状況
（東から）

図版８

１　井戸２
（南東から）

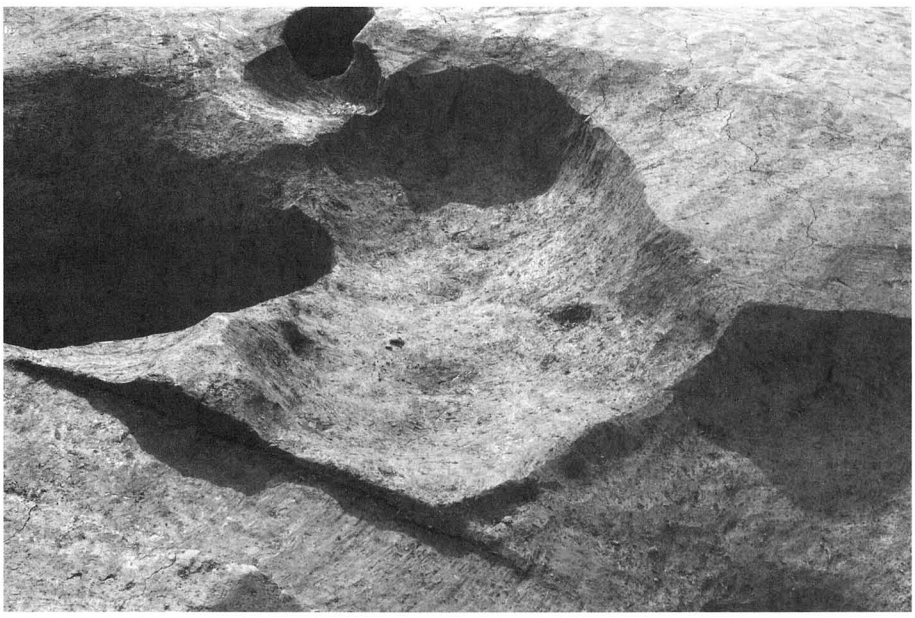
２　井戸２ベルト断面
（南から）

３　井戸２西壁断面
（南東から）



１　土壙１
遺物出土状況
（北から）

２　土壙２
遺物出土状況
（南西から）

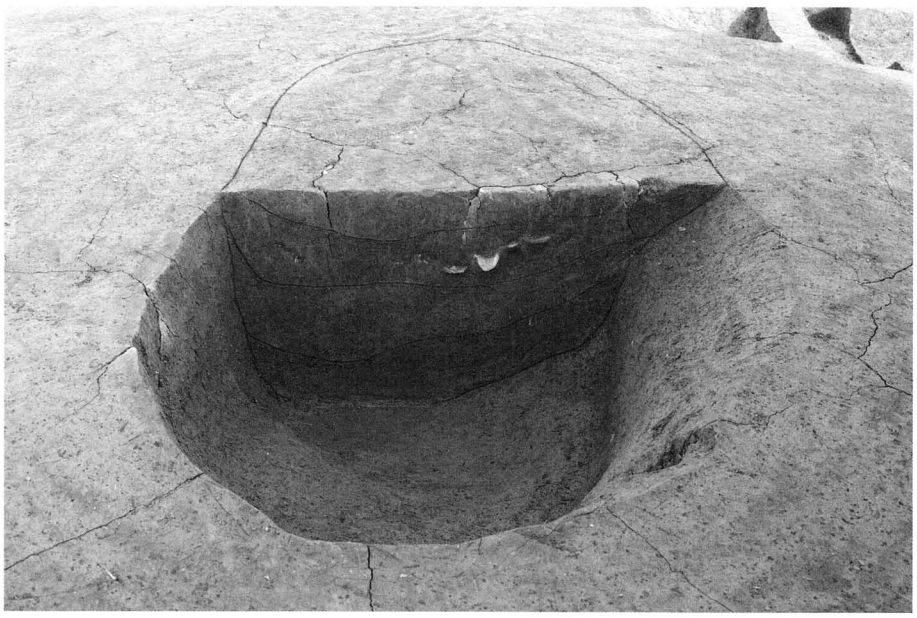


３　土壙３
（北東から）

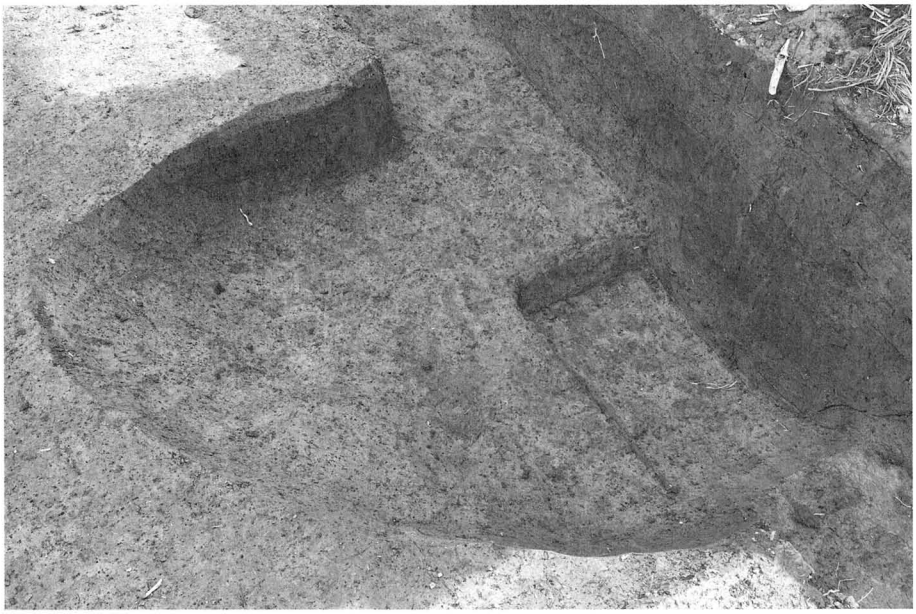
図版 10

1　土壙４
遺物出土状況
（北東から）

2　土壙５
（西から）

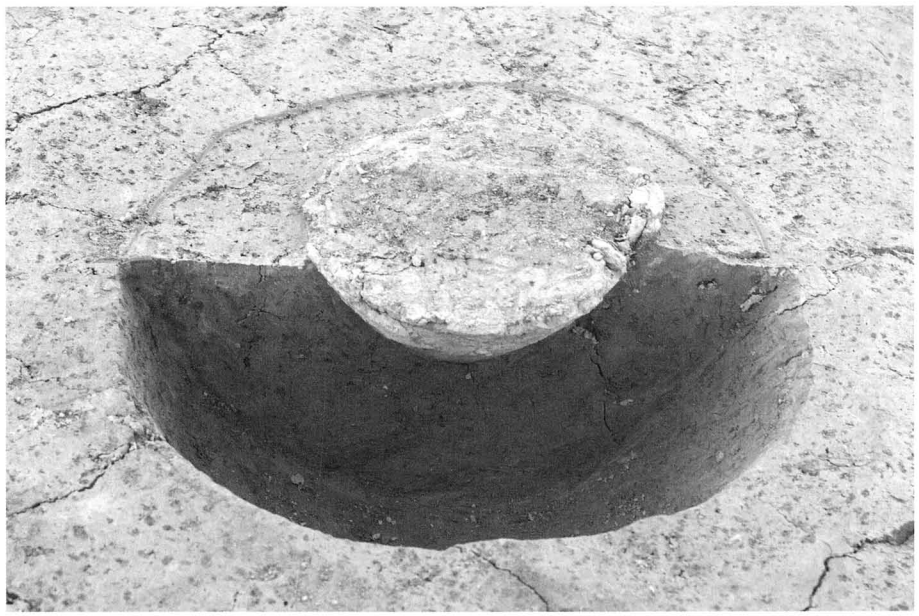


3　土壙７
（南西から）



1　土壙 11
（北西から）

2　土壙 13
遺物出土状況
（南東から）



3　土壙 14
遺物出土状況
（南から）

図版 12

1　溝１
（北東から）

2　溝１遺物出土状況
（南西から）

3　溝２
（南西から）

1　溝３
（北東から）

2　溝３北東部
（南西から）

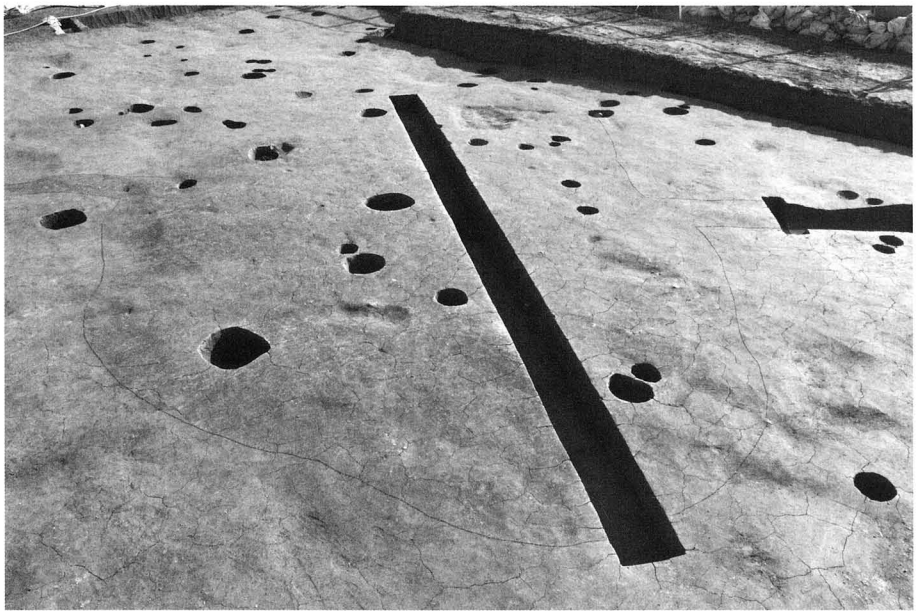
3　溝３遺物出土状況
（南西から）

図版 14

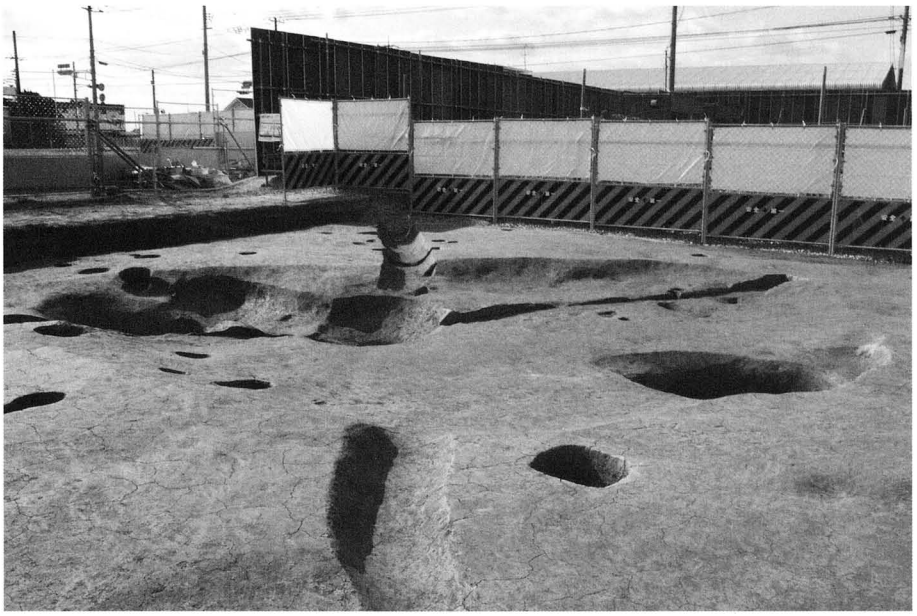
1　溝６南部
（南から）

2　溝６南壁土層断面
（北から）

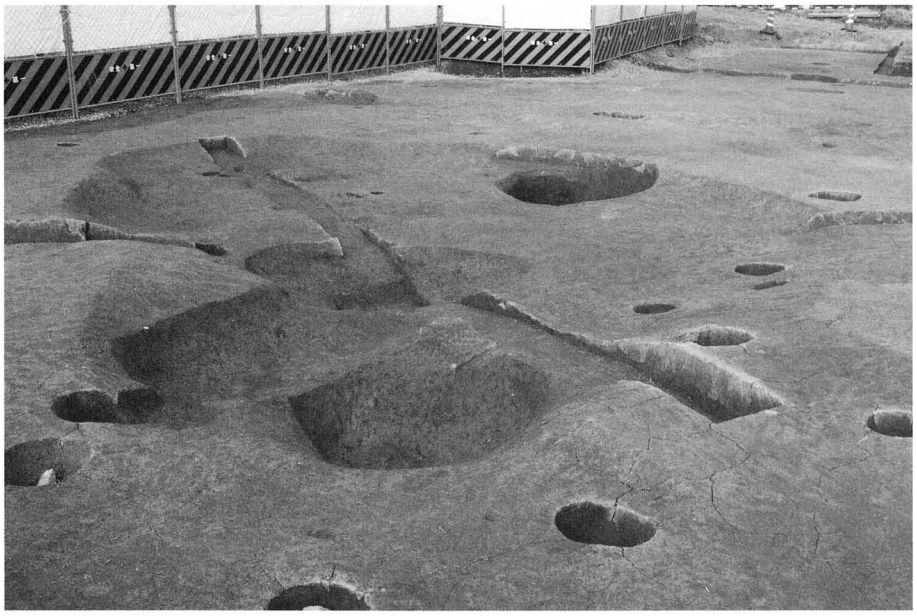
3　溝６北部
（北から）



1　落ち込み遺構
上面検出状況
（北西から）

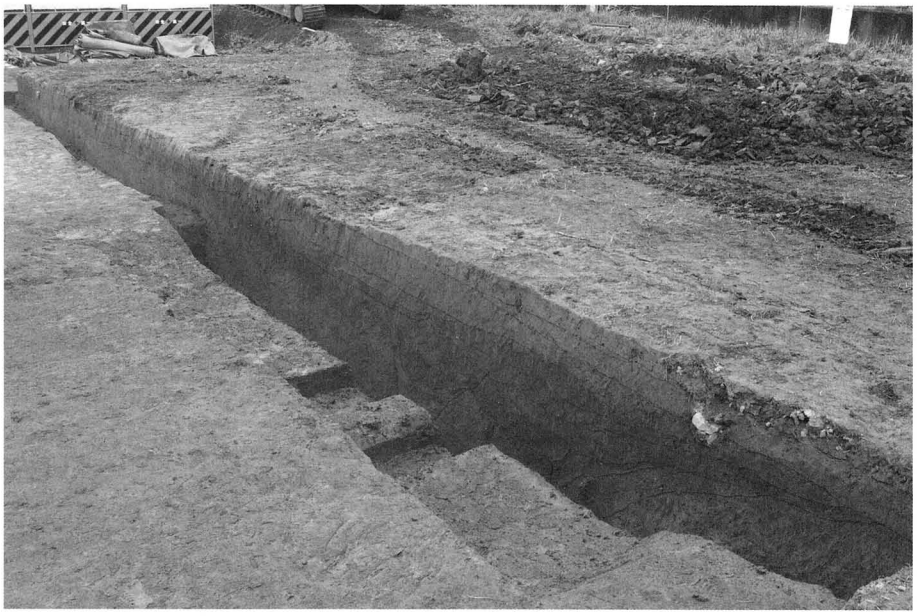


2　落ち込み遺構と溝３
（北東から）

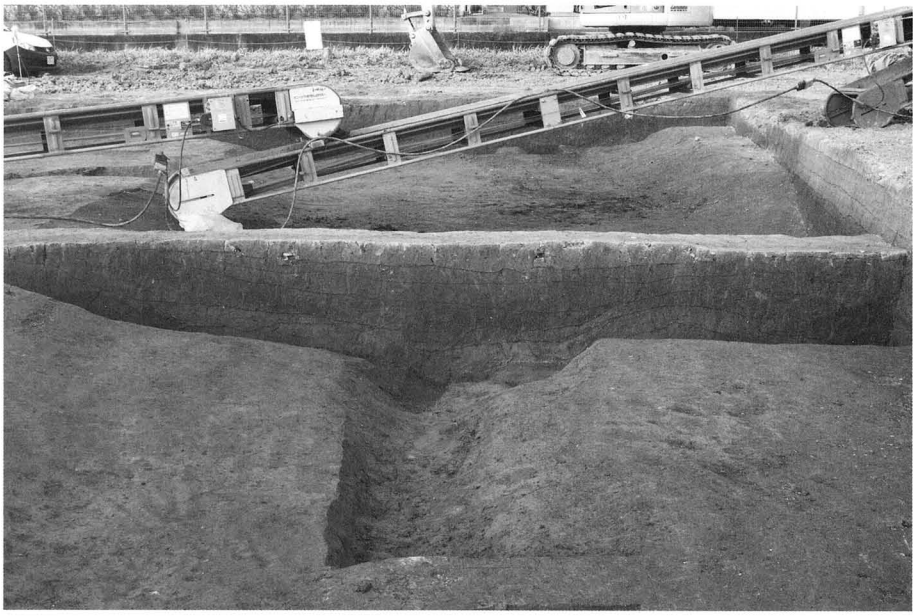


3　落ち込み遺構
（南東から）

図版 16



1　自然河道
北壁土層断面
（南東から）

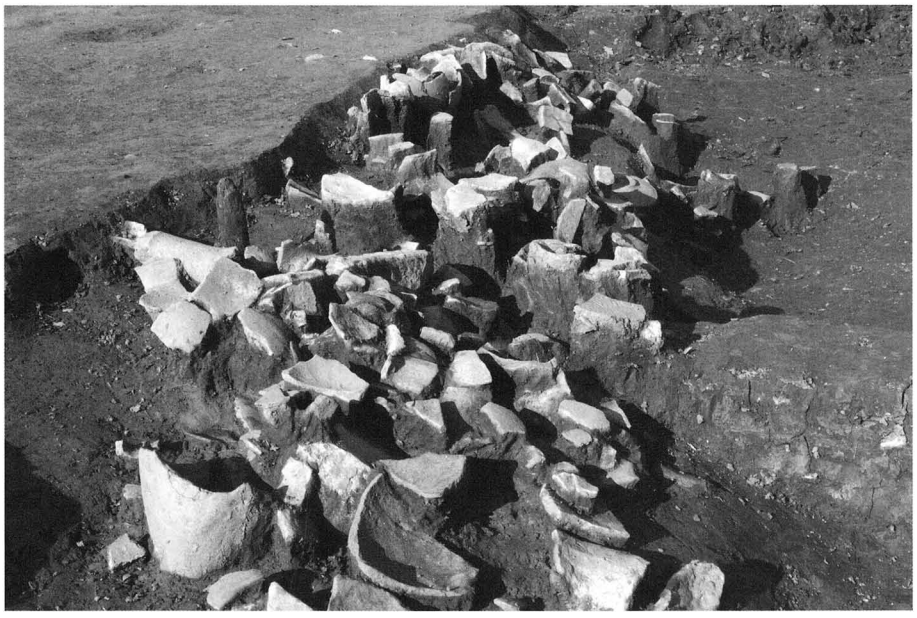


2　自然河道
中央ベルト土層断面
（南から）

3　自然河道
南壁土層断面
（北から）

1　弥生時代河道
（北から）

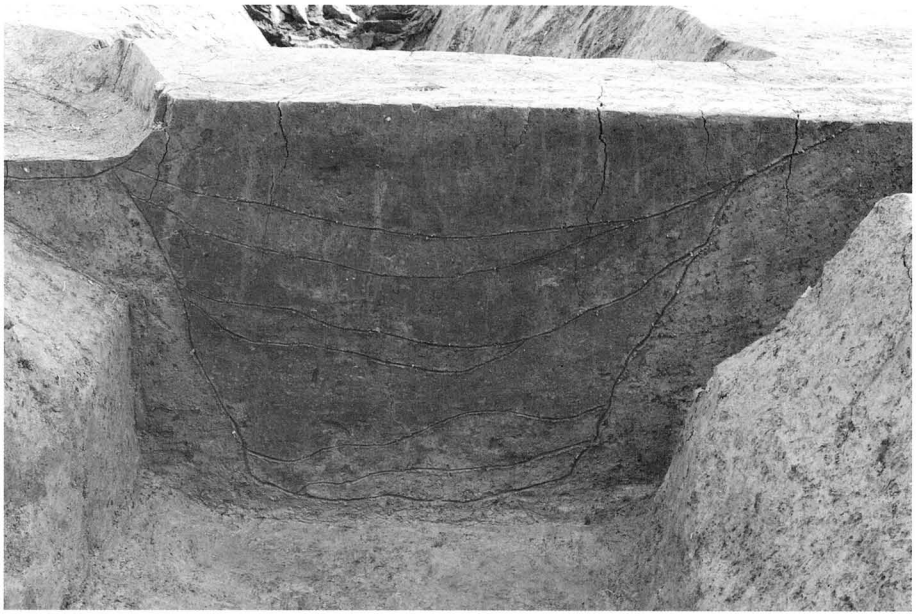
2　弥生時代河道
（南から）



3　弥生時代河道
遺物出土状況
（南から ）

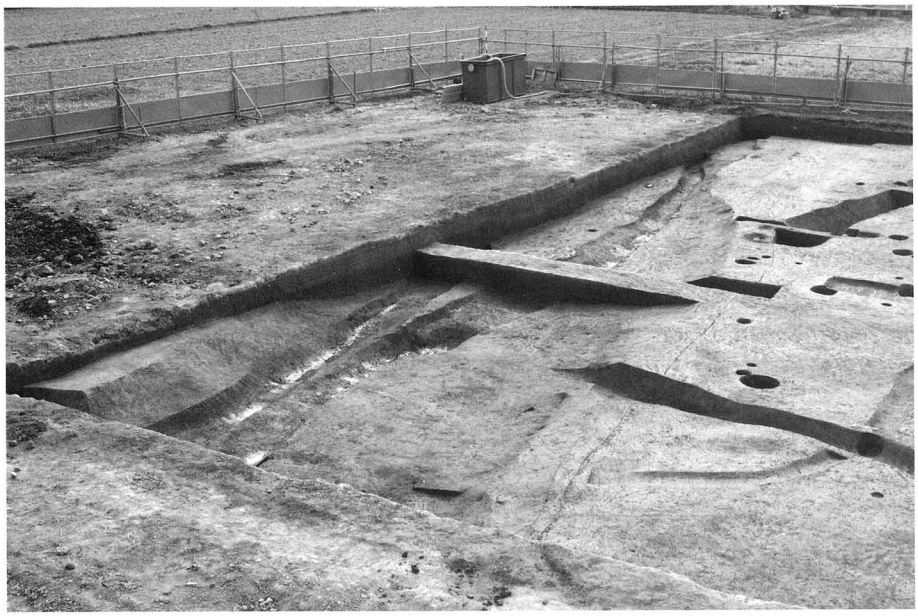
図版 18

1　溝７西部
（西から）



2　溝７ベルト土層断面
（北西から）

3　溝７東部
（南東から）

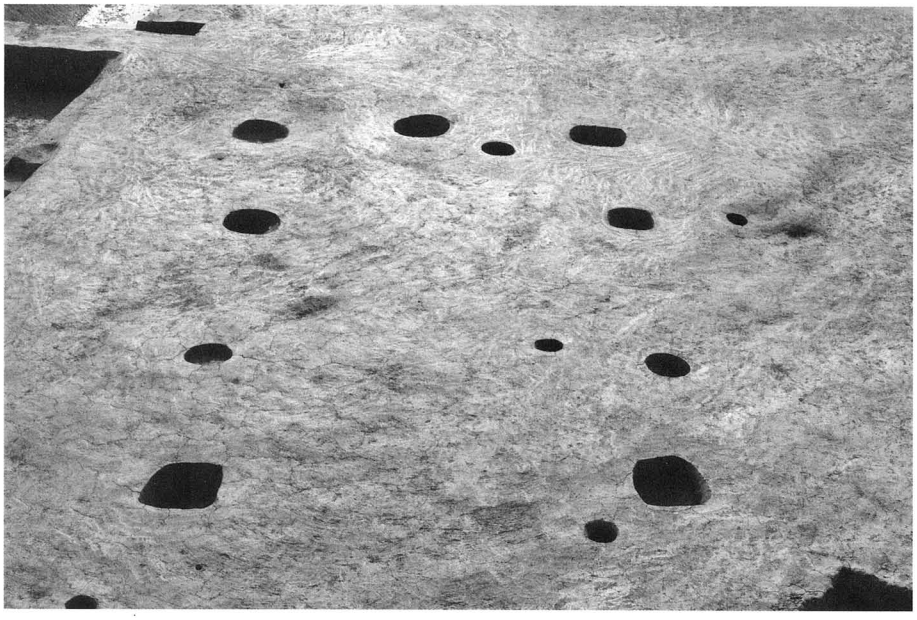


1　古墳時代河道
（北西から）

2　古墳時代河道
下層流路
（北から）

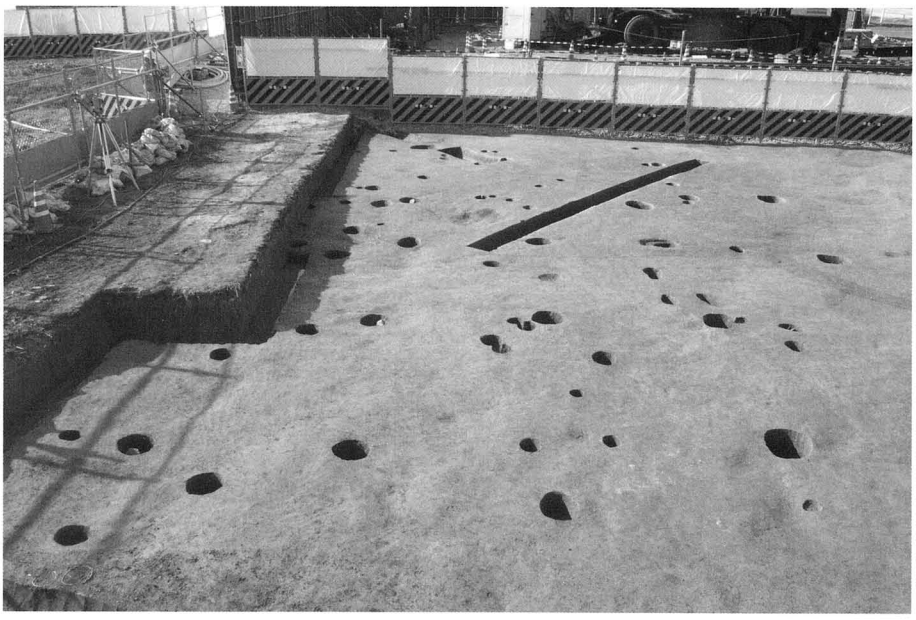
3　古墳時代河道
（南から ）

図版 20



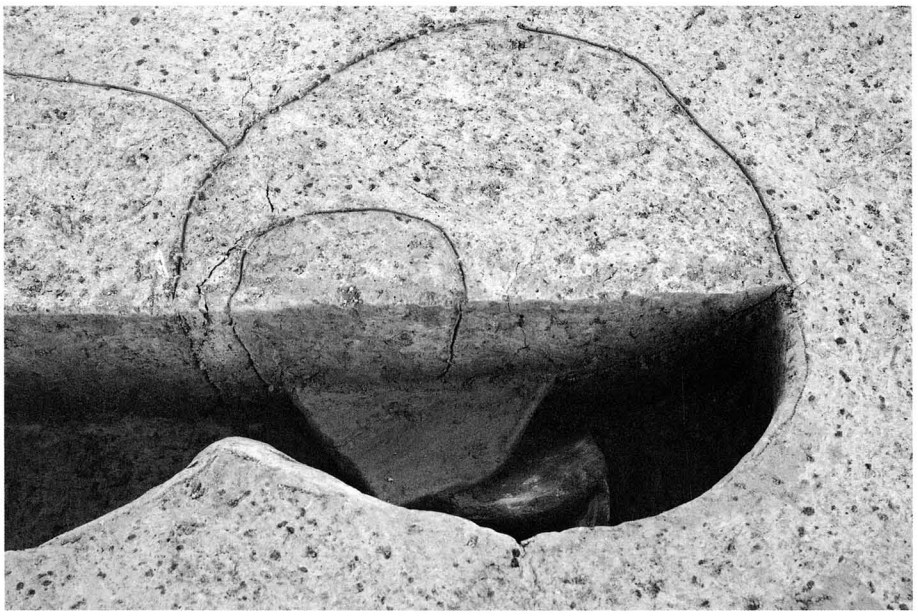
1　掘立柱建物３
（北から）

2　掘立柱建物４
（西から）



3　掘立柱建物５・６
（東から）

図版 21



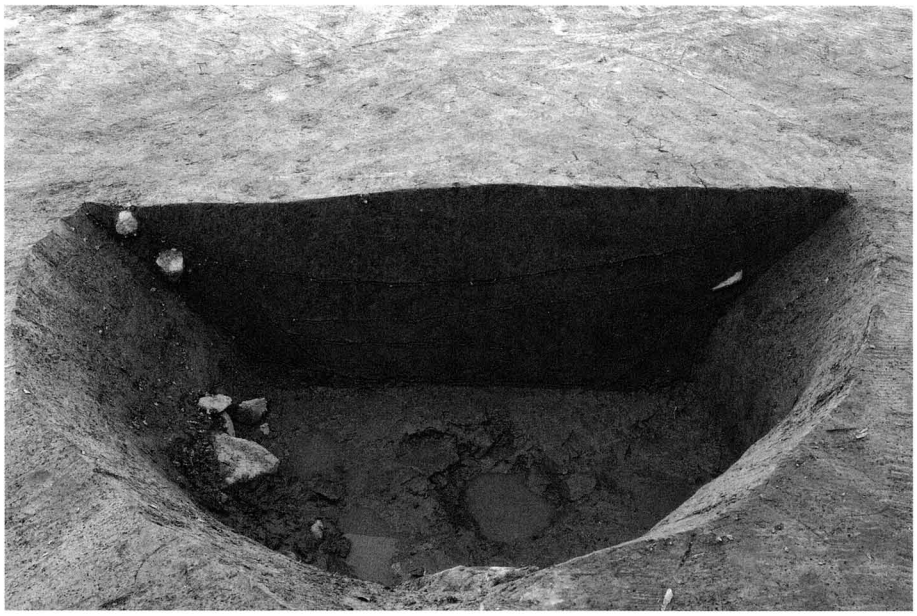
1　掘立柱建物４周辺
（P54）
（西から）

2　掘立柱建物５
（P186）
遺物出土状況
（北東から）

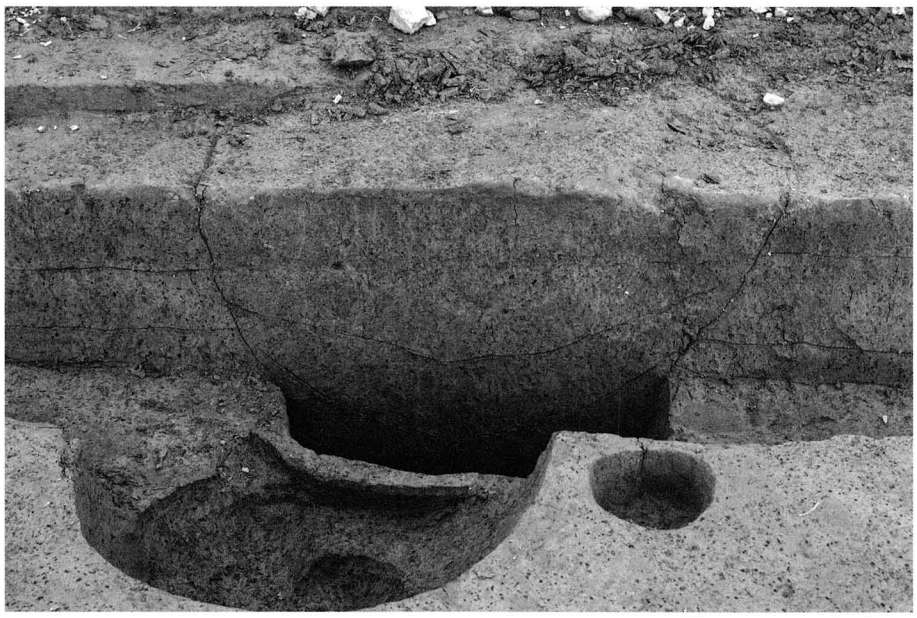
3　掘立柱建物６
（P209）
遺物出土状況
（南から）

図版 22

1　柵囲い遺構
（北から）



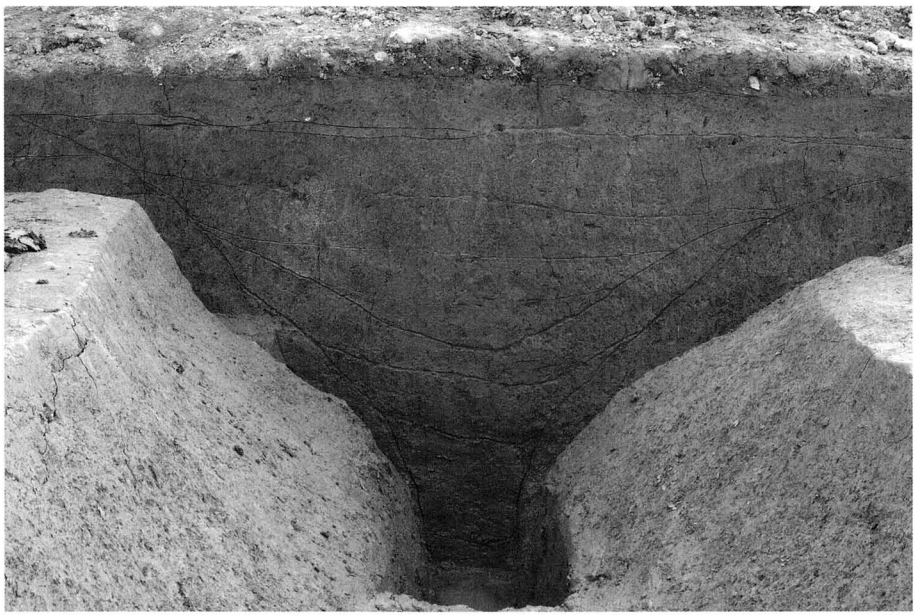
2　井戸４
（西から）



3　井戸６
（東から）

1　井戸７
（南から）

2　溝８
（北から）



3　溝８
南壁土層断面
（北から）

図版 24

1　土壙 17
（南西から）

2　土壙 19
（東から）

3　土壙 25
（西から）

1　Ⅲ区北トレンチ全景
（東から）

2　Ⅲ区北トレンチ
土層断面
（南から）

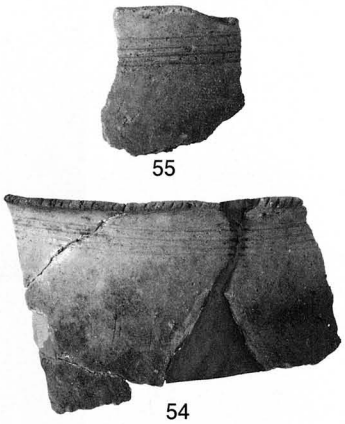
3　Ⅲ区北トレンチ
遺構検出状況
（西から）

図版 26

11　10

16

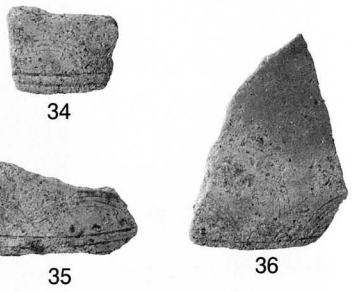
1　井戸１　出土遺物



55　54

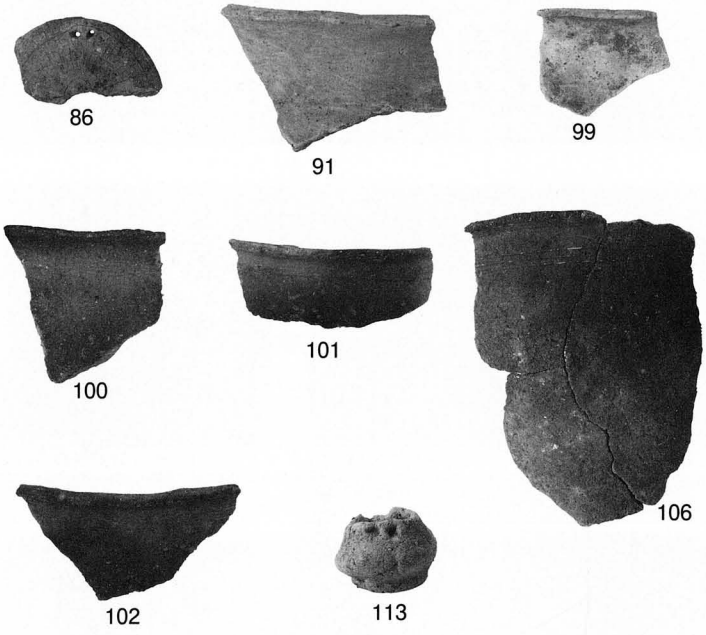
59

2　土壙３　出土遺物



34　35　36

3　土壙１　出土遺物



86　91　99　100　101　106　102　113

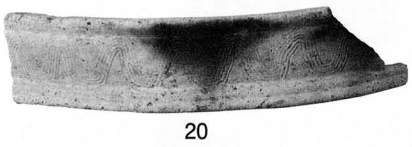
4　落ち込み　出土遺物

1

5　竪穴住居１　出土遺物

62

1　土壙４　出土遺物



20

29

24

2　井戸２　出土遺物

64

3　土壙 13　出土遺物

76

81

84

82

4　溝６　出土遺物

114

119

115

118

146

166

155

161

124

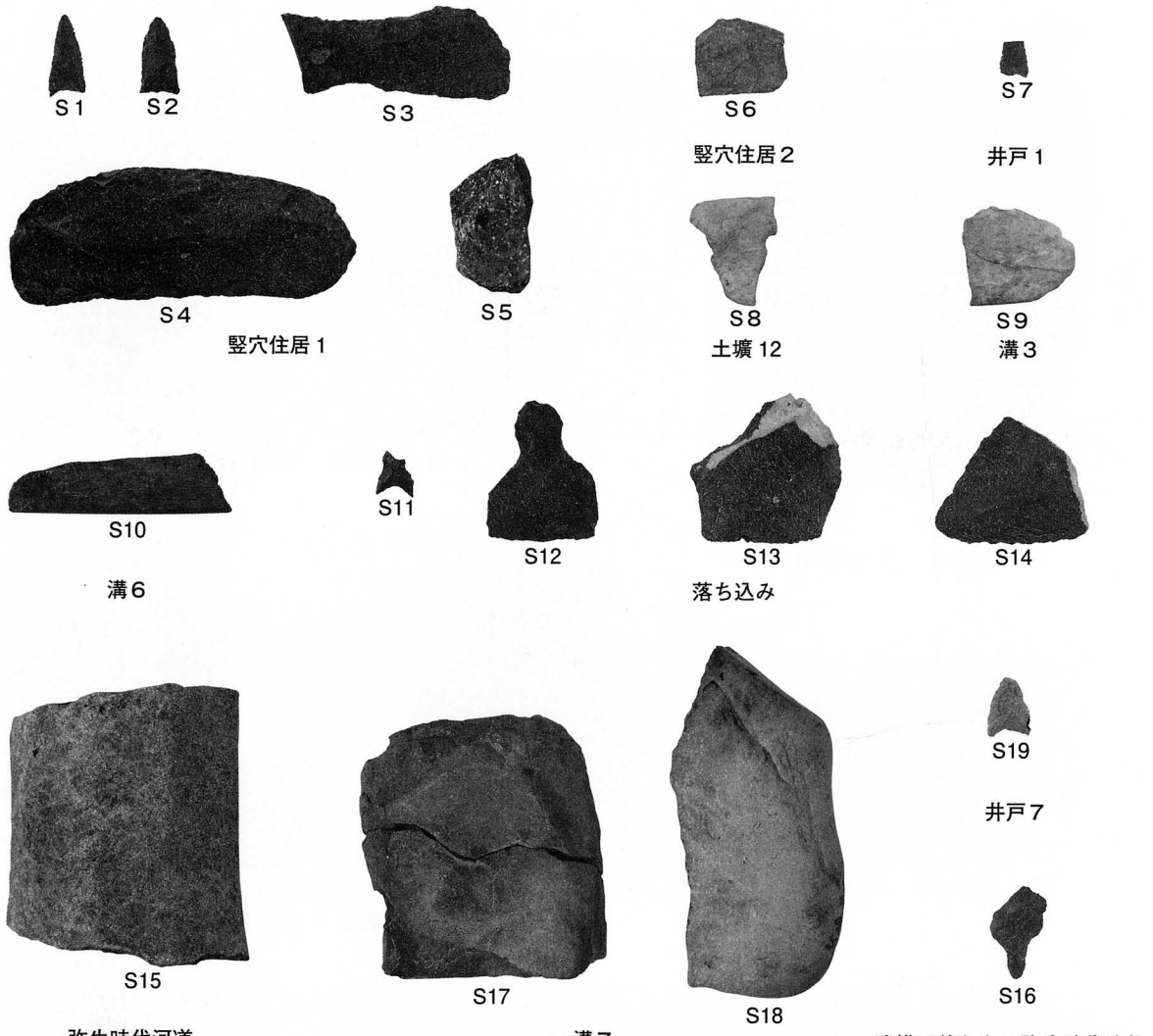
149

157

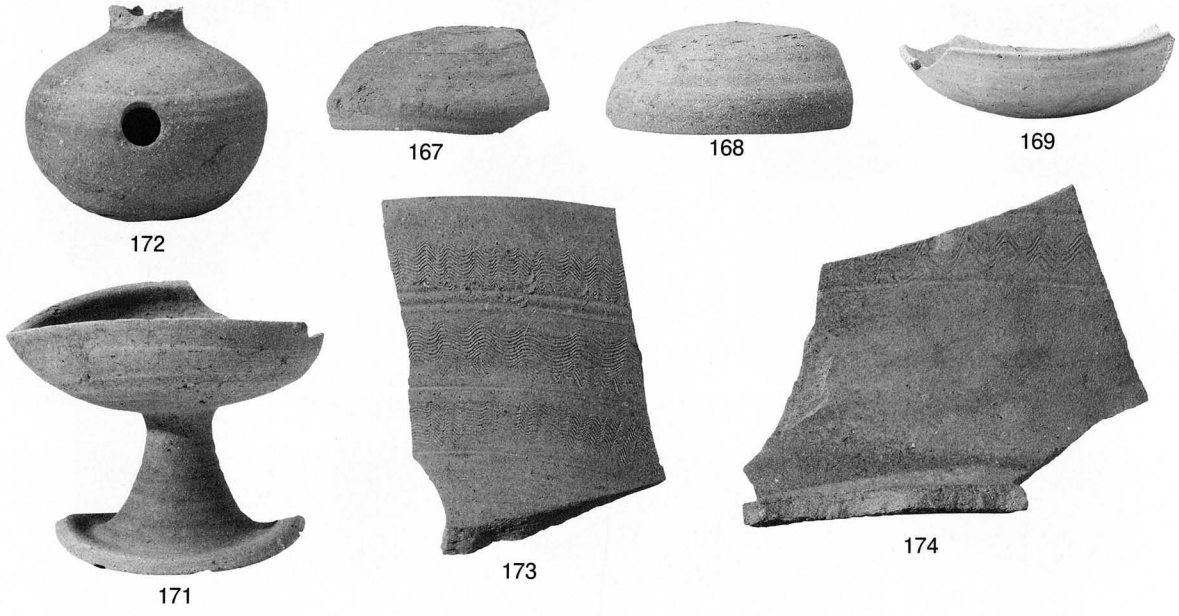
159

5　弥生時代河道　出土遺物

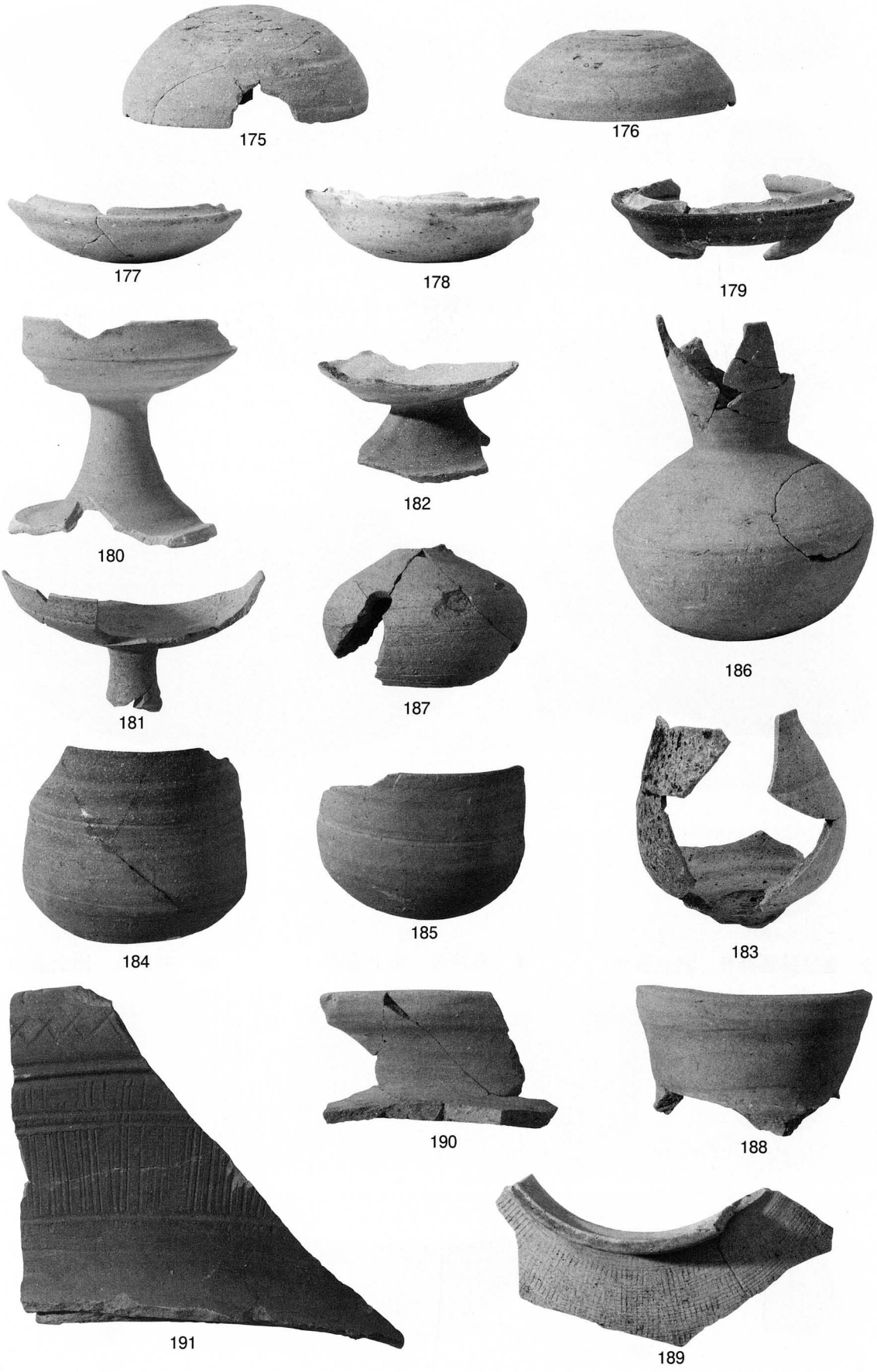
図版 28



1　出土石器

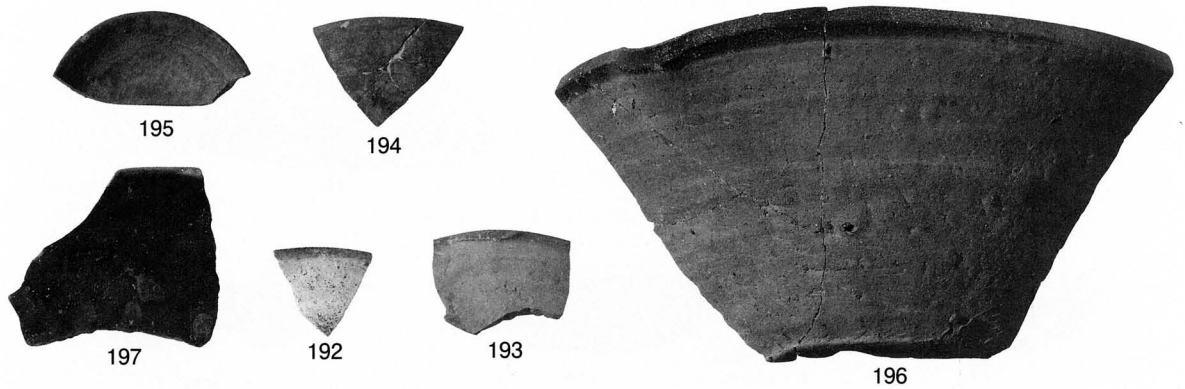


2　溝７　出土遺物

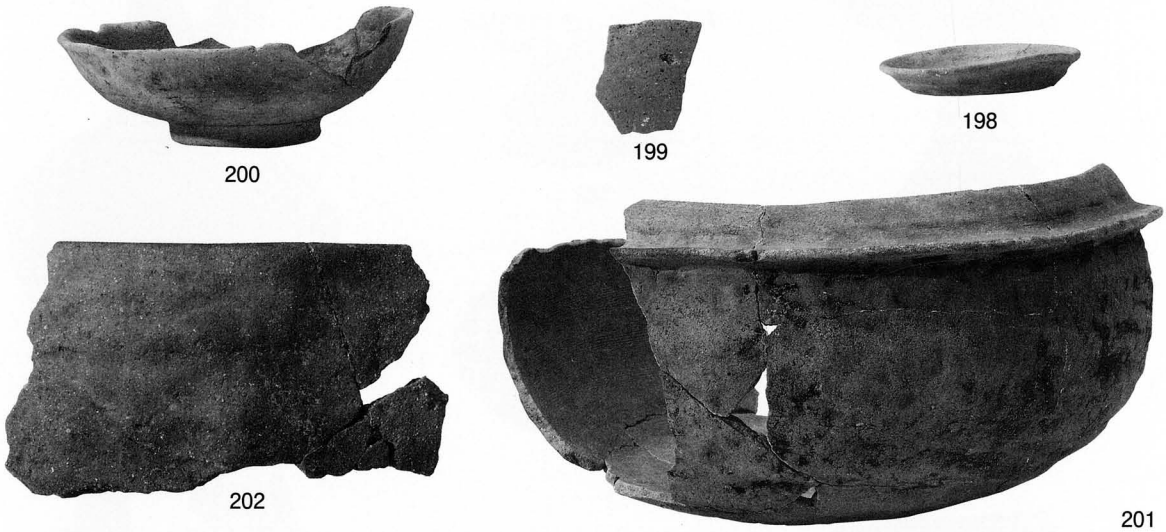

175
176
177
178
179
180
182
186
181
187
184
185
183
190
188
191
189

古墳時代河道　出土遺物

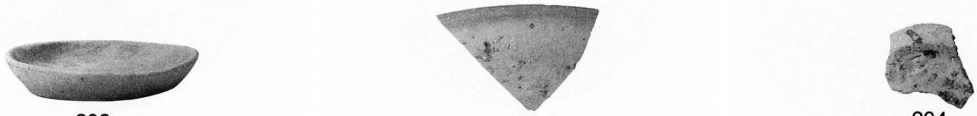
図版 30



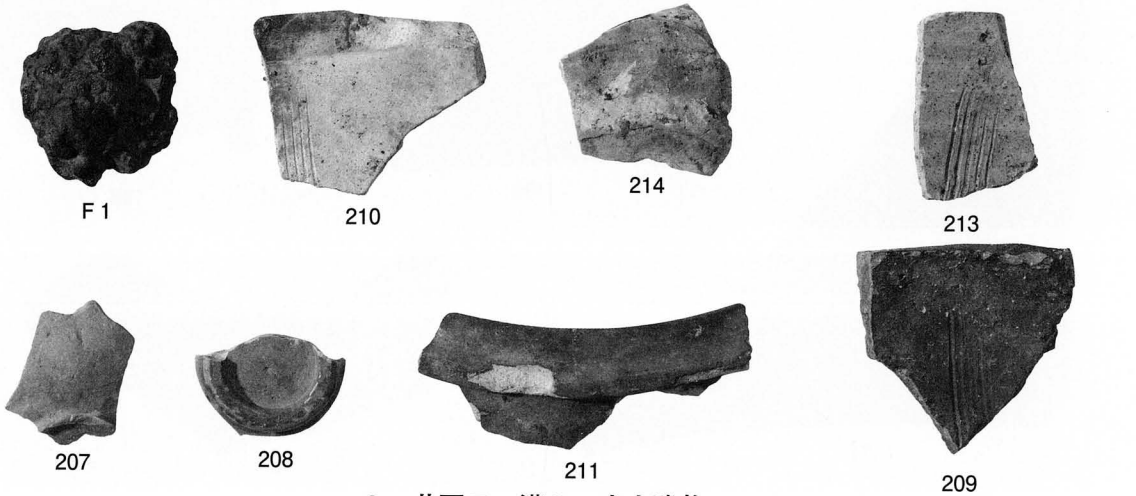
1　掘立柱建物４　出土遺物



2　掘立柱建物５　出土遺物



3　掘立柱建物６　出土遺物　　4　井戸６　出土遺物　　5　井戸４　出土遺物



6　井戸７・溝８　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はたなかいせき
書名	畑中遺跡
副書名	姫路－岡山高圧パイプライン敷設工事のうちＨＯライン非開削工事(岡山)に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	3
編著者名	馬場昌一・大谷博志・古川久雄・山本宗昭
編集機関	岡山県瀬戸内市教育委員会
所在地	〒701-4392　岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓4911　ＴＥＬ0869-34-5640
発行機関	岡山県瀬戸内市教育委員会
所在地	〒701-4392　岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓4911　ＴＥＬ0869-34-5640
発行年月日	2013年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
畑中遺跡	おかやまけんせとうちしおくちょうやまだのしょう 岡山県瀬戸内市邑久町山田庄395番地	212		34° 40′ 23″	134° 5′ 41″	2010.11.15～ 2011.1.20	1446㎡	ガス管 埋設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑中遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居 掘立柱建物 井戸 土壙 溝 落ち込み 自然河道	弥生土器 石器	
		古墳時代	溝 自然河道	須恵器	
		鎌倉～南北朝時代	掘立柱建物 柵囲い遺構 井戸 土壙	備前系須恵器 吉備系土師器椀 瓦器・瓦質土器 土師器鍋 輸入陶磁器	

要約

岡山県瀬戸内市邑久地域の中心部、瀬戸内市役所周辺は、岡山県域東部を南北に貫流する吉井川の下流部東岸に位置し、東背後に広大な千町平野を控える自然堤防・微高地である。下笠加から仁生田に至るこの南北約２㎞の地域は、岡山県内屈指の遺跡密集地帯をなし、弥生時代から中世に至る数多くの遺跡が知られている。畑中遺跡はその北部に位置し、従前の調査でも弥生時代の竪穴住居等数々の遺構が検出されている。

今回の調査でも、弥生時代前期・中期・後期にわたる竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙・溝・自然河道に加えて、古墳時代後期の溝、鎌倉・南北朝時代頃の掘立柱建物・井戸・溝等が検出された。弥生時代の遺構分布はやや散漫で、集落の中心域からはやや外れるものかもしれないが、弥生時代前期中葉にさかのぼる居住域の広がりを確認したことは重要である。古墳時代後期の遺構は、ほぼ同時に存在したと考えられる溝と自然河道のみであるが、６世紀後半と考えられる遺物内容は、操業開始から数十年程度と考えられる邑久古窯跡群との関連が注目される。中世の掘立柱建物群と井戸・溝等は、やはりこの時期に進められた濃密な農業生産活動とともに、具体的な集落生活を感じさせる。

瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告 3

畑中遺跡

姫路－岡山高圧パイプライン敷設工事のうち
ＨＯライン非開削工事（岡山）に伴う
埋蔵文化財発掘調査

平成25年３月15日　印刷
平成25年３月31日　発行

編集　瀬戸内市教育委員会
岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓4911

発行　瀬戸内市教育委員会
岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓4911

印刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2